

ト工 5N-25

GB554

1571



調査資料(昭和三十二年七月八日号)

外蒙歸還者の手記 (前篇)

公安調査庁

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

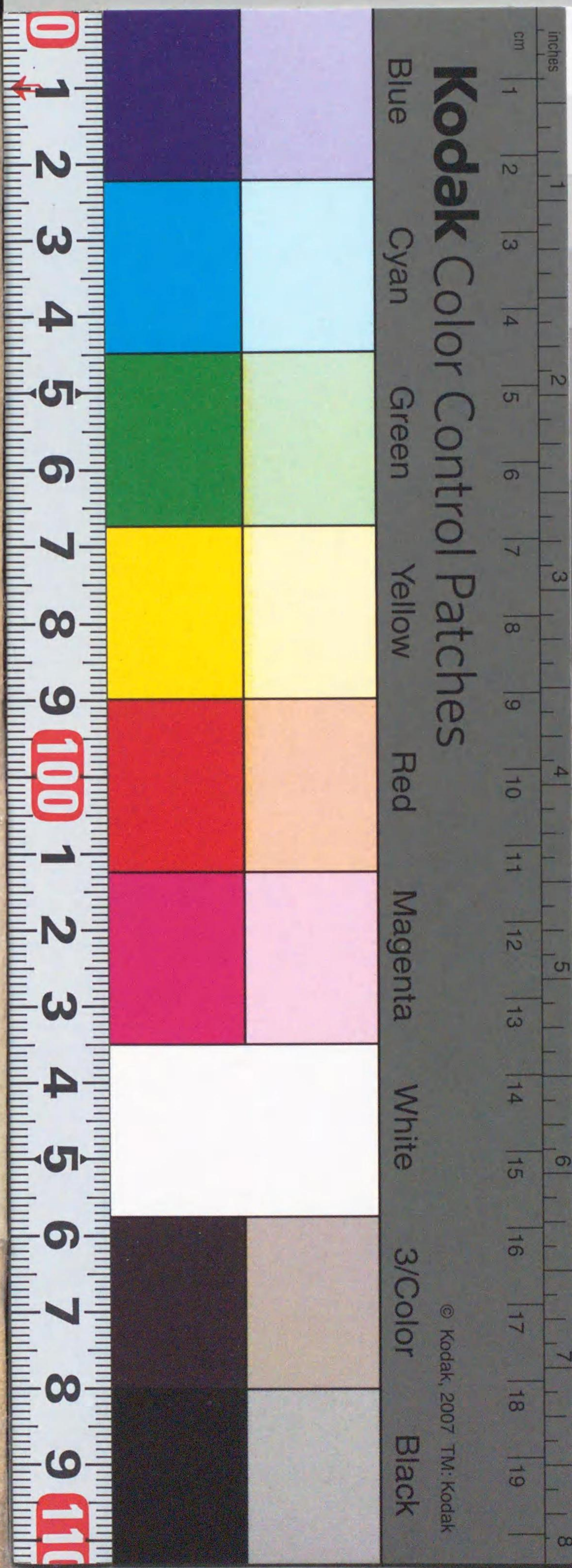


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



GB554
1571



916

83W28854

目次

◎ ま え が き

第一部 外蒙古共和国とはどんな国か

第一 外蒙古人民共和国の外貌

一	地形、面積、人口	二
二	気 候	二
三	民族の構成	五
四	風俗習慣	六
五	革命の経過	一八
六	国家機構及び行政機構	六一
七	外蒙古人民革命党	六一
八	外蒙古革命軍	七六
九	牧 畜	七六
一〇	農 業	七八
一一	狩 猟	九八
一二	工 業	九九
一三	鉱 業	一一
一四	商 業	一一
一五	交通、運輸	二五
一六	文化、教育	二五

一七	演劇、娯楽	二七
一八	保健衛生	二七
一九	宗教	二八
二〇	犯罪	二八
◎	あとがき	二九

第二部 終戦前後から刑の確定迄 三二

第一章 終戦前後からソ連軍に逮捕されるまで 三一

一	終戦前	三一
二	家族引揚通知を受け出発	三一
三	旗公署より出発途中自動車事故	三六
四	県城で警察官判返	三八
五	特務機関長の道案内者	四二
六	あてどもなく羊群廟へと	四三
七	砂丘内にテントを張つて	四四
八	盟長の娘ガロー	四六
九	騙し打ち	四七
一〇	豪雨	五〇
一一	閃電河畔でソ連軍に逮捕、家族と別離	五一

第二章 ソ連軍に逮捕されてからウランバートルに至るまで 五四

一	荷物と同様扱	五四
二	辞典を持った将校	五六
三	Y顧問銃殺か	五七
四	多倫看守所で女兒の泣き声	六一
五	足を負傷していた特務機関員	六四
六	日本軍逆襲に出たか	六六
七	穴の中に押し込められる	六六
八	国境を越へて外蒙古領内へ	六八
九	ヘンタイアイマツク(盟)所在地	六九
一〇	ウランバートルへ	七〇

第三章 外蒙人民共和国国内防処未決監に收容中の生活及取調べ状況、裁判の状況及判決 七二

一	未決監	七二
二	監房	七二
三	ジャンホー(糊の御飯)と黒パン	七二
四	最初の呼び出しと取り調べ	七四
五	監房の明け暮れ	七七
六	取調べとフィトンバイシン(寒い拷問室)	八〇
七	最高法院で判決	八三

第三部 外蒙の強制労働所

第一章 強制労働収容中の生活

一、	ツカン、バイシン	九三
二、	外蒙古系（外蒙古人以外の外国人）	九三
三、	オンドル、イタミスルン	九五
四、	アルブンツエベエル、バリガート（清掃班）	九六
五、	ハラ、サーブ（黒くなった丸い罐）	九七
六、	皮毛類の作業場	九八
七、	旧便所の堀り出し	九九
八、	外国系鉄工場	一〇〇
九、	当時の日本人	一〇三
一〇、	内国系収容所	一〇四
一一、	旧外国系宿舍の倒壊	一〇七
一二、	ブテグル、バリガート（予備隊）	一〇八
一三、	日本人収容者が増える	一一〇
一四、	食 事	一一二
一五、	ホゲンホロガイチナル（ナラズ者達）	一一三
一六、	柵外労働	一一五
一七、	春とあかさ	一一六
一八、	暴風と降雹	一一七
一九、	アイラガー（発酵した馬乳）	一一九
二〇、	旧正月とチヨイバルサンの死	一二〇
二一、	敵寒とトクトール（釈放証明書）	一二二

第二章 強制労働

一、	鉄 工 所	一二八
二、	木 匠 班	一三二
三、	靴加工班	一三三
四、	ミン班	一三四
五、	ジユウタン班	一三五
六、	泥 匠 班	一三六
七、	生産部のマナー（門番）	一三七
八、	イカダ揚げ	一三八
九、	サイチヨートナルの炊事（優秀囚人達の炊事）	一四三
一〇、	アジリンホークと積立金	一四四
一一、	加刑裁判	一四六

第三章 中央監獄病院

一、	中央監獄病院の概況	一四七
(1)	院 長	一四七
(2)	ホリフ医務室	一四八
(3)	経 理 班	一四八
(4)	薬 局 班	一四八
(5)	医 務 室	一四八
(6)	入 浴 班	一四八
(7)	洗 濯 班	一四九
(8)	炊 事 班	一五二

(9) 清掃運搬班	一五五
二 囚人、バカエムチ達	一五六
三 センタール	一五八
四 入浴場	一六三
五 死か生か	一六三

第四章 収容所側の監視

一 外蒙古人民共和国強制収容所の概況	一六六
二 中央監獄の監視	一七〇
三 ヒノクチ達(監視達)	一七二
四 囚人中の囚人スバイ	一七四
五 女囚収容所	一七六
六 植樹苗採取	一七七
七 チャガンホウラ収容所	一八〇

第五章 受刑者の取扱、政治教育

一 囚人の服務規定	一八二
二 新文字の学習及新聞購読	一八四
三 幹部の教化	一八七
四 囚人劇	一九一
五 監獄内の革命記念日	一九一
六 特赦、釈放	一九四

第六章 外蒙古人囚人の種類、態度、思想状態

一 囚人の種類	一九七
二 男女両性者	一九八
三 外蒙古人の常識	二〇〇
四 政治犯プロボーさん	二〇四
五 元外蒙古軍将校と参謀	二〇六
六 元財務省副大臣の横領	二〇八
七 革命党元中央委員の使ひ込み	二一〇
八 少年囚収容所	二一〇

註

この手記は、戦前から蒙疆地区の地方日系官吏として勤務し、その地方の蒙古人から敬愛されていた某氏が、終戦と共にソ連軍に捕えられて外蒙の首都ウランバートルに送られ、戦犯として長期刑に服し、釈放後更に約一年間市民生活を送った後、昭和三十年秋送還されてから、その体験記を書き綴ったものである。

この前篇では、外蒙共和国の外貌から始めて、逮捕から釈放までの苦難の生活が事細かに記述されているが、知る人の少い外蒙の実情を遺憾なく紹介するものとして、稀に見る貴重な資料である。後篇では、釈放後体験した外蒙市民生活の様子が記述されているが、尙終結に至らないので、取り敢えず前篇だけを印刷配布する。

○ ま え が き

蒙古（モンゴル）と言われていた地域は非常な広範囲に亘っている。アジアの中央部を殆ど占めていたと言つても過言であるまい。即ち外蒙古人民共和国、中共内モンチウ自治区政府、ソ聯領バイカル湖附近にあるブリヤト社会主義共和国、中共新疆自治区、青海省及甘肅省西蔵自治区の一部に亘つて蒙古人が分布している地域を包括して蒙古という。

現在ソ連が日本と天秤にかけ国連に同時加入せしめようと話題になつてゐるのは、ソ聯の勢力下にある外蒙古人民共和国（外蒙古）であつて首都はウランバートル（庫倫）である。

蒙古人民共和国と混同し易い中共内モンチウ自治区政府とは勿論中共の行政管轄下にあつて旧満洲国興安総省管内・旧徳王執政の蒙疆自治政府管内中蒙古人居住地域・寧夏省蒙古人居住地域及びオールドスを含めた地域であり政府の所在地は帰綏（旧厚和）にある。

この短篇では外蒙古人民共和国の外貌について、以下ざつと探つてみよう。

第一部 外蒙共和国とはどんな国か

一 外蒙共和国の外貌

二

一、地形、面積、人口

外蒙共和国はアジア大陸の中央部に位し所謂蒙古高原であつて首都ウランバートル市の海拔は一二〇〇米に達す。東径九〇度一二〇度北緯四二度一五〇度の間に亘り北西はソ連シベリヤに接し東南は中共内蒙古自治区及中共新疆自治区に接す。面積は一六〇萬平方尺、日本の四倍半に當る廣大なる面積に僅か八十五萬一九十萬の人口である。

外蒙古の地形は大體四つに區別し得る。

- (1) 東部地域 小丘陵の草原地帯
 - (2) 南部地域 砂漠地帯にして無毛の地と言われる。
 - (3) 中部地域 ゴビ地帯であつて蒙古獨特の広漠たる粗草原地帯である。
 - (4) 北西部地域 山岳地帯であつて河川湖沼多く自然林並に草地が相當広く続き蒙古第一の豊饒地帯である。
- ウランバートル市東北方にヘンテイ山、西南方にアルタイ山あり外蒙古人はこれら二山を慈しき父母である如く敬愛してゐる。

このヘンテイ山の東方よりケレン河が流れ出でダライ湖に注入する。この流域地帯は広漠たる草原で牧畜に適する。ケレン河はハルハ河となり黒龍江となる。なお東北方よりオノン河(チングス汗の發祥地)が北東に流れシベリヤに入り黒龍江に合する。

ヘンテイ山西方より、トレン河流れ出でウランバートル市南方四軒附近を西方に流れる。この上流よりイカダを流しウランバートル市民の燃料並に建築材料等に使用される。トレン河は漸次北流となり諸河と合してセレンゲ河となり国境を越えてバイカル湖に注入し北氷洋に流出する。

トレン、セレンゲ河附近の流域は、豊饒地であつて農業に適し機械化したコルホーズ(国营農場)が一、三ヶ所設置せられ大麦、小麦、燕麦、ジャガ芋、蔬菜類等が生産される。

外蒙古の山岳地帯は鬱蒼たる自然林であつて(この自然林は山岳の北側面にあつて南側には全々見受けられない)落葉松、白樺、白楊、シベリヤ松等が主なるものであるが中に緑葉樹もたまたまみられる。

八月初旬頃になるとウランバートル市の無職者がかり出され、落葉松、シベリヤ松等の松の実を採取せられる。この松の実を国家に供出して植物性油を搾出し配給に當てている。この実は中国の瓜子兒に似ていて蒙古人も好み特にソ聯人は誰も彼も道を歩きながら手早く喰ひ散らしている。

又高原高山地帯には灌木多くこれから獨特の野生のスグリ類(ウフリンハタ)又は山ブドウの様な紫色の実を採取し、国营工場ではブドウ酒に似た飲料水並にシヤム等に加工して売出ししている。

山林中には又野生動物が数限りなく繁殖している。狼、黒熊、猪、野生山羊、牡鹿、リス、タルバカン、狐、山猫、其他名前の分らない野生動物が棲息して居りこれらを捕獲し生計をたてて居る者も相當多く、毛皮は国家に供出すると共に帽子、敷物、蒙古服の裏等にも利用せられている。又肉は自家用に、脂肪は国家に供出する。近時野生動物の捕獲令が出て乱獲が許されない。但し狼皮は奨励金を出して捕獲に當っている。

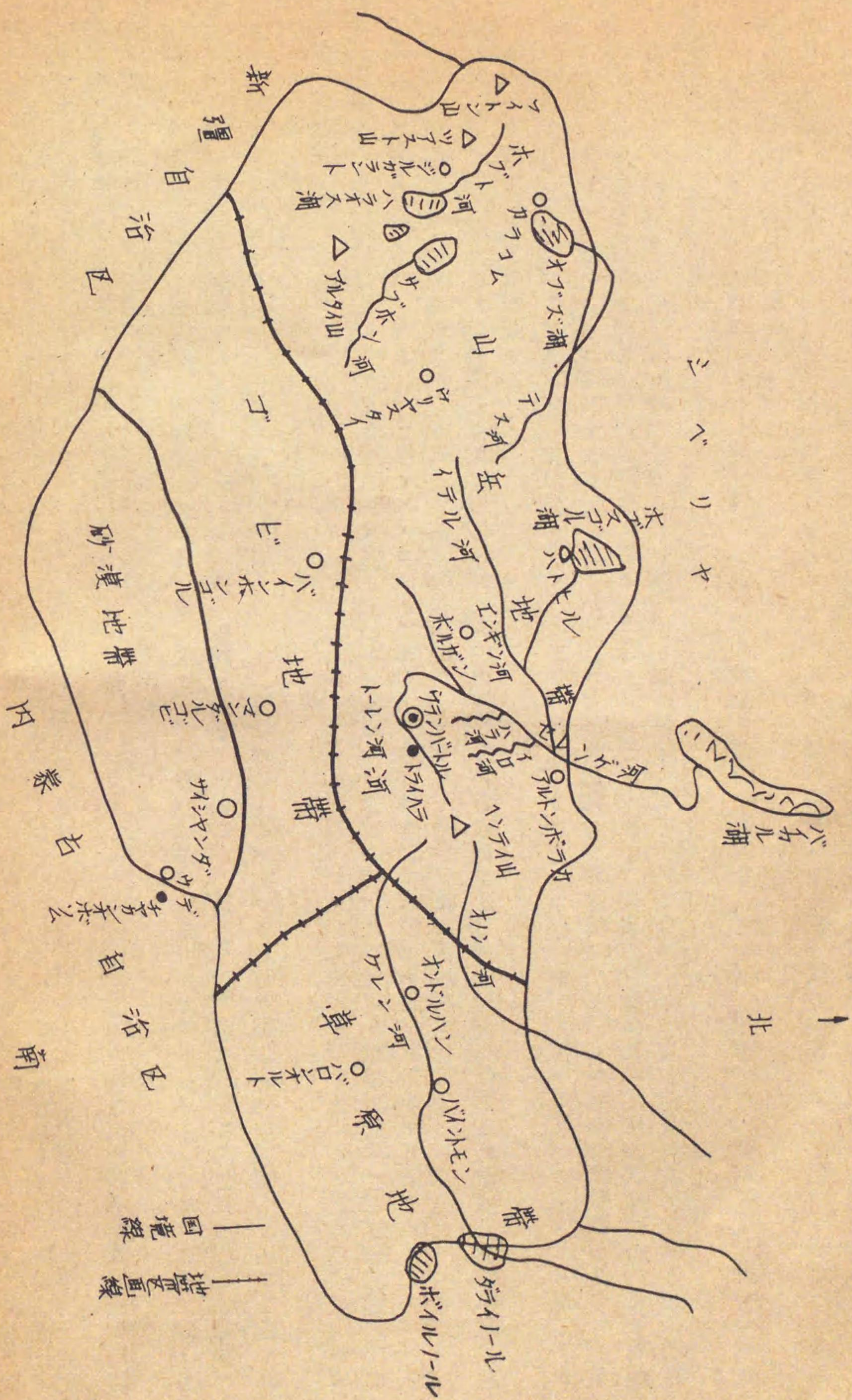
西部地帯は高山多く特にフイトン山、ツアスト山いづれも四、二〇〇米以上に達し萬年雪を頂いている。これらの高山の間には湖沼が多く内陸河川はこれらの湖沼を源とする。特にオブスノールはこの地方に於て最大の湖で面積二、五〇〇平方尺で海拔七四三米の低地にある。なおこの地方では大きな水瓜が産出され美味を以て著名である。其他キリギリスノール、ハラオスノール等も大きな湖でありこれらは総べて塩分を含み居り、ソーダ、塩等が産出される。

北部にホブスゴル湖がある。外蒙古に於て最大の湖で総面積三千平方尺に達する。周囲は高山に囲まれ春秋二季には波状高く、あたかも海の如き情景を呈する。

中部のゴビ地帯は西はゴビアルタイ盟より始まりバインホンゴル盟、ウブルハンガイ盟、ドントゴビ盟、オムノゴビ盟、ドロンノールゴビ盟に至る廣大なる地域にわたつていて、河川は殆どなく広漠たる粗草原である。しかし特殊な牧草があつて、羊の肉は実に美味である。なおゴビ地帯には粗食にあまんずるラクダが最も多い。自然の環境によつて蒙古人は家畜の糞を乾燥して燃料にしている。牛の糞、馬の糞、羊、山羊の糞、ラクダの糞総べてを燃料に利用する。ゴビ地帯に於ては水とこの燃料用家畜の糞が最も大切なもの一つである。

ゴビ地帯に最もよく見受けるのはノロ(黄羊)であつて何百頭何千頭と群をなしている。なお特別に野生の馬、野生のラクダ等もたまに目撃されると言う。

南部は砂漠地帯多くオムノゴビ盟の西南部よりドロンノールゴビ盟の南東に至る間砂漠の丘陵が続いていて一般的に不毛の地と言われているが、サイシヤンダ地帯は石油の埋蔵量は相當なものとして評価され現在は精油工場も建設され発電所も設けられ更に飛行場さえ建設されているこれらは総べてソ聯の力による事が窺われる。サイシヤンダ地区よりウデに至る迄の砂漠



を夏季貨物自動車で横断するには七、八時間を要し、途中一ヶ所水の補給所があるがエンジンはオーバーヒールして五、六回休憩するを必要とする。

二、気 候

外蒙古人民共和国は非常に標高が高く海岸から遠く離れて居る内陸の為大陸的气候で气候の激変は峻烈である。又降雪降雨少量の為空気は非常に乾燥する。

ウランバートル市は外蒙古で一番寒冷地であると言われる丈あつて八月二十八日に降雪を見た事もあつた。兎に角毛皮の蒙古服を着初めるのは九月中旬頃からで本格的厳寒の到来は十一月初旬である。十二月、一月が最も寒く最低温度は零下四十五度―零下五〇度になることも度度あり、普通は零下二十五度―零下三十度位である。なお朔風は凛烈を極め西風か西北風である。

春と言つても冬の中の春である。四月下旬頃から雪解が始まり山岳地は遅く五月の下旬にならねば完全に雪解けが終らない。コルホーズ(国营農場)では五月中旬頃より農耕播種の準備に当り六月初旬に播種が終る。中々忙しい播種である。

五月一日のメーデーにはまだ残雪があり、毛皮の外套を着て行事に参加する状態である。なお五月中旬でも降雪を見る事もある。

六月初めになると日向の温かい所から草の芽が出初める。六月十日頃から木の芽が萌え初める。この時こそ長い期間厳寒に閉ざされた暗黒の世界からやつと解放された様な喜びを受けるのである。これが春と言ふものである。

本常に夏と言うものは短い。大体七月一ぱいで一番暑気を感じるのは、ナードミ(外蒙古革命記念日)の前後に亘つた期間であろう。七月十日―七月二十日位迄本常に暑いと感ずる。この七月の夏と言われる期間において一、二回の降雹があり驚ろく事がある。飴玉の様な大粒が降り出した時は地面真白になり一時に冬が来た様な感じを受けるがたちまち洪水と化し消えて行く。

又五月、六月と九月頃の二季には必ず季節的暴風が巻き起る。太陽が全々見えなくなり急激に暗くなつて来る。又むし暑くなつて来る。又何処の家でも子供や表に出してある諸道具や品物を家に入れて戸締りして難を避ける。大体暴風は十五分位で通過して終る。其の間家の中は土ほこりで一ぱいになり窒息する様な重苦しさを覚える。

三、民族の構成

外蒙古人民共和国の人口は八五萬―九〇萬と称せらる。(赤系ソ聯人一萬人華僑四萬人第二次世界大戦終結の際外蒙古に連行された内蒙古人〔中国人も含む〕五千人等約六萬人は外国系としてこの人口には含まれない)

この中ハルハ族が中核として八〇%これに次ぐはブリヤート族四%カザック族トルゴト族八%ドルブト族三%其の外少数民族タタル族ウゴル族ウリヤスタイ族チャント族バラカ族チハル族カルチン・ハルチン族等の諸民族より構成されている。なお少数であるが白系ロシア人も居る。

ハルハ族が多数を占めている関係から外蒙古の国語はハルハ蒙古語を基準として使われており、国内全般に分布している。カザック・トルゴト族及びドルブト族等は西部地域に、ブリヤート族は北部の各盟に散在し、バラカ族は東部に、チハル族は東南部に居住している。

外蒙古革命以前に入蒙し経済的根柢を独占していた華僑はその勢力は現在衰微しつつあるがその数において見逃し得ないものがある。ウランバートル市に三萬人、各盟に散在する者一萬人といわれ、彼等と蒙古人婦女との混血児は物凄く増加している。ウランバートル市内各小学校、中学校の学生数の六〇%が混血児であり母方に入籍し蒙古族として数えられている。

赤系ソ聯人は政府各官庁顧問、工場の指導者、直接技術者、鉄道従業者、地下資源調査部職員、各地方官庁の行政顧問、蒙古軍指導官、ソ聯大使館附要員を総合すると一万人以上と言われており、ウランバートル市内にはソ聯人子弟の小学校と中学校が各一校づゝある。

第二次世界大戦終結時日本と協力したかどで外蒙古に連行された内蒙古人・満洲蒙古人・中国人がある其の数五千名余りでありこれら内蒙古人は日本の特務機関の職員、蒙古軍人、蒙古警察官、旗公署職員、公司職員其の他一般蒙古人である。

この五千名余りのうち監獄で服役中の者二〇〇名釈放された者三〇〇名中共内蒙古自治区に移管された者二〇〇名残余多数の者は外国系としてウランバートルに殆ど居住している。

現在この内蒙古人はほつほつ内蒙古に帰郷許可を得て帰郷する者がある。

四、風俗習慣

蒙古人は少数の都会人を除き殆ど遊牧民であつて家畜と起居を共にしている。外蒙古は人口が稀薄な為広漠たる草原を自由に放牧が出来る。良い草を見つけて次から次へと移動遊牧を行う。しかし現在ある程度計画的に移動が行われ牧野の荒廃を防止しつゝある。

蒙古人が放牧する際は、必ず蒙古犬を伴い狼の被害を未然に防ぐと共に、家畜の護衛犬ともしている。

彼等の旅行は馬とラクダの背による。現在国家は自動車道路の建設を行い貨車トラックの運営を計っているけれども牧民達は悠々と追らず幾日も幾日も野宿しながら、馬、ラクダの背をかりてウランバートル市に家畜からの生産物を持ち来り、之を売り揃き、日用雑貨を買ひもとめ、又帰つて行くのである。

彼等の住居は、移動に便利に出来ている蒙古包である。この蒙古包の骨組は横木、細いタルキ・天井の丸いわく、柱で其の外側はフェルトでまいてある。実に簡単で一時間位で組み立てて終う。現在牧民は国家からの毛類の供出割当がある為自由にフェルトを作つて取り換えるわけにいかない。フェルトの寿命は二年であるが、四年一五年も使用せねばならぬ状態に立ち至つている。この蒙古包にも大小があるが、大体一家族四、五名は住める。真中に炉がきつてあつて煮焚きをし、もとは真正面に仏様が祭つてあつたが、現在は革命者スパートル又はチヨイバルサン中にはスターリン等の画像が抑々しく飾られてある。しかし中には画像の側に仏像を箱に入れてこつそり祭り、御祈りをあげている家庭もある。

蒙古人の服装は旧来の蒙古服が多い。都会に住む上層階級は背広又は詰襟を着ているが家庭にある時は蒙古服である。色合は原色物を好み、青、茶褐色、黄、紫、緑、紺、黒、赤等であつて、男女とも同じである。帯は黄色、青色、緑色を特に好む。靴は蒙古靴を穿き又現代的ソ聯式長靴を穿く者もある。都会人は殆どこの長靴を穿き女子はハイヒールを穿いている者もある。遊牧民には便所がない。総べて「のぐそ」である。広漠たる野原でしゃがんで「のぐそ」をする光景は一寸乙なものである。彼等が大便後の処置は棒ぎれ、小石、草等でふきとり又ほろぎれ、フェルトのくず等を用いる者は上等の部類である。特にひどいになると、指で後始末して砂又は土にこすりつけてその儘御飯も食べれば茶ものむのである。

水は蒙古に於て最も大切にされる。草原地帯、ゴビ地帯、砂漠地帯等に於て水を得るのに非常に苦勞する。外蒙古地帯は何処でもアルカリを含んでおり、清水の井戸は何処にもある訳ではない。本場に遠い処は二〇軒も三〇軒も離れている処から牛車かラクダ車で一日がかりで運搬して来る。蒙古人は食器を洗つたり、洗濯をしない。又身体を洗う事もしないと言ふ事は致し方ない事であろう。御飯を食べた食器をなめて手で拭くか着物のすそでふくかである。都会に於ても水は非常に大切である。一定業者より水を買うのに石油かん一ぱい一元(日本円換算三〇円位)で業者は馬車又は自動車タンクで運搬して来るのである。

蒙古人の食料については、羊肉、牛肉、乳、乳製品、茶、塩、少量の炒米であつた革命前迄は、穀物野菜は殆ど使用しなかつたし、ラクダ肉馬肉も食わなかつた。しかし現在は供出物資が多い為と増産計画によつて肉量を減らさねばならなくなり、その代りに穀物類、野菜を混用し、さらにラクダ肉・馬肉をも喰わねばならなくなつて来た。

六月一九月に至る期間は多量の乳が産出される。まえばこれを自家用として乳製品に加工し、夏期に於ける食事としていたが、現在は計画経済実施により乳製品の加工も自由にならず、乳茶(スーテエーチャ)乳製品で過すと言ふ食生活に一大変化が生じて来た。即ち少量の肉と油に野菜類雑穀等を用いて食事とし黒茶(乳を入れない茶)と乳茶(スーテエーチャ)とを混用する如く変つた。

革命前のすべての行事は仏教（ラマ教）を中心として行われて来たが、現在革命後の事件が国の祝祭日と変り、又蒙古人の習慣にも非常な影響をきたして来た。

外蒙古人民共和国における現在の記念日としては、正月、旧正月（現在チョイバルサンの死亡した年より、旧正月の行事を廃止せしむべくあらゆる宣伝を行っている）五月一日メエーデイ（労働祭）ナードム革命記念日（七月十一日―十五日）十月革命（十一月七日）等である。

ナードム（外蒙古革命記念日）は一九二一年外蒙古革命軍がソ連赤軍と協力し、ウランバートルを解放し、人民政權を樹立した日を記念したもので全国民が挙つて祝つてゐる。

この日には政府官庁前人民広場に於けるデモストレーションにウランバートル市各小学校の学生を初め全市民が参加する。首相を初め各大臣外国使節等がチョイバルサンの靈柩を入れてある台の上に参列、陸軍大臣の開始の祝辞のもとに外蒙古軍機動部隊十台位の戦車を先頭に機動砲貨車が続き、次に士官学校・幼年学校の学生、軍の将校、下士官、兵の徒歩部隊と続く観兵式が行われる。引続いて各国工場従業員手工業協同組合従業員、党大学学生、綜合蒙古大学学生、特殊技能学校学生其の他十二区の一般人中小学生等約一万人のデモストレーションがソ聯式に実施せられる。

最近迄蒙古語でマンドガイ（萬才の意）を称えていたが現在はオレー（ロシア語）に變つた。観兵式が開始されてより終了迄三時間はかゝるであらう。

終了後ウランバートル市より西南方六軒の地点ヤール、ル、ツク（行事場）に向つてウランバートル市民は貨物自動車で集結する。ここに全国の代表が集り、競馬、蒙古相撲、蒙古ゆみ、蒙古将棋、運動競技が行われ、博覧会、生産品展覧会、劇場における臨時出演、映画上映、臨時デパートの売出し、食堂の開店等が開催される。沢山の蒙古人は行事を觀賞するのではなく、殆どは臨時デパートに向う。それは常日頃売出されていぬ必要品の買い求めに今日こそはと吾れ先にと押し寄せ黒山の様な人だかりとなる。ひどいものになると群衆の頭上を泳ぎ越えて買ひ求めようとする者、そうさせまいとする者、怒る者、泣く者、押しつぶされる者遂には死傷事件が惹起する。スリに会ひ有り金全部スリ取られ青意気吐意気である者、買ひ求めた者でも直ぐ又売して金もうけをしようとする闇も生ずる。

今年には革命記念三十五週年に当るので、各種の行事も大だに挙行されるであらうまた罪人も特赦が出て大喜びと言う所であらう。

五、革命の経過

清朝は蒙古の強大なる好戦的掠奪的遊牧国家になるを恐れ清朝皇室皇女と蒙古王公との結婚等による懐柔政策に意を払うと

共にラマ教の奨励を行つた。

ラマ教は一六世紀にチベットから蒙古に伝来したもので清朝はラマ廟建設の資金を提供しラマ僧に対して租税、兵役を免除したため急速な勢でラマ教は蔓延した。このためラマ（僧）は蒙古男子の八〇%を占めるに至つた。之によつて人口的に非生産的になり経済的にも困窮になる外致し方なかつた。これとともに漢人商人により、各種雜貨の法外な価格による販売、及び家畜及び毛皮類の著しい安価による交換又は買取りが行われた。このようにして遊牧蒙古人への搾取が徹底的に行われた。更に一九一一年庫倫（ウランバートル）に植民局が開設せられ、中国農民の移住が行われると共に駐屯軍が常駐する事となつた。

日露戦争後日本は内蒙古に、帝制ロシアは外蒙古に、勢力範圍を拡張する事になり、さらに辛亥革命によつて外蒙古人は中国から離脱する機会を与えられた。かくして中国の革命を利用して一九一一年十二月王公政府が樹立され活仏ボグドゲンが帝位につき外蒙古は独立を宣言したが、中国は宗主權を保持し自治を認めず。第一次世界大戦の結果ロシアは敗戦国となり、中国は革命の勃発を絶好の機会として急速に軍隊を外蒙古に派遣した。一九一八年には二、〇〇〇名にも達した。その当時の指揮官は徐樹錚將軍であつた。彼は軍隊を以て活仏ボグドゲンの御殿を包圍して外蒙古の自治撤廃を強要し、一九一九年十一月二十二日撤廃を宣言せしめると共に、王侯、ラマ、蒙古人を弾圧した為非常な反感を受けた。その後中国の内乱により徐將軍の後には陳毅が辦事大臣となつて駐在した。この中国の内乱は、外蒙古をしてソ連へ接近せしめることとなり、外蒙古の独立革命の基因となつたものである。一九二〇年二月頃外蒙古人はスフバートル、チョイバルサン等を中心として蒙古人民革命黨を創設した。

当時外蒙古革命党だけでは革命を成就せしむる事不可能であつたから、勢いソ聯に援助を求めより外に道はなかつた。即ちスフバートル及チョイバルサン等の一行は、モスクワに赴きレーニン、スターリンと会見を求め援助を乞ふつた。

当時シベリヤで赤軍と戦つていた白系帝制ロシア軍団長セミョーノフの部下ウングレン男爵軍は赤軍に撃破せられた為外蒙古に侵入し、ここを闘争基地と化さんとした。

一九二〇年九月ウングレン軍は庫倫（ウランバートル）を攻撃したが中国軍に撃退された。中国軍は外蒙古人を親露派と見なし弾圧し恐るべき拷問掠奪虐殺行為を行つた。ウングレンはこの機会を巧に捕え、大蒙古国家建設のスローガンを掲げて蒙古人の歓心を得た。こゝに於て外蒙古人はウングレン軍に進んで身を投ずる者多くなり、勢力を挽回し一九二一年二月中国軍を攻撃し庫倫（ウランバートル）を占領し活仏を王位に据えた。

ウングレンは直ちにソ聯赤軍を攻撃する準備をした。それには蒙古人を強制的に徵発し利用しようとした。なお兵の俸給も

支払わず、中国商社を略奪没収し、軍用資金に当てた。一九二一年三月ソ聯領シベリヤに向つて軍を進めたが、内部より不平や陰謀が起り又赤軍や之に協力する外蒙古革命党遊撃隊の攻撃を受け遂に敗戦瓦解するに至つた。

スフバートル、チヨイバルサン等の指導する人民革命軍及遊撃隊はソ聯赤軍と協力して七月六日庫倫(ウランバートル)を占領し七月十一日には活仏を元首とする立憲君主国家を宣言した(この日を記念して外蒙古革命記念日としている)この立憲君主国家にした理由は、当時の外蒙古は封建制度であり特にラマ教が根強よく人民と結ばれていた為革命党としては一時的な戦術として民族統一戦線を採用したものであろう。しかし人民革命軍という武力を有する革命政権側は、常に主導権を握つていた。

一九二四年元首活仏が入寂した。そして活仏制の支持者ダンゼンその他要人の陰謀が暴露して処刑された。かくして一九二四年十一月二六日正式に外蒙古人民共和国と国号が改められた。

革命党が政権を握ると共に王公の財産、寺廟の財産、資産家の財産、中国商社の財産等を没収すると共に遊牧から集体牧畜に移行、又極端な課税の実施、コルホーズ(国营農場)を経営して穀物の自給経済を行わんとしさらに国内個人商人を国营消費組合に統合し独占化せんとした。

これらの政策は外蒙古の経済を崩壊せしめた。免に角当時の外蒙古経済は自然経済の域を脱していなかつた為蒙古人の反抗と陰謀の基因となり革命党は弾圧に弾圧を加えた。ここにおいて蒙古人はその難を逃れ満洲内蒙古に逃亡する者続出し叛乱も勃発する等実に危機に瀕するに至つた。

茲に於て人民革命党は極端なる政策の失敗を認め新なる段階に処する方針を決定した。

- 一、反帝国主義的民族国家として強固にする。
- 二、家畜の生産力を第一に発達せしめる。
- 三、搾取資本主義経済を制限する。
- 四、封建制度を漸次撲滅する。
- 五、外国侵略脅威から外蒙古を擁護する。

これによつて総べての経済統制は緩和された。共同草刈、共同家畜飼育の初歩的方式が用いられ個人経済の発展にも力が注がれた為家畜数に於ても一九三二年一六〇〇萬頭一九三九年二六〇〇萬頭に増加した。尚個人商業に於ても政治的弾圧を避け価格政策と税率により漸時抑制し消費組合に統合せしむる方針をとつたが尚経済的にも政治的にも混乱状態が継続した。

一九三六年三月十二日締結されたソ蒙相互援助条約に依りソ聯軍が進駐し来るに至り国内の反動分子の清算にのり出し政府

要人ゲンドン、デミッド、アマル、並にラマ僧の有力者等が一九三七年一九三八年に亘り肅清された。この肅清直後一九三九年ノモハン事件が勃発しこの事件により親ソ派チヨイバルサン一派が外蒙古政権の支配力を握つたものである。

一九四〇年の第八回全国国民大会議に於て新憲法を採択したこの憲法をチヨイバルサン憲法と言つてゐる。

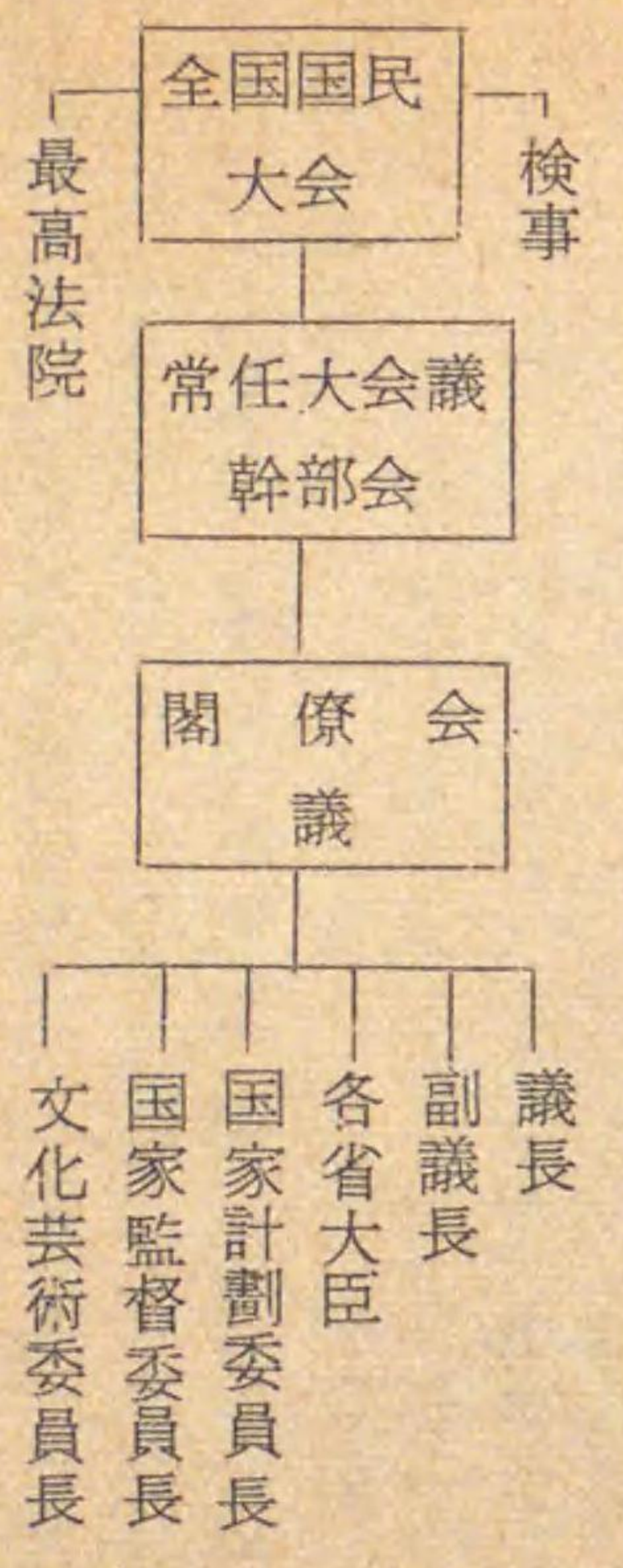
しかし第二次世界大戦は外蒙古の経済文化の発展を著しく後退せしめた。

一九四五年八月十日外蒙古人民共和国は日本に宣戦を佈告して不法にも満蒙国境を突破して満洲国並に内蒙古に侵入し満洲国内蒙古より家畜及人員を掠奪又は虐殺強制連行した。

一九四五年中華民国より外蒙古人民共和国の独立を初めて認められ更に一九四七年十二月蒙古人民革命党第十一回大会が開催され一九四八年一九五二年に亘る国民経済文化発展五ヶ年計画が決定されたが、外蒙古は人口稀薄であること及び封建制度の末だぬけ切らぬ為、経済文化も進歩せず社会主義社会でもなく資本主義社会でもない段階を牛のあゆみの如く歩むてゐるのである。

六、国家機構及行政機構

(一) 中央



外蒙古人民共和国に於ける政治権力は形式的には一応三権分立であるが、實際権力は人民革命党ががちり握つてゐる。

政府各機関議員の選挙は満十八才に達した外蒙古人民共和国のみに選挙権を与えられ、表面上は直接平等秘密投票によつて選挙するが、實際に於ては、候補者の推薦は人民革命党が行い、この推薦者について選挙せしめることとなつてゐる。又国营工場及一般共同組合等における末端組織における選挙に於ても同様である。例えば工場組合等に専任党員が占つて実権を握り、党本部の許可のもとに推薦選挙せしむる仕組になつてゐる。

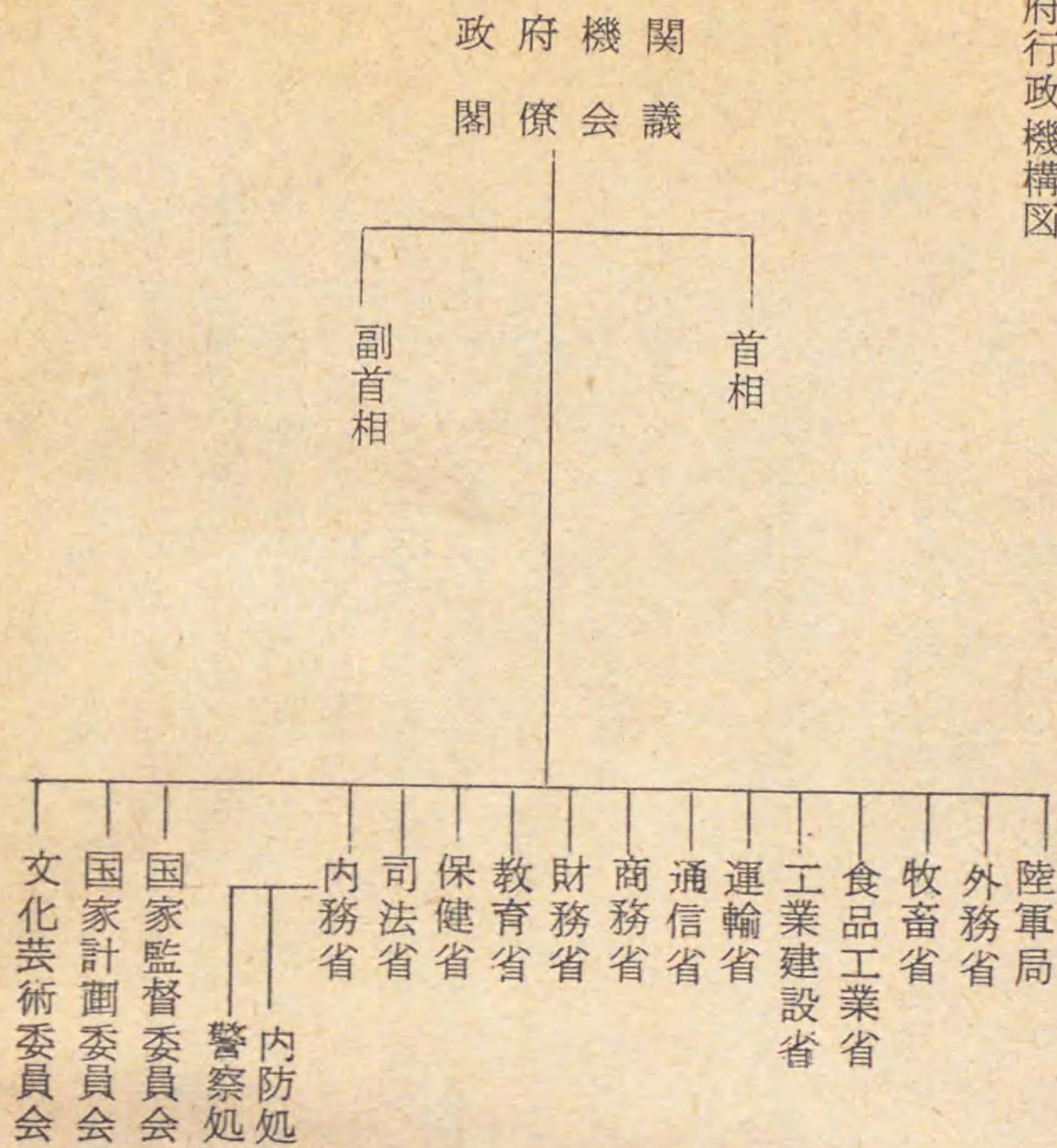
これを見ても人民革命党の専制政治が窺われる。全国国民大会議議員は全部党員であり常任大会議幹部会の委員も党本部中央委員会の枢要人物であり閣僚会議に於ても同様に党中央委員という枢要人物である。

全国国民大会議議員の任期は三年であつて大会議閉会中は代行機関として常任大会議幹部会が最高権力機関として実権を握り、議長副議長、書記長議員等八名十名の委員を以つて編成され人民共和国の首脳会議ともいえる。

法令の發布、大臣の任免、下級会議事項の決定、勳章の授与等重要事項の総べての決定権を持つてゐる。

政府の最高機関は閣僚会議であつて、この閣僚は国民大会議によつて任命せられる。内務省管下にある内防処はゲーバーウーと同じで国内全般に亘り政府反動分子の監視御目付役である。過去に於て峻烈なる肅清が何回も行われ、人民から一番毛嫌いされている機関である。なお内防処長官は閣僚会議にも出席しその権力は絶大なものである。

政府行政機構図



(一) これ等各官庁に於ける行政、技術指導権は完全に赤系ソ聯人によつて占められている。

地方 アイマツク(盟) ホト(市) の行政機構もやはり党指導のもとに行われている。

アイマツク地方行政機構はアイマツク会議ーソム会議ーバグ会議に構成されウランバートル市行政機構はホテン会議ーホロ会議ーホリン会議に構成されている。

右記会議に於て各々其の役所の代議員が選出されるが殆ど前記国家机关の選挙と変りはない。其の任期は二年である。

外蒙古人民共和国の行制区劃は十八アイマツク(盟)とウランバートル特別市である。

アイマツク —— ソム —— バグ
 (一八ヶ所) (三三五ヶ所) (二、七二一ヶ所)

ウランバートル市
 ホト —— ホロー —— ホリン

(一ヶ所) (一二ヶ所) (一五八ヶ所)

アイマツク名及アイマツク所在地名並ウランバートル市所在地名は別図の通り(三十三頁)

アイマツク所在地といつても日本農村の村役場附近よりも家屋が少ない。地方党委員会、アイマツク官庁、病院、学校、クラブ、地方協同組合、消費組合、供出物資事務所、道路建設事務所、ガソリン配給所その他であるが、特に注目すべきは地方蒙古軍の兵舎と地方監獄と未決監である。

ウランバートル市
 トーレン河の河岸にあつて人口十五萬以上と称せられる(ソ聯人、華僑、内蒙古人、その他も含まれる)

旧称庫倫でラマ教の中心地であつたが、現在特殊な都市として発達しつつある。

東南北は山に囲まれ西方は带状の平地が続く。革命後ウランバートル(赤い英雄)とかわり国都とした。海拔一、二〇〇米以上に達し蒙古唯一の都市である。

四階建の政府官庁を中心として南側は人民広場、これを囲んで各官庁、劇場、映画館、国立印刷場、国立蒙古大学、迎賓館、国立図書館、最高法院、総理官邸、中共、北朝鮮各公使館等居並び、その他散在的に国立工場、自動車修理工場、デパート、消費組合、国立病院、各種特殊技術学校、木材工場、鉄工場、パン工場、其の他手工業協同組合、勤労者宿舎等のある外は総べて支那式ドロ房子と蒙古人古来からの蒙古包を以つて形成された特殊な都会で世界でも稀有の都会であ

七、外蒙古人民革命党

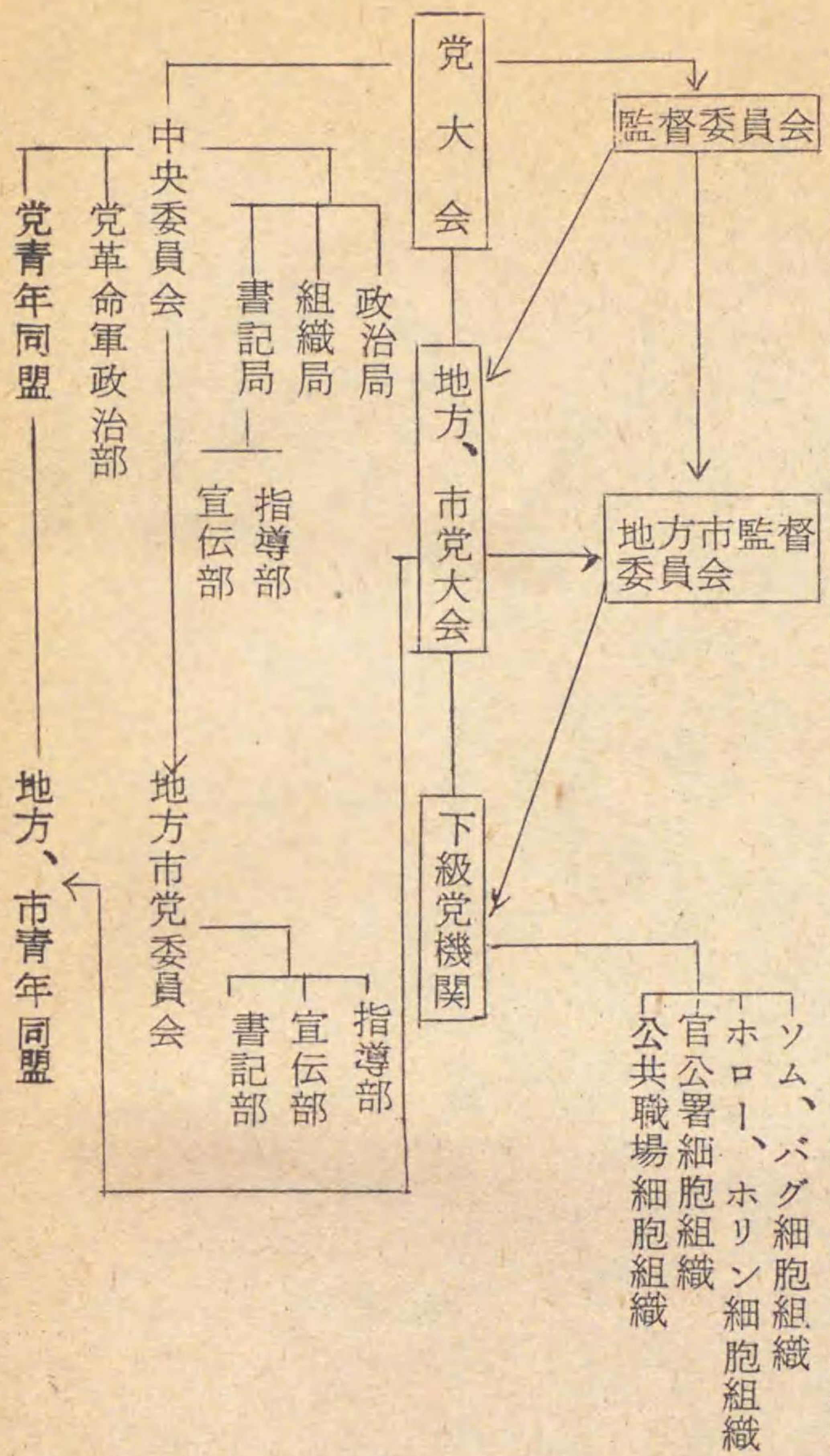
外蒙古人民共和国は唯一の人民革命党が全権力を握つて支配しているから、如何なる政府が出来ようとも結局党の方針に従うより外に道は無いのである。否、党が政権を掌握しているものであるから、党以外の者による政権担当の出現することは不可能である。

党の最高機関は党大会であつて、三年に一回の割合で開催されるが、臨時開催の場合は党中央委員会総会に於て決定される。党大会閉会中は党中央委員会が党の指導全般に當つてゐる。党中央委員会には政治局、組織局、書記局の三局が設けられてゐる、書記局は指導部と宣伝部の二部に分かれてゐる。

中央委員会は青年同盟及人民革命軍政治部の政治教養業務の指導権を握つてゐる。又党大会は党務の調査監督並に黨員の非党行為の取締りを任務とする党監督委員会を選挙する。

地方、市党大会は党中央委員会の指導を受ける、又地方、市の党大会が閉会中は地方、市党委員会が之に代つて党務を遂行する。

地方、市党委員会には指導部、宣伝部、書記部が設けられ下級党機関の指導に當つてゐる。



現在革命黨員は男女の別なく約二五、〇〇〇名といわれ、青年同盟員は国防軍人が六〇%を占め其の他十八才—二十六七才迄の女子をも含め三萬名といわれ、この中積極的優秀分子が推薦により黨員に昇格する。黨員或は同盟員は入党或は入盟会費を毎月納入し又教育を毎週三回毎回三時間—四時間の長時間にわたり政治、経済、生産増強識字等の教育を受けるそして一般人を教育する。

八、外蒙古革命軍

外蒙古人民革命軍はスフバートル、チヨイバルサン等の革命党創立と同時に編成され、当時の人員は僅かに三八六名に過ぎなかつた、現在この中の生存者は一二〇余名であり、これらの生存者に対し政府は恩給の特別待遇を与えてゐる。

革命軍には革命党より指導される政治部があつて軍の政治並に教養が行われる。この政治部は軍中反動分子の監視の役割を持つ監督機関でもある。革命軍將兵は総べて選挙権と被選挙権を持ち各種會議代議員となり得る。

革命軍の幹部は殆ど黨員で下士官兵の六〇%が青年同盟員である。革命軍の幹部の養成はイリンケイ・ソルゴル(士官学校と幼年学校)で行われ学生は二〇〇余名に達する。

男子は総べて兵役に服し、特に特殊技能者及精神病者不具者を除き満二〇才になると身体検査を受けて入隊する。三年間の兵役義務がある。有力者の子弟の中には、あらゆる手段を構じ兵役を免除される者も見受けられた。これらの兵のうち平和産業、建築等に従事する者が近年著るしく増えた。

革命記念日に観兵式が挙行されるが、その装備は誠に幼稚で旧戦車装甲車十数台並に装甲砲数台其他徒歩にて約六〇〇名の將兵と戦斗機五、六台参加する程度である。ただし実際の装備状況は詳かでない。大体現役兵の数は二萬と称せられ予備役は四十才迄で六萬と称せらる。

九、牧畜

外蒙古人民共和国に於て経済の主体となるものは牧畜業である。この牧畜からの生産物と交換してソ聯から日用雑貨・輕機械類・藥品・計器類・教育材料等が輸入される。

一九四八年—一九五二年に亘る五ヶ年計画は、牧畜業の発展に重点が置かれ、特に個人所有家畜頭数の増加に最も重点が置かれた。即ち一九四七年の所有家畜総頭数二、〇〇〇萬頭の五〇%増加を目標としたが、五ヶ年計画完了の現在なおその目標に達して居ない。

之れも総ゆる手段を構じ増産に拍車をかけ、共同放牧、共同草刈、共同搾乳、共同剪毛、獣医の増加、井戸の掘サク、狼害の防止等が計画的に行われたが、實際に於ては従来の遊牧制度から脱却して協同経営に入つたわけではなくまだ旧態依然と

した遊牧形態にある。しかしごく少数ではあるが共同組合式に移行した結果組合数が一五〇ヶ所となり人員も八千人近くに達した。家畜頭数に於ても漸増をたどり左記の通りである。

- 一九四〇年 二、二〇〇萬頭
- 一九四五年 一、八〇〇萬頭
- 一九五〇年 二、三〇〇萬頭
- 一九五三年 二、七〇〇萬頭

一九四〇年―一九四五年の間世界第二次大戦に依り家畜数は激減したが、終戦当時満洲及内蒙古より掠奪没収した家畜頭数は莫大なものと推定される。家畜の生産増加に対し微妙な動きを見せるものは家畜税であろう。

多数の家畜を所有する者は税金が多額になるわけであるから隠匿する者或は屠殺する者等がある。羊、山羊、ラクダ、牛、馬等に対する乳供出割当及びこれら家畜の毛の供出割当が過重な為、自家用乳製品は少く又蒙古包用フェルトもつくれない現状である。酪農工場は三二五ヶ所に設置され、バターを生産しソ聯に輸出している。バターの生産量は一九四七年に比すれば一九五三年は一〇倍に達するに到った。

毛皮類の供出割当がきびしいことは前述したが牛の毛迄割当があり又皮類に至つてはウランバートル市より遊牧地に逆移入して供出に当てるという現状である。

一〇 農業

農業はセレンゲ河トレン河、ハラ河流域に国营農場が二、三ヶ所散在しているが、漸次増加される予定である。総べて機械化された農法を以て小麦、大麦、燕麦、ジャガ芋、大根、白菜、キャベツ、ニンニク、葱、其の他香味料蔬菜等を主要作物としている。珍らしいのは胡瓜とトマトであるが小さく其の味は悪い。

ウランバートル市内を流れてトレン河に注入するセルベ川の流域は、蔬菜類の農耕地であつて、華僑がこれに従事している。又国营農場も小規模ながらも存在する。

東部地区のオン河流域にも小規模な国营農場がある。これらの農業生産に依つては国内の自給自足までに至らず殆どの穀類麵類の補給をソ聯に仰いでいる。

頭数	ラクダ	牛	馬	羊	山羊
20頭以下	3	1	2	0.50	0.25
20-50	5	2	4	0.75	0.50
51-100	6	4	5	1.00	0.75
101-200	7	5	6	1.50	1.00
201-500	8	6	7	1.75	1.25
501以上	9	7	8	2.00	1.50

二 狩猟

牧民の副業として狩猟がある、現在濫獲を防止する為法令が公布され禁猟区禁猟期間種類等制限せられた。しかし狼だけは除外され捕獲奨励金が交付されている。主なる狩猟動物はタルバカン、リス、狐、山猫、狼、ノロ、猪等で、毛皮類は外国に向けられ脂肪類は国家に供出される。

三 工業

外蒙古人民共和国を封建遊牧社会より直接社会主義社会に押し進めようとするに当つて経済上最も重要な条件を持つてゐる産業は畜産加工業である。

先ず第一にあげなければならないのは一九二四年外蒙古人民共和国中第一の総合工場としてサヒルガンコンビナートが建設された。其の工場の燃料は四八軒東方に有るナライハラ炭鉱から軽便鉄道により補給される。この工場は市内電燈の供給に当る発電所の外皮革工場、製靴工場、洗毛工場、幼稚な羅紗工場、並に手動製絨工場等を綜合した工場である。労働者数は全部で二、〇〇〇人といわれ、福祉施設として労働者住宅、クラブ、食堂、病院、温泉療養所等があるが、労働者住宅は不足であり、蒙古包、支那式ドロ房子等に居住している者もある。

一九四六年―一九四七年にわたり日本軍収容部隊が製肉コンビナートの建設に当り完成した。この工場には日本人の血潮が流れているといふことができる。チーズ、ソーセイヂ、肉製品、石けん、食油等の製品は総べて市民の生活食糧必需品として供給されて居るが充分でない。地方アイマクに於てはバター、チーズ、ソーセイヂ等の加工工場は近年著しく増加し三二五ヶ所に及んでいる。ウランバートル市内には手工業協同組合が九ヶ所あつて、皮革、製靴、製絨、フェルト、木工、鉄工、鏡、縫工、洗毛、皮革鞣し、建築、煉瓦等がその主な事業である。又各アイマクにも之と同様の手工業協同組合があつて生産に當つて居るが技術的に幼稚な為品質が悪く高価であつて商品流通が順調に進まない。またウランバートル市には鉄工場、鋳物工場、木工場、煉瓦工場、石灰工場、自動車修理工場、印刷工場、ビール工場、アルコール工場、製菓工場、パン工場、マッチ工場、薬品工場等があるが夫々労働者二〇〇名足らずである。ウランバートルの鋳物工場鉄工場はこの種の工場としては国内第一の工場であるが、完成品を作るのではなく一種の修理加工の工場にすぎない。鋳物としては支那ナベ、ペイチカの炊口、ペイチカ用蓋等が極く少量生産される。マッチ工場の製品は品質不良であつて箱はボール箱・中味のマッチ棒は太いのも細いのもある状態で点火率は五〇%である。

薬品工場は実に初歩的でアスピリン、頭痛薬、風邪薬其の他丸薬の製造を行つてゐる。これらの原料がソ聯から輸入されるものである事は申す迄も無い。

上 絹	下 絹	上 純毛大布	中 純毛大布	下 純毛大布	毛綿混合大布	ラシヤオーバー	上 長靴	下 長靴	上 ハイヒール	フエルト長靴	フエルト長靴	皮製牛提カバン	ハンドバック	新 聞	雑 誌	萬 年 筆	手 帳	イ ン ク	イ ン ク (粉)
一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	一 着	一 足	一 足	一 足	一 足	一 足	一 足	一 ケ	一 年	一 冊	一 本	一 冊 (学生用)	一 ビ ン	一 袋
四〇	二〇					四〇	三〇	一六〇	二〇〇	二〇〇	九〇〇	八〇〇	五〇〇	四八	一〇、五五	四、五	〇、一五	〇、二	〇、四
ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯
タルバカン帽子	烏帽子	鳥打帽	下等鳥打帽	机(三米)	腰掛	薬か	洗面器	なべ	上香水	下香水	ネリハミガキ	ハミガキ粉	ハブラシ	映 画	劇 場	ダ ンス	アスピリン	頭 痛 薬	腰 痛 薬
一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
国内	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	国内	国内	国内	国内	国内	国内

下 人 絹	上 人 絹	花 模 様 綿 布	原 色 綿 布	キヤラコ	白 綿 布	蜂 蜜 茶	紅 茶	粉 茶	緑 茶	石 ケ ン	食 油	食 パ ン	塩 糖	角 砂 糖	白 糖	ビスケット	シューシコ	ペロシコ	下 通 飴	普 通 飴	チヨコレート飴	チヨコレート	
一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	一 米	
八	〇	三	七	一、二	一	四	四	四	八	四	〇	五	二	四	四	六	五	五	六	二	二	二	
ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	国内	国内	国内	国内	国内	国内	国内	国内	国内	国内	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	
羊毛帽子	帽子	狐毛帽子	兔毛帽子	レザートランク	皮製トランク	電 球	電 球	コ ツ プ	皿	ホウチヨウ	ド ン プ リ	飯 碗	水バケツ	綿 花	労働冬服	労働夏服	ソーセージ	生 乳	ル ク	コンデンスミ	なすケチャブ	イワシかん	パイナップル
一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ	一ケ
三	七	〇	五	四	二	五	〇	〇	〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
国内	国内	国内	国内	国内	国内	国内	国内	国内	国内	国内	国内	国内	国内	国内	国内	国内	国内	国内	国内	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯	ソ 聯

鉛筆	一本	〇〇五	ソ聯	マンジュウ	一ケ	〇、五	国内
ペン軸	一本	〇、〇二	ソ聯	マンントウ	一ケ	〇、五	国内
鏡(大)	一ケ	二〇	ソ聯	シールピン	一ケ	一	国内
鏡(大)	一ケ	六〇	国内	鶏卵	一ケ	一	国内
鏡(大)	一ケ	二〇〇	ソ聯	塩漬ニシン	一疋	二、四	ソ聯
ミシン	一台	一、二〇〇	ソ聯	バス運賃	一〇	一	国内
手ミシン	一台	六五〇	ソ聯	電燈料	二五W 一ケ月分	六五	国内
自転車	一台	三〇〇	ソ聯	絹ワイシャツ	一枚	一一〇	ソ聯
腕時計	一ケ	四五〇	ソ聯	半ソデシャツ	一枚	六〇	ソ聯
懐中時計	一ケ	二〇〇	ソ聯	耳飾り	一組	四〇一八〇	ソ聯
寝台	一台	一四〇	ソ聯	ナイフ	一ケ	一〇一三〇	ソ聯
石炭	百疋	三〇〇	国内	ヤスリ	角一ケ	六	ソ聯
薪炭	五本	一〇〇	国内	ヤスリ	丸一ケ	五	ソ聯
ガソリン	一リットル	一	ソ聯				

右の通りであるが、これらのうち国内で完成品として生産される物は殆どなく、一部加工した物も国産品として扱われている。なお靴、皮類製品、コンデンスミルク、ソーセヂ等は逆輸入の現状を現らわしていると共にその逆輸入品はソ聯製品がその殆どを占めている事を見ても、外蒙古に於ける技術と設備が如何なる程度のものか窺われ、さらに外蒙古の経済が全面的にソ聯に依存していることを知るのである。

ここに見逃すことのできないのはウランバートル市に於ける華僑の経済力の問題である。各工場、組合等の熟練技術者は殆ど華僑である。また個人経営の華僑手工業者は政府の重税と制限にも拘らず営業を継続している。その業種は次の如きものである。食堂、飲酒店、雜貨商、靴工、縫工、支那味噌酢商、菓子商、野菜商、木工、建築工、煉瓦工、人糞清掃者、薪炭商、

家畜販売業者、肉業者、染物商、時計修理商、自転車修理商、理髮商、写真商、菜園業者。

これらの業者はこの二、三年来政府の重税と制限により激減しつつあることが見受けられ、不平をいつたため投獄せられたという実例もあつた。

一五 交通、運輸

外蒙古に於ける交通は現在自動車輸送、畜力輸送、鉄道輸送である。航空輸送はあることはある様だが実用化の段階にはない。

外蒙古に於て鉄道の建設されたのは一九三九年でウランバートル市よりナライハラ炭鉱に結ぶ軽便鉄道である。汽関車は川崎造船のマークの付いた煙突の長いものでナライハラから石炭をウランバートル市に運んでいる。

一九四九年十一月ウランバートル市へソ聯領ナオンカから広軌の鉄道が敷設された。この鉄道建設に當つた者は、ドイツに捕虜になつたソ聯人で、終戦後、国事犯として強制労働に服しめられたものである。これらの国事犯の中には相当多数のソ聯婦人が含まれていた。

一九五三年五月頃からウランバートルと中共集寧とを結ぶ鉄道建設が始まり、一九五五年一月開通式が中蒙国境線に於て実施された。この鉄道建設により北京を基点としてみるとき満洲經由より一千軒短縮されたとともに外蒙古共和国管内サインジャンダ地区の油田は中共建設のための補給源となるに至つた。

ウランバートルより東方バイントモンに至る鉄道も予定されていたが中共との連絡幹線鉄道建設の爲中止された。この鉄道建設の完成は外蒙古とソ聯、中間の連絡を極めて短縮したのみならず、これら共産圏に於ける軍事上経済上、はたまた文化上に果す役割は極めて重要なものとなつた。

自動車道路も今は各アイマクに通じ貨物の輸送並に人の輸送も行つてはいるが、大体不定期的で七日一十日に一回位の割合に運輸が行われている。勿論輸送力の大部分は畜力によつてはいる。これは地理的条件からも経済的条件からも道路の状態から見てもなお依然として、畜力輸送によらねばならない現状であることを物語つてはいるものである。

一六 文化、教育

外蒙古は革命以来三十五年も経過しているが、民度の低いには驚くの外はない。之は社会主義国家なるが故にただそれだけの範圍に押し込まれているからであらう。党一本の力を以て全く専制的に押し進める為、国民の自由意志が認められず、何時も猜疑心を以ていやでも従つて行かねばならぬからであらう。

外蒙古人は元來からの蒙古文字を使用していたが、現在はソ聯の政治経済文化に影響されて文字改革を行つた。この為文盲

の率は低下し文字を解する者八〇%に及んだと言われるけれど實際面に於ては旧態依然たる文化程度である。特に遊牧民に至つては然りである。

蒙古人民共和國革命党及び政府の機関紙であるウネン（真理報）の主要欄は、ソ聯プラウダ紙の翻訳記事と民主主義国家間の友好関係並に生産部門に於ける協賛等の大目出しの記事がのせられ、二面三面には生産技術の向上・畜産関係の記事批判・文化事業の報告等の記事がのせられ第四面には資本主義国家間の政情、罷業、賃金値上げ運動、米国の冷戦基地の増設等の記事が掲載されている。其の他労働新聞、青年新聞、赤い星新聞等もある。また定期刊行の小雑誌や宣伝用の小冊子等が発刊されている。

蒙古人は新聞を積極的に購読しない。只強制的であるが故に致し方なく聞くか読むかする。読むに当つても外国ニュースを特に好む。

ウランバートル市にスタリリン名の国立図書館が一ヶ所ある。この建物は日本の捕虜軍人達の血潮が流れて建てられたものである。収容人員は三〇〇名と言われ、二階建の洋館である。暖房装置も整備し室内の装飾も最美をつくしてあるが、おしい事に閲読するものが僅少で、大部分の椅子は空椅子となつて物淋しく並んでいる。

学校教育の段階は小学校・中学校・技術学校・大学校となつてゐる。小学校は四年制、中学校は初級中学三年制、高級中学三年制、技術学校は初級中学卒業後入学し三年制である。大学は三年制であるがそのうち医科は四年制となつてゐる。十年制中学校があるが、これは小学校から中学校卒業迄の学校である。技術学校には医学校・師範学校・獣医学校・經理学校・商業学校（売子学校）・通信学校・芸能学校等がある。

ウランバートルには外蒙古唯一の綜合大学がある。医科、獣医科、文科、社会科、物理科等に分れ、約八〇〇名の学生が勉学してゐる。なお中共内蒙古人及び朝鮮人の留学生も計二〇一三〇名いる。

人民革命党大学というのは党の幹部の養成機関であつて、入学は優秀な党員でなければ許可されない。大体大学への入学に當つては、受験者数が少い為学校卒業者よりも現職者を採用する現状である。教育の程度は申す迄も無く低く、又物質的に支配される環境と制度下にある為、一時的な享樂主義に陥ち入つて男女間のルーズな性行為は初級中学生からすでに行われる実状である。まことに驚くの外はなく嘘ではないかと思われが正に事実である。

最後に科学委員会についてみると、特に目だつのは文字改革と蒙古語の研究であろう。この委員会では純然たる蒙古語を使用してゐて、この点は他の一般に比し著しい特徴となつてゐる。それでも現在はソ聯語が相当新聞にも教科書にも使用される様になつてきてゐる。

一七 演劇・娛樂

ウランバートル市には国营中央劇場の外サーカス劇場・映画館三ヶ所・ダンスホール三ヶ所・相当数のクラブ等があり昼夜に亘つて賑わつてゐる。前にも述べた通り一時的享樂主義にとらわれている外蒙古人は酒と性の交響樂におどつてゐる。特に若い青年男女が夢中になつてダンスに耽つてゐる様は狂気の沙汰とも思われるくらいである。又青壯年男女とソ聯人が交り酒色に浸つて夜の街を横行する様は一寸植民地的氣風を思わせる。

華僑を主とした中国劇場が一つある。支那式の劇の外映画が行われている。華僑は殆ど五〇才以上の者が多い為、現代的劇より旧支那劇を好む。地方アイマクにも小規模な演劇団が組織されているが取り立てゝいふ程のこともない。

一八 保健衛生

外蒙古は古来よりラマ教の伝播とならんで花柳病の伝播は物凄くものであつた。革命以来保健衛生に相当注目するようになり、医療機関の増設が行われたが、まだまだ不十分である。

外蒙古の医療は体に幼稚と言つて良い。医者にも大醫師と小醫師の二種類がある。この大醫師には大学を出た者がなるが、その程度は、日本の看護婦長にも及ばぬであらう。小醫師は日本人の常識の有る素人位なものといつても差支えない。

この様な次第であるから中央病院の診断医は総べてソ連人である。ウランバートル市民には年に一回の花柳病検査がある。血液の検査及性器の検査を行うが、それには信頼出来ないということである。検査後に花柳病で悩む者が多く見受けられる。このように国家機関が、のり出してはいるが、年に一度位の検査でもあり、花柳病の撲滅は、百年河清を待つにひとしい状況である。

外蒙古には公娼私娼は無いが、蒙古人の性生活のタイ廃は国を亡ぼすものと言われている。現在街を歩いても鼻の無い婦人男子を見受ける。このように花柳病を撲滅出来ないのは、国民に衛生思想の欠如してゐることは勿論であるが、根本的には、物質萬能の考え方から一時的享樂主義に陥ち入つてゐることに大きな原因がある。即ち政治のあり方にすべての根本があるのではなからうか。ウランバートル市内の花柳病院は大人病院と子供病院とに分かれてゐる。なお結核病院、精神病院、伝染病院等もあるが、どの病院も満員の盛況で、入院は容易でない状況である。中央病院内に産院があるが、前記の通り花柳病の蔓延している現在では死産が多く、又不具者も多く出る状態である。

中央病院の診断は午前九時からであるが、患者は午前の二時頃から受付に待機してカードの奪い合いをする。これは一日の受診者数即ち医者の診断数（ノルム）が決定されているからである。急患の生じた場合でもどうしても二、三時間はかかる。ある盲腸炎の急患が急報してから四時間後によく収容されたという例は多々みられる。

結核病院には、結核性カリエス・結核性淋巴腺炎・其の他骨部を罹患する者が非常に多い。ウランバートル市に中央薬局があるが、注射液や治療能力の高い薬は販売されない。アスピリン、頭痛薬、腹痛薬等の丸薬が販売されるのみで、其の他の薬は医師の診断書により調合して渡される。その際薬びんが無い為、酒びん、ジャムびん等を持参しなければ水薬の配給を受ける事が出来ない。

ウランバートル市には幼稚園に託児所が併設されている。これは、労働者が乳幼児を託児所に託して労働に従事せねばならぬ経済状態にあるからである。

一九 宗教

外蒙古には従来、ラマ宗が盛んであつたが現在は衰微してしまつた。外蒙古政府は最近二十年間に亘つてラマ教に対し物凄

い弾圧と制限を加えた。

それはラマ廟に重税を課す。十八才以下はラマにする事が出来ない。ラマを還俗して労働者にする。印刷物、ラマ医学、予言、性的不品行等を厳禁すると共に政府は人民に対し反宗教宣伝を行つて人民と宗教とを切り離す。これに対して反動する者は徹底的に肅清する。この様な弾圧の為現在の外蒙古にはラマ廟は激減して只一つのラマ廟がウランバートル市に残つてゐるのみである。このラマ廟(ガンドンの下方に位置している)にはラマが二、三十名余り居住する。現在ラマ廟の経営には経済的に極めて困窮してきているからラマだけの協同組合を組織し、生活の足しにしている。

一般住民のうち老年者達は、仏様を箱に入れるか壁を四角に切り抜いて隠し入れて朝晩拜んでいるという現状である。

二〇 犯罪

外蒙古には犯罪が非常に多い。文化は低く严寒長く続き、経済的に困窮してしまふと総ゆる法令が出ても犯罪が絶えない。革命以来監獄に御厄介になつた者の数は全人口(子供は除く)の八〇%と言われている。革命二十五周年祭、三十周年祭等に於て特赦を受け釈放された蒙古人達が、二、三日して再び古巣に何かの罪名を着て入つて来るのである。外蒙古に一番多いのは窃盗、さぎ、公金横領、宗教犯と思想犯であろう。少いのは強姦犯である。これは黨員であつても官吏であつても殆どが性に対する感覚がタイ廃している關係上、取締りがゆるく公認状態であるからである。殺人傷害罪も案外少いが實際は非常に多いのである。これはソ聯の影響を受けて常に街角で傷害が行われている。夏のことであるが夕涼みに出ていた一人の男が、突然二人の壮漢に襲われ金銭を強要された。しかし持ち金の無い事を告げると、壮漢二人は男を仰向にねせ畢丸の片方をナイフで切り取り逃亡したがこの二人の壮漢は遂に逮捕出来なかつた。この様に殺人傷害強盗、ゆすりの部類は冬期間に於て一番盛んに行われ、殺人事件も冬の期間だけでも二、三回は繰り返される。一般市民は冬期間常に戦々恐々として単独行動はとらず

三、三、五、五連れだつて行動するという状態である。

◎ あ と が き

以上が外蒙古人民共和国の概況である。

第二部 終戦前後から刑の確定迄

才一章 終戦前後からソ連軍に逮捕されるまで

一 終戦前

蒙疆政府徳王執政管下内蒙古察哈爾盟明安旗顧問から、同旗内、張北（盟公署所在地）にある興蒙女子中学校副校長として赴任したのは丁度大東亜戦争中であつた。その間、昭和十九年、張北より、同旗内イフウハイルハンに校舎を新築移転し、（旧校舎は藤田部隊に譲渡）引続いて昭和二十年には男子興蒙中学校を他の草原地帯に移転新築工事を進める（旧校舎は藤田部隊の馬屋と内蒙古軍兵舎等に譲渡）等子弟の教育に専念する傍らめまぐるしい聖戦下にあつて、勝ち抜く為にいささか微力を尽して来た。

私は最初は単身赴任であつたが、昭和二十年六月家族（妻子供二人）を張北から呼びよせた。張北を出発の時は盟公署の増子、川口、根本等の奥さんが見送つて下さつた。こんなにして見送つて貰つたという事は今迄にかつて無かつたことで何かしら重苦しい緊張した感じを受けたのであつた。

同行者は男子興蒙中学校に赴任する上原先生と奥さんであつた。宝源県公署に吾々一行の貨物自動車に着くと同時に、上原先生に召集令状が来ているという連絡があり、同先生は直ちに引き返して行く事になつた。私にも必ず赤紙が来る筈なんだがどうした事だろうと懸念しながら宝源県公署T参事官夫妻の手厚い接待に感謝しながら一泊、翌日は途中の蒙古人部落に一泊し、明安旗公署に着いた。そこからは牛車で、学校に着いたのは夕方であつた。

私達が学校に近づくると学校の女生徒達がよく来たときと大喜びで出迎えてくれた。

和子や敬之（筆者の子供達）を牛車から降ろし、手をつないだり抱いたりして、私共の宿舎に連れて行つてくれた。

この学校の位置は、察哈爾盟唯一の景勝地で、イフウハイルハンと言われる。

附近一带はニレの木とボラガス（柳）が繁つていて、西方にはイフウハイルハンオボがあり、南はラマ廟がニレの木の台間合間に見え、東はなめらかな傾斜した草原ではるか彼方に湖水が見え、北はニレの木が繁つてい、その間に、蒙古包の点在するのが此の上もなく雄大であつた。

このオボ祭と庙会は毎年七月行われるが、その時は、蒙古人の善男善女が参集して非常に賑うのである。

この興蒙女子中学校の東南方六軒の地点に、男子興蒙中学校が新築中であつた。

到着の翌日より男子中学校の建築指導や、日常教育の指示を与えたり、又自分の女子中学校の蓄産加工場の整備指導を行つたりして、四、五日経過した、その頃偶々女子学生に対して日本語の授業中発熱して我まん出来ず、宿舎に帰つて体温を計ると三十八度。早速家内からビタミンBを注射して貰ひ、なお可得安先生の診察をうける。余り熱があるので布圍を敷いて寝て終らう。

五、六日後全身に発疹して来たので、何だらうと司先生に診て貰つたら発疹チブスであり、心臓が強ければ大丈夫との事。それで、強心済の注射を毎日する。十七、八日位経つてから漸く峠を越し、発熱も三十七、八度に降下し初めた。

この峠を越す迄は本当に死境を迷つていた様だ。一度など、余り熱で苦しく、思はず枕元にあつたカンフル剤を取つて、規定量より多量飲んでしまつた、これが失敗だつた。グウと心臓が圧迫された様になつて、一時意識不明となつた。その時妻が私のウメキ声を聞いて、飛び込んで来て手当をしてくれたらしい、妻が隣の部屋で小供の世話をしておつたらしく若し私のウメキ声に気が付かなかつたら、と思つたと、ぞつとする。

病床に臥する一ヶ月余りして、はい出し、窓側に寄つて外を眺めると、和子が女学生達と仲良く遊んでいる姿が、無邪気で何とも言えず、私も何となく楽しい気分になつたのであつた。

二、三日して杖をついて歩ける様になつたので、学生の病気を看護しながら教鞭をとつて下さつたK子女子教師(日本人)N先生(日本人で男子中学校に教鞭を取つていた男の先生)に張家口と盟公署とへ事務打合せに出張して頂く事にした。残つた日系は私共家族だけとなつた。

二、家族引揚通知を受け出発

臥床中、学校事務は山積されていたし、男子中学校の建築の方も順調に進行していたものの、請負者の食糧、学生の食糧等のための牛車派遣、学生の健康状態、教育進行状態等に対する協議や指示に寧日ない状況であつた。

この学校は無電もなく勿論電話もない。蓄電池が無いためラジオも聞く事が出来ない。なお自動車も持たないという学校であつた。これは移転に伴う建設に追われていたためでもあつたが、大東亜戦争遂行の影響をうけてこれら器材の入手が出来なかつたのが一番の原因であつた。

この様にして八月 十日迄はまたく間に過ぎてしまつた。十日の真夜中午後十一時過ぎ突然宿舎の戸をたたく者がある。誰だらうと思つてたしかめると、蒙古語で「小山バクシー」と言つている。戸を開けて見ると明安旗公署の使者である。差出す手紙を受取つて見ると、Y顧問から至急親展とした手紙である。

早速ランプの灯を大きくして読む程に、日ソ間が戦争状態に入つたこと、吾々日本人の御奉公の秋が来たこと、盟公署より出す自動車によつて家族を引上げられたこと、十一日午前中に明安旗公署に出頭のこと等が認めてあつた。

妻にその旨を告げ、返書をしたため使者の者に八達額の煙草を与えて帰してやる。

早速家財道具の整理にかゝつて、日常必需品と必要な炊事道具を三個に纏め上げ、大部分は残す事にした。結婚当時は行李一つと布圍袋一つ位しか無かつたものが、二人も子供が出来てしまつた。致し方ない。病氣上りだ。一休みしようと思つて整理が出来てほつとすると、もう午前三時だ。非常に疲れてしまつた。病氣上りだ。一休みしようと思つて

横になるのもつかの間、五時になつてゐる。先生に来て貰つて日ソ開戦となつたこと。私は家族を送つて再び帰つて来ること、学校教育関係のこと等、先生方に依頼し又男子中学校建築のことを一筆書き記し、後刻届けて貰うことにした。

牛車の来る迄、妻は朝食の準備と子供の世話で非常に忙しい。私供は朝食もそこそこにして、漸く来た牛車に荷物を積み込む。もう一台に妻が敬之を抱いて乗り込む。女学生達は和子の手をひいて牛車についてやつて来る。学校の前を通り過ぎる頃、妻は和子を学生から受け取つて「皆さんサヨナラ又来るわね」学生達は口を揃えて「サヨナラ、サヨナラ」「キツト来てね」手を振りながら牛車の後を追いつながら長女和子に向つて「和子ちゃんサヨナラ」「ネエちゃんサエチャ」末だ本當に言葉もはつきり言えないが手を振つて喜んでゐる。

学生達が何時迄も何時迄も送つて呉れるので心苦しく「有難う有難う。もうこれでよいから帰りなさい」と促した。牛車はこつとこつと砂丘の中を進んで行く。学生達とは見れば、砂丘に馳け上がつてボロガスの合間から見送つてゐるのが見える。「サヨナラ」「サヨナラ」「サヨナラ」妻も和子も夢中になつて手を振つてゐる、敬之は妻の胸に抱かれてキョトンとしてゐる。砂丘の蔭になつて学生達が見えなくなると、何んだか心残りが出て淋しいものであつた。暫く行くと先生が馬で追ひ付いて来て、「小山先生この馬に乗つたら」と言つて馬から降りる。「先生それには及ばない、貴方は旗公署に行つて借入金の手を御願ひします」と告げると、それもそつと馬に鞭打つて走らせて行く。砂丘地帯から漸く抜け出したので歩くきよくなつた。

牛車道路の両側は草だけはのびてオミナエシ、蒙古ザクラ。野生ゆり其の他黄、赤、青、色とりどりの野草が、今を盛りと咲き誇つてゐる。雲雀も彼方此方とさえずつてゐる。日ソ間が戦争状態に入つてゐるとは少しも感じない。

小供達は久しぶりに牛車に乗るので嬉しいのか、何にかしらおしゃべりをしてゐる。私は今迄家族四人と諸に歩いた事が無かつた。それは自分の任地が遠隔、不便のため家族を張家口か張北に置いていたし、又政府盟公署等に連絡に出ても、一日として家族と団欒する暇が出来なかつた。又漸く学校に家族を連れて来ても、病氣をしたり、学校行政の責任者として、二校を受け持つ事になつ

三、旗公署より出發途中自動車事故

旗公署の貨物自動車は、エンジンの故障と、ガソリン欠亡の爲運行出来ず、片角に片付けられてあつた。その爲盟公署より家族引揚に、二台の自動車を派遣したものであつた。しかし途中一台は故障し、一台が無事に旗公署に着いたものである。この一台の自動車は、Y顧問の荷物で一ぱいであつたが、何んとかして吾々の荷物も乗せ出發する事になつた。吾々一行はY顧問、及び家族、旗公署行政指導官のK君（大東亜練成所修了生）、吾々四名計八名更に旗公署及ホリシヤの職員二名を加え、総計十名となつた。

旗公署職員が出て来たか、何か落ち付き無くそわそわとして、よそよそしく見送つてくれた。G先生が自動車の側に寄つて来て、金円を借用出来た事を告げ、御元氣でと妻にも挨拶して見送つてくれた。

暫く行くと旗蒙古軍兵舎の前に停つた。中から蒙古服を着た六名の新兵が、張北蒙軍才七師に入隊する爲に車上の人となつた。

この兵舎はナルバンチン喇嘛の寺廟を改造したものである。尙ナルバンチン喇嘛は外蒙古革命軍による肅清を恐れ、外蒙古より逃亡し来り、明安旗に在住したものであるが、私が明安旗顧問であつた時代は特に注意を払つていたし、特務機關も常に牒報網を張つていたものである。

この兵舎を出てから暫く行くと、五十米位の砂地を突き切らねばならない。皆下車し、男は車の後押しをやりどうやら切り抜けた。

やつとこれでよしと氣を安めてゐると、もの三十分も運行しないのにパンクをしてしまふ。車輪を取り換え、出發する。又もの二十分も行かぬのにパンクする。一時間以上もかゝつて修理が終つた頃には太陽も大分西に傾いてゐる。心はあせつて来る。家族達はうんざりした様な顔付きである。Y顧問に新兵蒙古軍を馬で張北に送つたらどうかと相談した。

Y顧問は赴任して以来僅か四ヶ月にしかならない關係からか、どう処置してよいか分らなかつたのである。又新兵が途中から逃亡するかも知れないという、責任感もあつたのかも分らない。まあそれでは同乗させて行きましよう、と出發したが案のじよう又パンク、兎に角蒙古軍新兵を五井台迄歩かせ、そこで馬を見付けて張北に送る事にした。

パンクした車輪を取り除き一輪欠のまゝ五輪（普通は六輪）で五井台迄走らせる事にした。

中国人の運転手も之によつて元氣が出鼻唄交りで、上手に運転してくれた。夕方になつて来るに従ひ小雨が降り出した。

五井台のシャーマンの家に泊る事にして、自動車をつけた。蒙古包からチョンダー（驢騎校）であるシャーマンの弟が迎えしてくれた。この男は金で驢騎校という役職を盟長から買った財産家である。

雨が激しく降つて来る。皆んな支那式家屋に入つて休む。私は運転手に明朝四時頃出發して張北迄行くから充分自動車を修理して置く様に頼む。僅かな煙草と白米を与えた上に、小遣にと幾らかの紙幣を握らせた。彼等は早速修理に取りかゝつてくれた。

シャーマンの家の者達と私は長年の友誼關係があつた為か、乳茶とホロート（乳で作つたカゼイン）をすすめてくれた。子供達はこれを取つて食べて見たが、齒がたゞす捨てるのは困つた。夕食時に蒙古特有の漬物を出してくれた。皆、お美味しいお美味しいと言つて、お代りをするのでシャーマン一家の者は、ほほ笑んで何回も運んできてくれた。

午後十時頃になつたので皆一諸に用便に行く事をすすめ、シャーマン一家の者に犬の番を頼む。蒙古には便所は無い。適當な場所用便をする。特に婦人には一番困る事であつた。

蒙古の犬は甚だ獠猛で、家人の外は必ず遠慮会釈なく襲いかゝるから、就寝後の用便は絶対出来ないものである。

雨がしとしと降つてゐる、皆んなの寢息がかすかに聞える。ほつと氣が付いて飛び起きて見るともう四時過ぎだ、小雨が降つたり止んだりしてゐる。

皆んなも起きてしまふ。運転手が入つて来て「出發するか」と尋ねる。私は「Y顧問どうしますか。雨の中でも出發しましょうか」「待てよ途中で昨日と同様な目に会つたら大変だし、漢人地帯に入ると治安が悪いから、暫く様子を見てから出發しましょう」「そうですなね治安の悪い処でエンコでもされたら大変だし、そうしましょう」。直ぐ朝食の準備をして貰う事にした。太陽が出初める頃から少し晴間が見え出したので早速朝食を済まして出發する。

道は非常に悪かつたがどうやら切り抜けて、学田地に到着したのが十二時少し前であつた。学田地郷公所に寄つて自動車のエンジンの調整、水の入れ換をする間に昼食をとる。暫く休息する事によつて一番治安の悪い地帯の道路が、幾分なりとも乾いて呉れると思つたからである。

菜油でいためた油餅の屋敷を済ませ、午後一時半に出發した。やはり道はあまり良く無かつたが、故障も起らず危険地帯を無事に通過する事が出来た。その頃約十五、六台の牛車に出会つた。よく見ると男子中学校の学生が、食糧運搬に来ていたのであつた。自動車を停めると、学生達が四、五名馳け寄つて来て、「バクシイ、サインバイノウ」「サインバイナー、サインバイノウ」。一応の挨拶の後、私は「馬乳酒を買えたかどうか」「先生買えませんでした、彼方此方探しましたがどうしても見付かりませんでした」「あゝそうかね、私が先に行つてゐるから早く来る様に」と言い残して自動車を走らせる。

馬乳酒（馬の乳を発酵させて蒸溜して作つた酒で日本酒と余り変りはない）が無いとは残念だ。酒が殆ど手に入らない宝源の日系職員に、何時も学校の食糧問題で大変厄介になつてゐるので、蒙古の酒を心尽しにと思つてゐたのに……。

てである。

私は参事官をつかまえて「貴方達はとうしたんですか」「今情勢が急変して直ぐ出発する事になった」「くそ、吾々に一言も言わずに撤収するとは誠に情誼の無い奴と思うのもつかの間、部屋に飛び込んで吾々も直ぐ出発する事を伝えた。私は再び馬の準備に忙しい参事官に「これで御別れします、又何処かで御会い出来るかも知れません。御元気で」別れを告げて自動車側にいくと、運転手がエンジンの手入をしている。直ぐ出発せよと命じたが中々修理がはかどらな

その側から張北迄乗せて行つて呉れと頼む日系道路建設請負者がある。「貴方はどうして馬に乗つて行かないのか」「馬に乗れないのです」「この車は佐翼旗迄行つて後は馬になるんです」「それは駄目だ、途中で馬に乗つて行くというならやめましょう」と言つて自分からよしてしまつた。この人はどうなつたことやら……。

自動車のエンジンも漸くかゝり、動き出した瞬間、南門附近で盛んに銃声がし始めた。どうしたのかと思つた間に県城内の騎馬警察隊は、蜂の巣をつついた様に取り乱して西門へ西門へとなだれを打つて逃げていく。これが信頼していた警察官か。銃声はひっきり無しにする。高空をビュンビュンと空をきる弾道の気持の悪い音がする。南門方面に於て物凄。自動車を急停車せしめて、「Y顧問何うします、警察官の叛返ですね、南門は激しい銃声だが、度胸を決めて南門を切り抜けるか、多倫に引き揚げるか」私も判断に困つた。自分一人で決定出来ない。家族達の身の上を考えると無茶な行動も出来ない。自分一人丈だつたらどんな手段でも構はして逃げる事も出来るが、残念な事に沢山の手足まといが居る。

Y顧問も同様である、其の返事の長い事、居ても立つても居られない、焦燥感に襲はれる。私は咄嗟に自動車から飛び降り運転手にガソリンの状況を聞く多倫迄は充分ある。「Y顧問、ガソリンは多倫迄大丈夫だ。多倫へ出ますか、それとも南門をぶつた切つて左翼旗迄出しましょうか、左翼旗に於てもこんな情勢が急変したらどうなるか分らない、」再びY顧問の判断を待つた。「多倫に行きましょう、特務機関長が待つていて呉れると言つていた。」数分の間であつたのである。長かつたこと。このような状況下における判断は初めてである。私は運転手の窓につかまつて東門に出る事を告げた、そのまま東へと自動車を走らせる。何んだか後から追はれている様な気持で一ぱいである。

暫く行くと坂道にかゝり自動車エンジンがエンコしてしまつた。悪運は何処迄も付きまとうものか、自動車からひらりと飛び降りて、修理する運転手の側に寄つて見ても、運転手の動作がまどろしくて致し方ない。宝源県城が見下せる。銃声が豆をいり様に聞える。混乱状態になつたのだろうか、煙が見える県公署はどうなるだろう、参事官も逃げのびたのだろうか、県長も満洲出身者で馬は上手で無いと聞いていたが、どうなつただろう。

無中でそんな事を考えながらも自分達の難行を思えば心配どころで無い。車の故障がしやくに障つて来る。漸く修理完了、ほつとする、出発、誰れも彼れも口を開く者が無い、暗沮たるこれからの行方を考えると誰しも無口になるのも当然である。

大部薄暗くなつて、冷え冷えと寒さが身に沁みて来る。多倫迄行き着けば関東軍と特務機関がある、必ず善後処置が構ぜられる。

自動車ががたんごとんと揺れたので、ふと吾に帰つてみると自動車はヘッドライトをつけぬかみに入つてさかんにもがいている。グウグウグウ。「駄目だ、駄目だ」怒鳴りながら、ひらりと車上より飛び降り、家族全部を降車させ、男は後のボディを押す事にした、案の状うまくぬかみを切り抜けた、ヘッドライトで腕時計を見ると十二時を少し廻つてゐる。

「何だこんな時間になつてゐるのか、未だハブリカに着かんというのは、いつたい何処の辺を走つてゐるのであるのか」。さつぱり見当がつかない。「Y顧問もう十二時です」「遅くなりましたね」「何処を走つてゐるのか分らないです、肅親牧場は近いと思ひますがね」「兎に角行ける処迄行く事にしましょう」又ぶつたり話が途切れてしまふ。

自動車は何時の間にか広い野原に出ている様子だ。私は明安旗顧問時代この道を何回も馬で通り自動車でも通つた事がある。

暫く行くと左側に薄ぼんやりと山のかげが見える。「Y顧問肅親牧場内に入りました。これから哈布利加迄大体一時間位でしょうね」「あゝそうですかこの辺が肅親牧場と和親牧場が有る所ですね」「え、そうです、肅親牧場には満洲国皇帝陛下の縁故に当る憲陽という人が牧場長で、この人は今京都帝大の講師をやつて居られるんですよ」「この憲陽さんの妹さんが川島芳子という方ですね」「え、そうです、憲陽さんは俺も知つてゐるが仲々親日家ですね」「俺も憲陽さんとは二、三回会つて居ます、明安旗と接譲地帯にあつたもんですから、土地問題で色々御厄介に成つた事があるんです。」「寄つて見ましようか」「そうですね。しかし暗くて何の方面に道があるか分らないし、憲陽さんは今いないと思ひます」「道草を食つてゐるより直接ハブリカに行きましよう」「そうです、そうしましよう」

暫くそんな話で、いらだたしさと、寝むさがまぎれたが、話しが杜絶すると行先が心配になつて来るのであつた。

突然城壁が現われて来た。「Y顧問哈布利加に着きましたよ」「あゝそうですか」、城門は閉まつていたが、城門上に自衛団の歩哨が四、五人立つてゐるのが判る。

「オーイ開門罷」「我々日本人那明安旗顧問來了開門罷」矢次早やに怒鳴つてゐると暫くしてから、大門をガタガタギイと開けて呉れた。有難い、この辺は未だ情勢の悪化を知らないらしい。時計を見ると午前二時近い、何んと時間のかゝつた

事か、屋間なら四時間位で着くものを正味九時間もかゝっている。自動車を城内に入れ郷公所に行き、家族達を一部屋に入れて休息させる、食事の用意を御願ひする。彼等漢人も親切だった、何にも情報を知らなかったからでもあるが、兎に角こんな遅くなつて来ても、いやな顔一つせず色々親切に準備にかかつて呉れた。私は運転手に今日の行程の御苦労であつた事を述べ色々宝源集の出来事を話さない様に注意しておいた。

運転手も中々好人物であつた不平一ついふでなく我々をここ迄送つて来てくれた。彼にも妻子もある事だろうし、若し人物がずるい男だつたら自動車故障だと偽つて、我々をほろり出し自由行動を取つたかも知れない。私は若干の紙幣を渡す事を忘すれなかつた。

哈布利加に着くと張りつめた気がゆるんだものか、家族達は毛布を敷き子供を抱いて寝てしまふ。「Y顧問、家族達が可愛想ですね、布団でも下ろして掛けてやりましょうか」「私もそう考えていた処なのです」布圍袋をほどいて、上から掛けてやると一寸頭を上げた様だが、その儘死んだ様に眠っている。

郷長が入つて来たので、多倫特務機関長が来たかどうか尋ねると、昨日朝早くこゝを出発したとの事であつた。

食事が出来て来た、皆を起して食べる様にすめたが、誰も余り食えない様で、沢山の油ビンを残してしまつた。残した油ビンを朝食にする様に保管して暫く休息する事にした。

五 特務機関長の道案内者

暫く休もうと思つて、ごろつと支那カンの上に横になる。そのまゝ前後不覚にねむりこけたのである。

驚いて飛び起きて見たらもう五時だ。「Y顧問早く出発しましょう」「Kさん吾々の荷物を整理して車を軽々しましょう」「そうですか早くしましょう」妻達に出勤して貰つて大至急整理する。郷長を呼んで、皆なで適当に処分する様に話す。

郷長も心よく引き受けてくれた。

郷長を初め、自衛団員に御礼を言つて出発したのは七時だつた。

自動車は快スピードで走る。大部軽くなつたので快調だ。この分なら午前中に多倫に着く事が出来る。自動車は走る。人の心も同じ様に馳ける。一時間位走つた頃向うから騎馬でやつて来る男がある。男は馬から降り、手を挙げて自動車を停止する合図をしている。急停車すると馬が驚いて跳ね廻っている。吾々は何うしたんだろうと思ひ、飛び降り近寄つて見ると、多倫特務機関へ機関長を送つて行つた道案内者であつた。早速丁機関長の状況を聞く。昨日昼頃多倫に着いたが、八路军が入城して終い、ソ聯飛行機は飛行場を爆撃の後整理して着陸している、尙ソ聯戦車部隊も突入して来ている、機関長は昨日の午後、自動車で張家口に出発してしまつた。

また関東軍の航空監視隊は、一昨日全員引揚げたらしく、今多倫に日本軍の姿は全々見受けられないとの事であつた。あゝしまつた。最後の頼みとした多倫も駄目か。がっかりしてしまふ。

道案内者は馬に鞭打つて吾々の来た哈布利加方面に土煙をあげて走つて行く、吾々は無言の儘大地の上に長々とひつくり返つて青天井を見上げるのみであつた。

六 あても無く羊群廟へ

「Y顧問。困つた事になりましたね。全々見当が付かなくなつてしまつた。南も東も封鎖されてしまつたんじやどうにもならない、吾々の行く可き道を何処に求めたら良からうか。」相談相手はY顧問一人だ、何とか切り抜ける方法を構はなければならぬ。

「本当に何とか切り抜けねばならん、満洲に逃げる方法を構するより外に方法はあるまい」「何か案が有りますか」「牛車か、馬で行くより外に道は無い」「では牛車か馬を何処から出して貰うか」「そうだ明安旗長札布に御願ひして出して貰ひましょう、私もY顧問も明安旗の為に働いた者だ、情誼を感じて出してくれるかも知れない」「じや行きましょう」車を引き返し哈布利加の手前より羊群廟に到る。羊群廟迄自動車が入つたが、之から先は砂地と、砂丘で行かれない。羊群廟の倉に入つて休息する間、私の知人であつたドルチ喇嘛に明安旗長札布に連絡を御願ひした。

明安旗旗長札布は、察哈爾作戦直前日本軍特務機関北野一兄氏の工作に依り、日本軍に協力した。察哈爾盟管下の蒙軍を編成し、日本軍の張家口入城に当り側面的に協力した。尙蒙疆自治政府成立と共に政務院長に任命され活躍後、呉鶴令にその席を譲り、参議院議長となり老後を養つていた。その功績により日本帝国より勲二等桐花章を授与された傑物である、終戦当時は察哈爾盟盟長であり、また第七師師団長でもあり、且つ参議院議長でもあつた。

自動車運転手に吾々の品物の一部を分けてやり帰してやる。この運転手に深く深く感謝する。自動車が去つてしまふと、心淋しく一人取り残された感じを受けるのであつた。

羊群廟では祈禱儀式が行われていた、それは月蝕があつた為ラマ教の迷信として、何か変つた事件が起る兆候であると信じ、その災厄から逃れる為に行われていたのであつた。吾々一行が茲に来た事を知つた廟内は、急に騒々しくなり、多数の喇嘛が廂壁に帖紙してあつた反共宣伝單を、徹底的に剝しにかゝつていた。これらの下層喇嘛が何か念経しながら剝がす光景を見た時、空恐ろしくじつとしている事も出来ない焦燥感に打たれるのであつた。

ひよいと戸外に目をやると遙か彼方十五軒程の前方を小型乗用車が西南方に向つて行くのが見える。多倫特務機関長の自動車だろうか。しかし多倫一張北街道は山の向うを通つておるのだから、こんなに近くを走るの、ふにおちない、その内

に見えなくなつてしまつた。これは後になつてウランバートルの監獄内に於て蒙古人からの情報に依つて知つたのであるが、張北蒙軍才七師一等教官下川氏が盟長を救出のためか、或は彼の出馬を乞ひに来旗し、会谈おもわしくなく帰張したものは無いかと推察した。

明安旗旗長札特巴札布に連絡に出したドルチ喇嘛が帰つて来た。「早く張家口に出る方が良い、正々旗にはソ蒙軍が入つており、そこから自分に対し文書を以つて、交渉をしてきて居り、飛行機で降伏状の伝單が撤かれて居る現状であるから、早く出発するが良い」との事であつた。尙特に「自分も今度は殺るされるに違ひない、皆達者で日本に帰れる様に祈つて居る」との事であつた。札特巴札布は耳の下に大きな瘤があつた、やさしい親父で特に私が張家口の参議院議長公館に寄宿していた当時色々厄介になつた事が思い出され何かしら胸にこみあげてくるものを禁じ得なかつた。

自動車は帰してしまつた。牛車は来ない。日は暮れる、ハブリカから持参して来た油、ピンを皆で分け合つて夕食を取る。早速近くの蒙古人部落に連絡して、牛車の派遣方を懇請する。

外が急に騒々しくなつて来て、ドルチ喇嘛と四、五名の喇嘛が飛び込んで来た。「早くこゝを出て、外の部屋に隠れて下さい。八路軍が近くの蒙古人部落に来ました。此処へ来るかも知れません」慌たゞしく吾々を案内して連れて行つてくれたのは、喇嘛の住居の一室であつた。絨毯を敷きつめた綺麗な部屋で、机が一つ置いてある。その上に灯心がゆらゆらゆれて居る私はドルチ喇嘛に、廟の牛車一台でもよいから借して貰えまいかと頼む。彼は心よく引き受けて飛び出して行く。犬の吠る声も激しくなつて来た。八路軍が来たかも知れない。皆此の部屋に居つては危険だ、外庭の隔に隠れていた方が安全かも知れない。皆にその方に行く事をすすめて灯心を吹き消す。急に真暗になつてしまふ。

その中に牛車の音がする、おや八路軍じゃあるまいなあ、一寸様子を見よう。壁の上から覗いて見ると、うすぼんやりと牛車の姿が見える。私は咄嗟に門を飛び出して確かめて見た。真違なく牛車だ待ちに待つた牛車だ。あゝよかつたよかつた。私は馳け込んで皆に牛車が来たから荷物を持つて出る様に伝えた。誰も彼もが子供と荷物を手一杯にして出て来た。荷物を積み込んで直ぐ出発。早速道案内者に明安旗才十一佐迄行つてくれる様に頼む、素直にきいてくれる。この道案内者も私はよく知つていた。

七、砂丘内にテントを張つて

羊群を離れるに従ひ心持が少し落ち付いて来た。しかし牛車にゆられながらも、何時も警戒は怠らなかつた。我々の武器といえば、わずかに小刀と炊事用の包丁位しか持たなかつたいざという時、何のやくにも立たないことは分り切つて居る。これで満洲迄落ちのびようとは……。

東の空が白白となる頃には、昨晚の焦燥感は無くなつた。初めて若い北村指導官が牛車に積んだ布圍袋に、またがつて大声で豫科練の歌を唄い出した。

「命おしまぬ豫科練の

七つぼたんは桜に縋り

今日も飛ぶ飛ぶ霞見ヶ浦に

でかい希望の雲が湧く」

広漠たる大地の朝風に元氣な声がしみ渡る。ついりこまれて私も合せて歌い出した。何もかも忘れてしまふ、女子供もはしやいで歌つて居るのだからか、如何にも楽しそうに、希望さえ有るようみえる。

才十一佐領薩副官(盟長札特巴札布の護衛隊長)の包の近く迄行つたが、立ち寄る事を中止した、それは彼に迷惑を掛けはならぬとの私の心遣いからであつた。暫く行くと向うの丘でマイハンを張つて、オボ祭りをやつておるらしいのが見える。吾々の牛車が近づく、急にマイハン(テント)を打畳み片付け始めた。

向うから馬を走らせて近づいて来る、見れば薩副官である。馬から飛び降りて「バクシイ、サイハンバイノウ」「サイハンバイノウ、サイハンバイノウ」一応挨拶の後、「貴家を訪問する事は貴方に悪影響があると悪いから行かない。牛車を派遣して頂く間マイハンを借して頂き、砂丘内に滞在して、牛車の来るのを待つ事にしたい」旨を述べると、彼も心よく引き受けてくれた。近くの砂丘迄案内してくれ、なおシャベルを一丁借してくれた。

「早速牛車を派遣するから」と言い残して帰つて行く、吾々一行は砂丘内のボロガス(柳)の繁みの中に、マイハンを張つて一時休息する事にした。其の中に牛車も来るだろうからと信じ羊群廟から来た牛車を帰す。(之は蒙古の習慣として馱伝式に次から次へと送り届ける方法である)

吾々は朝食も昼食も未だ済ましていなかった、直ちにシャベルで低地の砂地を掘ると、綺麗な水が湧き出て来る、周囲が総べて砂丘に囲まれて居る為、水には不便しないで済んだ。妻達は食事の準備にかゝる。吾々男子は枯木を集めながら周囲の地形を覚える事にした。

皆疲労と空腹で、くたくたになつて居た。三度の食事を一度にせねばならぬ事も、現在の境遇では未だ良い方だ、白米もあるし、干物も準備してあつた為、さしたる不自由も感じなかつた、しかし満洲へ、満洲から何処へ行くか分らないこれから先が、不安でならない。食事を済ましてから、騎馬の蒙古人が来て今日中には牛車は間に合わない、明朝必ず派遣するからとの連絡があつた。

雨がしよほしよほ降り出した。皆今日は牛車が来ないというので、各自の布圍を出して寝てしまふ。雨も止んだり降つたりである。その夜は皆安心して眠れた様だ。附近に部落は無し、犬の吠えるのも聞えないからであらう。

朝ほの暗い頃より起き出して朝食をすまし、にぎり飯を準備して、牛車の来るのを待った。しかし牛車は来ない、午後になつてから前の使者がやつて来た。「どうしても牛車が集まらない、ラクダではどうか」という事である。吾々は皆で相談した。其の結果Y顧問の奥様が妊娠三ヶ月である事が分り、無理する事は出来ない、「それでは牛車二台で良いから早く出して呉れる様に」と、特に依頼して帰す。吾々は使者の者が帰つてから、荷物の整理を始めた。今度こそ食糧を主体として、其の他は最少限度に梱包する事にした。一個一個の梱包が出来上つた。残して行く荷物は蒙古人にくれてやろうと、ポロガスの下などに纏めて置いた。

夕方から又雨が降り出した。どうして牛車は出してもらえないのか、何か理由があるのだろうか、日ソ間の急変を知つて敵意を持つてゐるのだろうか、それともソ聯軍に對し恐れをなして出せないものであるのか、急変による貨幣価値の変動を考えて出せないのか、日本とソ聯の間に挟まつて動きが取れないのであるのか、どれもこれも当てはまる様な気がする。しかし今迄の恩義を感じて二台位の牛車を出して欲しくない事もあるまい。昨日帰した牛車が惜しくなる。その儘借用しておけばよかつたと、悔いてはみたが後の祭であつた。

学校を出てから今日で何日になるだらう、指折り数えてみる、十一日シャーマンの家、十二日哈布利加郷公所、十三日羊群廟、十四日砂丘内、十五日砂丘内、五日目だ。何と慌たぶしかつたことか。

明日は必ず牛車が来るにちがひない、翌日も朝早く起きる。砂丘に上つて、牛車の来るのを見張つたが来ない、午後になつて前の使者がやつて来た、「旗民に早く出す様に督促してゐるけれど、何うしても集まらない」と其の事情を詳しく我々に話してくれる。

ハ、盟長の娘ガロー

使者の話によつて殆ど不可能な状態であることを知つた。「何んとか方法は無いか、もう佐領に頼むのは駄目に決まつてゐる、おゝそらだ盟長の娘ガローに御願する事だ」と気がつく。早速一筆書いて使者に渡し、至急ガローにここに来る様にと頼んで帰す。

盟長札特巴札布の娘ガローは年令二十才、興蒙女子中学校第一回卒業生で、非常に親日家であつた、それは巴彥托拉盟長の息子との結婚前、日本人と良い仲になり、妊娠迄してしまつたが、結局、父親の反対するところとなり、封建性の強い蒙古のこと、遂に巴彥托拉盟長の息子との政略的結婚を余儀なくされた。その後二、三、年して自分から離婚してしまひ、女子

中学校に入学し、卒業後は多倫ラマ印務処の小学校の先生などをやり、独身を続けて来たものであつた。彼女と知り合つたのは私が明安旗の初代顧問として赴任し、盟長の冬の公館に挨拶に行つた時、盟長と自分の会話をしてくれくれたのが最初であつた。それ以後度々ガローに通訳してもらつたのである。また自分が家内を張家口に置いた時、家が無く困却し盟長公館の一部を借用して入つたこともある。妻とガローとが相当親密な間柄となつたのはこれからであつた。日本の振袖を着て喜んでゐた事などもほゞえまじい憶い出として浮んでくる。

夕方ガローが汗びつしよりになつて騎馬でかけつけてくれた、飛び降りるなり「何も知らなかつた、小山さん達がこんな処に居るとは全々知らなかつた。御苦労されたでしょう、何も持たずにつけたのです。早く牛車を出す様に手配しましょう、私が佐領の所に行つて話してみます、」ガローさん本當に御迷惑をかけます、何分宜敷く御願ひします、」小山さん。父も宜敷く言つていました。早く行つて面倒を見て上げなさいと言われて来ました、父は今度殺される事を覚悟してゐます、毎日の様に正々旗から強迫状が参りますので、どうなる事か少しも見當が付きません」「あゝそうですか。残念です。お父さんに御迷惑かけてはいけません、伺いませんでした、お帰りになつたら宜敷く御伝え下さい。」

ガローは支那服を取り出して、妻に与え、「これを着なさい、日本服でいたら危険です」と言つて気を配つてくれる。困つた時の神助けとさえ思われ、有難く頂く。妻もポロガスの下に片付けて置いた、品物を取り出してガローに贈つた。Y顧問の奥さんも何かと贈つた。

彼の女は去るに當つて、「牛車は私が佐領の処へ行つて直接交渉するから、遅くとも明日は出発出来る様にします」と、言い切つて馬にひらりと飛び乗る。

「皆さんサヨナラ、日の丸を押し立てて来る日を必ず待つています、サヨナラ、御元気でね」ガローも妻達も涙にむせび、別れのサヨナラも出ない。

夕闇迫る蒙古砂丘の彼方へ、消え行く彼の、女丈夫の後姿を何時迄も何時迄も見つめるのであつた。

九、騙し打ち

「今度こそ大丈夫だ、明朝は必ず来るぞ」と頼もしく、その夜は希望を持つて寝に着いた。

十七日皆朝早くから張り切つて準備するのであつたが、時計と睨めこである、八時、九時、十時、十一時。来ないのか、どうしたんだらう、あんなにガローが言つて呉れたのに、何か變つた事でも起きたのでは無いだらうか。十二時頃になつて使者の者が来てガローからの贈り物だと言つて、白酒を一びん持つて来て呉れた。牛車は手配中だから遅くとも、夕方頃迄には来るだらうという事だ。蒙古の事だから無理も無い様なものゝ、事情が事情だから余りにひど過ぎると思わざるを得なく

なり、又「これは危ないぞ、白酒など持つて来た処を見ると、安心させて置いて殺つてしまふのでは無いか」とも考えさせられるのであつた。最悪を考えねばならぬ、皆と相談した。正藍旗迄ソ蒙軍が入つておるとすれば、明安旗にも確実に入つておるにちがひない。皆は決心した。小刀や、庖丁で柳を切つて来て尖をとがらかし、最後の時はこれで突き刺すのだと覚悟した。吾々男三人は行く先の見当を決める為、砂丘に上り方位を確かめる。

夕方になつても牛車は来ない、確実に来ない事が分つた。夕飯には握り飯を準備して、最後の壮途への宴を張つた。ガロ―が贈つて呉れた白酒にY顧問の持つていた干いかの少量を肴にして……。

夜九時頃になると、またしよほしよほと秋雨がやつて来て、マイハンのはためく音と交錯して物淋しい。今晚に限つて敬之が泣いて泣いて寝つかない、妻がマイハンから出て抱いてあやしているけれどむさつぱり泣き止まない。秋雨はザーとやつて来ては止み、又しのび足の様にやつて来る。やがて敬之も漸く泣き止んで寝ついた様だ。そうするとかすかに牛車の鐘の音がカラン、コロソ、カラン、コロソと聞える、「おや牛車が来たかな」と言いながらマイハンから飛び出して聞き耳をたてる。何にも聞えない、おかしいなあ、マイハンに入つて妻に聞いて見る、聞えなかつたとの返事である。皆も聞き耳を立て、聞いて居るが聞えない。

又ザーと小雨が降つて来る、どうしても神経が高ぶつて眠れない。誰も眠れない様だ。又暫くしてカラン、コロソ、カラン、コロソと牛車の鐘の音が聞える、私は咄嗟に妻をつゝいて、「あの音が聞えないのか」とただすと、「あゝ本当だ。聞えます聞えます。」皆が飛び起きて聞き耳をたて、聞く、本当に聞える、牛車が来たんだと、飛び出して行くのは、元氣な北村指導官である、暫くしてしよんほりとマイハンに戻つて来た。「牛車は来ないのか」、北村指導官も首をかき上げて考えている、「確かに聞えたんだ、出てから暫くたつたらなり止んでしまつた」という。実におかしな事があつたものだ、まさか皆に聞えたのだから錯覚でもあるまい。

私はたまりかねて小雨の中を、砂丘の上つて周辺をくまなく見張つた。しかし牛車の鐘の音はしない。三十分もじつと立ちすくんでいたが何にも聞えない。牛車も来る様な氣配もないマイハンに帰つて暫くすると又聞える、北村指導官と手分けして、左右に分かれて音のする方に近ずいて行く中に、音がしなくなる、馬鹿馬鹿しくなつて帰つて休む事にした。もう十二時も過ぎてゐる、明朝は早いからと横になつてみたものゝ中々眠れない。マイハンをサラサラと打つ秋雨がいかにもうら淋しい。家族達は明日は早いからともう、ぐつすり寝込んでしまつてゐる。

灯のないマイハンの中は、自分一人丈である様だ、よく考えて見ると総べてが裏切られてゐる、何事もへし折られてゐる。家族達が可愛想だ、こんなに可愛い子供達をおぶつたり、連れたりして食うものも食わせずに、砂丘を越えて行かねば

ならぬかと思えば、ますます頭がさえて眠れない。

十八日頃の暗い頃より仕度をして、朝食の準備も出来た。皆が車座になつて「さあ元氣で行くんだ、どんな苦しみも乗り切つて行くんだ、何処迄も生き抜くんだ」と酌み交す水盃も真剣そのものだ。

突如、パアン、パアン、パアン、パアン、激しい銃声だ、どきつと胸を打つ。マイハンにブス、ブス命中する、皆んな伏せるッ。氣が付いて見れば和子が一人で立つて泣いてゐる。咄嗟の間に抱き寄せ二人で伏せる、妻も近くで敬之を下にして伏せてゐる、Y顧問の奥さんも子供を抱いて伏せてゐる、益々銃声は激しくなる、マイハンには弾丸がブスブス音をたて通した。

よし俺が様子を見て来る、和子を抱きながら、マイハンよりは出し外的情況を見る、砂丘に丸い帽子を被つた外蒙兵らしい者が見える、四方八方から盛んに発砲してゐる。再びマイハンに下つて「Y顧問駄目です四方八方からです」私は咄嗟に自殺を考えた。しかし刃物は総べて出發準備の為外に置いてある。子供は身体に固くしがみついている、「子供が可愛想だ、Y顧問手を挙げよう」

私は思い切つて和子の抱きつく手を、むりやりに振り切つて外に飛び出す、弾丸は身近に降りそそぐ。「待つて呉れー待つて呉れー」必死になつて叫んだ、向ふで何か叫んでいる、その中に銃声も止んだ、蒙古語で「外へ出る」「広い場所に出る」と砂丘の上で怒鳴つてゐる。私達は皆無言だつた、自分はこれが最後だと決心した、和子を確かり抱き上げて、一步一步おもむろにマイハンから出た、外蒙兵とソ聯兵の三、四十名が銃剣を突きつけ、広い場所に連行する。その後から明安旗の蒙古人が二、三十名ついている。知つてゐる蒙古人が大部分だ。皆そつぽを向いてゐる。直かに私達を見る事が出来ないのだ。私が明安旗の顧問をしていた時、信頼し合つた愛信或科長も居る、佐領も居る、驍騎校、護軍校も書記も居る、皆うつむいてゐる。

身体検査が始まつた。時計、皮帯、万年筆、金錢、帽子、靴等を取り上げた。遂に吾々男子は裸体にされて調べられた、しかし何にも武器は無かつた。

家族達の身体検査も始めた。腕時計やハンドバックの中にあつた金錢及貴重品等を没収した。

吾々は服を着る事を許された。靴と帽子を帰して貰つた。服を着てしまふと吾々男三人は後手に縛り上げられてしまつた。マイハンに案内せよと、青帽子の外蒙古將校に命令された。吾々はマイハンに行つた。「坐つて居る」と言われその通りにした。家族達も之にならつた。

外蒙兵とソ聯兵は、マイハンの中だの、二個の梱包だの、ボラガスの中に纏めて置いた物迄メチャクチャに掻き廻した。

私は妻に「之が最後かも知れない、何事もあきらめてくれ、お前達は何処迄も生き抜ける丈生きのびるんだ」牛車が五台来た。明安旗の蒙古人達が丁寧荷物整理して、一つも残さず牛車に乗せてくれた。少しも吾々に敵意があるとは認められない。彼等も吾々に何か話したかったであろう。何だか悪い事をしてる様な気配が窺はれるのであった。家族達は二台の牛車に乗せられ、吾々三人は縛られた儘三台の牛車に別々に乗せられた。そして外蒙兵四名、正旗より来たハルチン蒙古人二名、正旗蒙古人二名、計八名で吾々一行を護送するのであった。

10. 豪雨

広いバインノールの彼方に夕日は映えて落ち沈む。牧羊は悲しく鳴き家路を指して急ぐのに比べて、吾々捕われの身は何時何処へどうなるものか不安のどん底につきおとされる。

一部落に寄つて休息する事になった。ここは明安旗才十一佐のバインノール部落であつた。南下するソ蒙混成部隊はここに宿営するらしく、沢山のラクダと馬のざわめきは、吾々にとつて悲しい絶望の奏曲としか響かなかつた。

一つの蒙古包に八名押し込まれて、両手を自由にしてくれた。今迄何にも知らなかつたが、縛られた手首にめり込んだ麻繩の後が、歴然と残つておるのは驚いた、しかし痛いとも感じない、

皆朝握つた握り飯を出して見たものゝ冷えきつてしまつていて食おうとする者がない、其の中に蒙古人が黒茶を入れて持つて来た、又蒙古特有の漬物を出してくれた、皆身体が温つたものか、適当に食事をしてゐる、Y顧問の奥さんは蒙古の酢ばい漬物を、おいしく載っている様だ。

その中に出発する事になった、蒙古包を出る。外は真暗だ、今にも夕立ちが来そうだ。盛んに稲光と雷鳴との交錯だ、こりや雨が降るぞ。牛車に乗るに当り、毛布と布圍を取り出して、「雨が降るから、これを被れ」と妻に与えて自分の乗るべき牛車の側へ行くと、監視兵が待つていましたとばかりに麻繩で縛り上げる。

出発して間もなく豪雨がやつて来た、吾々は何にも着るものがない、夏の協和服は瞬く間に泌み通つて肌達して来た、非常に冷たいと感じたが、その中に無感覚になつてしまつた、豪雨はひっきり無しに降り続けている、私は家族がどんな風にいる、其の中に牛車が停つた。雨も小降りの様だ、傍に居た外蒙兵が馬から降りて、水の中に寝てしまつた、暫く過ぎても起ち上らない、ハハハ疲れて寝てしまつたかな、私はこの時とばかり牛車から静かに降りた、靴は水で浸つてしまつた、川かなと思つたが川では無い、水音のしない様にこつそり歩いて家族の側に行つて、「どうか」と声をひくめて聞いた、「私は大丈夫です。貴方はどうですか」妻も俺の事を心配している。「子供は雨に濡れなかつたか」「毛布じや駄目になつ

て布圍を被りました」あの時毛布と布圍を出して与えてよかつたと思つたのであつた、「寒いだらう」「いいえ」「何処迄も頑張るんだぞ」答は無かつた、しかし頑張つて呉れるに違ひ無い。

戻つて牛車に乗る、寒気がしてどうにもならない、下腹に力を入れて震えるのを我慢する。しかしガタガタ震えるのはとまらなかつた。逃亡するには絶好の機会だと思ひながらも家族の事を考えるととてもできない。

監視兵が起き上つた。ジャジャジャと水音がする、小便をしていやるなと思つたら、そうでない、全身の雫が垂れ落ちる音だつた。牛車が動き出す。東が漸く白んで来た、雨は降り止んだ様だ、蒙古人部落が見え出した、外蒙兵一名が馬を走らせて行く、吾々の牛車はその部落に着くと、蒙古人が出て来てお茶と茶碗を置いて行つた。監視兵は吾々を自由に呉れた。皆身体が冷え切つていたので、この熱い御茶が何よりの御馳走だつた、夕べ残した握り飯を出して見たら、三つしか残つていない、皆で分け合つて食べた、何にか少し悪くなつた嗅がしたが、何んとも無かつた。

牛車も疲れた様子で思わしく進まない、停つたり進んだりである。日が高くなる頃四郎城の北側を通る、昔何回も自動車や馬で通つた懐かしい思い出の四郎城である、城壁が風化され僅かにそのおまかげを残しているが、フビライ汗時代は南征への居城であつた、その前に喇嘛廟があり、その前方に閃電河が流れているのだ、河向うに善隣協会の畜産技術員養成所であつた建物が見える、この辺は良い草原だ、こゝの地方から興蒙女子中学校に学生が三名来て居る筈だ、今度の事変で困つた事だらう、無事に帰り得たらどうかと心配になる。

こゝ迄来るとびしよ濡れだつた協和服も乾いてしまつた。

外蒙兵は二人づゝ交替で部落に行つて、食事をして来るのか、遊んで来るのか分らないが、兎に角時間が長くかゝつて吾々の監視は怠り勝ちとなつた。

11. 閃電河畔でソ聯軍に逮捕、家族と別離

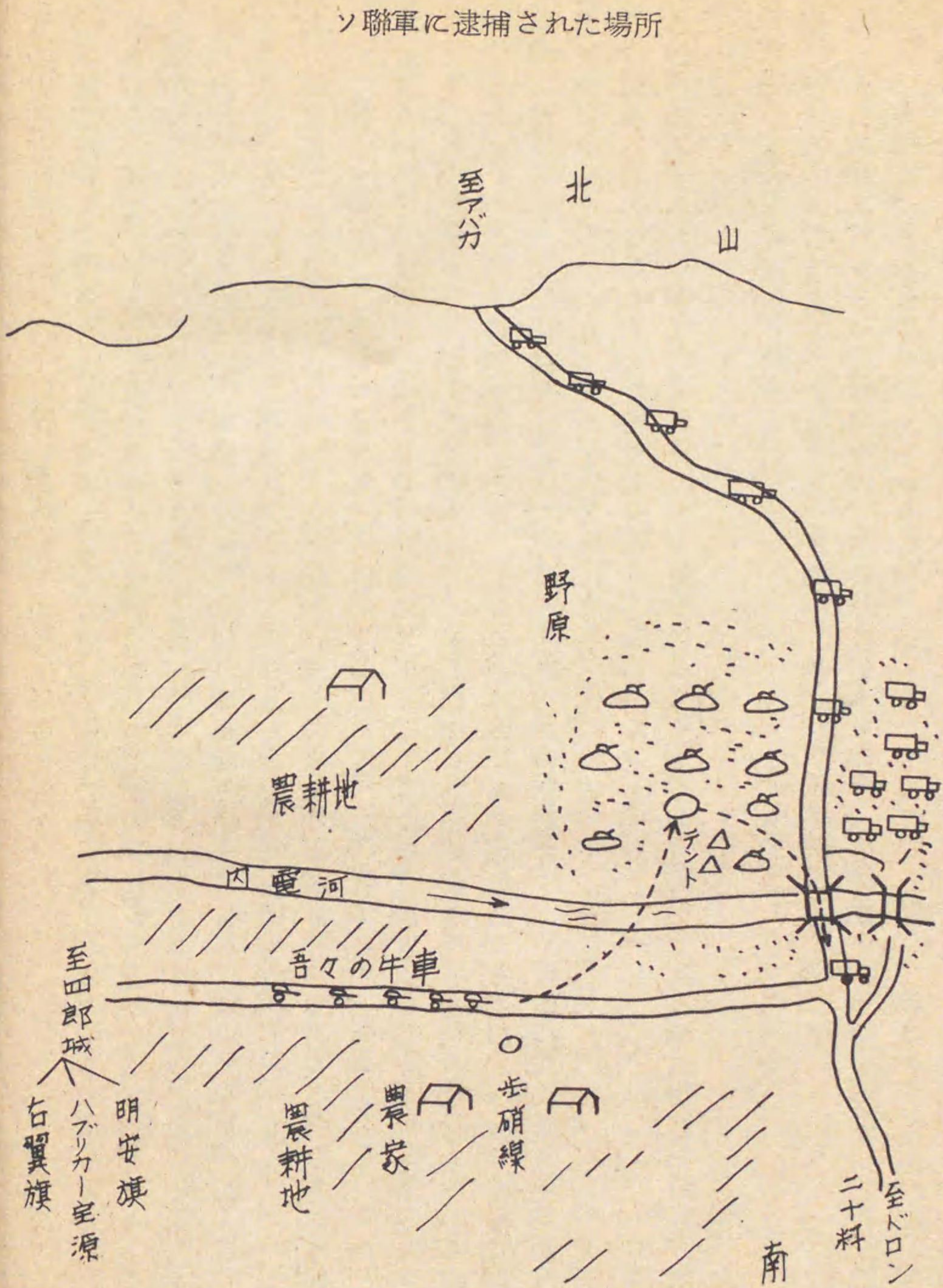
閃電河畔に出て、農耕地が見え始めた、新開地である、この明安旗の牛車夫は私を知つていた、監視のすきを見計らつて、道ばたの漢人農家に飛び込み、鶏卵を六、七個掠奪して来た。「Kバクシイ、卵を食べる」と差し出した。私は非常に嬉しかつた、「有難う。家族も腹が減つてゐるから分けてやつてくれ」と頼む、彼は家族達に分配してくれた、家族は喉が乾いてゐたものか美味しそうにすすつてゐた、

夕日が西に傾く頃、吾々の牛車五台は東方に向つて閃電河沿ひに進行してゐた。

飛行機が来た様な音がする、空を見ても何にも見えない、何だらうと思つて稜線を見ると、戦車と自動車が見え、南へ南へと南下するエンジンの物凄いな音である。その道は多倫とバイズ廟を結ぶ日本の軍用道路である、この軍用道路は私が明安旗の顧

問時代に建設し始められた道路で未だ未完成であった。私はこの道路建設には旗民を無理させた、牛車や人夫の供出を行つて側面的に協力したものだ、それが今あべこべにソ聯の利用する所となつてゐる現実を目の前にし、実に残念至極でたまらなす。

監視兵も部落からかけつけて、嚴重に監視する様になつた。



ソ聯の歩哨線にぶつかつて停車を命ぜられる。

歩哨は電話連絡をし始めた、若い十六、七才の少年兵である。三人のソ聯兵が自動小銃と拳銃を持つて吾々を取り巻いた。どれもこれも帽子を横ちよに被つて、戦塵に塗れた服はガソリンの臭で鼻をつく。何か言つておろすけれど全々分らない、妻達に手を差し出し握手しようとした。しかし妻達は見向きもしなかつた。にやにやしながら差した手をひっこめた。荷物を検査し始めたが何にも得る物が無かつた、外蒙古兵四名は何時の間にか何処かへ雲隠れしてゐない、まごまごしてゐた正々旗人二名とハルチン人二名が、吾々と一語に連れて行かれる、河を渡つて向う岸に上ると、四、五台の戦車が吾々を取り巻いた、銃剣を持つたソ聯兵が五、六人来て歩哨に立つた。戦車、幌貨車の合間から物見で一ばいだ、互に「ヤボンスキー、スパイ」だと話し合つてゐる様だ。

前のテントからソ聯将校が二人出て来た、中佐と中尉である、吾々三人は麻繩を解かれ、身体検査をうけた、何にも吾々には無かつた、家族達の身体検査を始めた、妻達はそれを拒んで受けさせなかつたが、ハンドバックとか目ぼしいものを没収した後将校はテントへ引き揚げて行つた。処が黒山になつて見てゐたソ聯兵はどつと押し寄せ、着物、布圍、食糧等殆どを吾が物の様に戦車自動車内に運び込んでしまつた。

私は之が最後と思つた、妻の傍に行つて和子を抱き上げ頬ずりしてやつた。柔かい皮膚は冷え切つてゐた。和子は確かり私の胸に抱かれ顔を押し当ててゐる、敬之を負つた妻と見合す目と目は互に最後を語つてゐた、「おい最後が来た...何事もあきらめてくれ...何処迄も生き延びてくれよ...子供を達者にな」と吐切れ吐切れ最後の言葉をささやく、妻は泣かなかつた、小供も泣かなかつた、私はもつと優しい言葉をかけてやりたかつたがこれ以上何にも言えなかつた。夕日は落ちて辺りは暗くなり、雨が降りそらに重々しい。私にとつて最初の子であつた和子が可愛いくてたまらない。この可愛い、和子とも之が最後かと思えば、何かしらこみ上げて来るのを禁じ得ない。静かに静かに小さなおかつば頭を撫でてやつた感触は今日この文を認めながら、昨日のことのようにはつきり憶い出せる。

機械化部隊の豪音とガソリンの臭は辺りを戦慄の渦に巻き込む。

Y顧問も家族と最後の別れを告げている、若い北村指導官は腕組して滂然と直立して東方をみつめてゐる。

将校に来て何か歩哨に言つてゐる。歩哨は吾々と家族とを銃剣で引き離した、私は和子を妻に渡した。家族達は牛車に乗せられた。私はじつとその姿を見つめていたが、そのうち歩哨に麻繩で縛り上げられ、敷布を裂いて三人目隠しをさせられた。

「かの江、達者でな、済まなかつた」と最後の言葉を残した。

橋の方に連れて行かれた、後の方で和子の「トウチャン」と言ふ声がした様に思われた、ドキッ胸を打たれ立ちどまつ

多倫へ連れて来たなと初めて知った、そしてこれからどうしようとするのだろう。きつとこの辺で銃殺にするかも知れないと考えさせる。

「Y顧問多倫ですよ、飛行場も見えるでしょう」「あゝそうですか、多倫に来たのですか」Y顧問は多倫に来た事が無いので全々知らなかつた。

二、辞典を持ったソ聯将校

よく見ると自分達の附近は殆ど戦車の群と、幌付き貨車の群で一ぱいである、その群の中で炊事でもやっているのか、白煙がたちこめていて気が付かなかつたのであるが、吾々は機動部隊の真中に居る事がはつきりした。テントの中から将校が二人出て来た。一人は中佐で中背で太った四十才位の赤ら顔の男であつた、一人は中尉で身長は高くきりつとした男前の三十才前後と思われる男で片手に露日辞典を持っていた。

中尉は辞典を時々開いては考えながらまず日本語で我々に訊問する。「この中佐は司令官である、この中佐の質問に対し正確に答えて貰いたし」吾々は「よろしい」と答えた。又辞典を見ながら「貴方達は何をしていたか」私は即座に答えた。「私は学校の先生です」Y顧問は「私は明安旗の顧問です」北村指導官は「私は旗の指導官です」又辞典を開いて見ながら「此の附近に日本の軍隊があるか、あつたらその兵力はどの位か」私は之には困つた。実際日本の軍隊兵力がどの位居るかば、争奪聞いた事も無かつたし知らうとも考えて居なかつたから、全々分らない、「私は軍人でないから良く分らない」と答えた。「承德には軍隊があるか」「私は満洲の事は全々知らない」と答えた。この中尉が中佐と何か話しているが皆目分らない。中尉は少し強気に「貴方達は嘘を言っている、正確に返事をせよ、しないと為にならない」と威しをかけてきた。私は喋つても喋らなくてもどうせ銃殺されるに決つてゐるから「私は軍人で無いから何にも知らない」と答えてやつた、「そうか」と言つて中佐と又話し合つてゐる、私は只一つ心残りの事があつた、家族の安否であつた。私は中尉に向つて「私達は一般人である為家族と一諸に戻つて一諸に捕つたものである、家族には罪は無いのだから、無事に日本に帰して貰いたし」と御願した、中佐と中尉は色々話し合つていたが遂に「貴方達には家族と一諸に住める家を与えましよう、心配しないで宜敷し」と言ひ残して二人の将校は立ち去つた。

暫くしてからソ聯系のブリヤート蒙古人の歩哨が二人やつて来て前の歩哨と交替した、吾々の麻繩は解いて呉れた、同時に吾々を捕えた正々旗蒙古人二人とハルチン蒙古人二人も麻繩を解かれ四人の交替したソ聯兵に連れられて将校の居るテントの方に向つて行つた。

吾々三人は一人のブリヤート蒙古人歩哨に連れられ街の方向に向つた。私達は家族達と一諸にして呉れると信じ内心喜

んだ。吾々が自分勝手に銃殺されると考えた事があやまりで、これで助かつたと思つたのであつた。

朝早かつた為ソ聯兵は忙しそうに出動準備中であつた、或る者は小豚の丸焼を二人がけて焼いて居る者もあつた、又ジャガ芋をお美味そうにもりもりと食べていた、私は何気なく見とれていると、彼のソ聯人がジャガ芋を囓りながら寄つて来て、ポケットからジャガ芋を出してくれた、私は頭を下げて受け取つて驚いた、ジャガ芋の手触りが余りにも固た過ぎたからだ。生だと直感した、ソ聯人がまさか生のジャガ芋を喰べて居るとは全々思わなかつた。

見馴れた馬の横を通り過ぎ橋を渡つて多倫県公署の前に行つて停つた。

県公署は大門に多倫県公署とあつた、前の儘であつた、其処で四、五時間待たされた。

三、Y顧問銃殺か

県公署内から一人の女の蒙古兵が出て来た、青い軍帽にスカート姿で肩章を付けていた、得意然としている、私は始めてお目にかかつたので、これは見物だわいと思ひ、じつと見てやつたが、女らしい恥かしさも、身振りもしなかつた。吾々の傍にやつて来て三人の姓名を蒙古語で聞いて、紙に書いて持つて帰つた。暫く立つてからY顧問を連れて行つた。

吾々はY顧問が何時出て来るかと、待つたが何時迄たつても出て来ない、其の中に前公署内で拳銃の音がする。ハツと聞き耳を立てると、三、四発吐切れ吐切れに聞えた、「Kさん拳銃の音ですね、何発も聞えましたね」北村指導官が心配そうに言ふ、「拳銃で殺つて終つたに違ひない、多倫の露と消えたか」私はそう信じた、朝の辞典を持った将校の言つた事が嘘である事に初めて気が付いて、自分ながら人の良さに馬鹿馬鹿しくなつた。

歩哨が吾々に前の場所に帰れと促した、二人はとほとほと戦車や貨車や輸送ラクダ車の間を抜けて辿り着いた。夕日は西に沈みつゝあつた、二人は山腹に腰を下し、見下すと飛行場に一台飛行機が降りてゐる、小さい自動車走つてゐる、雑多な馬車や、牛車、ラクダ車、騎馬兵、ラクダに乗つた兵隊達が規律もない乱れた群をなして南下してゐる、戦車と貨車は待期してゐるのか動かない。

若いソ聯兵が来て新聞紙を小さく裂いてそれに刻み煙草を巻き、唾をつけて貼り付けると一本の巻煙草が出来る、それを吸えと言つて出してくれた、久し振りの煙草であつた。煙草好きの私には、紙臭くも何ともなく大きく吸いこんだ味はまた格別で疲れた神経が休まるのであつた。

直ぐ近くの幌貨車の中からソ聯軍の女兵隊が出て来た、その後から男の兵隊が出て来た、男は向うへ立ち去つたが、女の兵隊は私達の処にやつて来て、物稀らしげに見てゐた、私に煙草をくれた兵隊と何か話してゐる、彼は私に向つて女の方を指びさしてから、両手を上下に合せて開けたり閉めたりして、ゲラゲラ笑つた。女は恥も知らずニヤニヤ笑つてゐる。私は

直感的に「この女と寝て関係したらどうか」という謎をかけられたのかと思つた。私はこれは恐ろしいと思つた。そして直ぐ自分達の家族がこんな調子にソ聯兵に強要されておるのではないかと思ひ廻らした。私が黙つてムツトしているので、あきらめたらしい。その代りかどうか知らないが彼等二人は幌自動車に連れだつて入つて行き一時間位経つてから出て行つた。暫く経つてから、又別の男を連れて幌自動車に入り込む。私はこりや公然たる淫売婦じやないかと推察した。

遙か彼方に牛車四、五台行く。家族達ではないかと目を控えて見ても、はつきり確かめられない。北村君に聞いても頭を横に振つて分らない様だ。若しそうだとしたら、昨晩は何処で泊つただらう。あの河畔で泊つたとすれば、ソ聯兵にどんなにか惨められ、凌辱強姦されたのではあるまいか。或は抵抗した為に銃殺されたか、それとも抵抗出来ず自決を計つたかも知れないぞ、と臆測に耽つてみると、閃電河畔で立哨していた十七、八才のソ聯兵が、私達から没収した家族の写真を持つて来て、一枚、一枚見せびらかしながら、特に妻の若い時代の写真を見ると喜んで、胸に当てたり、キスし始めた。私は侮辱された激怒から、彼が持つていた写真をむしり取り、滅茶苦茶に引き裂いてしまつた。彼は突然の暴力者出現により度肝を抜かれ仰天したものか、只啞然として見つめていた。私はこれでほつと安心するとともに、自分の予想する通り、家族達は絶対に凌辱されたものと信じ、暗憎たる思索に耽るのであつた。ソ聯兵が、炊いた白米を持つて来た。それは私共から没収したものらしい。燻製鮭の一切を持つて来た。しかし私は家族の事で神経が苛立つて食欲は進まず、只水が欲しくて足まらなくなつた。水を頼むと六〇〇瓦入のグリーンソコ(コップ様なもの)に一杯持つて来てくれた。私は息もつかずに飲みほして、お代りをした。やつと溜飲が下る様な美味しい味がした。飲まず食わずで二日間続いたが、それでも食欲が無いのに驚ろいた。

ソ聯兵が来て吾々を連れて行つた。戦車三台の真中に四尺四方位の殆ど擦れ切れた、おんほろさんほろの毛布が一枚敷いてあつた。それが吾々の寝る処であつた。今晩何時戦車の下敷にするだらうと二人で話し合つた。私は北村君と二人で抱き合つて、青天井を見ながら寝たが仲々眠れない。それに寒くなつて来てどうにもならない。致し方ないので背中と背中を合せて寝る事にしたが、興奮してどうしても眠れないまゝに、きつと日本軍が反撃して来るに違いないと思つたのであつた。ソ聯軍の装備と規律を二日に亘つて見たが、これじや大した事は無いと思つた。小銃を持つてゐる兵隊はほんといふに少い。拳銃でも持つておるかと思つた。総べて丸腰である。これで戦争が出来たらうかと思つた。又機関銃も野砲も山砲も長距離砲等も全々見あたらない。幌貨車が相当多かつたが、中は兵隊が殆どで、兵器を載せておるのを見受けなかつた。戦車も数える程で相当沢山あるとは見られなかつたし、殆ど中型戦車で備砲も小口径砲を備えていたに過ぎなかつたようだ。特に珍らしいと思つたのは炊事車であつた。丁度経便鉄道の機関車を改良して小さくした様なものだ。私の

見た兵器は殆ど自動小銃、小銃、拳銃であつた。

服装は埃と汗と油が浸み込んでいて特殊な臭いで、傍にも寄れない。私は鼻をつまんだ。帽子をきちんと被つておる者は一人もなく、服の釦は低はずしていた。皮帯も結んでいない者が多かつた。

彼等の軍隊規律は何処にあるかと思われた。上下の差別は見られない。泥坊はお手の物だし、酒を飲む癖が悪く、博打が好きだし、手当り次才に女を凌辱するし、三柏子揃つておる。これでよく軍紀が保つて行けるものだと思われた。これに比べたら日本軍は強いのは当然だと、しみじみ思われ、必ず逆襲に出て来るに違いないと信じ、そのときは徹底的にたたきのめしてやるんだと切止齒扼腕するのみであつた。

疲れていたので何時の間に寝てしまつたものか、明け方寒さで目が覚める。

朝食には黒パンと紅茶を出してくれた。初めはカステラを焦して彼等が食えないものを自分達にくれるのかと思つたがそうではなかつた。私は何かの本でロシアの黒パンについて読んだ事があつた。しかし実はこの時初めて黒パンを口にしたのである。腹も減つていた為か、お美味しく食べた、又何処かへ行く事になつた。歩哨は二人附きだ。東廂近く迄行くと、沢山の馬やラクダに乗つた外蒙軍隊がやつて来た。彼等は私共を見て何処のスパイかとたゞした後、日本人と分ると、俺達に寄せせよ、ソ聯歩哨より強奪した。彼等外蒙古軍は、無智、野蛮人として我々に接し、我々は鞭で滅茶苦茶に殴られた。頭や首は血みどろになつた。血は垂れ下つて来て襟首に入るのが分る。打たれば打たれる程敵愾心が出て、死ぬ迄たゞかたてもうんと言わんぞという気持が強く許りだ。吾々二人は痛いと言わなかつた。又痛いとも感じなかつた。こゝに鏡でもあつたら、紫と赤い血で色彩つた縞模様のオカメが写し出されたであらう。

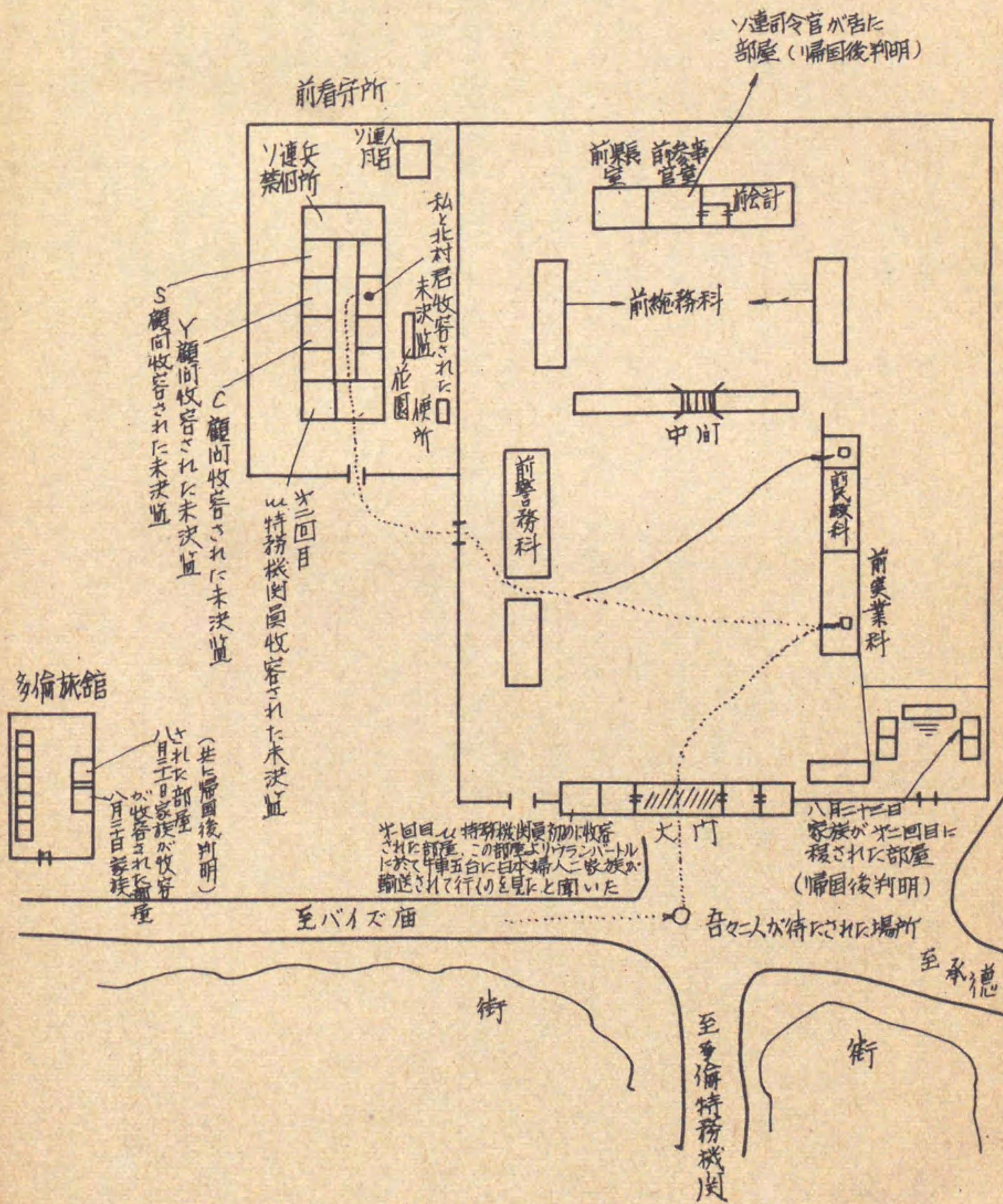
彼等は思ふ存分たゞいたので気持が治まつたものか、赤い布を引き裂いて、顔中血を拭き取り、その布で目隠しをした。北村君も同様だつたが、彼等は騎馬だつた為、北村君の目隠しを取り外し、私を後手に縛つてしまつた。北村君は私の腕と組んで案内役となつた。騎馬の外蒙兵は処かまわす連行するらしい。北村君は非常に心を使つて案内して呉れた。「Kさん水溜りです」。「ぬかるみです」。「穴があります」。「大きな石があります」。「溝がありますから跨いで下さい」。「橋です。気を付けて下さい」。「自動車が出来ました。横に寄りましょう」。「多倫旅館の前に来ました」。「県公署の前です」。「県公署の前に立ち停ると、目隠しとり、手も自由にしてくれました」。

暫く其処に待たされた。中からY顧問を連れて行つた外蒙軍女兵が出て来た。「ハハア、これで最後になるか」と観念した。

連行される。それは多倫県公署の前実業科の室であつた。終戦前私は何回も学校建築材木購入の為来た事があつたので様

子は分つて来た。

多倫県公署と看守所



終戦前、多倫喇嘛印務処長であつた蒙古人某氏（名前は忘却す）が赤い布で腕章をつけて出て来たのによつた。彼も驚いて立ち寄り物言いたげにじつと見ていた。吾々が前実業科に入ると、太つたソ聯將校と蒙古軍將校が二人だけだつた。中に二つ机が置いてある。私達が側に寄るとソ聯將校は煙草を一本づゝくれた。丁度日本の朝日と同様で吸い口の馬鹿に長〜煙草であつた。

蒙古語で前歴の概要を質問された。詳細に涉つた質問は全々しなかつた。僅か十分とはかゝらなかつた。私はこれが最後と思つて家族達の助命を御願ひした。彼の蒙古人將校はソ聯將校に通訳してくれた。彼等はうなづいた後、二名のソ聯兵に我々を連行して行く事を命じた。吾々はその兵に護送されながら、これが最後になるのかとあきらめていたものゝ、何となく心の動揺をとめることはできなかつた。前警務科の横を通つて二つ門をくぐつた。其処には高い塀をめぐらした一つの大きな建物があつた。其の入口には監視が立哨してゐた。かぎを開けて入つた。初の部屋には支那式半カンがあつた。その向うの戸に錠が下りてゐた。監視はそれを開け、我々に入れとうながした。私は入つてひよいと左前の部屋を見ると、正堂旗顧問C氏が驚いた顔付きで、目で合図してゐる。おや宝源県北方で別れてしまつたが、ここにいたのか。瞬間その隣りの部屋には昨日銃殺されたと思ひこんでいたY顧問が、顎髭を撫でながらジツト吾々を見つめてゐる。目と目が会つた瞬間お互にニヤリと笑つたその目はお互に千万言の感慨をこめた何かが通つた。吾々は其の前の部屋に入れられ、格子戸を閉めて監視は出て行つた。

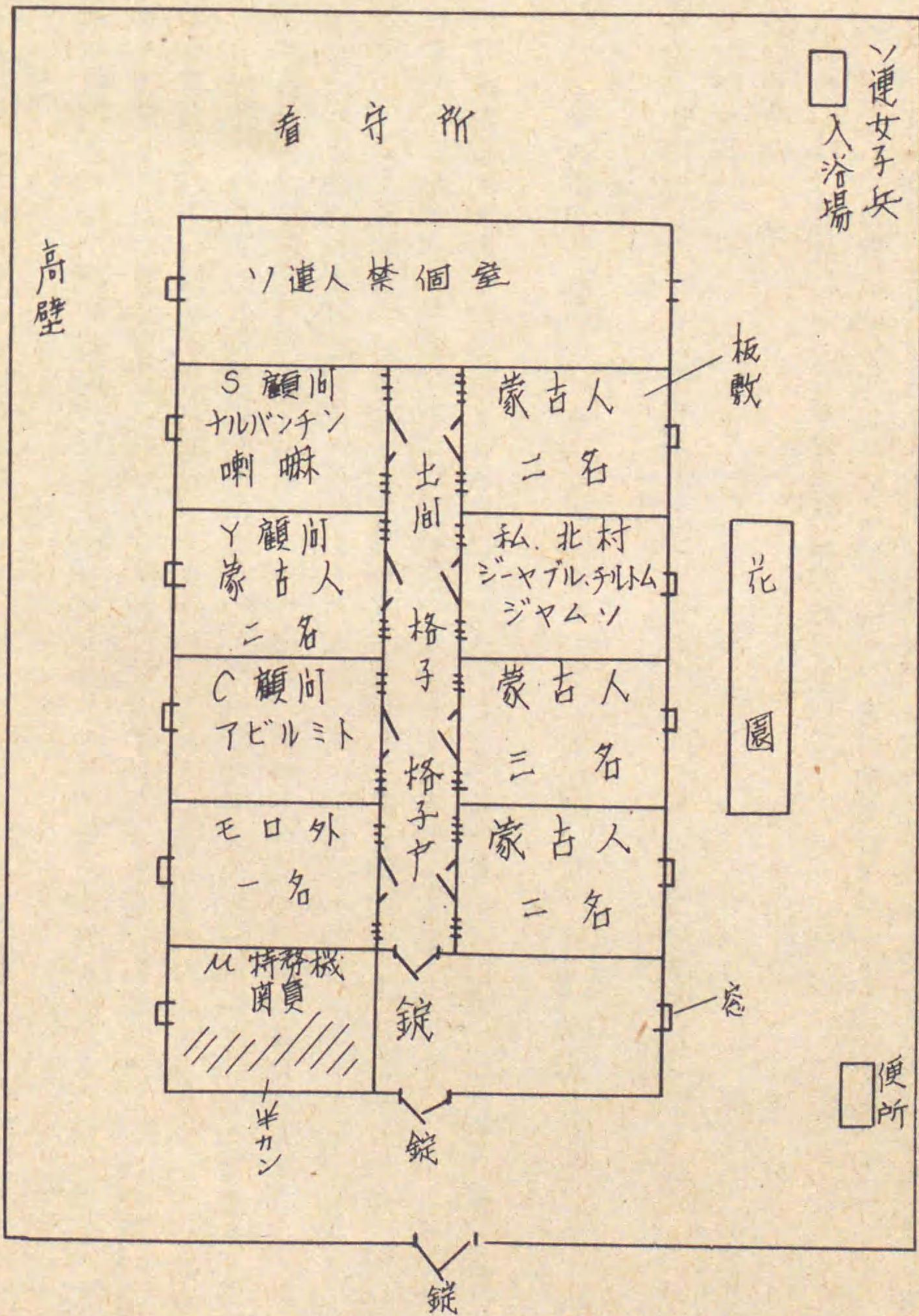
私は四人の同志が、部屋は違つても顔の見える処におるといふことを知つて、百万の援軍を得た思いで胸が一杯になつた。

この看守所は多倫県公署時代のものをその儘利用しておる事が分つた、私は多倫県公署に何回も来たが、こんな処に看守所があるとは全々知らなかつた。

四 多倫看守所で女児の泣き声
 多倫看守所に打ち込れたのは、八月二十一日午後三時頃であつた。
 よく見ると外蒙古より逃亡し、明安旗に在住してゐた、ナルバンチン喇嘛とアビルミトがいた。
 この二人は、私が明安旗顧問時代に牒報勤務に従事せしめ、利用してゐた者である。どうしてこんな処に来たのかと思つて私が二人を見ると、二人も心配そうに私の方を見てゐる。
 各部屋毎に蒙古人が二、三名位づゝ入つてゐたが、殆ど知らない者ばかりだ。しかしどうも日本の特務機関に關係のある者らしく、精神的に打撃を受け、目の球は大きくくぼんで、キヨロ、キヨロしながら、何か不安らしく、小声で話をしたり、

人の気配を窺う様子がありありとみてとれる。私はこの看守所に知っている者が出来たという事で、心が落ち付き、物凄く空腹感を覚ゆるのであった。

看守所



少し落ちついてから看守所内外の状況が分り初めた、この看守所は中央に土間の通路がありその左、右に土練瓦で間仕切

りされた部屋が四つ宛並んでいる、また各部屋の土間に向った面は、直径三寸位の丸太で作った格子戸になっており、向き合の各部屋の状況が手に取る様に見える。各部屋は板張り、窓は鉄格子に張った紙が殆ど破れていた為、自由に外の状況を見ることが出来た。

西側の入口の部屋は支那式半カンになっていて、昔は看守人でもいたものか、吾々八部屋の方が良く見える場所であった。私がこゝに入った時は誰もいなかったが、二、三日経つてから足を負傷した男が横臥する様になった。東側の部屋はソ聯兵の禁固室になっていた。窓下には草花のアオエ、コスモス、朝顔等が植えてあり、便所はその向うに見える。監視兵はたまたま窓からのぞき込んで、吾々の様子を監視するというよりは、むしろ物稀らしく見ている程度であった。夕方になつて雨がしよほしよ降つて来た。アオエもコスモスも雨に打たれて、しよんほり咲いているのも淋しそうである。突然高い壁を乗り越えて、女兒の泣き声が聞える。ハット思つて耳を傾け聞きいると、自分の長女和子の泣き声にそつくりである。

あゝ可愛想な事をしてしまった。身体の具合でも悪いのだろうか。空腹の為母親に訴えてでもいるのだろうか。雨に濡れて着換えるものもなく、寒くて泣いているのだろうか。それとも母親がソ聯軍に連れて行かれ、一人ぼつちで淋しくて泣いているのだろうか、と思えば益々自分の女兒の泣き声に似て来るのである。遂にたまり兼ねて窓側に立つて聞き耳をたてて聞く。

「北村君、あの女の子の泣き声が聞えるかい」北村君もすくつと立ち上り聞き耳をたて、「なる程女の子の泣き声ですね、或はこゝ迄雨の中を何んとかして来たかも知れませぬね」

「そうかも知れん。病気でもしていなければよいが」

「ほんとですね」
一しきり盛んに泣いていたが、遂に泣きやんだものかそれきり聞えなくなつた。
二日目にも聞えて来た。それがいかに待ち遠しかつた事か、姿は全々見えないけれど、その泣き声が、生きていというなぐさめになるのであつた。

三日目になつて朝早くから待つたけれど遂に聞こえない。それでも聞こえはせぬかと待つ程に日はとつぷり暮れて行くばかりである。夜になつてから、ソ聯兵の酔客が東側の部屋に、押し込まれたらしく、物凄く怒鳴り散らし、夜通し戸や窓をたゞいたり、けつたりしているのが聞えるのみだ。

その後遂に子供の泣き声は全々聞えなくなり、何か物足りない気分に入るのであつた。

耳 足を負傷していた特務機関員

食事は一日に一回若しくは二回であった。殆ど糞麵で其の儘食べるか、湯でかいて食べるかであった。湯は一日二回である。用便は一日一回であったが、後になつて二回となつた。茶碗に一杯位の糞麵を食わされていたので、二、三日便通が無くても大して苦痛ではなかつた。便通があつても丁度ラクダの糞の様にころした固りとなつてころがり出るのであつた。小便には非常に困つた。しかし窮すれば通ずるで何とか方法を考へ出した。この方法は、夜になつてから格子戸を押し開け、土間に降りて、一物を持つて如露の様に振つて散尿すると、その形跡が分らなくて済む。只鼠間小便のつまつた時は致し方ない。監視を呼んで頼むけれど、おいそれと直ぐ応じて呉れない為、一物を確り握つて我慢するより外に道は無かつた。

一番困つたのは南京虫である。夜通し南京虫に攻められる時など、自分の頭、首、顔、耳、鼻等を刺された時手早やくたゝいて南京虫を捕えようとする努力は、並大抵のものではない。日中退屈なので南京虫退治を始め、総ゆる穴、割目に、薄い、細い棒切を差し込み、突き殺す。それでも夜になると、何処からか這い出して必ず頸部と、耳、鼻、眼、手、等を特にひどく刺されて腫れ上るのは全く手の施し様がなかつた。

またひつきりなしに雨が降り続いた為、破れた窓からは恐ろしい程の湿気と、冷気が入り込んで来るのであつた。

部屋の内外に取り散らして有つた紙を、吾々は申し合せた様に、便所の行き帰りに捨つて来ては、窓の破れ目に押し込むか、破れ目と破れ目を利用して橋渡しにして湿気の入らん様に、工夫をこらすのであつた。

四、五日過ぎてから入口の支那式半カンに一人の男が横臥している事を知つた。足は怪我をしているらしく、白い布で縛つてあつたし、ズボンに股下まで切つてあつて、二、三ヶ所太い紐で縛つて、素足が出ない様にしてあつた。またソ聯の女医が来て治療している事もあつた。

ある時便所を早く済ませて先に帰つていると、後から帰つて来た北村君が、四角に折つた紙を持つて来た。

「入口に寝ている男が、この紙をこつそり渡したんです、何でしょう」と言いながら、二人でこつそり開いて見た。それは苦心惨勝して考へ出したに違いない。鉄の細い物で紙に書き綴つた、自己紹介の手紙であつた。

「私は特務機関員Uという者です、足を負傷している為自由にならない、今後宜敷く頼む」という文面であつた。

あゝ日本人だつたのか、早速返事をせにやならない。部屋の何処かに釘の打つたのが無いかと隈なく探したが、どうしても見付からない。毎日南京虫を刺していた棒切れで、紙に書いて見たが、どうしてもうまく書けない。それでも何処かに釘がありそうなものと探すけれども無い。あつても手や、歯では抜けない。思案に耽つていると、ふと、オ、そうだ、自分の爪だ逮捕されてから、一度も爪を切つた事がない、長く延びている、これなら、棒切れより固いから、良く書けるに違いないと思ひ書いて見る。線はよく書けるが、丸味を持つた字は全々書けない。また自分達の身に付いている物を調べて見たが、爪より固いものはない。それでも棒切れでは駄目だと思ひながらも、再び取つて書いて見る。前と同様だ、窓からもう一枚紙を取つて、前の紙を下敷にして書いて見る、オヤ、字態が前よりもはつきり現れるぞ、占めた、紙を五、六枚重ねて書くと今度は、思ひの外はつきり字態が現れた。この時の喜は亦格別なものであつた。

一枚に吾々日本人の氏名を書いてU特務機関員に渡す事にし、三枚にはU特務機関員の紹介を書いて三人の日本人に渡す事にした。土間から小さな石を拾ひ上げて、紹介状を上手に包んで、日本人の三部屋に放り込んだ、どれも皆な上首尾に連絡が出来た。

U特務機関員には明朝便所に行く時に渡す事にした。

その晩は気持よく眠れた。起床と共に便所に出される。U特務機関員の前を通る時、ヒョイト折畳んだ手紙を投げ付けた。U特務機関員もお手のもので知らん顔して拾つた、これで吾々日本人六名が知り合いになつた。

午後になつて突然、大騒動がもち上つた。一人のブリヤート蒙古人将校が、部下三名の兵隊を連れて、ドヤドヤ入つて来るなり、なにかわめきながら、折角工夫して湿気の入らん様に破れ穴を防いでいた紙を、目茶苦茶にむしり取り初め、なお日本人のみを物凄勢で叩き初めた。

Y顧問はどうかと見ると、彼のブリヤート将校が二尺余りの棒切れで、力まかせに叩いている。矢部 顧問は顎髭が物言いたげに、立ちほだかつている。それ故に叩く方も恐ろしいのか、物凄形相で飛びかゝつてゐる。

吾々の部屋に入つて来るなり、私の頬べたをいやという程力まかせになつた。この奴とにらみ返してやると、あべこべの手で火の出る様になつた後、今度は北村君にかゝつて行つた。糞ッ！貴様も一かどの将校ではないか、貴様達の社会主義国家とはこんなに文化の低いものか。

俺達は今こんなにやられてゐるけれど、またあべこべにやり返してやる秋を近い内に必ず来させねばならぬと決意を新たにした。

この事件後、吾々日本人は直感的に内蒙古人が、密告したなと感じ、其の後の交通は夜中に実施する様になつた。後になつて分つたがこの密告者はモロという内蒙古人で以前は外蒙古より逃亡して来た者で、日本の特務機関が彼を保護し、利用してゐたものであつた。

どうして蒙古人は、掌を返す様に裏切るのだらう、長いものには巻かれる式になんでも勢力の強い方へ寝返りを打つのである、それにつけても吾々が明安旗の砂丘の中で、幾日も牛車を待たされた挙句、遂に牛車も来ず、却つて捕つてしまつた

六 日本軍逆襲に出たか

のも明安旗の蒙古人がソ蒙軍に密告して協同逮捕したのではないかと思わされるのであった。

吾々の部屋に一人の西藏喇嘛が入つて来た、姓名はジャムブル、チルトム、ジャムツオ、といふ恐しく長い名前である。この様に蒙古人、西藏人の名前が三つ以上重ねてある喇嘛は大抵活仏である、喇嘛教を信奉する者はこの活仏に頭を撫でて貰う事が、最上の慈みであると信じ敬うのである。

彼が入つて来た最初の夕食に特別多量の糲麵と、少量の骨付き羊肉を出してくれた、又何か変つた事でもあるかなと思わされた。

ふとこの活仏喇嘛を見ると驚いた。彼は丁度犬が骨をかじつて居る様に歯で骨を割り中から骨の髓を取つて食べなおその骨をしゃぶつて居るのに驚異の目を見張ると同時に、余りにも可愛想に思われ、自分の骨を分けてやると、彼は大変喜び又前と同様無我無中になつて、骨をかじるのであった、彼も飢えていたのであらう。

夜になつてから盛んに銃声と、擲弾筒の破裂する音が聞こえる。オヤ、こりや日本軍が逆襲に来たなど、独り台点し各日本軍同志に連絡するのであった。

監視兵がやつて来て、頭を低くして寝て居る様にと注意する。注意されると益々日本軍の逆襲と信するのであった。

暫くして擲弾筒、軽機、小銃の音がやんだ、やつぱり逆襲が効を奏せず引き上げたかも知れない、次の日外蒙古兵が来て内蒙古人に伝えた情報に依ると、日本降伏の記念祝典が挙行され、照明弾と、自動小銃等で慶祝した事を知つて、がっかりしたが、それでも末だ日本が降伏したとは考えられなかつた。その後幾日か平穩に過ぎた。

七 穴の中に押し込められる

九月三日の夕食は又多量の糲麵と少量の骨付き羊肉が出され、又なにかある事が予想され、しかもそれは必ず吾々にとつて悪い事に違いないとなつて居るのであった。

九月四日の朝食には又多量の糲麵が渡された。吾々は食い切れないので、水でかいてむすびにし後で腹の減つた時に喰う事にした。

暫くしてから入口の部屋から、何処かへ連行されて行く。順次繰り返され吾々の番になつた多倫県公署の中庭を通り越し、大門外に出ると、大きなソ聯の幌自動車が待つていた、歩哨が五、六人で監視している、吾々には其れに乗せられた、見れば看守所にいた者である事が直ぐ分つた。

この自動車の運転手は、べらぼうに丈の高いソ聯兵で、外蒙古兵将校一名と外蒙古兵三名の監視のもとに、吾々一行十九

名が何処かへ護送される事になつた。多倫をあとに北上するのである、U特務機関員は足を負傷しているので、一番震動の少ない前の方に坐らせられた、吾々は真中辺にばらばらに坐つた、特にY顧問は優しい心に似合はず顫慄を生やし、こわい顔をしていたので、特に注意人物視され、後手に縛られ坐らされた。

ソ聯人の運転するこの自動車は、物凄スピードで所かまわず素つ飛ばすので恐ろしい程である、一番困つていたのはY顧問であつた、吾々は両手が自由であつてさえ、震動の激しさにほとほと困却していたので、Y顧問は両手を後手に縛られて居るので、彼方に転び、此方に転びして居るが少しも痛いと云わない、歯を喰いしばつて我慢している、吾々日本人はなんとか方法を構じようと、三方面より狭む様に寄つても、恐ろしい程の震動の為どうする事も出来ない、只々なる様にまかせるより致し方なかつた。

その夕方オルト、タラに到着した、そこは察哈爾盟正藍旗管内にあつて、錫盟ダブス、ノールより、張家口と多倫に青塩を輸送する中継地となつて居る重要地点であつた。

吾々は自動車より降ろされると、湿気の多い場所とその儘、太いロープで足を数珠撃ぎにして縛られた上、シートを上から覆せて終つた。側にいたナルパンチン喇嘛は手が自由なので、縛られた麻繩を、他人に気取られない様に根気よく緩め始めた。足を抜いて少し後下りし、小便をし始めた、処が量が多い為四方八方に流れ出し、側に居る吾々の処迄流れ込んで来た洪水だ洪水だ私は土を手で掻き寄せ、防尿堤を作つて難なきを得た。

彼は私にも麻繩を緩める様に教えてくれた、私も緩めて足を抜いて休むと気持ちよく休む事が出来た、処が明朝早くシートを取つて終つたので、びつくりし麻繩をつかんで見たものの、その麻繩自身が固く結ばれて終つてどうにも解けない、附近の人達を見ると、誰も彼もが麻繩を解いていた為、大きな問題とならないで済んだ。

自動車は走つてバイズ屈に着いた、道路の両側にはレーニンとスターリンの画像が行儀よく立並んでいる。又四角な大きなアーチが建てられてあつて、総べて赤い布に墨で書かれていたが、ロシア文字で全々分らない。

自動車は超スピードで北上する。この辺に来ると非常に大群をなした、馬群、羊群、牛群が見えだした、どれもこれも北上して居り、外蒙古兵が鞭を持つて追ひ廻している。これ等の家畜は何万頭と数え切れない程の多数のものであつた。

この様な徴発即泥坊は満洲ホロンバイル、蒙嶺烏藍札布盟、錫村格爾盟、察哈爾盟等各地方に大行的に行われ、外蒙古に没収された事が、ウランバートル中央監獄に、在獄中明確に実証された。

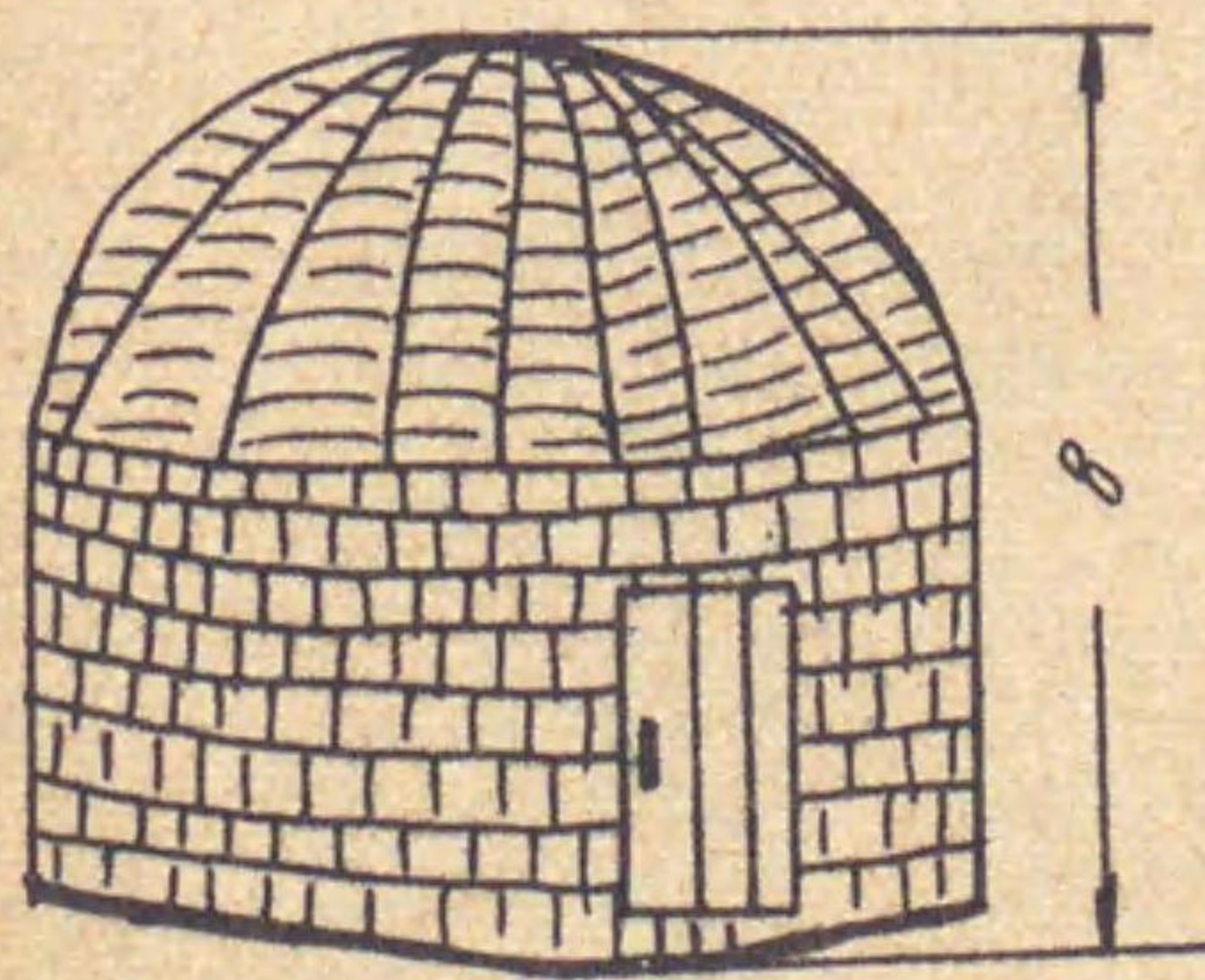
東アバハナル旗の一ヶ所に、吾々の自動車は停つた、吾々一行十九名は、巾二米、長さ三米、深さ一米五〇糲位の穴に入られた。入り口は少し傾斜になつていて坐りにくい処であつた、それであるから足を投げ出すなぞ及びもつかない、特に

U特務機関員はどうにも我慢出来ないらしい、私はそれを見かねて、穴の上に立哨している外蒙古兵に、何回も広い場所に出して休ませせて呉れる様に頼んだが聞き入れられない、私はU特務機関員を傾斜地に、背負い出し足を投げ出し得る様にしてやった、外蒙古歩哨は銃剣を何回もつきつけ、威しを掛けたが、その時は無我無中で背負い出す事文だった。

ハ、国境を越えて外蒙古領内へ

内蒙古と外蒙古の国境である事を、内蒙古人が吾々に教えてくれた。外蒙古に入るのかと思うと、何だか未知の世界に行く様な、恐怖感に襲われるのであった、あれが外蒙古の監視所だと、こつそり教えてくれる。それは石か土で造つてある様で余りはつきり見えなかつた。吾々は国境を越える時、とても日本には帰れないし、妻子とも会えないと覚悟した。国境線を越えて暫く行くと、自動車は停め、吾々十九人に全部目隠しをしてしまった、どの位走つたか分らないが三、四時間は走つたであろう、自動車は停つて吾々の目隠しを取つてくれた。暗闇から突然明るみに出された様に些か茫然たること少時、降るされて馬小屋に入れられた、馬糞と馬尿でむせ返る様な悪臭だ。

こゝが外蒙古ダツカンガイ、「ナルンボラカ」という前哨基地で、兵舎が近くに相当見えるのみで、住民の蒙古包は全々見受けなかつた、この辺は馬糞、ラクダ糞が、各所に散在し又道路も巾広く、軌の跡が相当あり、くぼんでいるのが見える、なおよく注意して見るとソ聯製自動車のタイヤの跡型が歴然と残されていた。こゝに一泊し電柱にそつて北上する、どの位走つたか分らないが兎に角夕方リムンヤーモン（佐公所）の所在地に宿泊する事になつた。連れて行かれ蒙古包と同じ格好の石牢に入れられた、石の厚さは一米近くもあり、高さは三米、直径三米の大きさで有る。扉は五十纏もある厚さの材木に鉄板を張り付けた頑丈なものであつた。この石牢には空気穴は少しもなく、みんな呼吸困難となり卒倒する様になるので、誰もが吾れ先にと扉の側にへばり付いて離れない。



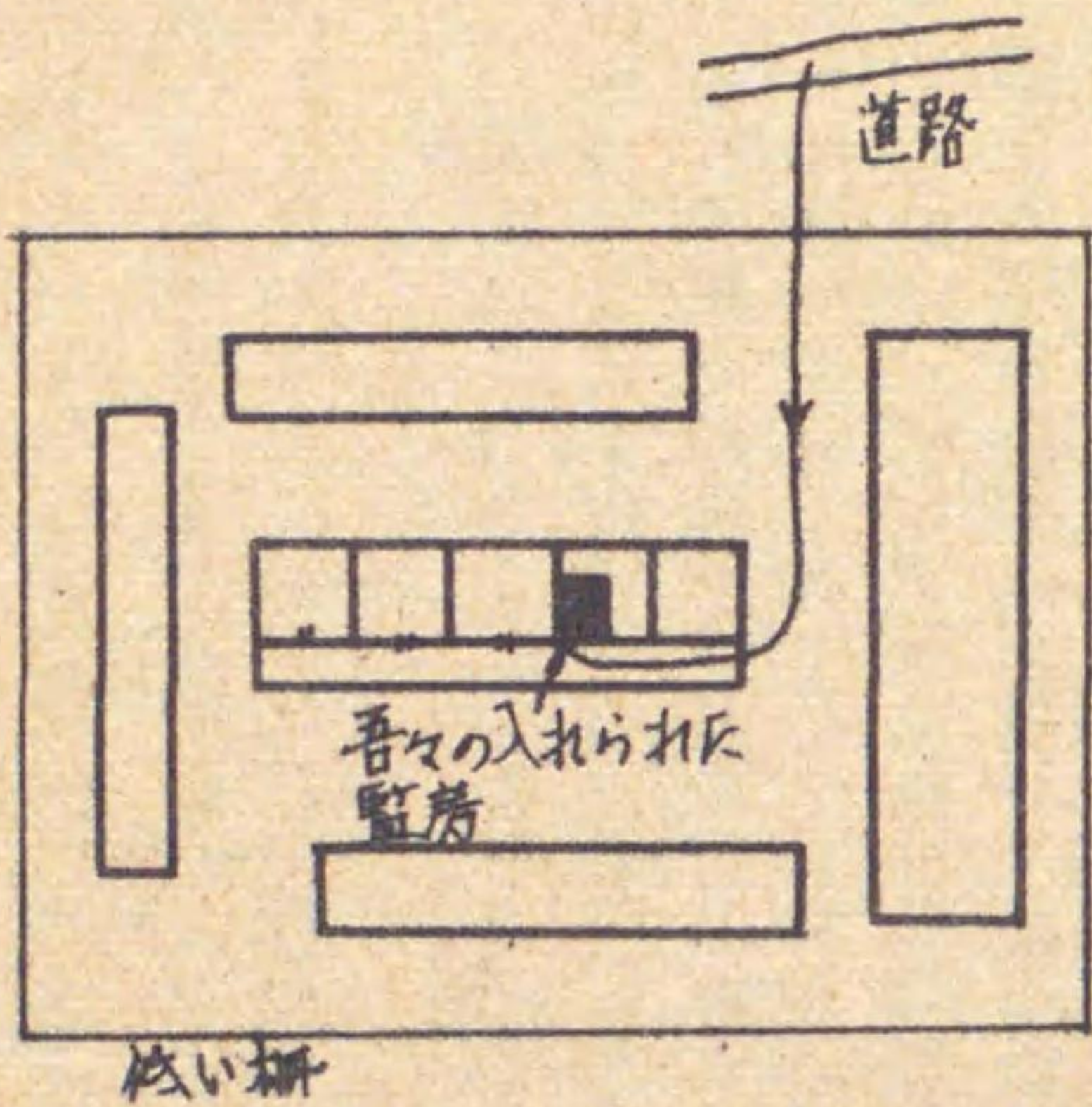
じみと知らされたのである。

夜遅く突然扉が開き、外から人が入つて来て、骨付きの羊肉を分配してくれる間、扉はその儘開放されていた為、中の炭酸ガスは新生な空気に入れ換えられた。吾々は相当な空腹ではあつたが、この空気の入れ換えで甦みがえつた様な、満腹感を味わつたが再び扉を閉められると、またしく間に前と同様呼吸の圧迫で苦しめられた。しかし順番に廻つて来る隙間の空気が吸いで甦みがえるのであつた。

九、ヘンテイ、アイマツク(盟)所在地

朝早く扉を開けて出ると言われた時は、吾れ先に弾の様な早さで飛び出し、大きな深呼吸を何回もするのであつた。吾々の自動車は北上して、ヘンテイ、アイマツク所在地に着いた、自動車は僅かな平屋造りの建物の間を縫つて、アイマツクの刑務所に入つた。吾々はそこの一棟の二番目の部屋に入れられた、この刑務所は余り高い塀は廻らしてはなかつたが、建築物の間にある為、見遠しはきかなかつた。

ヘンテイ、アイマツク刑務所



吾々一行十九名が楽に入れる様な、大きな監房で丁度「形になつて居り、板張りでその上にござが敷いてあつた。南側は入口になり、土間がある。寝る時は小便桶をこゝに二つおいてくれた。北側は一尺四方位の小窓が高い処についていた。

夕食には大きなバケツにうどんと野菜のごつた煮を、沢山持つて来て、アルミニウムの椀に盛つて接待してくれた。吾々は空腹であつた為何回も御代りをして、腹一ぱい食つた。私は逮捕されてからこのかた、初めてこんなに腹一ぱい食べた。吾々は気持よく眠れた、翌朝明るくなつてから朝食を持つて来た、蒙古人達はアルミニウムに一杯食べた切りでお終ひにした、私は皆んなどうして食べないだらうと思つて、お椀の中味をよく見たら白菜とキャベツにジャガ芋を塩味に煮つめたものであつた、白菜やキャベツは細く切つてあるので、暗い処ではうどんにみえたのであつた、昨晚接待が余り良かったのはどうした理由だらう、蒙古人は野菜を殆ど食わないのに、吾々が何にも知らないでうどんと思つて食べたので、いい気味だと思つて接待したのかも知れない。吾々はこんなうどん粉と間違える程、空腹であつて只々何もかも、食う事のみを考へていたわけである。

私は諺を思い出した、武士は食わねど、高揚子と、自分の心境はそんな事を言つて聖人ぶつていられた。私にはなかつた。

このアイマツクの所在地は丁度日本の田舎の部落と、同様で建物は点々と散在してゐた。その建物は総べて木造で二階建は見られなかつた、兵舎、学校、病院等が見受けられたし、又小さい官舎があつた、その官舎よりラジオが手に取る様に聞えて来た時は、一寸意外に感じたのであつた。ソ聯人の顧問がラジオをかけてゐるのかと思わされた。

電気でもあるのかと思つたが、それでもない様だ、吾々の入れられた監房は燈油であつたがかりに発電所があるとすれば、大きな音が断え間なく聞える筈であるのに静かであつた。

10. ウランバートルへ

吾々一行十九名を乗せた自動車は西方に向つて走る様になつた。出発して間もなく便通を催しどうにも我慢が出来ない、止むを得ず自動車を停車して呉れる様監視に頼むと、心良く承諾して呉れた。私は自動車から降ろされ監視のもとに野糞をたれ始めた、処が吾々一行の者全部が野糞する事になつて終つた。

吾々は多倫を出発して以来、一度も便通が無かつた為、昨晚野菜の御馳走により久方振りの便通となり、今迄なにかと重々しかつたものが軽くなりせいせいした。

この辺より大部山岳地帯となつて来た、その山岳も殆ど東西に走つてゐる。

遙か右手に高い山が見える、雪があるのだ、今頃雪があるとは不思議に思う、相当北上した事がうなずける。

途中監視兵が、穴からはい出して、日なたほつこしてゐるタルバカンを、車上より発砲して射とめようとするのであつたが、いずれも命中するものはなかつた、この辺は沢山のタルバカンが穴からはい出して、戯れてゐるのであるうか、キイツ、キイツ、となきながらあつち飛び、こつち飛びしてゐるのがみえる。このタルバカンは鼠類に属する動物で大きさは猫位の

ものである。穴の中に棲んでいて、毛は非常に珍重がられ、外套の襟及毛皮として利用せられ、脂肪は非常に多い為、国家の供出物資に指定されてゐる。

途中ソムヤームの大きな、蒙古包に一泊して八月十二日午前九時頃出発した、途中昨日と同様監視兵は、面白半分タルバカンに向つて発砲して喜こんでゐる。相当走つてから道路距離標柱のある広い道路に出ると、監視兵はシートを頭の上から覆せ、外観を見る事を許さなかつた。それでも監視の目を盗んで外を見る事も出来た、煙突の長い機関車が走つていて石炭を満載し吾々と同方向に向つてゐる。

或る場所に行くと遮断機が降りていて、其処に通行検査所があつた、監視兵が出て行つて連絡したらしく、直ぐ戻つて来た、吾々は検査がなくて済んだ。暫く行くと木橋を渡つた。河中は五十米位あつて、相当水量がある様だ。暫く行つて自動車から降され、休息する事三十分間。この辺は相当広い場所で、遙か西方に建築物らしいものが見える、喇嘛廟と思われが何であるう、二、三十台の牛車が吾々の来た方向に向つて行く、ここで初めて蒙古服を着た蒙古人を見た、又ラクダが三、四十頭やつて来た、何処へ行くのか分らないが、誠にゆつたりした歩み方である。

再び自動車に乗せられ出発した。自動車の速度と、風の速度で覆せたシートが舞い上り、外観の様子がチラホラ見える。洋館も見え出した、支那家屋も、蒙古包も、見える、実際おかしな処に来たものだと思う。遊牧社会には蒙古包が一番似合ふのに、洋館、支那家屋、蒙古包が雑然と入りまじつてゐるのは、どういふ社会だらう。

側にいたナルバンチン喇嘛が、「こゝがクローン(ウランバートル)だ」とこつそり教えて呉れた、なる程これがクローンか、昔地理でクローンは喇嘛廟が沢山ある事を教えられたが、実際に見ると全々異なつてゐた。

大門をくぐつて水タンクの側に停つた、こゝが外蒙古人民共和国の肅清と虐殺の御本尊内防処である事が後になつて分つた。

一、内防処未決監

吾々は自動車の上で、シートを覆せられた儘暫く待たされた上、一人づつ叫び出されて行く、私も五、六番目位に呼び出され、監視に連行される。二階に連れて行かれ一室に入った、其処には机と腰掛が一組あるばかりで額もなければ何も無い。只机の上に電話器とインク壺、ペン軸さしが置いてある殺風景な部屋で、窓は北側にあつて、窓下にスチームが通つている。ソ聯将校が腰掛けていて、外蒙古将校と監視二名が直立して私が入つて来るのを待つていた。私が入つて立つてみると、ソ聯将校が何か言つてゐる様だが、皆目分らない。側にいた外蒙古将校が通訳した。

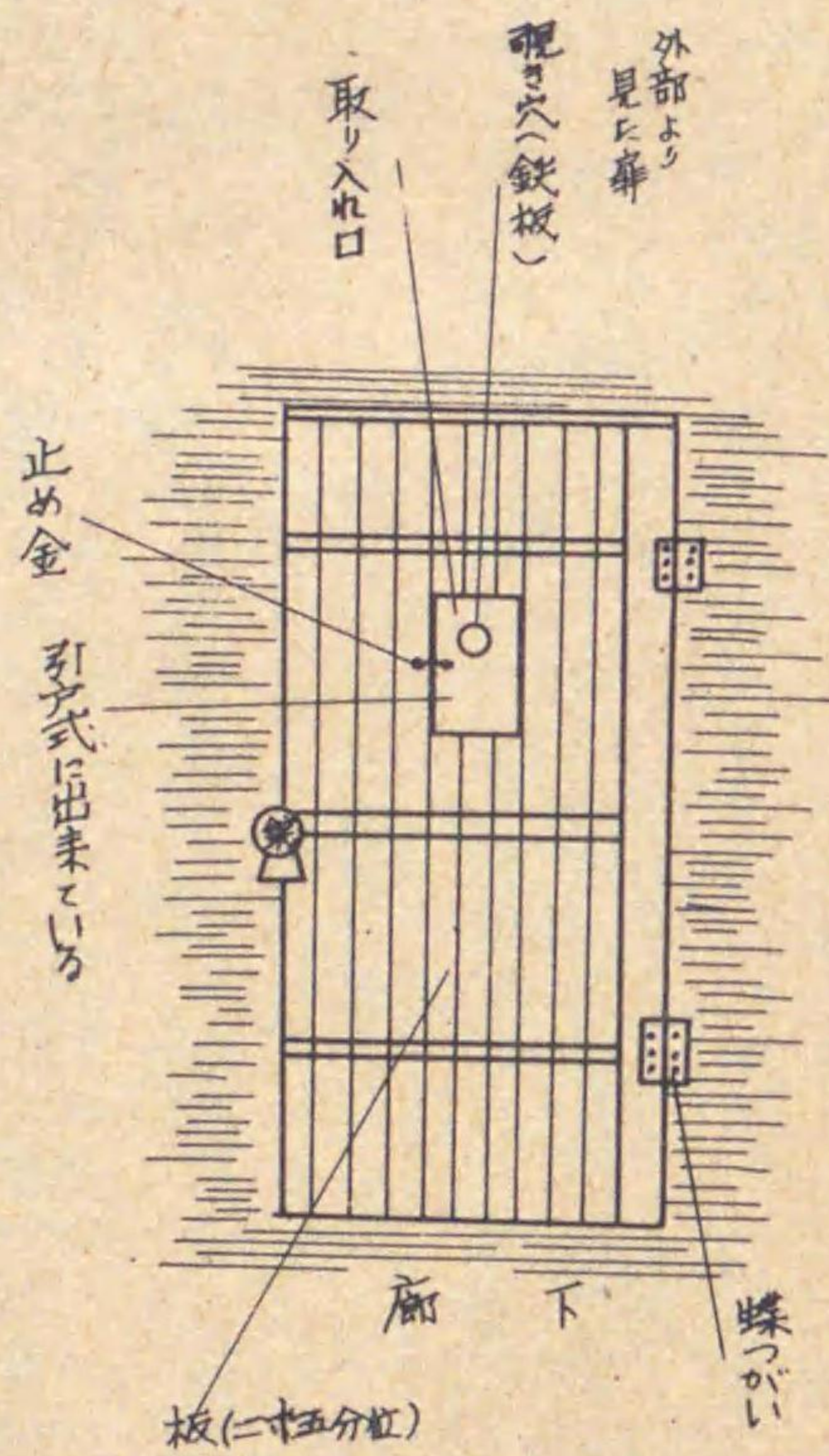
「お前は何国人か」

私は日本人であることを素直に答えた。ソ聯将校の質問が、外蒙古将校の通訳によつて続く。原籍は何処か、逮捕されたのは何処か、逮捕前の職業等。それが終つてから身体検査をするから、服を脱げと命ぜられた。私は協和服を脱ぎ、股下を穿いていた所それも取る様にと命ぜられた、股下を脱ぐと、禪一つと腹巻となつた、処が外蒙古将校は私の腹巻を、グイグイ引つばつて取り上げた上、禪まで取れと命じた、私は躊躇していると、彼の将校は禪に手をかけ、力一ぱい引きちぎつ終つた。私は一糸まとわぬすつ裸となつて直立してゐるより外に道はない。検査が終つて協和服を着る様に命ぜられその通りに着てから、肌身離さず使つて来た腹巻を返して呉れる様に頼むと、彼の蒙古人将校は言下に、暫くの間預つて置く、その内に返してやるという。この腹巻は砂漠の中でテントを張り、牛車を待つてゐる時、妻が心ずくしの、腹が冷えるといけないからといつて渡してくれた白いフランネルで、五尺位の布であつた。私は妻の最後の心尽しの布を肌身から離す事が、どんなに心おしく感じたか分らなかつた。監視に連れられ、頭の上から協和服の上衣を覆せられ連行される。階下に降りて、裏庭に出る。西に曲つて行くと、右側の建物に入る事を促される。入つて行くと、薄暗い廊下を右に曲つた、標札二〇号と書いた部屋の前に停つて、錠をはずし扉を開けて、この中に入れと目で合図する。私は後髪をひかれる思いで、しほしほと入ると、頭でも叩かれた様に、ボタンガチャンと、扉を閉め、錠の下りる音がした。

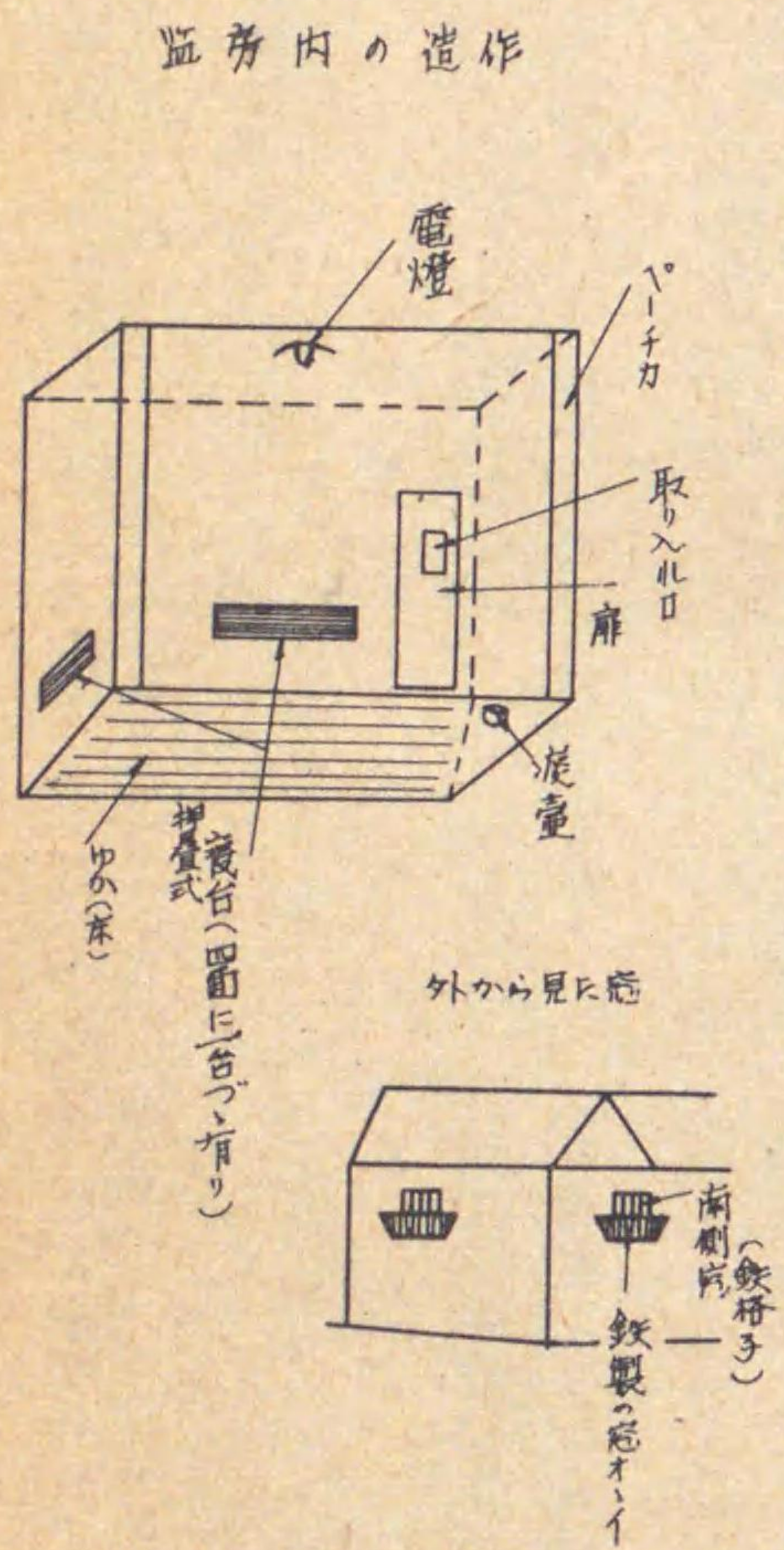
これが私が生れて初めて未決監に入れられた経過である。後になつて分つたが、これが内防処未決監である。

二、監房

私が押し込まれた監房には一人の華僑が入つてゐた。毛皮の外套を着こんでつくねんと扉に向つて坐つてゐる。南側には小さな窓があつて鉄格子がはめられている。東西の両隣りの監房とは厚い壁で境になつてゐた。北側は私が押し込まれた房の扉となつてゐて、扉の上方に二十糎四方位の取り入れ口が付いてゐる。その真中に直径五糎位の丸い覗き穴があり、それに外から丸い鉄板がぶら下つてゐる。



この北側の壁の角に壁ベチカーがはみ出し、又四面の壁には巾七十糎、長さ二米、厚さ四糎位の板で作つた畳み式の寝台が上げてあつた。床は隙間のない様に板で張りつめてあり、新しく増築されたものらしく、床に塗つたニスもはけていない。この床の片角に直径三十糎、高さ十糎位の丸い鉄の痰壺が置いてあり、天井にはくすぶれた二十W位の電球がついてゐた。



私はしばらくぼんやり立つた儘でいたが何の音も聞こえない。暗い圧迫感が、ひしひしと感ぜられ、これから先の不安がつのるばかりである。

私は我慢出来なくなり、坐っている華僑の側に寄つて話しかけた。

「あなたの名前は何と言うのか」

「我的蒙古名字ダライ、中国名字劉海」

と彼の華僑は何か口ごもりながら答える。彼も相当な年令に達していると見え、頭髮は胡麻塩交りで額は大分禿げている、見た処五十才を越えている様子だ。顔付や目付でのおどおどしている様子が窺われ、人を警戒している事がはつきり分る。

私は注意深く小声で、

「俺は日本人で今度の戦争に依つて、ソ聯軍に逮捕されこゝに連行された者だ。」

と拙ない支那語を以て説明したが、彼にははつきり聞き取れないらしい。首をかしげて考えている。私は再び日本人であることを話し手足身振り、大鼻子(ソ聯人)に捕つた事を告げた。彼は漸く頷いたが明瞭に分らないらしい。しかし日本人である事だけは分つた様だ。

突然扉の外で鍵を外す音がするので話は途絶えた。扉は開けられ押し込まれて来た者がある。よく見ると一詣に多倫看守所から来た、内蒙古錫盟のチユルトムという特務機関要員である。彼はいぶかしい恐しい顔付きで私を見つめている。私は余りにも彼の顔色が、恐怖に満ちていたので顔をそむけた。

彼も弱少民族の通有性として事大主義的氣質を持つていて、吾々と一詣にウランバートルに連行される途中も

「日本人の為に俺達はこの様な苦勞の目に会わされている。」

と直接日本人に向つて幾度かいつていたことがあつた。

しかし事実、日本人の誰でも、蒙古人に対しては非常に親切に扱つてやつたし又誠意をもつて指導してやつたのだが、それが、今彼等は、豹変し、我々は裏切られたのかと思つて残念で致し方ない。内蒙古人達が日本の恩義を感じ義理人情を幾分なりとも解してよさそうなものだと痛切に感ずるのであつた。

私は言語、行動を慎み、彼等にこれ以上迷惑をかけまいと誓つた。

三、ジャンホー(のりの御飯)と黒パン

着いた日、暗くなつてから扉が開けられ、デサユル(当番下士)が幾くつかの鍵を握つて立つている側に、二十二、三才位の蒙古軍下士の女兵が、バケツに一ぱい食事を持つて、吾々の方に近か寄つて来た。吾々に一つづつのアイガア(セトビ

キ)のもので容量は日本の飯碗の三倍位入る)を差し出した。

私が躊躇していたら「早く取れ」と苛立たしく言う。私は慌てゝその食器を受け取つた。この蒙古婦人の下士は食事給与婦であつた。彼の給与婦は忙しげに我々の差し出す食器に、杓子で三ばい計つて入れて呉れた。丁度食器の九分目位になつた。配給が終ると扉を閉めて立ち去つた。吾々は初めて外蒙の未決監食事にあり付いた。私は両手で食器を持ちどうやつて食おうと思案に暮れた。箸もサジも無い。今迄連日の自動車旅行で非常に空腹を覚えていた。食器に口を当てゝ見たものゝ縁が広い為充分にすゝる事が出来ない。私は板敷にジャンホー(糊の御飯)をこぼして終り。それでもどうにか啜る事が出来たが、これ丈ではまだまだ空腹である。

私は何気なく食器を板の間に置いて、外の二人を見守つた。処が劉もチユルトも食器をペロペロなめている。何回も同じ事を繰返し食器を綺麗にしているのである。

彼等は食器をなめて終つてから私の食器を見つめている。するとチユルトムが

「食器をなめて綺麗にしなれば、吾々二人も食事が減らされる」と言うのであつた。

私はこれは大変だ、人に迷惑をかけてはならぬと思ひ、顔中ジャンホーだらけにして嘗めるけれど、食器の底迄はどうしても嘗め切れない。致し方ないから長い間手や顔を洗つた事もない指でこすり取つて、それを嘗めた。そして私はこの御飯は何から出来ているかと色々考へて見た。ひよつと舌切り雀のおばあさんの話が出される。ジャンホーには野菜が多く入つているが、それは支那山東白菜である。こんな処で支那白菜が出来るのかと思議に思ふ。じゃが芋も少し入つている。いつたい蒙古人は元來肉食であるのに、菜食する様になつたのだから、又は未決囚にだけこの様な菜食を強要しているのだからかと考へさせられる。

其の外家畜の蔵物が五、六切れ入つている。肺蔵は軽いのでジャンホーの上に浮かんでゐる。この糊の原料は、小麦か燕麥を一回荒く挽いたもので、粒その儘のもの、半分欠けたもの、皮だけのもの等種種雑多である。

實際人間の食うものでなく、豚の飼料にもつてこいのものである。外蒙は人間に対し畜生と同じ取り扱いをするのかと呪わしくさへなつた。

後になつて分つたのであるが、この食事は未決監の規定に依る二等飯であり、労働ノルム(一〇〇%)を完成した者に対しては一等飯と規定されている。

私はこの二等飯に、一日一回で在監八ヶ月余の長い間親しむ事になった。

暫くして又扉が開けられ、デチュルが御茶を飲めと杓子に一ぱい食器に注いでくれる。私はデチュルが扉を閉めて行つてから、注がれたお茶を飲んで見た。お茶は茶褐色であるが、お茶としての香りは全々ない。これも後になつて分つたが、代用茶である（外蒙古に於ては第二次大戦前より国内の野草を日隠干にして代用していた。）少し酢ばい味があり、毒ダミを煎じて飲む様なものである。

三度扉が開けられ給与婦は食器を取り上げて行つた。

扉は固く閉ざされて二、三時間全く沈黙の中に過ぎた。その中に廊下を行つたり来たりする足音がし始めた。二、三人一諸のものもあれば、五、六人一諸のものもある。デチュルが口笛で合図しながら未決囚に行動を取らせているらしい。私は日本人と蒙古人の歩き方が違うのに耳を敬て見たが、どうしてもはつきりつかめない。そうこうしている中に、扉が開けられ、便所に行くから出て来いと言われ、三人は一列にならんで廊下に出た。廊下の角でデチュルは未決監入口のデチュルと口笛で合図した。吾々三人は入口に向つて歩かされた。デチュルは入口の東側にいて、西側に行けと命じた。右に曲つて行くと便所が見えた。

便所は未決監とは別棟になつていて堀立小屋である。深さは一米位、奥行は二米位、横は三米位である。それに厚さ二寸巾一尺位の板が渡してある。吾々は両方の板に両足をのせて、大小便をするのである。長い事空腹続きであつた為大便はりきんでも中々固くて出てこない。顔を真赤にしてりきんで漸く一かたまりの太い大便をすませたときの気分は全くいいものである。この時困つたのは紙の無い事であつた。指で拭く訳にも行かない。その儘ズボンを穿く訳にも行かない。致し方ないから、そこらに転がつている石を拾いに這い出し、それでこすり取つていると、デチュルが「早くせよ」と急ぎたてるのでボタンもかけずに走つて帰つて来るのであつた。

未決監の入口迄行くと停止させられ、上衣を脱がし、頭の上から覆せられ、東側の壁ぎわにへばりつかされた。反対側の便所の方に五、六人の者が用便に行くのが感ぜられる。それが終ると早く監房に入る様に「ボシヨ」「ボシヨ」と急ぎ立てられ、丁度羊の群を畜舎に追ひ込むが如く追ひ込まれて終る。

暫くすると「オンター」（寝ろという意）と廊下でデチュルが叫んでいる。私とチュルトムは何にも寝具がないのでぼやつと立つていると、扉の覗き穴の丸い鉄板が音のしない様に、こつそり上げられ、外から黒い目の球だけが此方を見ている。こりやいけないと慌てたがどうにもならない。ぐずぐずしていると「早く寝ろ」と外で怒鳴つている。私は壁に付いている板の寝台を下ろし、その上に腕を枕にしてごろつと寝てみた。

二〇Wの電燈が監房の角角まで照し出して明るく、どうしても寝つかれない。その上夜分の冷え込みはものすごく、いたたまれない程身に泌みて来る。

チュルトムは蒙古服を着ていた為、帯を解いて自分の靴を枕にし、蒙古服を頭の上から覆つて俵の様に丸くなつて寝て終つた。

私は協和服を着ているので、丸くなれば背中が冷えて来る。仰向けになると腹が冷えて来る、俯伏せになると息が苦るしくて長続き出来ない。それでも背中を壁にくつつけ、膝小僧を抱いて寝るとすこしはよかつた。しかしこれも長くは続かなかつた。足が痛くなつてくる。足を延ばすと冷えて来てどうにもならない。

私は夜通し寝返りを打ちながら、朝の来るのを待った。その待ち遠しい事おびたどしい。其の間デチュルの覗き穴から覗く音に、たえずおびやかされ、その都度寝た振りをしているのであつた。

翌朝「ボソー」（起きろの意）の声にはね起きてみると、昨日と同様便所行きが始まつた。

蒙古給食婦が、黒パンを大きな箱に入れて一人一ヶづゝ与えて行つた、私はその黒パンの如何に小さいかを眺めた、可愛い程小さい。巾一寸、高さ三寸、厚さ一寸位のものである。之も一回分でなく朝食と夕食の二回分である。この黒パンは後になつて度々品切れとなり、時には二、三日も給与されない。その時の心細さはたとえようもなく、いつそう空腹感を覚えるのであつた。

四、最初の呼び出しと取り調べ

監房に入れられた次の日は、監房内の規則を、デチュルから言い渡された。それは

- (イ) 鉄製品を所持しない事
- (ロ) 互に話をしない事
- (ハ) 扉に向つて坐る事
- (ニ) 眠つてはならぬ事
- (ホ) 外から石や物を持つてこない事
- (ヘ) よく考える事

右に違反した場合は、フィットン、パイシン（冷い拷問所）に入れるとの事であつた。

次の日扉が開けられ、デチュルが監房に入つて来て、私の姓名を聞いた。そして私は連れ出され、未決監事務処に入つて待たされた。

事務室には二つの机が並び、四つの腰掛が置いてある。一人丈腰かけていた。その男が電話器を取つて、「バイノー」(電話連絡の合図言葉。日本の「モシモシ」に当る)と連絡する。相手方と連絡が出来話が終つた。私はその話の終る迄事務所の片角に立つていた。デチュルは私の上衣を脱がせ、頭の上から覆せ連行した。階段を昇り二階に出た。廊下の角に何個所も高さ二米たらずの四角な箱が置いてある。その箱の前にデチュルは停つて錠を開け、中へ私を押し込み、錠を下ろしてしまつた。私は何だかと思つて驚いた。非常に狭くて自分の身体を自由に動かす事も出来ない。天上を見るのと突抜けである。体重を後にかけると箱が動く。箱の底は無くして廊下の上に直かに置いてあるだけである。それだから揺れるのもあたり前だ。三十分位その中で待たされた。

私は未決監に八ヶ月いる間、取り調べの都度何回もこれに入れられた。

ある時取調べの為暫くこの箱の中で待たされた。処か小便がつかまつてどうしても我慢出来ない。其の当時自分の身体は極度に衰弱して、骨と皮ばかりであつた為、小便を我慢する力が無くなつていた。致し方なく箱の角の方に音のしない様に済まして終つた。運よく済んだところへ取調官が来て私は取調室に連行された。この小便が階上の廊下を浸み透して階下の取調室にポタリポタリとおち出したのが五、六分後であつたらしい。これが大騒ぎとなつて階下の取調官が階上にかけて来たが、誰も箱には入つていない。小便の跡はあるが分らない。階下の取調官が取調中の私の処にいきなり入つて来た。処が私の取調官が盛に調書を書いていたので暫く待たされた。その中にいきり立つた階下の取調官も少し気をおちつけたらしく、私の取調官に小声で小便の垂れ下つて来た事を話しているらしい。私の取調官は私に向つて「お前は箱の中で小便をしたかどうか」と尋ねた。

「私は小便はしなかつた」と即座に嘘を言つて応えた。

階下の取調官は「別の部屋かな」と言いながら出て行つた。

彼が出て行つてから私の取調官は「お前が若しも箱の中で小便をしたらフイトンバイシンに入れるぞ」とおどした。

フイトンバイシンには二種類ある。その一つは未決監二十四号と二十五号の間にある一つの部屋で、床も壁もコンクリートで固め、西側の窓は開放してある。壁ペイチカも無い。殺風景な冷寒で身も心も氷りついて終り様な部屋である。もう一つは三十一号の部屋の中に地下に続く穴があり、それに付いている引き戸を開けると、地下に降りる階段がある。この階段を十段位降りるとコンクリートで固めた通路がある。巾二米位でそれを暫く行くと右手は薄暗い電燈が灯いている一部屋がある。私は、一度だけ威嚇のためにデチュルに連れられてこの部屋の中をみたことがある。余り薄暗い為はつきり分らなかつたが、そこは壁は総べて氷が張りつめて天井からは太いツララが下つていた。入つた瞬間寒いと言おうか、痛いと言おう

かピリツと物凄く冷寒を覚ゆるのであつた。

この地下道を暫く行くと階段がある。上ると戸があり、開けると内防処本館の階段の真下に出るのであつた。

この箱の臨時待合所は色々の事件が起きた。

私の監房の蒙古人同囚が、長く待たされたので、居眠りを始めた。処が体重が一方にかゝり過ぎて、ハット思う間もなく横倒しになり、居眠りどころか、大慌てに慌てたという事である。箱の倒れた物凄く音に、階上の各部屋からソ聯将校、蒙古人将校が飛び出してきたという、笑えないエピソードもあつたのである。私の様に小便をする者は数知れず、尚腹具合の悪い者は下痢便迄する者さえある、それが発覚する度毎に、フイトン、バイシンに連れて行かれ拷問をうけ正体のなくなる程冷え切つて歸つて来るのであつた。

この様なことは後になつて分つたのである。

さて、私はこの待合箱から出されて、取調室に連れて行かれた。部屋には机に向つて腰かけている蒙古人の中尉と、肩章のない通訳が一人いた。

私は入口の腰掛に坐る様に命ぜられた。前方の机の上には電話器が一台あり、筆記用具が側に置いてあつた。

私の取調官は二十四、五才の若年で、美男子であつた。日本語の会話は殆ど出来ないが、単語を少し知つていた。私は日本語を何処で勉強したかと聞いて見た。党大学で勉強したという。これを思うと戦争前より相当日本語の学習が行われた事が窺われるのであつた。

通訳は朝鮮人の様な顔付きで、どこか陰険な処が有りそうに見えた。非常に日本語が上手であるが、アクセントは一寸鮮明を欠き難しい言葉になると分らなかつた。

後になつて分つたが、この通訳は終戦前内蒙烏藍札布盟より逃亡し外蒙に入った者で姓名はサンポー、ドルチ、しかも張北の日月寮の第一回卒業生でさえあつた。其の為かこの通訳は余り厳しく聞かなかつた。後で取調官が席をはずし外出した時など、親切に煙草を呉れたり、「苦勞ですか」などと聞く事もあつた。彼の名前はその時知つたのである。

第一回の取調べは極く簡単であつた。国籍、原籍、現住所、氏名、年令、家族の氏名、年令、父母の氏名、年令等順序正しく取り調べた。二たん監房に帰された日又同じ様に学歴職歴を訊問された。第三日目も同様な学歴職歴を訊問されて監房に歸された。

それ切り一ヶ月位、何とも呼び出しを受けなかつたところ、突然また呼び出された。行つてみると、多倫で会つた事のある、外蒙古将校がいて、取調官と色々打合せをやつてゐる。外蒙古将校は私を知つてゐると見え、こちらを向いて「身体はどうか」と尋ねた。私は「今の処元気です」と答えた。彼は笑い乍ら取調室を出て行つた。私は前と同様に職歴を聞かれ、

なお特務機関とどんな関係であつたか、軍とどんな関係があつたか、盟公署の特務科とどんな関係にあつたかを訊問された。私はこれらの各機関とは関係はあつたが、蒙古人を捕えたり、殺した事は全々な事を述べて調べは終つた。

その後一ヶ月位過ぎて又呼び出された。午後の十一時頃であつた。頭の上から上衣を覆せられて、引きずり廻されたので、何処をどう行つたのか見当がつかなくなつてしまつた、只覚えているのは階段を何回も上つただけである。初めてこゝで番号の付いた札を胸につけられ写真を一枚取られ、来た時と同様引きずり廻されて、監房に帰された。それきり呼び出しは無く、昭和二十一年の正月も監房で過した。四月に入つても未だ呼び出しは無かつた。

五 監房の明け暮れ

監房の起床は五時である。冬は殆んど真暗闇である。起床後用便に出される。夕方七時から八時頃に亘つて再び用便に出され、就寝するのは九時頃となる。

この用便が、朝と晩の二回のみであるといふことは実につらいことであつた。膀胱が裂けはしまいかと思われる程我慢に我慢を重ねて順番の来るのを待たねばならない。或る者は耐え切れなくなつて扉の覗き穴を、ガチャガチャと気の狂つた様に突くのであるが、デチュルは絶対に来ない。他の監房でも同じ様に、滅茶苦茶に突き鳴らすのがよく聞える。

若しデチュルが来たとしても「今直ぐだから我慢せよ」と言われる位のものである。順番が隣の監房まで来た事が分ると、益々小便がつまつて立つ事も出来ない。じつと坐り一物を確り握つて我慢するのであるが、それでも我慢出来ない時は、痰壺に、分らん様小便するのである。我慢に我慢しきつた小便は中途で止め様とした処で止まりはしない。殆ど痰壺は一人で一ぱいになつてしまふ。一人がこれを始めると誰も益々我慢出来なくなり拾取もつかぬ仕儀となるものであつた。

監房に入れられて一ヶ月位過ぎてから寝具とそれにグリシコ(セトビキで把り手のあるコップ様のもの)がお茶を飲む為に各人に渡されていたが、これ以後、同囚達はこのグリシコに小便をして、高い窓から上手に小便を投り出す苦肉の策を構するものであつた。

その後十一月頃になつて窓は閉められ、目貼り迄されてしまつた。その為には痰壺が満員の盛況といふ事になつた。

蒙古人には自分のした小便を片付ける者が無い。致し方ないから私が一日二回小便痰壺を運び出さねばならなかつた。兎に角山盛りになつた痰壺小便を未決監廊下に零さない様に持ち運ぶのには苦勞した、初めは汚ないと思つて運び出したが、慣れると一滴も廊下や手に零さないで済むようになった。

初めはデチュルも黙認していたが、余りに各監房毎にはげしくなつたと見え、遂に取り上げられてしまつた。それから後は自分も苦しんだ。同囚達は遂にお茶を飲む、グリシコに小便して各自が懐に隠し出し便所に捨てる事に成功した。私は困つた事に蒙古服の様に懐に隠す事が出来ない、協和服の上衣の下に隠すが中々うまく隠せない。しかし直ぐ人の後から随いて行くと分らないで済むことを発見した。しかしどうしても無理があるので手や協和服を小便で濡らす事が多かつた、又グリシコに小便が一ぱいになつてから、再び小便がつまつてもならない時は正に困却そのものとなる。私はグリシコの小便を飲んでみた。半分迄は飲めるが後はどうしても飲めない。その空いた部分に少し小便して我慢した。このグリシコも毎日協和服の上衣の裾で拭くのであるが、段々白ぼく臭いのあるものになつてくる。こんなに小便のつまるのは、勿論ジャンホー(糊の御飯)と監房の湿気によるのであるが、また身体の衰弱も大きな理由であることを見逃すことはできない。

毎朝給食婦が小さな黒パンを配つている。同囚達は順番に並んで貰うのであつた。十一月頃から私の監房にも内蒙古人が押し込まれて来た。一番多かつた時は十名にも達した。その時は床の上に横になつて寝るのであつた。大勢になると気苦労は無かつたが、腹の減るのには困つた。段々自分の肉体がむしばまれ、血肉が激減し、皮と骨とばかりになるのが自分でも分るようになる。その為には扉口でパンを貰う時、パンの端のこげた処を貰ふ事でも願うのであるが、中々それには当らない。この端のこげた固いパンは、こうぼしく真中の柔らかい所より量が多い様に思われるのであつた。大半の者にとつて、扉口の床の上に零れた粉の様なパン屑を、指に唾をつけて拾い、口に入れることなどは普通のことであつた。ひどいものになると、小便所に捨てた、黒パンの焼けこげた食い残りを拾つて来て、こつそり食う者すらあつた、又外のペイチカで、デチュルがジャガイモを焼いて食つた、黒い皮の残りを、手早く拾つて来る者もあつた。

未決囚達は一途にどうしたら早く未決監から出られるだらうとあせつた。それでも内蒙古人は普通三、四ヶ月で判決を受けに連れて行かれる様であつた。内蒙古人は常にデチュルに見つかからない様に、経文を念じ礼拝を続ける、又易をたてる者もあつて豫言する、それが当ると誰も彼も易を見て貰うのである。未決監に於ては、食事と、睡眠と、易が最大の楽しみであつた。しかしこの易判断は当るも八卦当らぬも八卦で、今日はパンの端の固い所が当るとか、取調官が呼び出すとか、等が主なものであつた、この八卦に使う石も便所の隅りにデチュルに見つかからない様に拾つて来ねばならなかつた。又八卦を立てる時にもデチュルに見つかからない様に扉口の北側角で行わねばならなかつた。

昼飯時の十二時近くなると、未決囚達は、物一つ言わず又音一つ立てず、全神経を、東側廊下の扉のガタン、ボタンという開閉の音に集中する。このガタン、ボタンの音がすると、今日も食事にありつけたと気安くなるのであつた。そして皆元氣付き、話し始めるのである。それも食事の事ばかりであつた。内蒙古にいた時張家口、張北、厚和、包頭海接州、満洲里で食べた支那料理から、日本人と一諸に酒を飲み、肉を食ひ、密柑の鐘詰を食つた事など、すべてのことが楽しい思ひ出して語り出されるのであつた。

これもデチュルの監視を避ける為、半分は覗き穴に向けられ、キチンと坐りながら語り合うのである。昼食が終ると又退屈な午後が続く。呼び出しでも無かつたら減入つてどうにもならない。腹は減つて来る。退屈紛れに自分の延びた顎髭を親指と人指指びの爪の間に挟さんで、ひっこ抜く事も時間を過すのによい方法であつた。しまいは栄養の無い爪は割れて、肉迄喰い込み毎日が続けられなかつた。

又しらみが頗る繁殖した。それに根気よく退治するのも時間を過す良い方法であつた。十五日間に一回風呂に入れられる。風呂場には小さな桶が三、四個あつて、それに一ぱいづゝ湯と水をくれた。余り冷えるため誰もが小便をするので、風呂場は甚だ小便臭い。身体を洗うのはよいが、寒くてとり肌がち、終いには足が痙攣する程になつてしまふ。

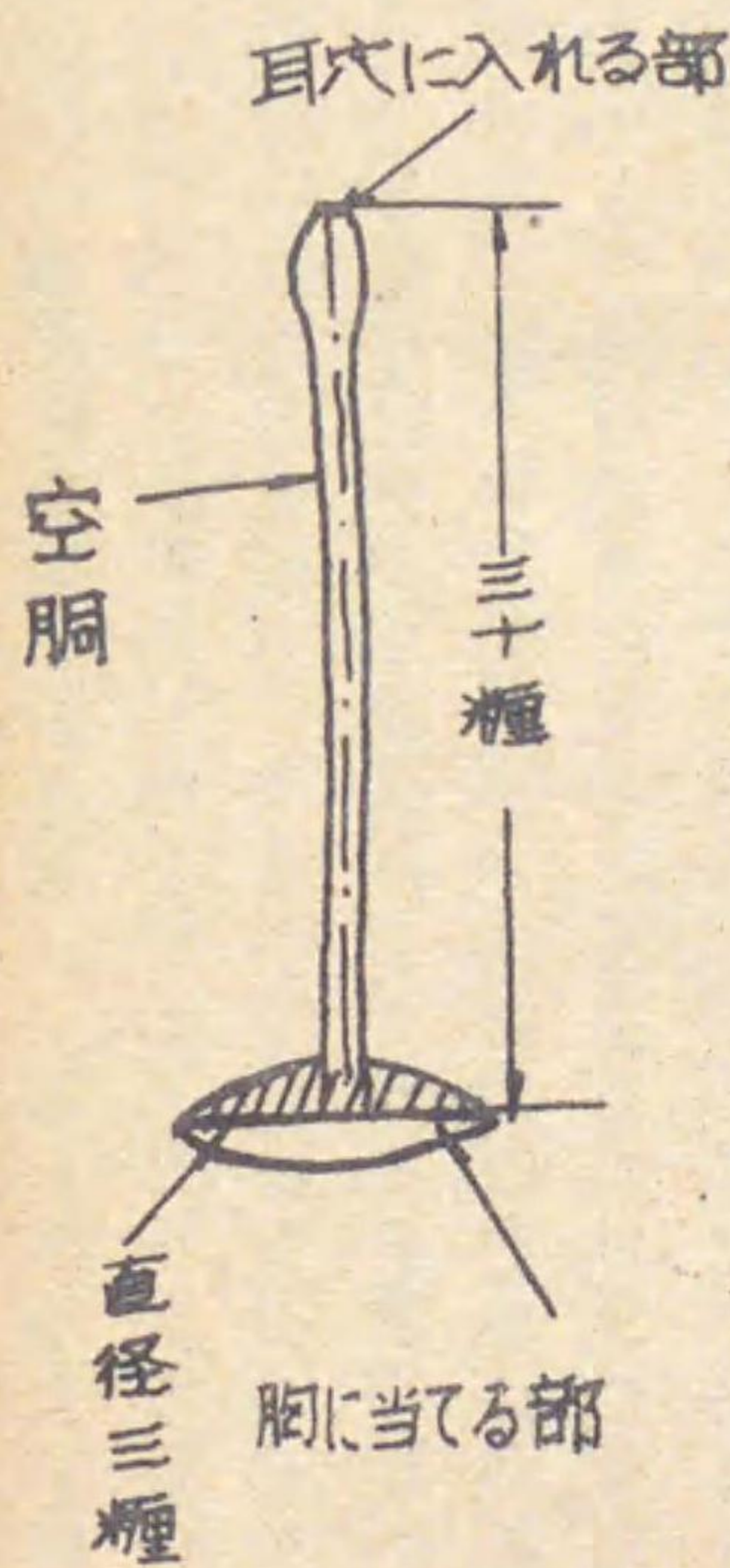
吾々が風呂に入つている間に監房内の臨検が行われ、例の易判断の小石とか、針、釘、棒切れ、余分のシャツ、ズボン下など大切に食い残して置いた黒パンのかけら迄没収して終うのであつた。

一週一回位大掃除が行なわれる、二重窓に張りつめてある二寸位の厚さの氷をかきけずつたり、又床には鋸切り屑をばらまきその上に氷をかけて掃き、僅かなぼる布で床をこするのであるが、冷え切つた手と足は自由にならず、衰弱しきつた身体を無理してやらねばならぬ、囚れの身の苦しみは一通りでは無い。

或る時私達の監房の者が全部廊下に出動させられ、廊下の床の拭き掃除をやらされた、その当時私は栄養不良で皮と骨ばかりで心臓が動いているという名ばかりだつた。この衰弱した身体で長い廊下を這つて氷りついた鋸切り屑と共に拭き掃除をした為、身体が冷え切つたその日から下痢便となつて終つた。

私はデチュルに医者に見て貰う様頼んだ、医者は一週火、金と二回医務室に詰めていた。私は医務室に連れて行かれた。医師はソ聯婦人であつた。ソ聯婦人医師は腹具合を聴取した後、胸に聴診器を当てた。その聴診器たるや、文明人ソ聯人が使つてゐるといふ事の考えられない木製の骨董品のようなものであつた。

木製の聴診器



こんな貧弱な聴診器をみて、私はその国の程度が分る様な気がし、驚ろくやら、ふき出すやらであつた。しかし女医は熱心に診断してくれた。女医は薬を一服渡してくれた。そして肉の入つた御飯を食べてはいけない。その変り黒パンを与えるといつて証明書を書いてくれた。私は証明書を貰つて給食婦に見せた。給食婦は忘れてしまつたのか、何時迄待つても持つて来ないので、覗き穴を遠慮しながらとデチュルがやつて来た。私が証明書を見せると、彼は後で持つて来てやると言つて去つた。夕方になつてからデチュルが黒パンノルマアの一切の半分しかくれない。彼のデチュルは「お前は腹が痛いから食べないだろ。俺は腹が減つてゐるから半分貰つた」という。正直ではあるうが頼にさわる。この様に黒パンがデチュルの腹の飼となつてしまふ事は朝飯前の事で常習である。後になつて同囚が病氣した時もやはり私と同様搾取されてしまつた。

大体朝配給されるノルマアの黒パンは四〇〇瓦が定量であるが、実際は二〇〇瓦位しかない。これ等のかすめとられた黒パンは給食婦は勿論デチュル、将校達の腹に収められるのが事実となつてゐる。

又黒パンは月に四、五回途絶えて、このノルマアの半量の配給にさえありつけないこの時こそ飢えに飢えるのであるが、どうにも仕様がな。配給の無い時はジャンポーが幾分なりとも余計に猶給されるかと思ふとそうでない。常日通りの配給である。

外蒙古はこうやつて食事を減らして、取調べに役立たしめようと考へてゐるのか、又国家に予算がなく購入出来ないのか、それとも品不足の為か、それとも生活に苦しい為に囚人達の食事迄搾取するかと色々考へて見たが、何れも皆当てはまる様であつた。

実際こんな未決監に入れられた者こそ迷惑至極な次第で、正に人権蹂躪も甚しい。これが現在の日本で行われたとしたら大問題である。而し社会主義外蒙古はそれが当然の如く行われている。若しこれに対して反動的行動に出た場合は、直ちに国事犯として重刑に処せられるのである。

六、取調べとフイトン・バイシン(冷蔵監房)

四月に入つても未だ監房内の窓は、外から差し込む陽の光も入つて来ない程、厚い氷が張つてゐる頃であつた。その頃私は衰弱ひどく、尾骨が一寸五分位出ており、又足首は片手で握れる程やせて終つていたので、起ち居も不自由で、元気がなく、起てば目眩がする状態になつてゐた。一番疲れるのは便所行きたつた。同囚達に助けられながら行く事も度々だつた。私はこの頃一種の絶望感におそわれて、近い内に獄死するだろうと豫期し始めた。処が或る日初めに取調べを受けたバイツァクチ(検事)に叫び出された。内防処本館の階段を昇る事が出来ず、デチュルに背負われてバイツァクチの前にやつと腰か

ける事ができた。而し腰掛けて五、六分も経たぬ内に尾骨が出ている為痛くて腰かけていられない。両手をお尻に敷いて見ると痛くてどうにもならない。起とうとする目眩がする。遂に居たまらず、床の上に坐つて終つた。バイツアキチは椅子に腰掛けると再三命じたが、私はそれが出来なかつた。私は黙つた儘坐つていた。いつそ銃殺にこると殺られた方が楽だと観念していた。バイツアキチは簡単に前と同じ事を訊問したが、私のはつきり答える事が出来なかつた為、早く監房に帰してくれた。其の日から昼食がノルマアの外に二重ノルマアが追加され、二食給与される事になった。これが二、三日続くとぐんぐん元氣が出て来た。どういふ廻り合せか知らないが、それから生き得るといふ喜びを味い得たのであつた。この糊の御飯丈の追加は取調べの手段方法として取られたとも考えられるし、又衰弱を回復せしめようと良心的に行われたかも知れない。

次の日呼び出され、バイツアキチより日本の拷問は非人道的である吾が国は拷問は絶対かけない人道的に取調べを行うから隠さず迫せよと前おきをしながら、明安旗顧問時代の状況を聞き始めた。私は当時旗公署顧問として行政に携わつていた関係から総ゆる機関と連絡を密にせねばならぬ状態にあつた。駐蒙軍軍馬補充部隊、軍情報部、各特務機関、憲兵隊並びに盟公署の外事関係の特務科並に軍皮毛集荷部隊等がそれであつた。

明安旗顧問時代私のやつて来た行政事務は多種多様であつたし、又二、三年過ぎ去つた当時においては忘れた事も沢山あつた。而し取調官の方では大体の調書が出来ていて、総ゆる角度から研究され、特務情報に関連性を持たせようと努力している点が窺われるのであつた。

私は外蒙より逃亡し明安旗に在住していた、ナルバンチン喇嘛とアビルミトを利用して、外蒙の情報を取り、これを各特務機関、憲兵隊盟公署特務科に提供していた。

これらについて物凄く程追求され、ホトホト困却した。この二人は多倫から一詣にウランバートルに来、そして事実この未決監に入れられているのであるから私には、嘘も言えない苦しみがあつた。取調官は私の供述を蒙文に書き、私はその一枚一枚にサインさせられた。

その後毎日取調べが実施される様になり、或る時には午後十時頃から明朝二時半頃にわたることさえあつた。

又一つの問題が起きて来た。明安旗管内にあつたスエーデン人耶蘇教会の取締りであつた。大東亞戦争時代外人耶蘇教の取締りは、盟公署特務科の指示と多倫、徳化各特務機関の指示にもとずいて行われた。その実施調査に当つては、私自身が教会に直接出張した。その調査内容は、無電機、短波高級ラジオ、武器等の有無及び思想動行であつた。この調査結果を特務機関、憲兵隊、特務科等に報告したといふ件につきてきつく訊問された。

また軍属補充部隊並に軍皮毛集荷部隊の業務に積極的に協力し、明安旗旗民をして馬並に軍皮毛類を供出せしめた件が追加され、さらに多倫一バイズ廟間を結ぶ軍用道路建設に当り、旗民の大車、牛車を徴発して、道路建設に協力し軍作戦に貢献した件も追加された。

私には隠していた一件があつた。それは小さな問題であつた。それは明安旗蒙古人で張家口政府に勤めている某が反日的で親ソ思想を持つていた関係から、軍憲兵隊、政府内政部特務科においては注意人物としてリストにあげていた者であつた。処が突然某が行方をくらまして終つた。特務科はこれは一大事と、その逃走経路は明安旗管内に在ると見、私の明安旗に自動車車で捜査にやつて来た。私はこれに対し八方管内に手を配り捜査に協力したが、遂に逮捕に至らず行方不明のまゝであつた。処がはしなくもここに於て追求されるに至つたのである。私は之に対し頑として否定した。余りに頑固に否定したのでバイツアキチも手段方法を変え、徹底した拷問を実施する様子を見せるのであつた。それは先ず第一に地下のツララの下つていてフイトンバイシンを通らせ、暗に拷問するぞと暗示して訊問に当るのであつた。而し私は否定した。それではと今度は未決監に連行してシャツとツボン下だけにして、第二十四号と第二十五号の間にある、フイトンバイシンに私を押し込めた。外蒙の四月は未だ冬であり零下を下つていた。只監房にいてさえ寒くてたまらないのに、このフイトンバイシンは、鉄格子のみで、物凄く冷たい風が吹き込んで来る。その上壁と床は総べてコンクリートで固めてある。靴は穿かせない。只沓下を一枚穿かせるばかりである、五分も過ぎない中に全身は冷え切つて感覚さえなくなつて来る。私は窓から入り込む寒風を避け成る可く窓下にうずくまり、臍を両手でかかえ込み、ガタガタ震えるのを我慢しようとするが、この寒さはどうにもならなかつた。死ぬならこのまゝ早く死んだ方が楽だと思わされるのであつた。デチュルか或はバイツアキチが知らないが覗き穴から覗きながら「早く出たいなら隠さず迫せよ」といふ。

私は之に対し返事をするだけの氣力さえ出なかつた。どうとでもなれと思つてばかりであつた。十五分位も過ぎたかと思われる頃、再び誰かが覗き穴から覗き何か言つた様だ。私は頭を上げられなかつた。顔や、手、足も紫色に變つて来ていた。私は叫ぶ事も、怒鳴る事もしなかつた。その儘昏睡状態に陥つて横倒しになつた。

目を覚まして見たら医務室の寝台に毛布を掛けられ寝ていた。ハット思つて立と上ろうとしたがどうしても起きられない。もがいている中にまた氣が遠くなつてしまつたらしい。揺り起されて見ると、デチュルが側に立つている。私の協和服を取り出し着る様に命じた。デチュルに助けられながら協和服を着ると、彼のデチュルは彼の肩に私の腕をとりあげ担ぎながら連れ出し、階段を上つてまたバイツアキチの取調室に連れて行つた。バイツアキチは物凄く顔付きで再び前の件を追求するのであつたが、私は全々知らないと否定した。検事は「お前は隠しても駄目だ。確実な証処があるぞ。白状しないと殺すぞ」

と突然腰から拳銃を取り出し銃口を私に向けた。私はこの時身の引きしまる思がしたが、「どうせ行く処迄行くんだ」という捨鉢な気持ちにもなっていた。

「知らない事は知らない」とつっぱなした。そして又反動的に「殺すなら殺して見る」と答え検事の差出す拳銃の銃口をにらめ付けた。検事は拳銃を向けたものの引込むに引込まれない片意地を張っている。早く引金を引けとこちらもややくそになる。検事は素早く拳銃を放り出し、私に飛び付く様な早さでやって来て、訳けの分らぬ事をわめきながら、私の頭を所きらわず突き散らすのであった。私はいくら気力だけ負けん積りでも骨と皮ばかりの処へさらにフイトンバイシンの拷問が相当こたえていたため、僅か指先で小突き廻されただけで、床上に転げ落ちるのであった。バイツアクチは私の襟首をつかんでグイグイ引き起し椅子に腰掛させ、自分の席に戻って行き、拳銃を腰のサツクに蔵い込み、腕組をしながら私の方を睨め付けている。

私は殆ど椅子に腰掛けている気力さえなくなっている。バイツアクチは「明日迄よく考えて置け」と厳命した。デチュルが来て、私は、前と同じ様に肩を担い助けられながら、階段を降り、自分の監房に入れられた。其の時私は自分の家に帰った様にほつと安心したのか、ドタリと板の間に倒れてしまった。同囚の蒙古人は私を助け起して「どうしたのだ、余り長過ぎたじゃないか」と尋ねるのであった。

私は「フイトンバイシンに入れられた。人事不省に陥って医務室で寝ていた処を起され再び訊問を受けた」と述べると、同囚達は驚いて、毛皮の外套を敷いて横になれと薦めてくれる、私は遠慮せずその上にはい上つて毛皮にくるまつた。暫くの間ブルブル寒さで震えていたが、その中に少し暖か味を帯びて来た。同囚達も手や足をさすつてくれた。その日は同囚達の心尽しの毛皮にくるまつて寝たので、冷え切つた身体に暖か味が甦つて来るのであった。

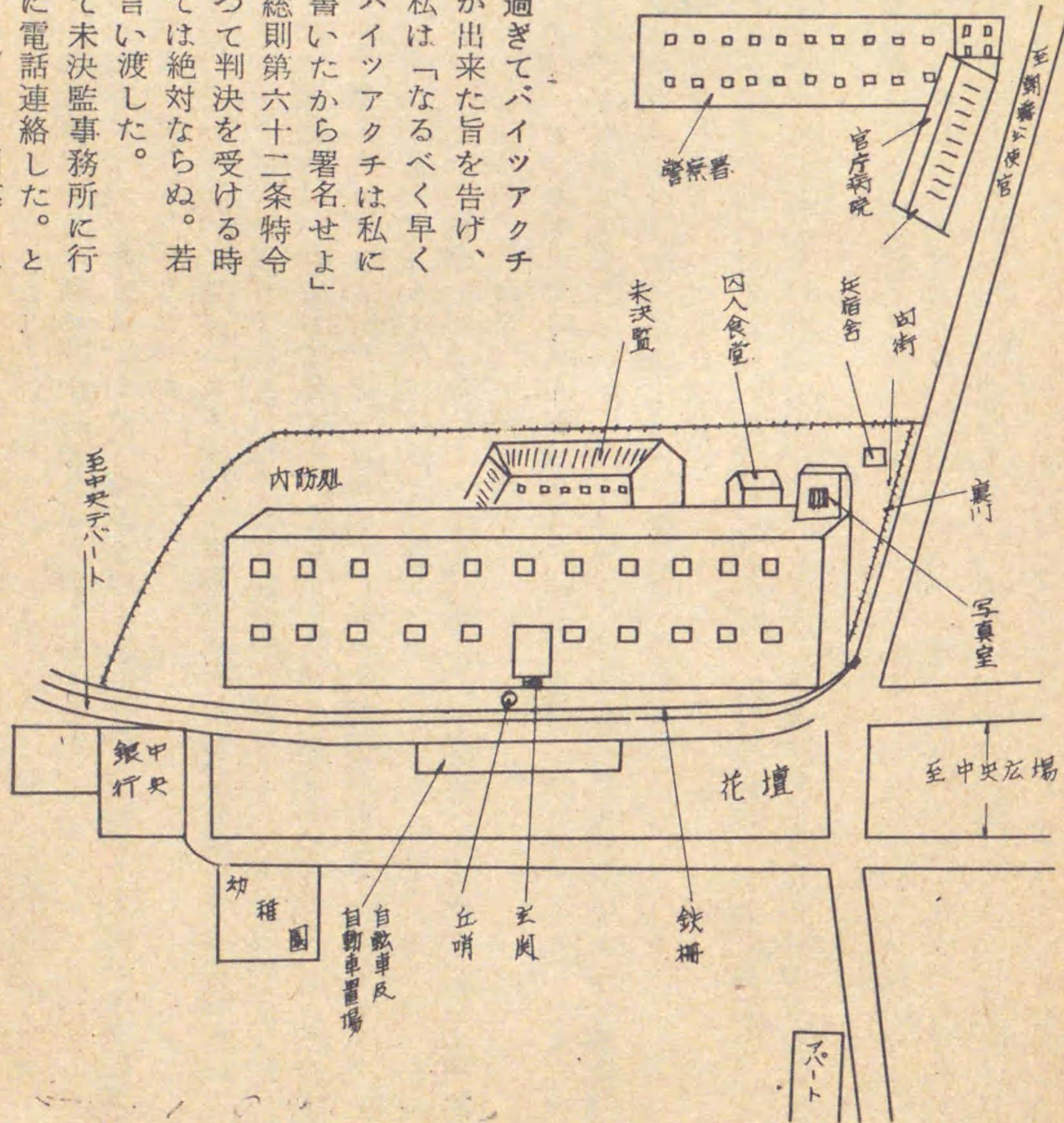
次の日も呼び出された。バイツアクチの追求は前と同様鋭かつたが、しかし自分は何処迄も知らないと否定した。その後二、三日間追求は激しかつたが、遂に日数が過ぎるに従つて穏やかになつて来た。これを峠として訊問も降り坂となり、再び原籍地、現住所、親兄弟の氏名年令及家族の氏名年令等詳細に調書を取るのであった。

又、指紋と写真も三階の一室で取つた。最初監房に入れられて暫くしてから、この三階に連行され写真を撮つたが、当時は何処にどうあつたものか少しも見当が付かなかつた。今度はその場所がはつきり分つた。

内防処の一番東側に三階に昇る階段がある。この階段を昇ると一部屋があつて、向う側は現像暗室となり、こちら側が撮影室となつている。ここには三人の将校が働いていた。

写真と指紋を取つてから二、三日過ぎてバイツアクチは私に最高法院に於て判決する調書が出来た旨を告げ、「何か希望事項は無いか」と聞く。私は「なるべく早く日本に帰して貰いたい」と答えた。バイツアクチは私に「刑期を軽くして貰う様に嘆願書を書いたから署名せよ」といつて署名させた。そして「刑法総則第六十二条特令第十五条を適用する。なお法院に行つて判決を受ける時は、この調書を裏切る様な言動に出しては絶対ならぬ。若し出た場合は審査をやり直す。」と言ひ渡した。

それから二、三日後、呼び出されて未決監事務所に行くと、直ぐデチュルがバイツアクチに電話連絡した。ところろが、小山(コヤマ)と末山(スヤマ)とを間違つたらしく、末山が監房から出され内防処本館に連行されて



行く迄、事務所内で待たされた。ひよつと窓越しに見ると足を負傷しているらしく、両手をつきなからいざつて行くのが見える。あれが末山という鳥藍札布盟にいた特務機関員であるのかと、初めて知るのであった。彼については、同室の鳥藍札布盟の内蒙古人が末山と対面せしめられた事や、また彼が鳥藍札布盟の特務機関員として活躍し、終戦時は戦闘を交え負傷の結果逮捕された事も話に聞いていた。

後になつてからのことであるが、私が中央監獄に服役中彼の末山は遂にその姿を見せなかつた。

五月一日メーデーの前日、未決囚達は全員身体検査を厳重に行われ、警戒も厳しく、銃剣を持った蒙軍が未決監周囲を取りまいた。デチュルは絶えず覗き穴から覗き、監視を怠らなかつた。

二、三日経つて別のバイツアクチに呼び出され、初めて黒パンとスープを御馳走になつた。私は非常に美味しいと思つて御馳走になつたが、そのかわりに、バイツアクチは、察哈爾盟盟長札特巴札布に就いて訊問した。私は札特巴札布の事に就いては余り詳細に知つていなかった。大体の職歴を述べただけであつた。そこへ一人の小尉が入つて来た。バイツアクチと小声で話した後、私に向つて立派な日本語で話しかけてきた。私は一寸驚いた。余りに突然であつたからだ。

彼は「貴方は私を知っていますか。私は貴方に一度御会いした事があります」

言われて何だ、この男が私を知つておる？。何かの間違ひでは無いだろうか。若し会つておるとしたら、この男は外蒙のスパイだつたのかも知れない。私が返事をしないので、彼は続けて話し出し、

「私は張家口の盟長公館でお会いしています。きつと御存じかも知れませんが」と附け加えた。

私は「あゝそうですか。蒙古人の人達は僅かな日本人を知つておるでしょう。しかし私は沢山の蒙古人の人達と接触していたので忘れてしまいました。失礼ですが貴方のお名前は何かとおしやるのですか」

彼の小尉は笑つて何も答えず、その儘取調室を出て行つてしまつた。

出て行つてから考へて見ると、この少尉が内政部特務科に追われ、明安旗に逃げ込み、捜査が厳しい為、逃切れなくなつて、外蒙に逃亡した者だと察しられた。この男のために自分は相当な拷問を受けたし、亦総ゆる明安旗の事情について調査資料が出来ていた事も分るのであつた。

このバイツアクチより訊問されてから後は殆ど呼び出しは無くなつた。

五月五日突然寝具を持つて出ると呼び出された。私の寝具は白い毛皮の外套が一枚しかなかつた。私はそれを持つてデチュルに従つて未決監事務所に入つた。暫くすると蒙古人が二人同様寝具を持つて入つて来た。又一人入つて来た。瞬間「おやじさん生きていたのですか、達者で何よりです」

「お、Rさんも達者でしたか、どうしたかと心配してました」

二人は涙を流さんばかりに喜び合つたのである。長い間の監房での苦勞がその顔にありと見える、目は鋭く窪んで髪はのび、青白い顔色は、物におびえた様に見える。自分も、他人には骨と皮ばかりで生気のない今にも死にそうな何とも言えないものに見えたであらう。

四人とも判決の言い渡しをうけるため、先ずここまで来た事を、お互に知つておる為、デチュルにも遠慮はしなかつたし又デチュルも吾々が話し合う事にも介入しなかつた。

私はノロの皮で出来たヒサシのない円い帽子を、じさんは外蒙兵のかぶる土耳其帽を、蒙古人達もそれぞれあり合せの帽子を貰い、恥かしそうにかぶりながら、二人の監視に連れられて未決監の裏門を出るのであつた。

七 最高法院で判決

私は青空を仰ぐのは八ヶ月振りだ。あの薄暗い監房の中から出されて、懐かしい太陽の陽光を、さんさんと全身に受ける心持は又格別なものだ。おや、日本の兵隊さん達が働いているぞ。みんな肩章を取りはずしているが、軍服には違ひない、相当よれよれになつているが、その動作を見て直ぐ分つた。声を掛けようと思つたが遠くに忙しそうであつた為と自分の姿が余りにもみじめな格好であるのを恥かしく思つたからだ。

私は日本の兵隊さん達が、同じ血潮の通う、自分達だけの協同体の中で働いている姿を見て、どんなに羨ましく思つたことか、そしてどんな苦勞しても同じ民族同志の助け合いの中で働けることにこそ生き甲斐があると感ずるのであつた。

彼等はスフパートル（外蒙革命の父といわれる）の石像を建設中であつた、又中央広場建設の為、測量している者、土を運搬する者、整地する者、土を掘り起す者、みんな一糸乱れぬ働き振りである、私はやはり日本人は戦争には負けたが弱小民族では無いと確信され、この様に頑張つておる姿を見て涙ぐましく思うのであつた。

そこを通り過ぎ、広い道路を横切つて行くと、表は二階建て、それに連らなつて平屋の洋館がある。その裏門から入つて待合所で暫く待つた。

先づ第一に内蒙古人の一人が呼び出されて行つた。三十分もたない中に帰つて来た。聞いたら、刑期二十五年の判決を言い渡されたという。「何、二十五年だつて」と不思議に思う程驚いた。

もう一人の蒙古人が呼び出されて行つて、やはり三十分位して帰つて来た。どうだつたと聞くと「刑期二十五年だ」と答える。「それは嘘だらう」と念を押すと、苦が笑いながら「嘘じやない本当だ」と答える。「何だ、そんなデタラメな判決があるか」と義憤に燃える。

次に私が呼び出された。廊下を左に曲つて行くと、ドアがある。そのドアを押すと、そこが裁判所であつた。中に入つて見ると実に殺風景な部屋である。

監視は私を板の衝立の真中に直立している様に言い渡した。私は言われる通り真中に直立して前方を見た。四米位離れた処に背広を着た中年の蒙古人が机に向つて、こちらを見ている。これが裁判官である。その左側に書記が一人いて、その横に男と女の民衆辯護人が二人いた。右側には斜向に机が置いてあり、それに私を取調べたバイツアクチと通訳が並んで腰掛けている。

先ず第一に書記が起ち上つて、私の氏名を確かめた後、今から判決を行う事を宣告した。通訳が起つて説明してくれた。次に裁判官が起立して、調書の概要を読み上げ最後に判決の宣告が下された。これも余り早く読み上げたので、何が何だかさつぱり分らなかつた。

通訳が再び起立して説明してくれた。

初めの処は調書の大略を述べ、最後の結びは「帝国主義日本の侵略者の忠僕となつて、蒙古に渡り八年の間中国人民及蒙古人民を弾圧し、なお特務情報を蒐集し、これを日本特務機関、憲兵隊に提供し、併せて帝国主義日本侵略軍の作戦に積極的に協力した処大なるものあり。右は、外蒙古人民共和国憲法に定めたる、刑法総則第六十二条及特則第十五条に該当する。よつてここに刑期十五年を言い渡す。刑期は一九四五年八月二十二日より始まり一九六〇年八月二十一日に至る期間を中央監獄に於て服役する事を宣告す。最後に何か希望事項はないか」と附け加えた。私は直ぐ「刑期十五年ですか」と訊して見た。

「そうだ」との返事である。

「それは余り長が過ぎる。もう少し減刑して貰いたい」と述べた。

通訳とバイツアクチと打合せた後、裁判官、書記、人民弁護人が寄つて耳打ちを初めた。それからみんな自席に帰り、裁判官が起立して「もつと長い刑期を言い渡す処、参酌して刑期十五年に軽減した。若し不服なら再審の方法を取るが良いか」私は暫らく黙つて起つていた。

実際十五年という重刑を受けるとは考えていなかった。しかし今迄何回も死線を越えて来た自分には、考え様に依つては短い様にも思われるのであつた。生きてさえすればあるいはどんな事でもうまい具合になるかも知れない。又不服を言つて再び未決監に投監されたら、それを生きる事なんて考えられない。先ず第一に生きる事だと考え、

「刑期十五年不服は無い」と心にもないことを答えるのであつた。

裁判官は「外に未だ希望事項は無いか」と再び尋ねた。私は外に希望もなかつたが、一筋に日本の国土が恋しかつた。私は「早く日本に帰して貰いたい」と述べた。裁判官も日本人を初めて取扱つたものか、非常に緊張していたようだが、私が素直に折れたのでほつと安心したものらしく、

「日本人でも蒙古人でも同じだ、良く監獄規則を守つて働けば早く刑務所より釈放される。そうすれば日本にも帰れる」と教訓を与えた。後になつてこの言が事実となつて現われた。私は在監七年半に減刑され満期釈放となつた。

尚バイツアクチも起立して「良く働け。そうすれば減刑され、早々釈放される事は事実だから、良く働く事だ」と裁判官の教訓に又念を押すのだつた。私は

「このバイツアクチ奴、何をぬかすか。私をあのフイトンバイシンに押し込めて人事不省に陥らしめ、その上殺すぞと拳銃迄向けた男が、よくもこんなぬけぬけしたことが言えたものだ」と、あきれ、猛烈な敵愾心をそそらずにはいられた。私は連れられて待合所に帰つた。じさんが心配しながら、「どうでした」と聞く、私は蒙古人の手前大きな声で言えなかつた。

「刑期十五年です。もう駄目ですね。五十才にならねば刑期が終わりません。而し生きていれば又何とかなると思つて承諾してきました。」

少し判決の状況を伝えた。

じさんも間もなく呼び出されて行つた。一時間位して帰つて来た。私も心配になつて、

「どうでした判決は？」

「やつぱりKさんと同じです」

「あゝそうですか。内蒙古人の二十五年に比べたら軽刑なので、済まない様な気がしますね。」

「本当にそうです、内蒙古人に済まない。」
そんな話をしていると、自分の刑期が十五年であつても、そう苦にはならなくなり、初めて解放された気軽さになるのであつた。その反面又人生僅か五十年その人生の一番生き甲斐のある時期を、外蒙古の刑務所で過ごそうとする前途は実に暗澹たるものでなくて何であつたらう。

「あきらめよう、死んだと思つてあきらめよう、妻よ、子よ、もう駄目だ。再び会う事は出来まい。自分はどうして妻子と一諸にいる時もつと優しい言葉をかけてやれなかつたであらうか。あの多倫の河岸で別れる時、もつと何とか慰さめの優しい言葉、元氣付ける言葉、別れの言葉が言えなかつたのか。実際済まぬ事をした。本当に申し訳けない事をした」と泌々思

うのだつた。

其処に掃除婦が入つて来た。年頃四十に近く十二、三才になる女の子を連れていた。その娘は片方の目がつぶれている。片方目で私供をシゲシゲと見つめている。何を思ったかしらないが、彼の母親に盛に何かねだつてゐる。母親は片角にある戸棚を開けて二、四盞の大きな黒パンを出し、それを四つに等分し片目の娘に渡した。娘は四つに等分した黒パンを持つて吾々の腰掛けてゐる処に来、一切づつ分けて呉れた。私の受け取る手が、感動でふるふる震えてどうしようもなかつた。

又、お茶を飲めと運んでくれた。母親も娘の心持をくんで一諸になつて白砂糖を分配してくれるのであつた。これが蒙古人婦人とその子供であるが、その気持は実母の如く妹の如く、嬉しくて涙が出てたまらなかつた。只有難う。有難うと御礼を述べるばかりだつた。其の時の黒パンもお茶も何と美味かつた事か、今だにその親子の気持と、接待が忘れられない。

吾々はデチュルに連れられて、再びもと来た道を引き返し、内防処の未決監に收容された。今度は四人が一諸で八号の監房であつた。食事の待遇も少し變つて未決囚達の残飯をノルマアの外配給を受けた。黒パンも今迄よりも少し大きくなつた。茲に二日間いた、其の間いつも監房内外の掃除を言いつけられた。監視も付かず自由に話しも出来た。しかし唯も彼も骨と皮ばかりである為、汗だくになり、へとへとに疲れてしまふのだつた。

私は多倫から一諸に來た日本人の安否が気ずかわれ、じさんとも相談して見たが、少しも情報が分らなかつた。

私は在監中、あるときは外の便所に、ある時は二十一号と二十二号の間にある内便所に用便をする事があつた。その際常に内便所の白壁に注意を払つてゐた。それは吾々日本人の消息が壁に書いてありはしないかと思つたからだ。私は注意深く壁に「元気か? 小山」としておいた。しかしその後何回も内便所に用便する度毎に注意して白壁を見たが、何の印もなかつた。こんな事をじさんと話しながら、日本人の安否を気付かうのだつた。

第三部 外蒙の強制労働所

第一章 刑確定後強制労働所收容中の生活

一 ツカンバイジン(白い家)

ここに二泊して犯人護送用自動車に乗せられ、裏門より出た。幌で囲つてあるので外の外観は殆ど見えない。しかし十分位して大きな建物の前に停つた。小さな門をくぐつて行くと、二階建の頑丈な洋館式で窓には覆いのある、又鉄格子のはまつてゐる建物が見えた。まさかこんな中に押し込むのじやあるまいと、一寸不安になつた。しかし連行して來た將校は一人のデチュルから鍵を受け取り入口の扉の錠を外した。いくつかの錠を開けて入つて行くと、廊下になつてゐる。カビ臭い湿気が鼻先を刺戟する左に曲ると、ツアカンバイジンの監視事務所がある。附いて來たデチュルが吾々を監視して將校は書類をデチュルに渡して歸つて行つた。それから三十分位待たされた。なんだかさつぱり様子が分らない。すると既決囚らしい蒙古人二人を連れて一人の將校が入つて來て、置いて行つた書類を見た後台帳に何か書き込み初めた。しかしよく分らぬらしく、吾々一人一人に原籍地、現住処、氏名、年令、罪名、刑期その他を聞きながら書き込むのであつた。書き終ると既決囚二人に吾々四人を連行する様に命じた。これが後になつて分つたが、昔からある有名なモルトン(未決監)とヤス、ツオウシ(禁固)で、これ等を綜合してホリフ又はハラ、ゲエリル(暗黒の部屋と言ふ意即ち監獄)と言ふのである。

この未決監には別に内防処の直轄未決監に入れられるのである。特に国事犯は別に内防処の直轄未決監に入れられるのである。この未決監には、バイツアクチ(検事)も内防処より出張して取調べを行う。ヤス、ツオウシ(禁固)は狂暴罪人か、何回も強制労働所(監獄)から逃亡した者、又は二犯、三犯と罪を重ねた者が收容され、丁度アパート式になつていて最高十二人位までが一部屋に押し込まれてゐる。

ここに又トスカイ、ツオウシ(特別禁固)がある。ここには外国系の政治犯が押し込まれていて、蒙疆政府蒙軍參謀長トクトホ、滿洲国興安總署王爺屈に本部のあつた蒙民厚生會、會長マニバートルホ、その他興安軍官学校第一期生ニマー、蒙疆政府主席徳王の第二子、蒙疆政府賜林格爾盟副盟長、等三十有余名が監禁され他の罪人と接觸は出来ない様に嚴重に監禁されてゐた。

二、外国系(外蒙古人以外の外国人)

吾々四人は内国系トウブルクチ(内国系の罪人のみを統轄する職長)の蒙古包に入れられ前と同様原籍國別、罪名、刑期、氏名、年令等を聞かれ、それを囚人名簿に記入の上再び連れ出された。

九四

そして一つの支那式泥葺きの固定家屋に入った。一つの部屋には事務用机が二個並んでおり、隣りの部屋には寝台が三個並べてあつた。

これが外国系のトールブルク事務所である。ここには背の高いノツポの男、中背で丸顔金歯を入れた男、そして背の低い髪を無精にのばした男の三人がいた。

このノツポのトールブルクは吾々四人に対し蒙古語で流暢に注意を与えた様だが非常に聞きにくかつた。しかし簡単に済ましてくれた。

後になつて分つたが、このノツポの蒙古人は内蒙古人で、昭和十六年頃、日本の特務機関員として密命を受け、外蒙に潜入した。相当奥地に迄入り込んだが、言葉使いの相違により発覚し遂に外蒙軍の逮捕する所となつた。彼の名はヨンドンジヤムソと言つたが、囚人はヤントンジヤムソ（煙突の様に長いジヤムソと言ふ意）と言つていた。

後の中背の男は華僑と外蒙古婦人との混血児でキュービイと綽名されていた。もう一人は内国系の刑事犯であつた。

このキュービイが裏庭に捨て置いた。巾一尺長さ三尺位のぼろぼろのフェルトを取つて、私に呉れた。うさんにも同様なフェルトを取つてくれた。これが初めて貰つた官給品である。

暫くすると三人の罪人が来て、吾々四人は別々に引き渡された。

私は肥つた背の高い蒙古人の監督するバリガード（班）に編入され、うさんは別のバリガードに編入された。

吾々はバリガード・ダラガア（班長）に連行され、一の大きな宿舎に入り、バリガード・ダラガアの指名席に入る事になつたが、満員で吾々の割り込む余地がなかつた。私とうさんはぼろぼろのフェルトを持つた儘そこに立つているより外に道はなかつた。

外国系の何百名が一諸に宿泊している状態は、何とも言えない。非衛生な事は論外である。頭の髪の毛はぼろぼろと長くなつているし、顔もそつた事もなく、何処となく、青黒い顔付であり、身にまとうものは、おんぼろであり、おまけにこれ等囚人の放つ体具は一種独特なものであつた。

私供の見てゐる前で、彼方此方で売買行為が行われている。ハラタルハーとノルマーのジャンホーと交換しようとか、煙草一サジ五円で売るとか、帽子、靴、帯等ぶらさげて囚人間をわめきながらねつて歩くのであつた。

この様に自分の腹を満たす為に、着ている物を一枚はぎ二枚はぎして売り飛ばすので、中には裸でいる者もあつたし、毛皮の外套を着ている者もあつた。

この外国系には色々の種族がいた。内蒙古人、満洲人、ソロン人、コルチン人、ドルブト人、西藏人、漢人、白系露人、

カザク人、ウゴール人、ハルチン人等であつた（我々は内国系からヤボン（日本人）ヤボンとさげすまれ、特別扱いをされた）、特に彼等にとつては初めての監獄生活である為、何事にも暗く重苦しい、落ち付きのない惨めな生活であつた。彼等は皆大きな精神的打撃からか自暴自棄となつていた。

彼等には又大きな負擔があつた。それはノルマーの仕事であつた。このノルマー制は体裁のよい強制規定である。即ち囚人から最大限度の労働力を搾取し、生きる程度の最小限度の安価な食事を与え、もつて労働力に酬いと言う仕組になつてゐる。

それであるからこの食事を得んが為に、総ゆる手段方法を構じてノルマーの完成を期さねばならなかつた。

これ等の外国系は一九四五年八月終戦と同時に、日本に協力したと言う事で、日本のスパイと認定され、刑法総則第六十二条特別第十五条に基いて判決され、最低十年最高二十五年の刑期を課されていた。

又死刑に処せられた者も少数ではあるがあつた。死刑にされた事は発表はされなかつたが、囚人間に於て認められ、それはまた事実であつた。

また一般に外国系は特別刑期が長く、監獄生活の苦しさから、反動的行為に出る者が殆どであつた。但し監視人、又は政府直属の長が来た場合は静粛になり、如何にも実直そうにしているが、彼等が一たびその場を離れると、態度はがらりと変わるであつた。

日本の軍歌を誇らしげに歌い出し、かつばらいもすれば、ゆすりもする。喧嘩はする、人の物を横領する。又反面気の弱い者は炊事係の捨てた塵埃同様の残飯を捨てて食う者もあつた。

特に蒙古人は元来肉食を主体として来た民族であつたから、此の監獄に入つてから急角度にジャンホー（糊飯）に切り換えられてしまつたので、彼等の衰弱は物凄かつた。この為病人は数知れず死亡する者はたえなかつた。

これについては監獄病院の項に於て詳細記述することとしたい。

三 オンドル・イタミスルン

オンドル・イタミスルン（背の高いイタミスルン）が、ハラサーブ（黒くなつた丸い罐でジャンホーを入れてある食器）をぶら下げて来て、これを食べると私に差し出した。

私は彼の身なりを見て驚いた。実際何とも言えない、乞食同様な格好である。

私の驚いた様子を見て彼は苦が笑いしながら「俺もモルトン（内防処監房私と一諸の監房にいた）から此処へ連れて来られた時には腹が減つてどうにも我慢出来なかつた。着ていた物を一枚脱ぎ、二枚脱ぎ、靴迄脱ぎ捨てて、みな腹の中に収め

て終つた。現在この通りみじめな姿になつた」と言つて自分の姿を見廻した。彼はボロボロにちぎれた毛皮外套をまとい、その合間からみえる陰部を破れた猿又様のもので隠しているのみで、シャツなどは思いもよらず、直かに外套を着ているのだつた。

彼は外蒙古人であるが、満洲ホロンバイルに逃亡し、日本特務機関に收容され、其の後自由人となり、將軍厩あたりを転々としていた。終戦と同時に外蒙軍に逮捕され、外国系として刑期二十五年を受けていた。

彼が内防処の監房に私と一諸にいる時、暇つぶしに彼の鬚を抜いてやり、時々ジャンホーを分けてやつたりした為、今回自分のシャツをジャンホーに換え、親切に持つて来て呉れたのであつた。

Jさんと私は涙を流さんばかりに礼を言つてジャンホーを舐るのであつた。後になつて強制労働中彼が病気の為、働けなくなつた時、私はこの恩返しにもとでできるだけの援助をしてやつたのであつた。

其の後私が仮釈放された時、涙を流して別かれた事は、今も懐しい思い出となつて甦つて来る。

四 アルプンツエエエル・バリガード (清掃班)

バリガード・ダラガー (班長) はガルトンと言う大きな男であつた。彼は外蒙古人で終戦前外蒙古のスパイとして、満洲ホロンバイルに潜入した処、日本特務機関に逮捕され、王爺厩特務機関の保護を受け、其の後錫林格勒盟特務機関に移管され、自由の身として保護されていた。昭和十八年突然外蒙に逃げ帰つた処、外蒙軍に逮捕され、外国系として刑二十五年を受けたものである。

私はこの部下として外国系收容所庭内を清掃する役を命ぜられた。その当時骨と皮ばかりの身体で直射日光に当ることさえ疲労を覚える位であつたから、箒を持つて広い庭内を清掃するには並々ならぬ、努力が必要であつた。

この清掃班は、便所汲み取り係四人、手挽車で柵外に塵埃を捨てに行く者が四人、庭内を清掃する者三人計十一名であつた。便所汲み取りの四人はいずれも中国人で、満洲白城子より王爺厩経由、ハロンアルシヤンに鉄道建設労働者として、労働中逃亡し、方向を間違え、外蒙に逃げ込んで終つた。その為外蒙軍に逮捕され、日本のスパイとして刑期十年から二十五年を受けていたものである。

外国系收容所にはバリガードが十四ヶ班あつたが、この清掃バリガードが一番人数が少く他のバリガードは殆どが三十名以上四十名であつた。これらの囚人は收容所に收容しきれず、廊下及その他作業場等に分散收容されていた。また彼等はいずれも、内蒙古人か満洲蒙古人か或は中国人であつて、かつて日本特務機関の要員であつたか、或は、善隣協会、旗公署、蒙軍、満洲国境警察隊、憲兵隊、大蒙公司、其の他中国人売買等に関係のある者許りであつた。

さきこのべた手挽車で柵外に塵埃を捨てに行く同囚達は監視人の目を盗んで色々のものを捨てて来た。一番役徳となるのは、煙草の吸い殻であつて、これを捨集めて、一日二、三服の煙をたてる事が囚人達の最も大きな慰安であつた。その当時の監獄では、煙草の売買が最も激しく行われていて、スプーンに一ばい五トコロゴ (円と言う意) 日本円に換算すると一五〇円) であつた。僅か五トコロゴと言つても現金を持つている者は無く、只自分の着ている物を手離すか、金歯を取り外すして、交換するより外方法はなかつた。

当時外蒙は物資の欠乏と物価高になやんでいたが、それは第二次世界大戦のため、ソ聯からの輸入が全々跡絶えていたことによるが、終戦後になつても依然として経済事情は緩和されず、一九四九年に到る迄外国系は目を白黒させられたのであつた。

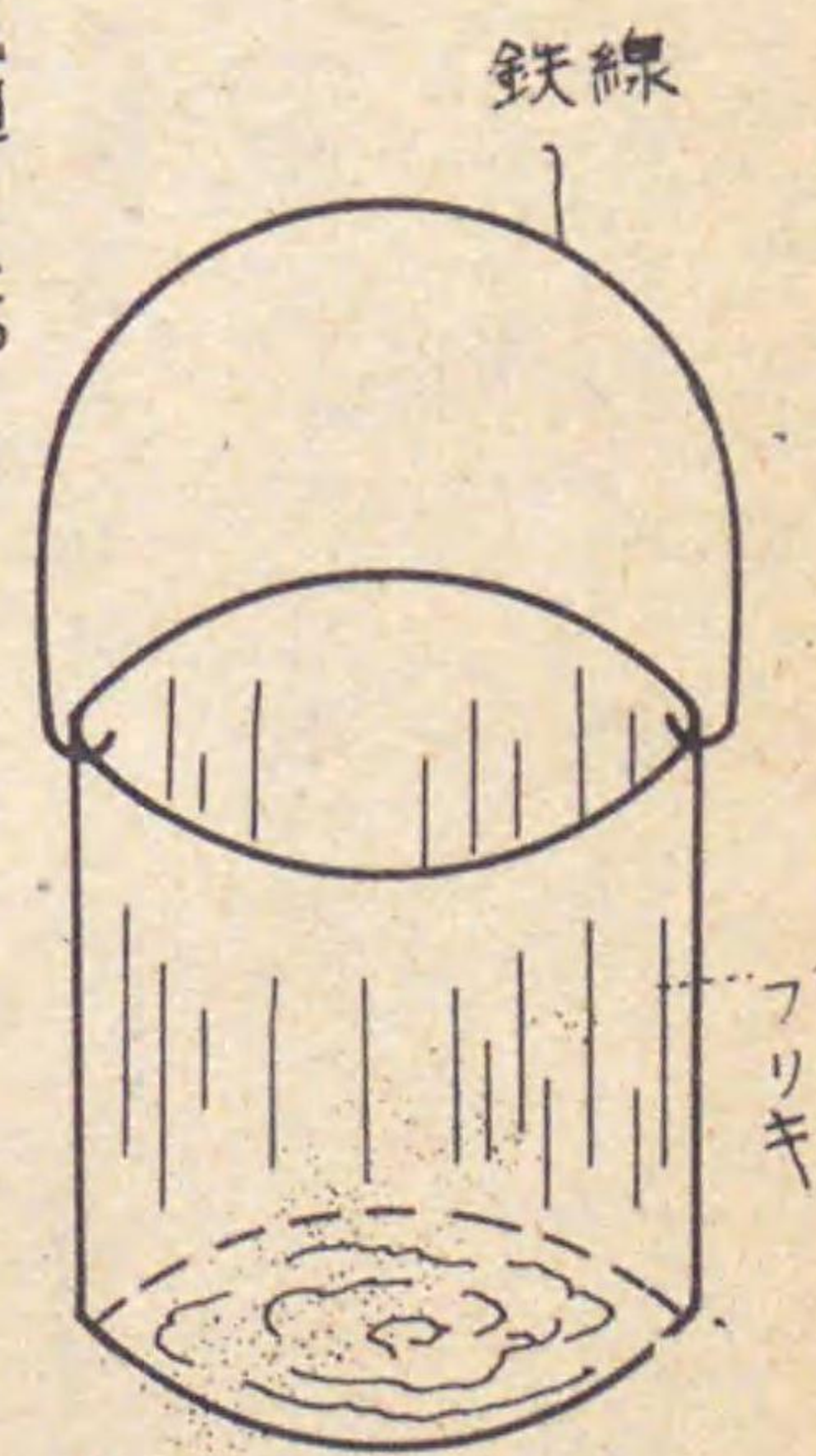
なお内国系つまり外蒙古人には、二週一回少量の差し入れが許されていたが、それが外国系に廻つて来る時には相当高価なものとなつて売買されていた。

五 ハラサーブ (黒くなつた丸い罐)

私が入獄して早速困つたのは、ハラサーブの無い事であつた。之を購入するには、一日のノルマーのハラタルハー (黒パン) と交換せねばならなかつた。こうして腹を減らしてもこのハラサーブを購入する事が先決問題であつた。

このハラサーブを持たない事には食事 (ジャンホー) の配給を受けることができないうりかジャンホーを半分食い残して後で腹の減つた時に食事も出来ない。このハラサーブこそ囚人になくしてはならない貴重な伴侶であつた。

私は命の綱とも言ふべきハラタルハーと交換してハラサーブを入手した。しかしそのハラサーブは底に穴が開いていてボロ布でふさいであつた。しかし無いよりはよかつた。



後になつて次のようなハラサーブの由来を聞いて身振いするのであつた。
 自分の物となつたハラサーブは誰のものか分らないが、長い間外蒙古人の小便壺として使用していたもので、それが底に
 穴が開いた為に、使用不可能となつて、便所に捨てた。それを捨てて来たのが外国系の同囚で、綺麗に洗つてジャンホーの
 配給を受けていたが、彼は又一つ何処からか捨てて来たので、私にその穴の開いたのを売却したというものであつた。
 彼も一日のノルマーのハラタルハーを得たので二、三日腹の虫が収まつた事であろう。私は彼の捨てた便所に行つて見た。
 成程便所には幾つも捨ててあつた。棒で適当な大きさのハラサーブを釣し上げて見た。いずれもみんな底に穴が空いて見えた。
 又ハラサーブの中が小便のアンモニヤで白くなつて、こびりついている。私はこりや駄目だ、一儲しようと考えたが、やは
 り俺には出来ないとおきらめるより仕方なかつた。

六、毛皮類の作業場

Uさんは足の負傷と、呼吸器が悪かつた為毎夕微熱があり相当苦しい様だつた。

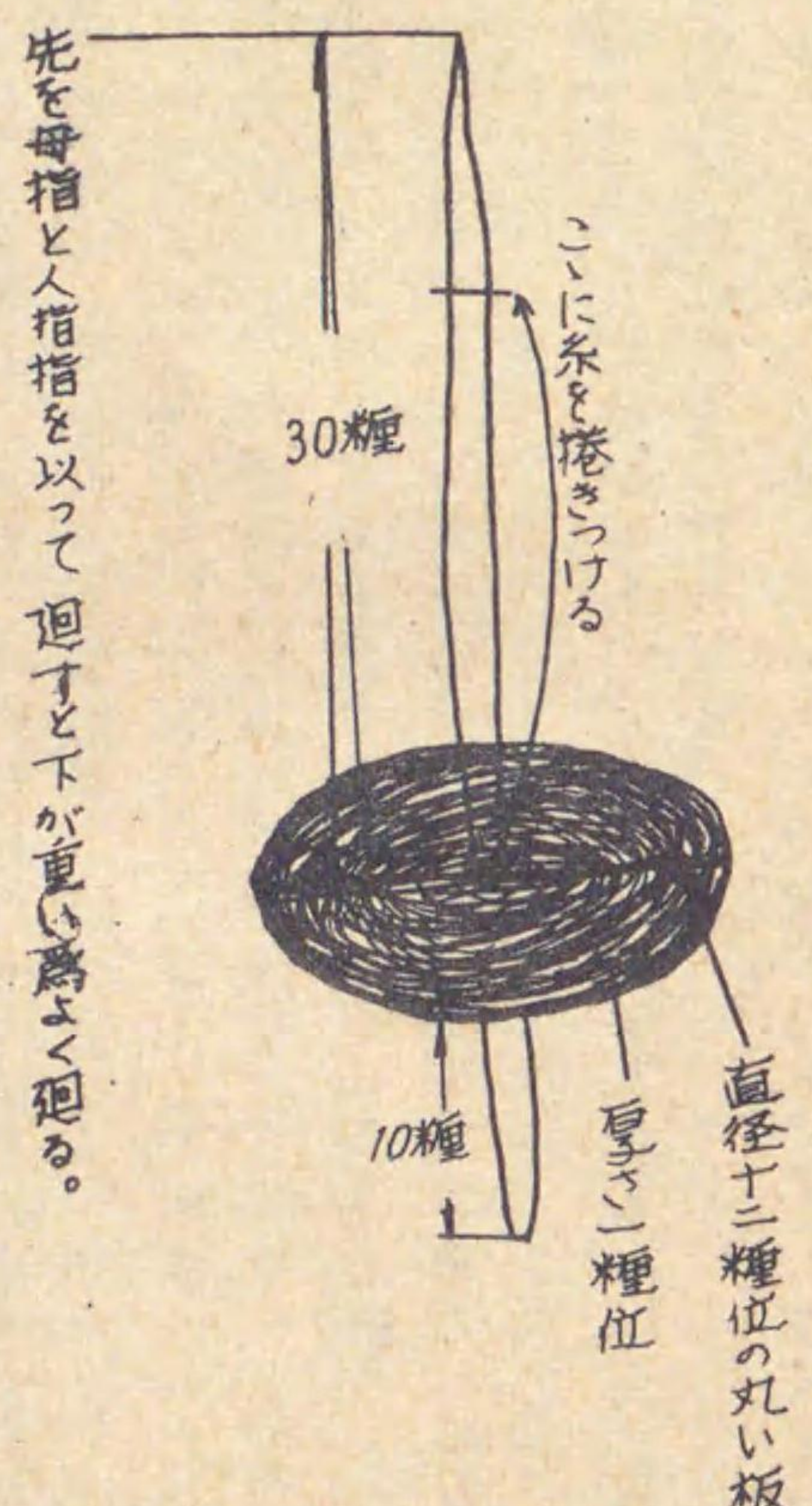
Uさんの仕事は蒙古雑来羊毛を毛糸にする事で、毎日のノルマーは二〇〇米、この二〇〇米も二重にしなければならぬ為
 実際は四〇〇米作らねばならなかつた。この作業場には何百人と言う同囚達が働いていた。

第一に羊皮を裁断する。七、八人で担当している。次に裁断した羊皮を縫う処丈を切毛する。その切毛を集めて毛糸に仕
 上げる。裁断された羊皮は、ミシン班に廻り兵隊用の白い外套を作るのであつた。

切毛者と、糸作りはノルマーに達せず、いつも夕方になると他人の毛量を盗んで自分の毛量に加え、漸くノルマーに達す
 るのであつた。毛糸作りも四〇〇米延ばすことは並大底では出来なかつた。一日起ち通しの糸造りは非常な疲労であつた。
 彼等は疲れると何時も日本の建国二千六百年祭の歌や軍歌を歌つて元気づけるのであつた。皆日本の歌を知つていて、一人
 が歌い出すと、大コーラスになるのであつた。彼等にはこれが一つの慰さめでもあつた。

兎に角糸造りは人のものを盗む事は出来ない。その為にメイトルを少し短くして納める事を考えるのであるが、何時も検
 査され収納の時には口論に口論が続き、遂には無理押しに収納させて終るのであつた。かくして一等飯の配給を受ける事
 が出来るのであつた。

私はそれでも清掃班に入つていたので、一日三回庭内を清掃すれば一等飯が配給された。又僅かな暇もあつた。この暇を
 見て毛糸を作る事を覚え、一日五〇米以上糸を作る事が出来た。それを僅かであつたがUさんに補給してやるのであつた。
 毛糸作りの機械は実に原始的なもので今迄見た事もない不思議なものであつた。馴れると二米も一気に延ばす事も出来る様
 になつたが、一般に毛糸の質は極悪で、物をあむとか、縫う事には使用出来ないものであつた。



七、旧便所の堀り出し

暫く発つてから手挽車を押して一日一回位、柵外に出る様になつた。これによつて煙草の吸殻を捨てて来る事が出来たし
 炊事場で捨てた羊頭の骨を割つて中からタルヒー(脳味噌)を食う事も覚え、又下顎の骨を割ると中から、僅かな筋を取つ
 て食う事も覚えるのだつた。これ等の割つた骨を大事に隠し帰り、ハラサーブに入れて煮ると脂肪が浮き出し、その汁を吸
 う事も出来る様になつた。これは班長を初め部下に至る迄これをやるのであつた。これをやらぬ事にはノルマーのジャンホ
 ーとハラタルハー丈では腹が減つてどうにもならなかつたのである。しかし外国系総隊長や幹部に発見された場合は、チャ
 ンガロン(短期禁固)に入れられるので、誰も細心の監視と協同の下で行わねばならなかつた。

或る日旧便所の堀り出しを命ぜられ、吾が清掃班は総出動で、中央監獄監視付きのもとに堀り出す事になつた。
 この旧便所は、ノモハン事件当時満洲国興安軍部隊の逃亡兵の捕虜收容所に充てられた際、使用されたものである。
 興安部隊の逃亡兵がこゝに收容される際、身体検査された。その時逃亡兵達は身につけ隠し持っていた貴重品、指輪、金
 銀細工、阿片、皮革、靴、帯剣、薬盒等を次から次へと隠匿の為此の便所にはうり込んだのである。今我々はこの堀り出し
 にかり出されたのであつた。

堀り出された物は帯革が一番多かつた。靴などはその儘出て来た。中には銀金細工の指輪や銀幣などが出て来た。又三八
 式歩兵銃の銃剣なども出て来た。阿片とか時計とかは全全見受けられなかつた。

これ等の堀り出された物は総べて綺麗に水洗いさせられ監視人が何処かへ持ち去ってしまった。私共は初夏の事であるから便所の臭いが身体に泌み込んでしまった。宿舎に帰ると、他の囚人達はマユをひそめ、吾々清掃班を敬遠して近づくものは無くなつて終つた。

この便所堀りも三日続けると底が出て来た。幸いな事に蒙古の便所はハラタルハーが主食である為、大便が風化してサクサクしている事であつた。若しあの時日本の様な便所の穴堀りをやらされた場合は、身体全体が糞だらけになつて終う処、少しはまぬがれたがしかし着換えの一枚もない吾々は、何処となく大便の臭が身に泌み込んで、鼻持ちならぬ、我々は、食わんが為、生きんが為にどんないやな事でも、苦しい事でも、働かねばならなかつた。

この便所堀りの期間、手足を洗つたり、顔や身体を洗うと言う事は全々出来なかつた。その儘疲れた身体を、板の間に敷いてあるぼろぼろになつた、たつた一枚のフェルトの上に横たえるより外に道は無かつた。

朝僅かなノルマーのお茶を配給されるが、それを残しておき、口にふくみ手と顔に二、三回ふきかけ、自分達が着ているシヤツか服のどこかで拭くのは上等の部類で、多くは万年洗いつこ無しと言う状態であつた。

外国系鉄工場

私は清掃班に配属されること一ヶ月余りで鉄工場に廻された。

この鉄工場は中央監獄内ウイルトル（生産部）の一部であつて、規模は手工業の域を脱してはいなかつた。

工場は宿舎を兼ね二十名位の男子囚が労役していた。その家屋は支那式百姓家屋と同じであつて、輔（フイゴ）のある焼き入れ場は物凄い薪炭のガスと煙で濼々としてゐる。其処に私の寝る所が決つた。

トムルチン・バリガーテン、タラガア（鉄工場班長）は私より二才年上で満洲ホロンバイルのバラカ蒙古人である。彼は日本特務機関の要員として国境を突破したが、外蒙国境監視兵に逮捕され、刑はやはり二十五年であつた。

彼は、私に、一人のハルチン蒙古人でタホルバヤルと言う小じんまりした男を紹介し、この人が私のバクシイ（親方又は先生）である事を伝えた。このバクシイは少し日本語を話せた。私が日本人である為好意をもつて日本語の分かる男を付けてくれたのであつた。

やはり日本人と接触した蒙古人は、何かと気持がよかつたし、又彼等も日本人が同じ班に来たと言うので、心の奥に隠している物事を打ち明けようとする気配が窺われるのであつた。

これは後になつて分つたが、この囚人達の中には、内防処の任務を持ち、囚人達の言動に注意して密告する者があるため沢山人のいる処では話せないのであつた。

この様な事は在獄中、吾々の身辺にたえずつきまといつたのであつて、一寸した事に口を割つた為に色々の事件となりイモズル式に何人も引き揚げられ、刑期が延長されるとか、ヤスツオジ（禁錮）に監禁されるとかの判決が簡単に追加されるのであつた。

それであるから彼等は当らず障らずの事を聞く。刑期は何年だとか、年令はいくつかとか、妻や子供があるかとか、何処に勤めていたかとか、うるさい程寄つて来て質問するのであつた。

バクシイは私に大きなヤスリ一丁、金槌一個とタガネ一つをくれた。そして蒙古独特の錠を作る事を教え初めた。私は一週間の中に錠の作る事を習得せねばならなかつた。この一週間は弟子であつて、ノルマーの錠を納めなくてもよかつた。しかし一週間後は必ずこの錠一個をノルマーとして納めねば、一等飯が食えない規定になつていた。

衰弱しきつた身体で、金槌を振り上げ、自動車の泥よけを切断する事は、初心者私にとつて並々ならぬ困難な試練であつた。

他の同囚達が一時間もすれば切断出来るものを私は一日かゝつて四十枚位しか出来なかつた。

二日目から錠の組立てをやり初めたが、この部分品をヤスリ掛けし、金槌で大きく延ばしたり、小さくしたりしてやるのだが、どうしても満足なものが出来ない。

バクシイが色々心配して教えて呉れるが、今迄見た事もない錠を組立てる事は、相当困難な事であつた。

四日かゝつて一つの錠を組立てるに必要な部分品が出来たが、悪い所はバクレイが直してくれ、これを二十一番線の鉄線でバラバラならん様に縛り、それを持つて私をフイゴの処に連れて行くのであつた。

バクシイはフイゴを押して、薪炭を真赤にしてから、組立てた錠を少し加熱し、それを取り出し、白い薬剤（トンサ）を水に溶解させ、小さく切つた銅片又は真鍮片をこのトンサ液につけ、これを錠の部分品の接目につけると、白く結晶し粘着する。くまなく接目にこの真鍮片を粘着せしめた後、真赤になつた炉の中に入れ、フイゴを押して加熱すると、約十分位で青い紫かゝつた煙がたち初める。こうなると銅片又は真鍮片は溶解して接目に流れ込み接着して終う。

この接着した錠を取り出し、冷やしてからヤスリかけし、鉄光りに磨く。そしてふたにバネを付けると、これでカギが出来上る。

この第一回の出来具合は非常に良く班長から良く出来たと褒められたが、これもみんなバクシイが作つてくれた様なものであつた。

班長は明日からノルマーとして一日一個の錠を納めねば一等飯が配給にならない事、若し出来なかつた場合はバクシイが

責任を負担して納めねばならぬから、充分頑張つて作らねばならぬと注意した。

私は一週間見習をやつたが、錠を作る事は少しの上達どころか却つて忘れて終つていた。なるほどこの一週間は見習期間として一等飯は配給されていたが腹が減つていて元氣も出ない。それなのに明日からノルマーとして錠を一個納めると言われた時には驚いたが、ノルマーを納めねば一等飯も配給されないし、又バクシイにも迷惑をかけると思ひ、次の日から無中になつて働いた。分らない処があればバクシイに聞いた。バクシイも氣持よく親切に教えてくれた。又出来ない処は手伝つて作つてくれた。

私は同囚達が仕事を休んでも、休むことすら出来なかつた。午前の七時から始め午後の八時頃迄デスキー(萬力の意)にかちりついてもまだ時間は足りない位であつた。

やつとこすつとこ出来た錠を班長に納めた。班長は錠を検査して、こゝが悪い、あそこが悪いと注意して呉れた。それでも納めてくれたので一安心し、明日も一等飯が食えると安堵の胸をさすのだつた。

バクシイは私の疲労した姿を見て、黒パンの食い残りとかジャンホーの残飯を持つて来てくれた。本当に有難いと思つて、一日もはやくバクシイと同じ様な速度でノルマーが納められる様になりたいと願うのであつた。

バクシイは満洲熱河省のハルチン人であつて、錫林格爾盟公署に勤務している際、厚和の家畜防疫技術養成所に入所を命ぜられ、そこを修了と同時に再び盟公署に帰り、ついで旗公署に転勤した。

その当時旗公署は財政困難であつた為に、彼の住居も与えられなかつたので、厚和に戻つて他に就職口を見つけた処特務機関の要員として採用され、錫林格爾盟分派機関に派遣され、間もなく国境偵察に出かけ、途中道に迷ひ、外蒙領に侵入してしまつた処を外蒙国境監視兵に逮捕され、判決二十五年を言い渡され、この鉄工場に労役する事三年との事であつた。

彼の技術は工場第一のすぐれたもので、一日三個の錠を作つていた。

私は彼から色々な物を貰つた。シャツ、ズボン下、黒パン、ジャンホウ、煙草、帽子、等何くれとなく恵んでくれた。

その他の同囚達も何かと食うものを恵んでくれたが、彼ほど裸一貫の自分にこゝろ迄心配してくれた者は在監中他になかつた。今は彼もウランバートルの中央監獄から中共厚和の内蒙古自治区政府監獄に移管され、元氣で労役に服している。

この鉄工場には錠を作る囚人が十二、三人銀細工二人、他の者は紙ペーパー、蝶ツガイ、引手、キセル、引出しの取手、釘、ハンダ付け、板金等で、あらゆる小細工のものを作つていた。

終戦前第二次世界大戦中はダンピラ(ソ聯の軍刀様なもの)を作つていたと話して聞かせるのであつた。

九、当時の日本人達

私とUさんがこの中央監獄に入つて来た当時は外に誰も日本人はいなかつた。しかし清掃班長の話に依ると、私達が入獄する少し前迄、この清掃班に日本人が二人いたとの事であつた。一人はUと言ひ、もう一人の名前は忘れて終つたがみんな兵隊であつたらしく、便所の汲み出しをやつて居り、最近何処かへ連れて行かれて終つたとの事であつた。

このUは後になつて再び投監されて来、鉄工場で錠を作る事になり、私が先生になつて教える事になつた。彼は兵長で満洲熱河省の国境警備に當つて居り終戦と共にシベリヤ經由ウランバートルに連行され、捕虜収容所で強制労働に従事中、隊を離れて逃亡を企て、外蒙軍に逮捕され、判決の結果刑六年を貰つて入監されて来たのだつた。

彼は若さも若かつたが、中々元氣でその上熱心であり、技術もすぐれ良い成績を上げていた。

私が鉄工場に廻されてから間もなく、S顧問が元氣で投監されて来た。

私とUさんは必ず多倫から一諸に来た日本人達が投監されて来るに違ひ無いと判断し、自分達が投監された当時食糧に苦勞したので、彼等日本人が来た時には、少しの黒パンでも与えようと、毎日ノルマーの黒パンを節約して貯めたのだつた。この黒パンをS顧問にやると、相当空腹であつたものらしく、ゴロゴロと咽喉をならしながら瞬間の中に食つて終つた。

私とUさん二人はこれ以上の事は出来ない。只ぼんやり見ているばかりであつた。私も未決からこゝへ来た当時は腹が減つていた。人の食つて居る物でも強奪して食いたい衝動に襲われた事もあつた。

S顧問は錫林格爾盟に勤務していた為沢山の内蒙古人の知人があつた。その為相当黒パンを貰つて腹いっぱい食べた様だつた。

又私の様にハラサーブを黒パンと交換しないで済んだ。それは以前S顧問の下で働いていた私のバクシイより、新しいトタン板でハラサーブを作つて貰う事が出来たからだつた。

S顧問も早速労役に従事せねばならなかつた。自分の希望もあつたが、ゴトルチン(靴工場)に廻されて行つた。その後二週間位過ぎてY顧問とO顧問が青白い顔付きで投監されて来た。

この二人とも知人の蒙古人がなくハラタルハーを持つて来て呉れる者も無かつた。私とUさんはノルマーのジャンホーを分け合つて食べるより外に道は無かつた。

早速二人とも作業場で毛糸作りを始めた。しかし二人とも作業には馴れず又出身が労働向きでなかつた為、ノルマー完成にはほとほと困却した様だ。それでも日本人と言う肩書きがある為、外国系各バリガーテン、ダラガアの好意により一等飯が配給されていた。其の後二人とも不器用でノルマーに達しない為、ゴトルチン、バリガートに廻されて行つた。

其処へ行くとUさんは非常に器用であつて、ノルマーを超過していた。しかし身体の具合が悪く、常に夕方になると発熱し、床板に臥しているのだつたが、誰も自分のノルマー完成に追い廻されて、顧みる者は無い、この様に一日働き通して、ノルマーのジャンホーとハラタルハーを配給される状態は、只生かして置き、生きて居る間は使える丈使えと言う残酷なものであつた。人間としての情誼などは爪の垢程も考えられない状態であつた。

昭和二十一年七月二十日昼過ぎになつて、突然この外国系収容所に、異変が生じて来た。何処かへ移動するらしく、自分の全財産を梱包して、トウブ、ラーガル、ホントロール、(中央監獄事務所)前に集結を命ぜられ、犯罪者が持物の一斉検査をさせる様に、僅かな持ち物を無茶苦茶に騒ぎ廻された。

三十名位づゝ自動車に乗せられ、五、六台の自動車が進んで出発した。

この様なことが三日間続行された。後になつて分つたが、ジュンハラ(地名)に新しくラーガルが出来、そこで内防処直営の農場を経営することとなつたのであつた。

この外国系収容所の囚人達は殆ど移動し、残留した囚人はわずかに四、五十名程であつて、特に政治犯の中の重罪人を留置したのだつた。

内国系収容所

外国系が移動した直後吾々も監獄内の内国系収容所に移動する事になつた。

私はトムルチン、バリガートに。S顧問、Y顧問、Uさんがゴトルチン、バリガートへ。O顧問は木匠バリガートに、夫々配属が決つた。

前にあつた外国系と内国系との境の柵も取り外され、往来も自由となつた。

私の入つた内国系のトムルチンは外国系の東側にあつて、相当年数の経た、ぼろぼろの泥葺き家屋であつた。

内国系のトウブルクチ(総隊長)が来て私をトムルチンに案内して、效で労役に従う様にと指図した。

私に又一人のバクシイが出来た。アルトナと言ひ入獄以前は自動車の運転手で、一寸自動車のタイヤを横領売却した件で

刑法第一二六条を適応され、六年の刑に処せられていた。彼は革命二十五週年に特赦を受け、三ヶ年減刑され、服役期間を差引けば、後八ヶ月位で満刑となる者であつた。

その外七、八人居たが総べて刑事犯で十年以下の者であつた。

その中のジャンミン、ジャムンは酒の上の傷害罪で刑六年、ロブソンは家畜窃盗罪で刑八年、モンゲン、ツオートルは同じく家畜窃盗罪で刑八年、バトソールは通姦罪で刑三年、シオーナストは国事犯で刑十年であつた。この男はアバタの小男

でオムツト、バートル(綽名)と言われていた。

「註」オムツトバートルとは背が低い為にズボンだけ歩いている様に見えるので、ズボンの英雄と言ふ意。

彼は満洲熱河省翁牛特旗出身の漢人化した蒙古人で、北京の蒙蔵学院を中退後、ウランバートルに商売のため入蒙した者で、投獄される迄在住していた關係上、内国系として取扱われていた。

彼の経歴というのは昭和十二年日支事変直後、外蒙の諜者となり、ウランバートルよりラクダ又は徒歩で、内蒙包頭、厚和等に潜入、情報を内防処に提供した功に依り二年間モスコに印刷技術修得のため派遣され、帰国後ウランバートルの国营印刷工場に勤務していた。

第二次世界大戦の勃発に伴い、内蒙内においては全面的に生活必需品の入手は全く出来なくなり、内蒙の経済は危機に直面した。その当時国营消費組合は総べて配給制度を取つていたが、配給する物が無かつた。彼はうっかり「国营消費組合に行つても配給される物が何もない」と口をすべらかした為に、密告され、国事犯として十年の刑をきるに至つたものであつた。

彼は外蒙国家に対しては、密命を受け包頭迄潜入して功を樹てた者でありながら、一寸口をすべらせた為に十年間労務する身となつた事を、何回も私に話して聞かせた。

彼は労役中よく働いた為、アシリンホーク(仕事の出来ばえにより減刑される日数)を沢山貰ひ、私より一年前に満刑釈放され、ウランバートル市内建設省直轄鉄工場に勤務していた。私は、後に仮釈放となり市民生活中、何回も彼と会う機会があつた。

そのことに付いては市民生活の頃に於て記述することとしたい。内国系は刑事犯と国事犯とに分ける事が出来る。

刑事犯が八割を占め、その中でも窃盗犯が多く、横領犯、賭博犯、詐欺犯、殺傷犯がこれに次ぎ姦通犯、強姦犯等がある。

国事犯では、思想犯、経済犯、流言蜚語犯、宗教犯、怠業犯、等が主なもので、特務犯として投獄されている者は外国系を除けば、極めて僅かであつた。又公共物毀損犯も数える程しかいなかった。

之等の罪人達はお互いに「ホロガイチ」(泥坊)と呼び合つて居る。

綽名は天下御免で、誰がつけたと言うわけがなく、通用した。姓名を呼ぶよりこの方が囚人間に於ては親しみがもてるのだつた。

例えは

「ハラマラガイ、ジャンボル」黒い帽子を何時もかぶっているジャンボル。
「モンゴレン、ダラガア」昔蒙古軍の隊長であつたから。
「ガル・エトマ」物事を針小棒大に吹聴するエトマ。
「ハラ・ダミリン」黒い顔のダミリン。
「オラン・ダンドン」赤い顔のダンドン。
「シヤル・イチンホルラー」黄色い顔又は頭髪のイチンホルラー。
「ノゴン・ドンロツプ」青い目のドンロツプ。
「モホル・ハムル・ダワー」鼻の先が曲つたダワー。
「ハムルグイ・ダンドン」鼻の無いダンドン。
「カザツク・アブガン」カザツク人のアブガン。
「ヤボン・ドルチ」日本人に似ているドルチ。
「オロス・ダワードルチ」ロシア人に似たダワードルチ。
「ケタト・セリヨート」支那人の様なセリヨート。
「ホゲン・ツェンドルチ」ヤクザ者のツェンドルチ。
「バンデイ・シヤムボル」女の代用をする稚子さんのシヤムボル。
「モツ・シヤンミンゾー」ユスリ（強奪者）のシヤンミンゾー。
「サルラカ・アテヤ」サルラカ（牛の一種で尾が太く頸部、腹部に毛の多い家畜）の様なアテヤ。
「ノホイ・ダシ」犬の様に付きそろうて行くダシ。
「ノス・ハンボウ」鼻汁を垂らしている男。
「フーブン・シヤミヤン」女の様な声色のシヤミヤン。
「ガルツオー・ツエリン」気の狂つた様なツエリン。
「ホビルハン・タンビニマ」活仏タンビニマ。
「マアングス・ゴトプ」オバケに出て来る怪物のようなゴトプ。
「イフウ・ハムル」大きな鼻の男。

「シユドウゴイ・ゼセト」齒のないゼセト。
「モヨル・バーボー」昔蒙古軍少佐であつたバーボー。
「サイド・ロブスンダルシヤ」昔大臣代理であつたロブスンダルシヤ。
「ホトラー・ロブスン」何時も嘘を言うロブスン。
「ハツカル・コンプ」片足のコンプ。
「ドルブン・ホロ」四本指の男。
「イフ・トロガイ」大きな頭の男。
数えればきりが無く誰彼となく綽名がつけられているが、この綽名を呼ぶ事に一種の特徴があり、囚人間に於てはある場合誇りにさえ考えられるのだつた。又顔役になつたと自負する点もあつた。
しかし中央監獄教育部長等は之に対し是正教化する様常に注意を与えるが、誰もこれに耳を傾ける囚人は無かつた。
外国系が殆どシユンハラ（内防処直営農場であつたが一九五三年国营農場となる）に移動せしめられてからは、窃盜、強奪は物凄く、少しの油断も出来ない状態になつて来た。

二 旧外国系宿舍の倒壊

外国系がシユンハラに移動せしめられてから、この宿舍は大改造する事になり、床、内部の造作、内外の壁等取り外され始めた。
或る日の午後であつた。物凄いい音に驚き飛び出すと、あつた筈の旧外国系宿舍が、土煙の中に埋まつている。それと馳けつけて様子を聞いて見ると、今迄の中で労役中の木匠達が五、六名生き埋めとなつたらしいが、中に日本人が一人労役していたが生き埋めになつただらうと、喧々号々と怒鳴り合つている。私はそれを聞いて、ヤツ、〇顧問がやられたなあと思ひながらも、何処かにいるかも知れないと思ひ、彼方此方を探すが、土煙りで誰だか少しも分らない。致し方ないから木匠班に行つて見ると、〇顧問が、ぼろぼろの半ズボンとシヤツに細い手足を出して、ギョロギョロ見つけているでは無いか。
「あゝよかつた、無事だつたか、よかつた、よかつた」とかけよる。
〇顧問もホツト溜息をつきながら
「助かりました。もう一足逃げ遅れたら、お陀仏だつた処です。考えればぞつとすると前置きをしながらボツリボツリと、その倒壊から逃げ出すまでの状況を話し出した。
倒壊の直前〇顧問は床板を運びに入つた、処が虫が知らせたものかどうかこの宿舍が傾きつゝある様に感じ、早速床板を

肩にした処、ミリミリと音がし始めたので、床板をほうり出して素早く飛び出した。入口に出るか出ない瞬間にバサリと土砂がかぶさつて来た。その風圧と土煙で、やられたと思う程、附近の状況が皆目分らなかつた。土煙の濛々と立ちこむ中に立ちすくんでいる処を、同囚に助けられて、ここに連れて来られたというのである。

その日は九月一日だつた。関東大震災を思い出し、奇蹟的に助かつた事をお互に祝うのであつた。

外蒙古人四人は行来不明のため、ラーガル事務所からは監獄長外幹部が全員出動で、吾々囚人を指導し、埋没した木材、壁土を掘り起させ、埋没者を探したが、皆目分らない。二日間総動員で漸く掘り出した死骸は、四体積み重ねられて、中央監獄の門を、無造作に出ていつた。この死骸は何処へ運はれて行つたであろう。丁度埃捨場に持つて行かれる様なものだつた。いくら囚人でも職務遂行中の犠牲者である。即日釈放として姓名を発表してもよさそうなものだ、つくづく考えさせられるのであつた。

其の後こゝに新しい家屋が、囚人の手に依つて建てられ、そこに生産部のミシン班と靴加工班が入つて現在迄及んだのである。

三、ブテグル・バリガート(予備隊)

中央監獄外の各所に囚人収容所があり、各々種々の生産部門を経営している。

この経営の労働力が不足する場合は、この予備隊から囚人を派遣し、労働力の補充に当てるのである。

この予備隊は季節に依つて人員が増減した。最高六百名位から最低五十余名と言つように増減が甚しかつた。この予備隊というのは全国から送り込まれる囚人の次の労役先を待つ、準備待合所でもあつた。

一九四六年初めごろから一九四八年迄は、物凄く激増し千名近くになつた事もあつた。

この予備隊の囚人達は、不労囚人である為、食事も二等飯を配給される。彼等予備隊囚人は多勢をたのみとして空腹を癒さん為、強奪、窃盗、賭博、傷害は勿論遂には高い柵を乗り越え逃亡する者さえ出て来るのであつた。

衰弱してどうする事も出来ない者は、獄庭にゴロリゴロリと横たわり、眠つていてもなく、死んでいるのもなく、身動きも出来ない状態に置かれてあつた。これ等の内にはその儘、あの世へ消えて行く者もあつた。又監獄病院に擔ぎ込まれて、息を吹き返す者もあつた。

その当時の監獄内には、野良犬、猫、ねずみ、鳩等食べられる様な物は一つも居なくなつたが、只旺盛を極めたのは、蚤虱、南京虫の三種だけであつた。この為、何度も発疹チブスが流行し、監獄外との連絡は遮断され全中央監獄囚人達は、干した皮革や、雑草をモリモリ食べる事もあつた。

又外国系でジュンハラに移動せしめられず、残留せしめられた者は病人、老人等僅かの者であつたが、時期が経過するに従つて、次々と増加して来た。それは、オノンとかバイントモン等に終戦後内蒙古、滿洲から連行され、そこで日本のスパイとして判決を受け、中央監獄に送監されて来た者及びジュンハラで病氣又は逃亡の疑いのある者として還送せしめられた囚人達で、外国系予備隊に二百名余り収容されていた。

この為中央監獄の庭内は雑草の生えない程、囚人の足で踏みかためられて終つた。

この外国系は監獄と言う味を外蒙に来て、初めて味つた者であるが、内国系は(外蒙古人)自分の国であると言ふ大きな権力を背景としていたので、両者の衝突を来し喧嘩となつたが、何時も負けるのは外国系で、負傷したり、こつびどくたゝきのめされて終ふのであつた。この現象は、同じ蒙古人でありながら、外国系は何時も事ある度に、ヤボン、ヤボン(日本人)と内国系から蔑まれる事から来たものであつた。

この困難など底の囚人生活は、労働力の過剰から生じて来た。一九四五年終戦と同時に日本と関係のあつた者が殆ど外蒙に連行されて来た。即ち内蒙古蒙疆政府蒙軍四千名、日本特務機関及び政府関係の者一千名、滿洲国境警察隊、憲兵隊、興安軍、その他等一千名計六千名余りの蒙古人が新たに加えられ、特にシベリヤ經由ウランバートルに約二万と言ふ日本人捕虜部隊が入つた為に今迄ウランバートルの建築等生産等総ゆる部門に無賃強制労働者として働いていた内国系囚人は必要がなくなり、総べてこの予備隊に掃き捨てられたのである。

外蒙古の経済力は突然の労働力二万六千余名を賄う事が出来ない。又それだけを収容する計画も出来ていなかつた為、只政府としてもソ聯の援助を待つより仕方なく、時の過ぎるのを待つと言ふ状態にあつた。

外蒙古人口八十五万に突然その三%強に相当する二万六千余名の労働力が急増した事は、中央監獄の労働力消化に大なる影響を与えた。

中央監獄に密閉された様に押し込まれた内国系囚人達は、生きんが為に色々の事件を起しその度に関係者が、急造されたチャンガロン(一時監禁)に押し込まれて終うのだつた。一時は三百名もの多数に上り、二ヶ月から六ヶ月に亘る者さえあつた。

これらの監禁者は暗い部屋にただうごめいているのみであつた。彼等は総べて三等飯であつた。この監禁者に対し外の囚人達は、何かと食糧を補給してやるのである、高い塀を黒パンとか黒い粉が飛び越えて彼等の手に渡るのであつた。

内部では賭博が正々堂々で行われ、その結果喧嘩となり、傷害事件を起す。特に奇妙な現象としては、バンデイ(雅児さ

んと言ふ意)を養い、これに依つて性慾を解決する行為が行われる。バンデイになる者は、十八、九才から二十二、三才位の美男子が選ばれる。その主人役は財力の有る者か、囚人の中の顔きき(やくぎ者)がなるのであつた。

彼等は一度自分のバンデイにした場合には、恋人の様に又愛妻の様に可愛がり、自分が食わなくともバンデイに与え、着る物も上等な品物を与える。そして同囚に横領されない様に庇うのであつた。

この為痴情事件が起きて傷害沙汰にもなるのであつた。

バンデイの性行為は今私にもはつきり分らないか、同囚達の話を聞いて見ると、肛門に入れるか、股の間に挟めるかであるらしい。バンデイの上手な男は女よりも具合がよいと言つてゐる。

このバンデイの由来は、外蒙古にラマ教が入つて来て以来の事らしく、ラマ(僧)が女人禁制であつた為性慾解決に、自分の若い弟子僧を利用してゐた事が、今この監獄生活にも持ち込まれ利用されてゐるといふ次第である。

三 日本人収容者が増える。

一九四六年秋頃になつて厚和特務機関員のKさんが投獄されて来た。Kさんは刑期二十五年であつた。Kさんは厚和から日本人救出の為、単独入蒙したが、時期が遅く、遂にソ蒙軍の南下部隊に逮捕され、外蒙内防処未決監に一年近くも収容されてゐた。彼の判決はトスカイシユウホ(特別司法裁判)に依つてなされた。

後になつて分つたがこのトスカイ、シユウホというのは秘密裁判で、内防処の検事が裁判官を代行し、確然と証拠を握れない者に対し、強制的に判決を下す、独裁裁判である。

Kさんは一九四七年初秋の頃肺結核のため獄死して終つた。

Kさんは非常に絵が上手で、仲々達者な面白い絵を書いて、吾々日本人を慰さめてくれた。屋台店のオデン屋、一ぱい飲み屋等の絵は日本の情緒を懐かしめたもので、今も尚目の前に浮かんで来る。

Kさんは靴加工班に就労していたが、ほどなくSさんの外は皆失職して外国系予備隊にいた。Kさんがその宿舎で発病し重態であつた時、私は生産部の仕事の暇を見て見舞に行つたが漸く起きる程度に衰弱してゐた。

私は今日内国系に差し入れがあつて、珍らしくもチョコレートを一、三個懐るに持つていた。というのは、チョコレートは外蒙古人は苦がいと云つて余り喜ばず、私にくれたのだつた。

Kさんも腹が減つてゐたし、糖分などは夢にも思わなかつた処へ、この御馳走であつた。早速チョコレートの紙をはいで口にほろり込み一ろまいなあ一と言言うのだつた。

その当時監獄病院に入院する事は、とても難しい事であつた。熱が三十九度以上もなければ入院は不可能な状態にあつた。

そこでKさんは入院を実現させるため無理して、アルカリ性の生水を監獄内にある井戸から汲み飲んだ為下痢となり、益々衰弱甚だしく、死亡する二、三日前に入院は出来たが、時期は既に遅く、遂に永眠されて終つたのだつた。

Kさんが投獄されてから間もなく、日本軍捕虜部隊の兵隊さん達が、次から次へと入つて来、外国系予備隊や木匠班等にそれぞれ配属されたが、その中の一人Uが私の処に来て、トムルチンに入りたいとの事であつた。私は班長に御願ひして入れて貰い、私の弟子となつた。彼は非常に錠を作るのが上手だつた。瞬く間に上達してノルマー以上の錠を作る成績を上げてくれた。

その中に二十名余りの日本軍捕虜部隊の将校下士官兵が、投獄されて来たが、この人達はホリフの監禁室に入れられていて、昼間だけ生産部の労役に服してゐた。初めは靴加工班に労役し、何時も朝晩整理して行き帰りをしている様は、だらしない外蒙古人に実によい見せしめとなつた。

その後靴加工班も仕事越来越少なくなつた為、製材を行う者、木匠班に入つて樽を作る者、ミシン班に入つて衣服を縫う者などに分れた。

これ等の人達の名前をみんな記憶してゐたが、今となつては殆ど忘れて終つた事を残念に思う。

一九四七年十月の初め、外国系予備隊にいた日本人が、寝具を持つて生産部に集合を命ぜられた。内防処の将校が二人来て、吾々日本人十七、八名の姓名を呼びクラブに集結せしめた。

これはきつと日本に帰れると喜んだ。外国系(内蒙系で日本人と接触のあつた蒙古人)が名残を惜んで、クラブに押しかけお互に別れの言葉を交すのであつた。ところが外蒙古将校は吾々五名に向つて、元の宿舎に帰れと命令した。五人の者は寝具を擔いでスゴスゴとクラブの門を出るより外仕方がなかつた。私は荷物を宿舎にほろり込み、直ぐ引返し同胞達の引き揚げて行く姿を見送つた。彼等は荷物を擔ぎ

「勝つて来るぞと勇しく

誓つて国を出たからは

手柄たてずに死なれよか

進軍ラツパ聞く度に

まぶたに浮ぶ旗の波」

威勢よく軍歌を歌つて監獄の門を出て行つた。その軍歌の余韻が取り残される私の心いつまでもいつまでも響いてゐた。とつぷり暮れたウランバートルの空はさむぎむと冷え渡つて、ぼろだと流れる涙は両頬に冷たく付わり、私はいつ迄も茫然

と立ちつくし、同胞の通り過ぎた後を見つめているのだつた。

頼つていた日本人の殆どが祖国日本に帰つて行つた。吾々五人を見捨てた様に……。

私はY顧問とはよく会つていた。Y顧問は外国系予備隊にいたので、仕事はなく暇であつた為、彼等捕虜部隊の者と何かと話し合いが出来ており、又吾々の名簿とこの人達の名簿を交換して持つていた。頼りになるのはこれだけだつた。

この日本人達が祖国日本に帰つたら、必ず連絡を取つて呉れるに違いないと深く深く願うのであつた。

次の日朝早く起きて生産部で、ヤスチヨウジに居る日本人二十余名の労働に出て来るのを、首を長くして待つたが、遂に現われなかつた。

また私とY顧問は、以前、日本軍捕虜部隊が中央監獄柵の遙か彼方の、チャカンハウラに向つて帰つて行く日本軍捕虜部隊の姿を眺めては楽しんで場所に登つて、その規律正しい行軍を待つたがこれも遂に現れなかつた。

鳴々遂に日本軍部隊も全部引揚げて終つたのか。

四 食 事

一九四九年頃迄食事はごく粗末で、小米、白米などは全々口にしたくも無かつた。只毎日与えられた物は黒麵のジャンホーとハラタルハの配給量だけだつた。

これ等の配給も毎日続く事はなく、たまたま缺食日が続く現状は、吾々身寄りのない日本人にとっては堪えられない程の試練であつた。

皮革を捨つて焼いて食べ、かびたハラタルハを食べ、発酵した糊の御飯を食べ、アカザを取つて来て食べ、骨を捨つて来てハラサーブに入れ汁を出して飲み、食いはしたが範圍の狭い監獄の中では、もう何にも無くなつた。雑草も生えなかつた。

こうなると囚人は生きんが為に、おとなしくはしていなかつた。仕事のサボタージユ、窃盗強奪が物の見事に実行された。銃を持つて警衛して運搬して来る。囚人達の食糧、ハラタルハも二、三百人の囚人が奇襲して強奪する。又家畜の内臓物を貨物自動車に乗せ四、五人の監視付で運搬して来るが、これ等の腹の減つた囚人達の強奪には、どうにも手の下し様がなく、只転手子舞をして声をからして制御するのみであつた。その為に配給の飯は実にお粗末となり、家畜の内臓などほんとうに僅かしか入つてない。ジャンホーをなめるより外なかつた。

これではいけないと言つたので、麻袋に食糧をつめ、一人が之を擔ぎ、その両側に監視が二人棒を持つて警械しながら運搬せねば、無事に納まらなかつた。

少しでも油断すると、後から麻袋を刃物で切り裂いて落ちた食糧を捨つと言ふ強奪も行われた。

一九五〇年頃より食事は欠食が少くなり、又ハラタルハも継続的に配給される様になつた。また内防処未決監の食事より少し量が多く、内臓物も少し多くなつて来た。ハラタルハも四〇〇瓦から六〇〇瓦となつたが、やはり何処かで目方をごまかすものと見え、五〇〇瓦位のも物が配給された。

五〇〇瓦の大きさとしようと誠に小さいものである。外蒙古の黒パンは、量の割合に目方は非常に重い。六〇〇瓦として配給される黒パンは四本指の巾しかない。これが二食分として渡されるのである。

これ丈では一日の労働エネルギーを補給する事は不可能で何時も柵外労働に行く同囚から高い金を出して、食糧を購入せねばならなかつた。

一五、ホゲンホロガイチナル(ナラズ者達)

刑の判決をうけて中央監獄に、投監されて来る者は、内国系は予備隊に、外国系は外国系予備隊にそれぞれ編入され、そこに早くて十日間、遅ければ三ヶ月以上も待機して、各ラーガル(千名位の囚人収容所、監獄単位)各トーチカ(ラーガルの出先収容所小単位二〇名から一〇〇名位)又は各官庁の雑役に廻される。

この予備隊には又各ラーガル、各トーチカ等で事件を起して戻された囚人も多かつた。これ等の囚人にとつては、モルトン(未決監)か、チャンガロン(一時監禁)に入るか、又は外のラーガル、トーチカに廻されるかを待つ待機所である。

なお各アイマツク(地方盟所在地)の地方監獄から移動せしめられた囚人達も又ここに待機せねばならなかつた。

こう言う待機所であるから、一種の娯味をはらんでいた。

特にこの内国系の予備隊は外蒙古のホゲンホロガイチ(ナラズ者)の集団場所でさえあつた。新しく投監されて来た囚人達が、どの位、この予備隊のホゲンホロガイチに脳まされたか分らない。

判決を受け初めて投獄されて来た者及地方監獄から移動せしめられた囚人達が、入つて来るなり、このホゲンホロガイチナルが寄つてたかつて、身ぐるみ強奪して終う。若しも抵抗した場合は、殴られたり、ドスで刺されたり、全く、手に負えない連中であつた。

新囚達は監獄に投監される前に、家族や知人から又は自分自身でととのえた衣類、乳製品、干肉、金銭、貴重品等を大事に持つて来るのであるが、このホゲンホロガイチの襲撃には、またたく間にカプトを脱いで、裸一貫となつて終うのであつた。このホゲンホロガイチはお互いに謀し合つて二、三人が監視に立ち、五人で新囚に迫る方法を探るのである。

先ず第一に寄つてたかるのであるが、若し新囚が素知らぬ顔でもした場合は、たちまちどすが板の間に五、六本突き刺さ

れて、凄文句で威し上げられて終う、新囚達は文句なしに、度肝を抜かれ、持ち物全部をほろり出して終うことになる。

ホゲンホロガイチの中には、言葉巧みに後で金を支払うからと言つて着用して終うのもいる。直ぐチチュル(幹部の当番)に密告し、四、五名のチチュルが馳け付けて来ても、蜘蛛の子を散らした様に何処かに隠れるか、何食わん顔している。又強奪した品物は素早くリレー式に次から次へと廻送され、分らなくなつて終うのであつた。

ある時五千トコロゴ(日本円に換算すると十五万円)位の金円が強奪された。その時は吾々生産部のノルムチン(生産品を作つて居る労務囚)から病院勤務囚迄一個所に集結せしめられ、身体検査と家宅捜査が行われ、五、六時間もねん入りに検査したが、遂に一文の金円も出なかつたことがある。

ホゲンホロガイチには官憲も全く頭が上らないのである。

この様に新囚達は強奪されて丸裸にさせられ、初めてホゲンホロガイチの実態をまざまざと知り、二度と繰返すまいと注意するが、それは不可能の事である。

又差し入れのある内国系(外蒙古人)の囚人達は、これを恐れ、ホゲンホロガイチが訪れて来ると、必ず彼等におじよすを並べ立て、何がしの食糧品、乳製品、煙草、金円等を与える。勿論ホゲンホロガイチは喜んで貰い、絶対にこの囚人の物を窃盗したり強奪はしない。若し他のホゲンホロガイチが強奪したとすれば、強奪した物を探し出して返して呉れるのであつた。若しけんぼろな囚人であつたら、何時か必ず強奪されることを覚悟しなければならなかつた。

この様に強奪、窃盗は囚人につきもので、これが無かつたら外蒙古人達は生きては行かれないであろう。

一九五一年外蒙古革命三十周年記念に当り、特赦が施行された。勿論囚人達全員はこの特赦を待望する。吾々日本人でさえも特赦があるだろうと期待していた。処が蓋を開けたら泥坊丈の特赦で、吾々日本人及外国系として取扱はれている者(殆どは政治犯)及内国系の国事犯には適用されず、全く非観するばかりであつた。外蒙古政府はこの様に反動分子に対しては慎重に警戒して居るのであつた。

特赦を受けた刑事犯は、殆ど釈放、又は減刑された、しかしこの釈放されたホロガイチ達の中には、外部に於て又犯罪を重ね、一週間も経たずに投獄されて来る者もあつた。こういう連中が漸次増加し、二年と経たぬ中に、前と同様な、強奪、窃盗が繰返される到つた。

なお一九五三年春、刑法の一部が改正され死刑が廃止され、総べて二十五年以下の有期刑となつたが、その瞬間、このホゲンホロガイチ達は「ホゲンホロガイチ、マンドドガイ」、「ナラズ者萬才」と呼んだと言う事である。

それから後は人を殺害しても、死刑にならないと自信を得、監獄内に於ては益々刃傷事件が頻発し、内防処ではこれが対

策に困窮していた。

一六 柵外労働囚

朝中央監獄の獄門を出て、ウランバートル市内にある。トーチカ、役所、個人家庭等に臨時雑用に使役され、夕方帰獄するという労役に出来る囚人達は、殆ど内国系で、幹部から相当信頼があるか、幹部に何か経済的に結ばれている者か、又は投監前、相当高官であつた者でなければ許可されない。

特に外国系は、いくら経済的に結ばれていても、仲々許可にはならない。しかし政府から任務を与えられ囚人の動向をスパイする囚人は、特別考慮されるのであつた。

之等の囚人達は外に出て、ノルマーの仕事を早く片づけるか、又は二人以上一諸に仕事する時は、二人のノルマを、一人で責任を以て片付ける、一人は適当に外出し、消費組合又は知人の部落に立ち寄つて、食糧品、日用必需品等を購入し、之を監獄内に夕方持ち帰り、同囚達に割増しの利益を取つて売却するのである。この売却に依つて相当な利益金を上げるのであるから、誰でもこの柵外労働を希望するのである。またこの柵外労働に従事する囚人達は、信用のある囚人であるから、外に出て窃盗行為や、逃亡する恐れが無いので、監視は殆どつかない。附いても送り迎え位の時だけであり、買った物もその監視に分けてやつて、抱き込んで終うのであつた。

外部からの購入品は、沢山は持つて来られなかつたし、また生の物は許可にはならなかつた。しかし要領のよい囚人は、前以つて之等の幹部を買収して終い、黙認的に生肉、野菜、白米、小米、粉等を持ち込む者もあつた。ただし酒だけは厳重であつた為、これを持ち運ぶ者は、特殊な職柄の囚人に限られていた。

この特殊な囚人というのはモンチヨール(電気工)、中央監獄事務所経理科附囚人經理士、病院附の囚人エムサ(医者)囚人トールクチ(総隊長)等であつた。

この内で一番激しく持ち運んで来る者はモンチヨールである。彼は職業柄電柱を昇つたり降りたりするので、修理に事よせ、柵外電柱から柵内電柱に渡り下りて終うので殆ど監視の目は届かない。しかし毎日それも出来ない、その場合は正々堂々と獄門から入つて来るモンチヨールは直屬長官から外出許可証を貰つて持つて居るので、出入りは自由であるが、それだけに監視は充分注意して検査をする。従つて、酒持ち込み方策はモンチヨールの間で深刻に研究された。

一度は、ハラタルハの真中に酒を入れて持つて来たが、監視は之を発見没収して終つた。そしてモンチヨールは遂にその職を追われた上、チャンガロンに入れられて終つた。

並大底な手段方法では酒の持ち込みは困難であつたが、遂に彼等は絶対安全な方法を案出し成功した。

それは自分の畢丸の処にぶら下げる事であつた。監視は検査の手を畢丸迄やることはしなかつた。誰の常識から考えてもそこまでは考へ及ばぬ事であつた。この酒は番小さい瓶で三十三コロゴ（日本貨に換算九百九十円位）大きさはラムネ瓶位であるが丸さはそれより太い、中に半リットル入つていて、その酒の強度は九十九%である。囚人達はこれをボーライアリヒ（乾いた酒）と言つてゐる。この酒を三十陪位にうめて飲むと、丁度蒙古人には手ごるな強度となるのであつた。

酒は色々あつた、チャガンアリヒ（白酒）半リットル二〇コロゴ、五十五コロゴのボーライアリヒ、その他洋酒があるが、高価で囚人達には手が届かなかつた。

ピイチユ（ビール）もあつたが、アルコールの強度が弱い為に全々運び込まれなかつた。この様に食糧品とか酒とかを買ふ金は、いつたい何処から入つて来るか、吾々にとつて長い間の疑問であつたが、次第に次のようなことが分つて来た。それは生産部から生産される製品を囚人から一般人に安く横流しする事、そしてこの横流しの間には、中央監獄の幹部がグルになつてゐる事であつた。

この点に就いては生産部及病院等の項目で後述することとしたい。

五 春とあかざ

ウランバートル中央監獄での春は、誠に待ち遠しい。丁度マイ、ニグ（五月一日）メイデイがやつて来ると囚人達も長い冬期間の重苦しい生活から解放される。又季節労働のため二、三百名の大移動が開始される。それはジュンハラ、ラーガルの農場における播種の為、予備隊、生産部、外国系予備隊等からかり出されるのである。

この時期になると、中央監獄も、生産部、病院を除いては極く僅かな囚人のみとなる、ホゲンホロガイチも僅かになつたので、みんな安心して、今迄着ていた毛皮の重い蒙古服を、軽い蒙古服に着換え、又宿舎も二重窓を取り外して、一重窓とし、目張りもはがされ、風の流通も良くなり、冬期間中の囚人臭が逸散する。

しかし未だ末だ春は遠く時には雪も乱れとど。しかし日当りの良い土を少し掘つて見ると黄色い若芽が出ていて、ほんのちよつとではあるが、春のきざしを感じる。雁もこの頃になると盛に北へ向つて、群をなして飛んで行く。冬の初期十月頃月夜に鳴き鳴き南へ下る淋しさに比ぶれば、この春の雁の訪れは万物に息吹きを与えてくれるかと思われる程である。ましてや、吾々日本人は故郷の春を遠く偲んで、うたた感懐に堪えなかつた。

六月になつても未だ草の芽は地上に出て来ない。海拔一、二〇〇米のウランバートルは、六月の五日頃から急激に草の若芽が萌えて来る。十日頃になると、ウランバートルの南側を流れているトールン河の河向うの山に、ハラモト（落葉松）が一齋に若芽をふき出して来る。この時こそ春らしい気分ひたる事が出来、生き生きとした喜びを味い得るのである。

又踏みかためられた監獄内の庭の角に、雑草が生えて来る。この頃は外蒙に於て一番野菜の欠乏する時期であつて、昨年のジャガ芋もキャベツも葱も殆どなくなる。

毎日のジャンホーに、腐敗しかけた臭のある家畜の内臓物が入つて来る様になると、誰もみんな下痢になつて終う。吾々日本人にとつては、この時期が一番衰弱する時期であつたし、又神経痛の様に足腰が痛み苦しむのだつた。これもみなビタミンの欠乏からであつた。

吾々はこのビタミン欠乏症には、ほとほと困却した。便所の附近に生えている「あかざ」を取つて来、ゆでて食つた。便が真青になつて出て来るが、これを四、五日続けると足腰の痛みも大分減つて来る。蒙古人同囚達は日本人が草を食うと言うので驚異の目を見はつたが、吾々はそんな事に少しも遠慮する事が出来なかつたのである。

彼等蒙古人は絶対に「あかざ」を食わない。「あかざ」を食うものは家畜だけだと考えている。又この「あかざ」は特に便所の附近によく生える為、最も汚ないものと考えている。これは不衛生な「あかざ」に違いない。しかし吾々には、これが外蒙の監獄内に於て最も良いビタミン補給剤あつたのだ。

「あかざ」が延びて来る頃になると、ウランバートルの一般人も夏服に着換え始める。又トールン河の河原に蒙古包（蒙古人の住居でフェルトで出来ていて移動に便利である）が点在し始め、七月の初旬には河原一面が蒙古包で埋められる。そしてここで蒙古人は絨夏（避暑）し、十月中旬頃まで生活するのである。

六 暴風と降雹

ウランバートルの附近は自然林が多い。しかしこの自然林も山の北西部だけにあつて、東南部には見受けられない。この地帯は草も余り生えない。赤肌の土が赤裸々に出ている処が非常に多い。

五月頃になると物凄い季節風がやつて来る。旋風が押し寄せて来る光景は、見事であり、恐しいと言ふ感じである。

私は一九四九年に初めて黄塵萬丈と言ふ言葉を現実を知る事が出来た。今迄、内蒙古や中国で味つて来たものの、この旋風は未だ且つて経験したことのない大規模のものであつた。

この日は蒸し暑く何だか重苦しく就労していても晴々しなかつた。

空模様は、どんより曇つて雨か雪でも降りそうな様子であつた。午後になつてから囚人達は大騒ぎを始めた。外に出ている物を部屋の中に入れるやら、窓は全部雨戸を下し、二重窓は全部閉ざし、隙間のある所にはフェルトを押し当て、この暴風（旋風）の襲来に備えた。

私は大した事は無いと思つてゐた。その中に太陽の光が薄ぼんやりになつて来たかと思ふ間もなく、遙か西の彼方から夕

立の様に糸をたてて押し寄せて来るのが分る。急激に暗くなつて、風が一層強くなつて来た。太陽だけが真赤に見える。囚人達はこの光景を見たさに部屋に入つたり出たりする。その出入の度毎に強風は人間の身体を押し流す様に、吹き込むで来る。しかもそれが波状的にやつて来る、その中に外に出ていた囚人達は悲鳴を挙げて、頭を両手でかゝえながら部屋に飛び込んで来た。その時の部屋に入つて来た風は物凄く、ぐつと息のつまる程であつた。雨戸の割目からは外の模様は一つ全々見えない。どーと押し寄せる旋風（暴風）の風圧と、石つぶての首で何にも分らん様になつて終う。家屋が倒壊しそうに傾く。何とも言えない恐怖心に襲われる。

誰か向うで、「硝子が壊れた。早く毛布を持つて来い」、と怒鳴っているが、何処にどうなつて居るか少しも分らない。誰かが毛布か何かで抑えた様だが、どうともならん様だ。二、三人掛りで漸く強風を押える事が出来様だ。我々の部屋は大きな部屋だつたが黄塵で一ぱいになり、呼吸が非常に困難になつて終う。

外へ出た方が良いと思うが、戸が風圧の物凄いい力に押えられて出る事も出来ない。全く絶望の感さえた。早速あり合せの布で、マスクをしたが、すればする程呼吸困難となるので取りはずして終つた。同囚達も皆無口だ。

こういう状態が峠で旋風（暴風）も立ち去つて行く。よしと言うわけでもみなで戸にぶつかつて外に飛び出した。風は末だ相当強く、天はうす墨で掃いたようにくらく、辺りはうすぼんやりである。後になつて部屋に入つて見たら、寝具の上は砂と土で覆われ、見る影もないのであつた。外蒙古人の同囚達は五、六年に一回は必ずこの様な旋風（暴風）があり、蒙古包、家財道具、小家畜など吹き飛ばされて、何処へ行つたか分らん事があると語つた。

ものの二十分とはかゝらなかつたであらう。

五月頃が一番強風が多く、何時もこの程度より軽いが、それでも外には出ていられないという。

七月の下旬頃になると豪雨と豪電が降る。外蒙古も一番暑いのが七月一ぱいである。八月になると少し朝晩涼味を覚えて来る。この一番暑い時期によく豪雨と豪電が一時にやつてくる。

この豪雨は稲光と雷鳴が一語であり、光り響き渡ると同時に豪雨が糸を通した様に、丁度魚のウロコが光る様に降り注ぐこれが暫くすると急激に温度が降下し豪雨に混じて豪電が白い線を引いて降つて来る。地面はたちまち真白になるが、豪水に押し流されて下方の柵内に山程積み重なつて終う。

降電の時は実に見事で、じつと見つめるのみだつた。

外蒙古囚人達はこの初電を食べると、無病息災で過す事が出来ると言つて一、二粒口にするのだつた。これに入る者は元気な若い囚人なお面白い事は、この豪雨と降電の中で囚人達が真裸体となつて水電浴をする事である。これに入る者は元気な若い囚人

一九、アイラガー（発酵した馬乳）

達であるが別に迷信からというわけではなく、監獄生活の味気なさに一種の好奇心にかられて行つたものであつた。

外蒙古人は一般人であるうと、囚人であろうと乳製品を最も好む、正に飯代りできえある。乳製品も色々あつた。

シヤルドス、これは牛乳を二、三日放置すると表面に脂肪の薄い皮が出来来る。これを集めて煮つめると脂肪だけが分離出来る。これが黄色い油と言うもので、普通蒙古バターと言われるものである。

モルゴ、アルヒー。牛乳を発酵させ蒸溜して取つた酒、第一回の蒸溜した酒は、日本酒と変りは無いが少し臭いがある。

三回位蒸溜すると白酒より強度となる。
チヤガンイテ。黄油を取つたあとのどろどろになつて居る脱脂乳を、布に入れて水分をしぼり出し、それを干したものを言う。

チヤガンドス。牛乳を発酵させ、その儘水分をしぼり出し、チヤガンイテ等を混入し、羊の胃袋に貯蔵する。

ウルム。牛乳を二、三日放置すると脂肪の皮が出来来るその儘長時間に亘りトロ火にかけると厚いウルムが出来来る。これを二つ折にしたものが市場に売られ出されている。

タラガア。牛乳や羊、山羊乳を、木で作つた桶にタラガアの種を少量入れて、掻き混ぜると一晩にしてドロドロのものが出来る。これに炒米や砂糖を入れて食べると実に美味しい。

チーズ。牛乳、羊乳、山羊乳から脂肪を取らずその儘発酵させて水分をしぼり出したもので、桑かくしてお美味しい。マースン・セパレーターで分離して取つた機械製バター。

アイラガア。一石位入る桶にアイラガアの種を少量入れ、そこへ馬乳を傾注して、よく攪伴して一晩ねせると、少し酢ば味のある馬乳が出来来る。これがアイラガアである。馬乳は一日五、六回搾乳し、量も多く、値段も案外安い。

アイラガアは七月初旬にならねば、盛に出廻らない。一番美味しいのは七月から八月迄であらう。
このアイラガアもたまたま生産部に配給され一リットル、一トコロゴ（日本円に換算三十円位）である。

生産部には生産部長の肝入で、一石入れの樽三、四個が自動車に積んで持ち運ばれて来る。生産部のノルムチン（生産に従事している囚人）が沢山購入するので、たちまちの中に売り切れて終う。この生産部の囚人の中にも商売の上手なのがいて沢山購入したアイラガアを予備隊、病院、ホリフ等の囚人達に手数料を取つて売却する者がある。

外蒙古人は囚人として投獄されて来ると、乳製品の欠乏により、体力の消耗甚しく、非常に衰弱する。それ故、乳製品を尊重することは非常なものである。いくら監獄のジャンホーに馴れたと言つても、彼等は乳製品の事を忘れる事が絶対に出来ず

何かと言うと乳製品の事で話に花を咲かせるし、又差し入れの時に、同囚達からチヨツピリ貰つた乳製品を押し載いて、味を含まれるのだつた。

これ等の乳製品は蒙古人の命の糧であるが、現在外蒙古一般牧民達でさえ乳量供出で追い廻され、自分自身の口にも十分入る事を許されない。ましてや囚人達にとつては高嶺の花ともいえるものであつた。

このアイラガは肺結核には最も必要な栄養剤であつたし、又足腰の痛む者にも特効があつた。

元來御祝日の飲み物であり、補給食料であり、さきに述べたように医薬剤であり、栄養剤でもあつた。

女も小供でも好んで飲む。ラーガル事務処でも特別取計らつて、革命記念日七月十一日から十五日迄は外部で売れ残りのアイラガを、囚人達特に生産部囚人達に配給売却して呉れるのである。このアイラガは少しアルコール分を含んでいて吾々の様に全々酒類に接することの無かつた者は真赤になつて酔うのであつた。

私など活仏タンビニマからグリーンシニコに一ぱい貰つて飲んだ時は、足がふらふらして、ノルマーの仕事が出来なく、二、三時間休息を取らねばならぬ事もあつた。

しかし外蒙古人はよく飲んだ。三リツトル位迄は普通で、一番多いのは六リツトルも飲む囚人がいた。彼等は総べて飲んでも平気である、少し朗らかなになる位である。蒙古人は酒に酔うと日本人と同じで、心の中のわだかまりをさらけ出し、大声で騒い歩き、そして監視に見つかつて、チャンガロンにぶち込まれて終う。それであるから囚人には酒が絶対禁止されているわけである。

旧正月とチヨイバルサンの死

外蒙古では旧習にとらわれ、依然として旧正月が盛である。

新正月は形式的に実施され、旧正月が実質的正月と言へるのである。

監獄の中では騎馬に乗つて、ハタツクを持ち、蒙古喫煙草カフヤと蒙古刀を腰にさげ、部落へ挨拶に廻ると言う事は、環境上出来なかつたが、しかし蒙古人囚人達はステイチエイチイ(乳茶)、チャガンボーボ(正月用菓子)、羊頭、羊肉、馬肉、牛肉、乳製品、ポーズ(肉を入れたまんじゅうをふかした物)等をアルミニウムの鍋に入れて、客用に供え旧正月を祝うのであつた。

ソ聯の様式をその儘うけ、又その勢力下にある外蒙の新正月は、警戒が最も嚴重であるが、旧正月は警戒はするけど、余り嚴重でない、その理由は監獄の幹部達も同じく旧正月を楽しみとし、部落を飲み歩き、又昔式な正月の気分を味わい得るから、監獄の警戒も怠り勝ちとなるのである。

それであるから善良な囚人でも、特に親しい間柄の者と、こつそり酒を飲み交す者もあつたし、又バクチを打つて楽しむ者もあつた。

又ラーガル事務所でも映画を見せたり、囚人達にコンツェルト(演芸)を行わせたり、蒙古将棋、ロシヤ式玉突き、蒙古マージャン、トランプ、蒙古角力等をクラブで実施せしめ、囚人達を二日間休養せしめ、楽しませるのであつた。

又ラーガル事務所では一年の総決算として表彰式を挙行する。表彰式には、ラーガリン、オロロクチ、ダラカア、(中央監獄長代理)、オロストリン、ダラガア、(政治部長)、フムウジュルグチ、ダラガア(教化部長)、ウエルトソン、ダラガア、(生産部長)、ナミン、ダラガア、(当監獄支部長)等が参加して行われる。この時にはアシリン、ホノク(仕事の出来ばえに依つて減刑期日が確定された日数。)が発表される事もある。之は三ヶ月づつを一期として発表され、一年に四回ある。詳細に付いては次項に譲ることとしたい。表彰の時には名前が読み上げられ、ステイジに上つて表彰状と、賞品を渡されるのである。特に吾々日本人は蒙古人より仕事の上にも真面目だつたし、生産能力も上廻つていた関係からか、一九五〇年頃からよく表彰に預つた。吾々日本人が表彰状を貰い出ると、講堂の囚人は拍手を以つて迎えて来た。一九五〇年頃から吾々日本人は蒙古人囚人から信頼を得始めた。それは日本人の真価を認め始めたからだ。その証拠としては日本捕虜部隊の蒙古に残した建設の偉大な足跡は、蒙古人の認識を改めさせた大きな原因であると共に又監獄内に於ても吾々日本人の常に変らない、誠実と智能は彼等に相当な信頼感をあたえた。

顧みると吾々が入獄当時から四年間と言うものは、実にみじめな境遇に追い込まれていた。当時は彼等の日本人に対する態度は、極度に悪化していたし、又外蒙古政府自体が常に日本を侵略主義帝国主義と宣伝し教化していた為、実際の日本の姿に接しない彼等は、単に政府の宣伝のみを信じていた。その為には侵略主義帝国主義日本人と、さげすまれ、何時も畜生と同様に追い廻され、ノルマ以外の使役を利用されていた。しかし前記した通り、長い年月が経つに従つて、日本人の真価を認識し、実際日本人は俺達より優秀であると彼等に認めさせた事は大きな収穫であつた。

旧正月には外国系でも内国系でも、吾々日本人を呼んで沢山食べると形式的でなく、本心から薦めてくれるようになったことは、入獄後の四年間に比ぶれば、大きな差異を認める事が出来る。

一九五二年一月二十六日の朝、囚人達は今日から旧正月だと言つて大喜びであつた。処が朝の八時頃突然カンピナート(ウランバートル市にある国営工場)の汽笛が鳴り出したので、仕事でも始めるのかと、誰も不思議に思つていた。処が宣伝用スピーカーから漏れて来る情報に依ると、チヨイバルサン首相、モスコにて賢蔵病手術経過が悪化し、遂に死亡した旨伝えられた。と同時にラーガル事務所から、オロストリン、ダラガア(政治部長)がやつて来て、我々はクラブに集合を命

ぜられた。そしてそこで、チヨイバルサンの死亡が正式に発表された。その時は誰も静まり帰っていたが、最後に発表が終つたと宣言され瞬間、囚人の中で、二、三人拍手を送つた者があつたのには一寸驚かざるを得なかつた。何時も訓示や話した後には必ず拍手を送る習慣がついていて、知らず知らずの中に拍手したのかも知れない。しかしいくら何でも一國の革命の指導者であり首相が死亡したと言うのに、拍手するとは度し難いものが窺われる。

そして旧正月の行事は一切取り止める事になつて終つた。

- (イ) 残念な事をしたとおしむ者 五%
- (ロ) 俺達囚人にはどうでもよいと言う者 三五%
- (ハ) 誰が総理の後継者となるだろうと推察する者四〇%
- (ニ) 死んだと言う事に対し色々他人と話をしない者 一〇%
- (ホ) モスコで殺されたんだらうと噂する者 五%
- (ヘ) チヨイバルサンの革命に依つて俺は囚人となつてゐるんだと怨む者 三%
- (ト) 其他 二%

しかし囚人達は、いくらチヨイバルサン首相の死亡が伝えられても、自分の準備した旧正月の祝いは別であつた。

監視の隙を見計らつて、ポーズを作つたり、祝品を鍋に入れ隠しておいて同囚が来た時に出して食べさせたり、又正月用の着物を着飾つたり、賭博に耽つたり、ロシヤ式玉突に耽つたり、蒙古将棋が行われたり、実に様様であつた。衷章を付けてチヨイバルサンの死を悼む者はほんとに数える程しかなかつた事は、吾々の不思議に思つた一つであつた。

彼等は言い度い事も心の奥に隠して、実際の事を言わない。この重苦しさを解決するものは、何と言つても、自分身の食いたいものを食ひ、娯楽に耽つてゐる事こそ、身の安全と言うのであつた。

三 厳寒とトクトール (釈放証明書)

外蒙古ウランバートルにある中央監獄の冬は今もなお身震いする程である。

中央監獄の宿舍及生産工場等は総べてトク板屋根か泥屋根の平屋造りで、壁も余り厚くなく、七寸位がせきの山である。また窓は二重窓になつてゐるが、硝子の壊れてゐる処はへにや板か布又は紙を貼つて外気の侵入を防いでゐるが、微すかに漏れ入る外気は、厚い氷となり内窓にはりついて、部屋は真暗になるのであつた。

外蒙の宿舍は窓が総べて二重窓であり、一間に一ヶ所しかついてゐない。戸には外部からフェルトを貼りつけ、外気の侵入を防いでゐるが、人の出入りする度毎に、内気が真白になつて外に流れ出す。この光景は丁度汽関車の蒸気をふき出した時の様な状態になるのであつた。

部屋の中は二段になつた床になつていて、その上下に沢山囚人が宿泊してゐる。誰も上段が暖かいので、そこに寝る事を希望するのである。それも皆んなフェルトを二枚重ねた、デビスグル(敷物)を敷いた上に、ノホイポーズ(犬の蛋)の口袋(綿布で袋に作り、その中に囚人が入つて寝ると蚤や、虱や、南京虫に刺されない)に入つて、其の上に薄い支那布団を掛け又その上に毛皮の外套や蒙古服をかけ、隙間から寒氣の入らん様に、確り包んで、頭には毛皮の帽子を冠るか又は外套を頭からかぶつて寝るのである。

部屋の中には大きな壁ペイチカが必ずある。燃料は石炭であるが、一日のノルマーは大きなシヤベルに一ぱいとたき付け用にハラト(落葉松)の割木が四、五本配給される。これが一日の暖房燃料である。

暖房に火を入れるのは官庁工場等は十月からであるが、囚人達は十一月から許される。冷えたノルマーのジャンホーもハラタルハーも総べてこのペイチカの御厄介にならねばならなかつた。ハラタルハーが配給されても、それは固く凍りついてゐる為、ナタやマサカリでたゞき割るのである。その割れたハラタルハーを、このペイチカの側に置くと桑かくなつて食べられるのであつた。しかし注意してゐないと、よく泥坊に遭い欠食させられる事も度々であつた。

朝方はべらぼうに寒く、痛い程で、零下三十度は普通で最高は零下五〇度迄下るのである。囚人達はみんな毛皮の帽子を冠つてゐるが、この毛皮が氷りついて、真白になつて終る。睫毛、眉毛、鼻毛、鼻髭が凍りつき、鼻水はつららとなつてぶるさがるのだつた。

足にはフェルトで作つた(毛で作)た長靴で毛の厚さは三纏位)靴を穿くのであるが、じつとして足と足の指先が凍傷にかゝり、真赤にブヨブヨにはれ上るのであつた。それが為にこのフェルトの靴の上にもう一枚山羊の毛皮で作つた外側靴を穿くのである。これと、身動きは不自由であるが、凍傷にかゝる事はめつたにない。

冬期間のマナー(囚人の中から選ばれて衛門(獄門)を昼夜交替に見廻る者)はこの山羊の毛皮の外側靴を穿き、外套の上から山羊の毛皮で出来ている大外套を着ていなければ勤まらないのである。

囚人達の便所は太いツララの逆立ちの様に、便所の板の間より突き出ている。それに大便や小便所をするので、益々高くなつて終いには便所の外側に野糞をする様になる。この野糞の時こそ冷えて大変である。誰も一分間としやがんでゐる者はない。日本人の様に割合に時間をかけて大便をすると思ふか。男の大事なものが凍傷にかゝるかも知れない。

この様な厳寒にも囚人達は建築の根堀をさせられる。ローム（先の尖った鉄棒）を持つて大地に力一ぱい突き刺すが、カチンと跳ね返るのみで二糶と土中に入らない。鉄棒の先丈が白くなる位である、それでもノルマーの仕事は完遂せねばならない。囚人達は色々工夫して何処からか自動車の古タイヤを捨つて来、それを根堀の処でいぶすと、大地は少し柔かくなつて、十糶位は掘れるけれど、再び元の様にカチンと跳ね返つて来るのである。

厳寒の時は地下一米五〇迄凍つている。私の様に生産部の鉄工班に働く者は、最もつらかつた。それは零下三十度以上になつた鉄棒や鉄板を取扱う為、毛皮の手袋をしていても、鉄棒や鉄板に凍りついてはなれない。間違つて空手でも握つた場合は凍傷にかゝるのは勿論である。

冬はいつも朝八時にならねばほのぼのと明けてこない。午後四時には暗くなつて終る、それで六時に起床で七時から午後六時迄就労である。中間に昼飯時間は一時あるけど、実際は二、三十分で食事を終えて早く就労する、午後七時から一週二、三回、新聞の解説があり、新文字の学習が二回ある、これも一時間文である。この点に付いては次項に於て述べよう。それから後十時就寝迄は殆ど自由である。

冬期間に於て太陽の陽の目を見るのは、仕事申便所の行き帰り位である。

一九五二年十一月二十三日は奇蹟的にも生きのびた私に取つて、一番大きな喜びであり、又苦しんだ出発日であつた。それは外蒙古人民共和国に日本人戦犯として、投獄されて以来七年四ヶ月間北線を越えて労役に従事していた私が思いもよらず仮釈放となつた日であるからである。私は刑期十五年の政治犯であつたのと、日本人と言う肩書が有る為、アジリン、ホノク（仕事の出来ばえに依り減刑される期日）を八年以上貰つていたにもかかわらず果して之が適用されて釈放されるかどうか非常に疑問であつた。しかし思いの外、刑期十五年を超過する事六ヶ月間位にて釈放される事になつたのである。

私はラーガル事務所呼び出されて、初めてラーガル事務所の位置を知る事が出来た。

私を連れて行つたデチュルはラーガル事務所囚人名簿入室に連行し、そこで囚人カードと照し合せ、処置した後、生産部長室で文書にサインした。又総務部長室に入つて其処で同じく文書にサインした。この総務部長はオソルシヤムソと言ひ、私が鉄工班に在る間常に来班し錠を作つて貰ひ度いと懇請した事が度々あつたので、彼は顔見知りの間柄であつた。彼は私に刑期が完全に終つたから釈放する事になつた旨を伝えた。又一般人になつてもよく働く様にと注意した後ラーガレンダラガの所に行けと言つた私は釈放されて監獄から出たら日本に帰して貰えるかどうかと尋ねて見た。彼は「こゝでは監獄から釈放する事で日本に帰す事は分らない。内防処に行つて聞いて見る」との返事だ。帰さないことははつきり分つてゐる。今迄外国系が釈放された内一人だつて帰された事を聞かない、ましてや日本人であるから帰さないに決まつてゐる。

ラーガレンダラガの部屋に行つて見ると不在であつたので、監獄代表（トロロクチ）の所に行つた。そこにはアハムト（大尉）がいて文書を閲覧した後、トクトール（釈放証明書）にサインして渡してくれた。

案内簡単でトクトールが出た。しかし私は刑期よりも六ヶ月以上超過していたにもかゝらず、蒙古人囚より釈放されるのが遅かつた。それは内防処との打合せのため遅れた事は事実である。私は鉄工班の班長に何回も刑期が終つたがどうして釈放されないかと訊いて見たことがある。班長はその度毎に、ラーガル事務所に出頭して調査して来てくれた。それによると前記の如く内防処に御伺いを申し立てゝいたのだつた。

私はトクトールを貰つて、私の班に帰り、同囚達にそれを見せた。同囚達は手に取つて見て、日本人が釈放される事が事実だとすれば、吾々だつて刑期が終れば釈放されるに違ひ無いと確信を得たのだつた。特に日本との関係のあつた、外国系に於ては、なお更の事であつた。この様に政治犯にとつては政府の方針の眞実性に対し常に疑問符を持つていた。私を釈放するに當つて内防処でも相当考慮した事が窺える。

私はトクトールを貰つても前途が真暗闇でどうして生きて行くか思案に耽るのであつた。私は不致取寝具と日用品を纏めながら、どこでこの知人もいないウランバートル市に住めるだろうかと考えさせられた。この吹雪の厳寒に……。

同囚達は集まつて荷物の手伝ひをしてくれる。私はその同囚達に私の必要な物を分けて与えた。彼等が何か貰う事を目的として来ている事は、いなめない。監獄内では少しの雑物でも必要だからだ。

私は荷物が片付いたので出獄する事にした。「早く釈放されて、外で会いましょうバイルタイ（サヨウナラ）」と別れの言葉をかけると、みんなノルマーの仕事の手を休め、戸口に出て見送つてくれるのであつた。

私は長い歳月この生産部で過した事が、何かと心残りして振り返ると、同囚達は「バイルタイ、バイルタイ（サヨウナラサヨウナラ）」と手を振つて見送つていくれ

私はこみ上げて来る感情を押えて「バイルタイ」を呼ぶのだつた。

門衛所に荷物を置いて、生産部炊事班長の顧問、病院勤務の顧問さんに別れの挨拶に行つた。みんな元気よく働いていた。

私は出獄する一週間以上前から、みんなと心残りなく打合せをし、話せる文話し終つていた。何時何処で最後になるかと生き残つて日本に帰つた者が状況を伝える事にしておいた。心残りも少しも無かつた。

「みんな身体を大切に」と固く固く手を握りしめ、口には出さねど熱い熱い血潮が通うのだつた。日本人なればこそである。一脈通じた血潮は高鳴るのだつた。

私共の鉄工班にはバリガンダラガー兼マーシチル（技術者）一人・書記一人・掃除夫一人・ノルムチン二十名。その四名は銀細工、十六名は鉄工に分れていた。

マーシチルには相当な権限が附与されていて相当な幹部も之には頭が上らない。

銀細工は革命以前から、華僑の仕方をその儘真似て行われているもので、蒙古刀、蒙古碗、蒙古馬具、蒙古煙草入、蒙古燧石、蒙古耳飾り、蒙古服のボタン、錠の飾り細工、引き出しの金具細工その他等が行われている。蒙古碗銀細工のノルマーは蒙古碗の大小と細工の如何に依り異なるが、普通三〇％―四五％であつて、熟練した技術因は一日一個仕上げて終る者もあるが、大体銀細工を始めてから二年間位迄は一日一二〇％位のものである。

一日のノルマーは各人とも一〇〇％であるが、時と場合に依つては二〇〇％以上強要される。銀細工製品にも夫々％があつて、ノルマーの軽いものと、加重式になつている困難な物もある。平均すると一日一二〇％が普通である。鉄工班に於ても同様で製作品に依つて夫々％が異なり、又夫々軽重がある。

鉄工班には錠作りが一番多く、蝶ツガイ、引手、釘、机等の金具、紙バサミ、ナイフ、蒙古刀、であるが板金はヒシヤク、バケツ、ストーブ、煙突、樋、蓋ひ、その他であるが、板金の不足の為生産量は少い。ストーブが一番よく売れるが、品不足で需用を満す事が出来ない。このノルマーはストーブに煙突付きで九〇％で、一日では仲々困難な仕事であつた。しかし之に対し売価は三十四トゴロゴであつて闇相場になると一〇〇トゴロゴに上昇する。

錠はこの鉄工班に於て一番生産数量が多く、毎日その製作に追われている。註文品になると売価は一四トゴロゴ、％は一〇〇％である。普通の錠になると売価は一二トゴロゴ、％は七五％である。この錠の註文品を作る様になると漸く一人前である。錠のバネの付け方に依つては簡単に開かないし、又質も良質となる。普通品はノルマーに追われてどうしても多量生産になるので、質は低下し、不良品の続出となる。

この錠を作製する技術も一年以上の経験者でないといふ二個以上は作製出来ない。その為朝七時から、夜八時迄昼食の外は殆ど休息なしに働かねば、一五〇％ノルマーの完成は出来ない状態にあつた。これも皆機械力を利用するのでなく、全く手工業の域を脱していない事が大きな障害となつている。

銀細工の場合でも又は鉄工班の場合でも必ずノルマーを早く完成して、余暇を見て自分個人の製品を作る事に余念がないのである。この余暇に作製された品物は柵外労働囚、ヒノクチ（囚人を監視する幹部）等に内密に売却の労を依託する、これ等の人が信用でもあれば外で売却した金額を直接渡して呉れるが、大抵は弱身につけこんで、半分位の金額や物品をよこすのが、普通であつた。ひどいになると全々口実を設けて着服して終る者すらあつた。

こうやつて苦勞して、現金や物品を得なければ、監獄内では絶対に衣食住に事欠き、生活が出来ない。特に外国系に至つては、差し入れもなく、自分自身を頼りとして行く外に道は無かつたからである。

この横流しにする錠は生産量の五分ノ一に当る多量のものであつた。

この鉄工班でも前記した横流しの件が、幹部の耳に漏れると必ず臨検が行われる。しかし突然の臨検に際しても、囚人は万事心得ていて常時、絶対安全と言ふ隠し場所を作つておき、そこに毎日の余剰分を隠すことが習慣になつている程、臨検に苦しめられていた。

又この臨検者の中にも囚人と内密に結託し横流しの役に當つている者もあるので、どうにもならない。道具箱やタナに、他人から頼まれた補修の錠、ナイフ、キセル等があると没収して終る事もあつた。

この鉄工班にも、生産部から、毎月割当があつて、錠は三〇〇個以上である。之が一年間になると四千個以上に達する。又横流れの錠を加えれば五千個近くに達して終る。

この錠は監獄だけで作つていくのでなく、ウランバートル市を初め、国内の到る処で生産され、その量たるや老大なものと思われ、僅か八十五万と言ふ外蒙古に於て、どうしてこの様な老大な数量が消費されるかは、一つの大きな社会制度の欠陥を物語つてゐる。一人の囚人は必ず一、二個の木箱を持つて居るが、それには必ず錠が下りている。之は誰れをも信頼出来ないからである。又、事務用の机、引き出し、戸に到る迄この錠が一つづつ使われているのであつて、これが監獄内ばかりでなく、官庁を初め一般家庭に於て同様である事を囚人達はよく話して聞かせたものである。この錠に銀細工を施して家庭内の装飾品としてもしていたが、これは極めて僅かな階級者のみに限られていた。

面白い事には大箱マツチよりも大きな錠が作られる、この錠は何処に使用されるかと言ふと倉庫又はヤスチョージの部屋毎に用いられる、このヤスチョージの錠は特別頑丈に造られる、そして簡単に開かない様に工夫して作るのであるが、禁固者達はどんな頑丈な錠を下されても、何時の間にかぶち壊して終るか、開けて終る。その時はホリヘン、ダラガーから鉄工班の者が至急ヤスチョージに出頭を命ぜられ、鉄工達は鉄線、ベンチ、鉄切り鋸を持つて出かける、壊された錠をこの三つの道具で外ずして、部屋の禁固者を解放してやる。これが彼等禁固者にとつては、一つの計画であるから、毎日の様に繰返される。そして又彼等禁固者にとつての食糧運搬の機会となり、又酒の密売のチャンスともなる。それは、小便と大便の悪臭紛々たる禁固室に長くトジ込まれている事が堪えられなくなつて来、僅か一杯の酒を得て陶然となる利那的慰安に駆られるからである。

鉄工班のマーシチルは、ダンビル、ジャソと言ひ、政治犯で内国系であつた。彼は外蒙古人であるが、昭和十七年頃売買

に国境を越えて内蒙古に入つて来た処を、日本の御厄介になり、徳化の未決監に投監されたが無罪釈放され、再び外蒙に帰つた処逮捕され、政治犯として二十五年の判決を受けたのであつた。彼は非常に親日家で、よく私の面倒を見てくれた。病気の時などノルマーを納めた様に記載してくれたし、日用物資も恵んでくれた。私の仮釈放が早かつたのも彼の力が大きかつた。彼は一面非常に賭博が好きであつた、彼の宿舎は鉄工班内にあつて、何時も幹部の行動を探つて、今日は何時から何時迄絶対に来ないと見定めると、内国系有力者を狩り集めて来て、賭博に耽るのであつた。

又相当上の幹部でも彼の賭博する事を知つていても逮捕する事が出来なかつた。というのは、幹部が彼から、貴重な銀細工製品を作つて貰い又は何かのやりくりで無償で作つて貰つてゐる弱身を握られてゐるからである。同様に鉄工班にも殆ど幹部が厄介になつてゐる。日用器具の補修と製品は必ずマーシチルの許可のもとに作らねばならないだけに、権限は偉大なものがあつた。彼の主張は良く幹部に通じ、彼も又幹部に要領よく立廻つてゐた。

彼の部屋に私が行くと何時も、活仏ダンビニマと蒙古将棋をやつてゐた、このダンビニマは中々エピソードのある男であつた。彼は、外蒙のホビルハン（活仏）であつた。一九二四年に外蒙革命党が政權を握ると共に、王侯寺廟の財産を没収し且つラマ僧に対し徹底的弾圧が加えられた。活仏ダンビニマの身辺にも、危険が迫りつゝあつた。彼は非常に上手な予言者であつた為、遊牧民の信頼は絶大なものであつた。しかし革命党は人民を迷わす大敵であるとし、逮捕命令が出た、彼はそれを予知して姿をくらまし、行末が全々分らなく、その儘になつてゐた。一九三六年ソ蒙互助条約が締結されるに当り、再び峻烈な検査が行われ初め、彼の身辺にも危険が刻々と迫つて来るのが感ぜられ、遂に二頭の馬を馳つて、国境を突破する事になり、部落に泊した、それを知つた革命軍は部落に迫つて来た、吹雪の吹き荒ぶ曉方であつた、活仏ダンビニマは逸早くそれを知り、薄暗い吹雪の中を、煙をまいた様に後をくらまして終つた、その当時彼は三十八才であつた。又同囚達も面白おかしく「お前は魔術を使つて、煙の様に国境を越えて逃げたんだらう」なんて言つたと、彼は「そんな事はないけれどあの時は死ぬか生きるかだつたから一生懸命だつた、又若かつたしな、元氣があつて無茶だつたからなあ」と笑つて答えてゐた。彼は国境を突破して以来内蒙古に住み、錫林格爾盟、察哈爾盟を転々とし、一九四五年の終戦当時、察哈爾盟廂国旗に於て、ソ蒙軍に逮捕され、外蒙ウランバートル中央監獄に刑二十五年として服役する事になつたのであつた。

こう言うエピソードをもつ活仏ダンビニマは鉄工班の掃除夫として就労してゐたので、マーシチルとは、非常に意気統合して、マーシチルと同宿してゐた。

この二人は私が行くと何時もこつそり真面目な顔付で、「日本は何うだ？ 米国の勢力はソ聯の勢力に比べて強いだらう？ 蔣介石が台湾に居るが中共は何時攻撃して来るだらう？ 新聞では北鮮が勝つたと言つてゐるが、米国は飛行機が沢山

あるのだから負けたと言ふのはどうもおかしい、ソ聯に原爆と同じものが出来たと言ふが本当か？」と質問する。彼等も常に共産主義の弾圧と峻烈な摘発を身に受けてゐるので、そのウツプンを日本人の私にだけさらけ出すのであつた。

この鉄工班には外国系囚人が多かつた。其の理由はマーシチルが政治犯として、外国系の政治犯と系統を一にしていた事が一番大きかつた。又、知人もない差入れもない外国系はよく働いた。又よくマーシチルの言を聞いた、それだけに彼は外国系を信頼し、面倒を見ていたのであつた。

彼は一九五四年マーシチルをやめさせられ、煉瓦工場の一バリガーテンダラガーとして転属させられた、理由は一つの事件があつた。銀細工の銀量が帳簿上足りない、それは、政府の行つた中央監獄に対する監査の際二疋の銀が何処へ行つたのか分らないと言ふ事が露見し、大問題となり、摘発究明されたからであつた。銀細工の囚人達は銀の持ち合を、全部彼に提供し、彼も自分の家から銀碗や銀を持つて来て埋合せたが、大量の銀には達しなかつた、政府は究明に究明を重ねるに従つて経理部長が先ず第一にあげられ、オロクチダラガー。ライガレンダラガーがあげられた。其の後又生産部長があげられて終つた。これ等の者が夫々中央監獄の生産品、原料、銀細工等を横領してゐる事が露見した。

ライガレン、ダラガー以下三名が徴戒免職、生産部長が十年の有期刑となり、マーシチルは転属となつた、そして中央監獄幹部の大改革が行われて、只残つたのは監視部長ソノムスルン一人だけとなつた。

三、木匠班

木匠班にはマーシチルと書記が各一名いて、木工と塗装工とに別れてゐた。

木工には樽机、腰掛、箱、家具、馬具、蒙古包一斉、建築材料の加工、等で就労囚が十二、三名であつた。

塗装工は木工で製作された物の塗装と、蒙古将棋、蒙古ダム、等の楽器の製作と塗装であつた。木匠班のマーシチルは元蒙古空軍将校で、ソ聯に留学し飛行技術を修得した最初の者であつた。年令は四十才位であつたが、非常に気取りやで、幹部の前に行く調子よく立ち廻る男であつた。刑は十五年で国事犯であつた。この班には華僑が三人居り主に賭博犯で六、七年の軽刑者であつた。この華僑が木工の技術方面をリードして、蒙古人囚に教えてゐた、その他の者は外国系で政治犯であつた。木匠のノルマーも相当重く、暇のある者はなく、夜遅く迄働き通しであつた。

それでも彼等にも別途収入があつた、それは白樺でパイプを作る事であつたし、又囚人達に小箱を作つてやる事であつた。塗装工は三人いた、一人はジャムボル。チイルトム、ジャムソと言ふ長い名前の男で以前はホビルハン（活仏）西蔵人であつた。

彼は錫林格爾盟に居住してゐて、日本特務機関と関係があり、政治犯として刑十五年を受けてゐた。彼は技術が良く、

セルロイドで色々のマドロスパイプを作っていたし又、蒙古将棋を彫刻する事が上手であつた為、アシリンホノクを沢山貰い減刑され、一九五三年釈放となり、ウランバートル市建設省の木工部に勤めていた。

もう一人は内蒙巴彦託拉盟の蒙古人で、ジャンソオンと言つて、やはり日本の政治犯で刑十年を受けていた。

彼は藤縄部隊の出身で、蒙疆政府の興蒙委員会教育処に勤務中、終戦となつて故郷に帰り、自分の希望で外蒙に来て暫く建築労働者として働いている中、師範学校に入学二年生の時前歴がばれて逮捕となつたものである、逮捕の状況は一九五一年冬の事であつた、学校の放課後スケートに行つて、夕方遅くなつて帰つて来た、そこへ突然私服の刑事が来て、逮捕状を差し出し同行を求められた。彼は内心来ななと思ひながらも、日用品と寝具を持つて同行した処、待たしてあつた自動車に乗せられ、内防処の未決に收容された、收容期間僅か三ヶ月にて判決を受けたとの事であつた。

彼は一九五四年外蒙から中共に移管され厚和中央監獄に、一班長として就労している。この様に生産部にいる者は、政治犯か、国事犯でそれも、日本と深い関係のある者ばかりであつた。

三、靴加工班

靴加工班にはマインシル一人で書記も兼ねていた。このマインシルは日本和歌山県師範に満洲留学生として二年勉学した男であつた、終戦前四月ハイラルに帰つていた、終戦となつて彼は家にいたが、ホロンバイル自治政府が成立するに當つて政府の命に依り、外蒙ウランバートル党大学に留学生として派遣された、彼は又在学中前歴がばれて、政治犯となり刑二十年を受ける身となつた。

彼はマインシル兼書記を兼ねていた為、材料及製品を思う様に動かす事が出来た、そのため囚人とは思われぬような衣食住であつた為、囚人達にねたまれ、遂に密告され、靴の横流し等に依つて、アムゴロンのチャンガロンに收容される事になつて終つた。一九五四年中共に移管され、厚和の中央監獄に労役している。

靴加工班は主に長靴の加工であるが、又労働者用の短靴、馬具、カバン等も作つている、就労囚は七、八名であつて絶えず移動が激しかつた。

長靴の%は一足一二%であるが、一日に一足は出来兼ねる。これにも註文品とノルムとの二種類であるが、このノルムは夜遅く迄やると一足半仕上げる人もあつた、彼等もノルマーの靴ばかり作つてはられない、結局生活の為に、囚人達の靴を修理したりして、臨時収入を得て、生活を保持するのである。

何を言つても日常穿いている靴は、必ず修理せねばならぬ時期が来る。それが何百人と言う囚人のいる中央監獄に於ては修理を頼まれるのが当然であつた。

ある時この事を幹部に密告する者があつて、一斉臨検が行われた。その結果修理の靴が出てくるわ出てくるわ、誰も二、三足は持つているのだつた、又新品らしい長靴も隠されていた。之れ等は全部没収と決まつて、事務所に引き上げられた。いつたいこんな突然の臨検があるとは彼等も殆ど思つていない時だつたので、総べてが上げられて終つたのである。彼等は一週間のチャンガロンに入れられ、なおその一期のアジリンホノクは遂に無効になつて終つた。しかし、只一人密告した者が残つたが、彼は同囚にはその後頭が上らなかつた。直ぐ中央監獄外のチャカンハウラ收容所に転属されて終つたのである。

四、ミシン班

ミシン班には相当数の就労者がいた。マインシル、書記各一名で、裁断係りと縫工とに分れていた。

ミシン班では、マイハン(蒙古天幕)シャツズボン下、特に幹部の夏冬用服、労働服その他を作つていた。

このミシン班はノルマーは非常によく、普通の人でも一五%を越していた。

このマインシルは外蒙古人であるが、国境を越えて内蒙に入つた為、日本特務機関の厄介になつていた男で、ヤボン(日本)ダンドルと皆なから言われていた。

彼は一九四一年頃、日本特務機関に厄介になつている際、故郷恋しさに、再び外蒙に逃げ帰つた処逮捕され、政治犯として刑二十五年を受けていた。

彼も蒙古文字を知らぬ為、綿布類の員数が足りなく、何回も弁償して無事に収まつた。それであるから、彼の囚人積立金は殆どない位であつた。

彼もやはり親日的で、私がノホイボーズの口袋がなく、困却している際、彼は白い綿布五米も持つて来て呉れた。私はその御蔭で、ノミ、シラミ、南京虫、に食われないうで済む事が出来た。

この様に彼は気前よく、氣に入つた者に与えるので、いつも検査の時不足しているのであつた。彼の部下は殆ど日本の政治犯で、アテヤ、ジャンソオン、モンゴレンダラガー、スルバートルホ等みんな十五年以上二十五年迄であつた、その外の者も同じであつた。

一九五三年からS顧問もこゝでミシンを踏む事になつて、懸命に働いていた。

又、特殊な者としてはユダヤ人がいた、彼は張家口で喫茶店を経営していた者で、終戦と同時に、外蒙に連行されたが一般社会人として、ウランバートルに市第五協同手工業組合に勤めていた処、衣類の横領で四年の刑期を受けて入つた者である。

ミン班の勞務者達は、シャツ、ズボン下、服、衣類等の補修又は製品を作つて売却し、臨時収入を得ていた、生産部で臨時収入の多かつたのはミン班と鉄工班であつた、彼等は毎日ノルマーのジャンホーを食べないで、自分で食事を作ると言う、全く囚人の羨望の的であつた。

茲に問題になる者が一人いた。スルバトルホと言つて、内蒙錫林格爾盟アバカの蒙古人であつた、彼も日本特務機關の要員であつた關係上十五年の刑を受けていた。

彼は非常に器用な男で、ミン班の修理、裁断時計修理、ラジオ修理、マドロスパイプ作り等、総ゆる物を修理したり、作つたりしていた為、幹部との間柄が密接に結ばれ、いつも監獄事務所又はグループに出入りしていた。その為囚人間に於ては誠に忌避される存在となつて終つた。それは囚人中の囚人スパイであると思われたからである。

彼は亦よく女囚收容所に出かけ、ミン班の修理もやつていた關係から、女囚達には飢へた狼の前の羊の様な存在でもあつて、常に女囚との話題がつきなかつた。

一九四九年迄は女囚收容所は、中央監獄内にあつた、その当時の男女囚は一種の野獸の寄り集りとも言えたであろう。この頃に付いては後項に於て記述する。

五 ジュウタン班

ジュウタン班には、マインチル、バリガテンダラガー、書記各一名がいた、新設されたばかりで、その内容は詳細に分らない。ジュウタン織工係と染色係とに分れていた。織工係には織工が五、六十名就労していて、この班のノルマーは全く悪く何時も一〇〇%を出る者は僅かであつた。

彼等はいつも生活に追われ、ハラタルハーを探し求め歩いていた。

染色係には三名の就労者がいて、こゝでは化学薬品を使用していたので、医者の証明により牛乳の配給を受けていた。

ジュウタン班に奇妙な現象が現われて来た。それは牧畜を主体とした内蒙であるのに、羊毛、山羊毛が不足して純毛ジュウタンを作る事が出来ない状態となつて来た。そしてその代りにウランバートル市内各消費組合より、梱包用の綿布を掻き集め、之を一本一本ほいて、二重により重ね、それを染めて、ジュウタンに織るのであつた。この綿糸から作られるジュウタンは、値段が安かつたが、それでも蒙古人の購買力はなく、倉庫に製品が山程積み重ねられていた、染色係にはノスハンボー(鼻汁をたらず男)バアツホ、と言う錫林格爾盟の男がいた、彼は終戦当時、国境警備隊員として、下士官であつた、彼は非常に短気者で、何時も内国系蒙古人と喧嘩をして、大いに外国系の氣勢を挙げていた。彼は内蒙に連れてこられ、バインリモンで一般人建築勞務者として働いている中に内蒙に逃亡、内蒙旗公署で中共に逮捕され後ウランバートルに護送さ

れ二十五年の刑を受けたものであつた。彼がなぜ内国系と喧嘩するのかと言ふと、全く内国系が外国系に対し、何時もヤボン、ヤボンとさげすむのに反撥し喧嘩となつて終ふのであつた。

彼は又囚人中の囚人スパイであつた。彼は何時も一週間の内の決められた日に必ずグループに出頭した。彼は私にだけ内密に話があると言つて、自分は任務を持つている事を素直に話して聞かせた。そしてこんな事も告げた。

グループには内防処の情報係長がいて、囚人間の情報を探ぐる為、一部の囚人に任務を与えているのだと言ふ事だつた。その任務の種類は思想、政治問題、反動分子の策動、窃盗等が主であるが、その他監獄内に於ける全般に亘る事件等も含まれていたので、そして必ず割当があつて、行く度に何か情報を提供せねばならぬ事も話して聞かしてくれた。この様に任務を持つていたので、彼の言動は相当大まかだつた。又内国系も感ずいていたものである。その為には一寸手が出なかつた事もうなづけるのであつた。

しかし彼は日本人の吾々に対しては、絶対に信頼して、吾々の言動を密告する様な事は全々ないのであつた。

彼は何時も私に、肉のウドンを作つた時には必ず呼びに来て、食べるをすすめてくれるのであつた。

彼は亦銀細工、時計修理、義歯入れ等の特殊技能を持つていたので、幹部の内女の義歯入れのため、よく幹部に連れられ柵外に出て行く事があつた為、生活は非常に楽であつた。

ジュウタン織係には一人の両性者がいて、女にもなれば、男にもなると言ふ変り種で、何時も囚人間の話題となり、悲喜こもごもの話題が尽きなかつた。この件に付いては後項に譲る。

六 泥匠班

泥匠班にはマインチルが一人で、書記もいなかつた。彼等は総べて華僑であつた。政治犯の者は少く僅か二、三人位しかいなかつた。この泥匠班の華僑達は、自分の家を持ち、蒙古婦人との間に子供迄設けている。五〇才以上の老年輩者のみである、華僑の詳細に付いてはウランバートル市民生活の項に於て記述することと致したい。彼等は中央監獄内の家屋修理は勿論、出先收容所の修理又は一般人の家屋修理、官庁方面の小修理等に當つていて、彼等は中央監獄から外の仕事に出ると、必ず物資を購入して、之を囚人間に売り捌くのであつた、その上彼等には差し入れがあるので、何一つ不足なく服役していた。

彼等華僑は年令にも拘らず、仕事をよくした、特に泥匠の仕事は彼等の独占場である為、成績の良いのになると、六〇〇%以上になる者もあつた。

彼等の物凄いアシリンホノク申請のときは、内防処でも細密に審査して判定を下すのであるが、確乎たる証拠が握れない

ので三分の一に削減されて終うのであった。この様な削減が行われると、生産部全部門に亘つて、削減される様になつて終つた、それは私が一九五二年の第三期に於てアジリンホノクを貰つた時は、削減する事は無かつたが、その第四期から突然なくなつてしまひ、囚人の中には予定していたアジリンホノクも来ないので、更らに一期遅れて釈放された者もあつた。

七、生産部のマナー（門番）

外から生産部に入る入口は唯一つで、そこにはマナー（門衛）がいた、彼はドルチ王と言つて三十六、七才の男であつた。彼が門番として来たのは一九五一年で、生産部ノルムチンの外は絶対に入場をさせなかつた、又幹部も生産部長の認可証を持参しなければいけない様な、頑固一徹の男であつた、彼は口を割つた事から、国事犯として刑七年を受けていた。

彼の出身は錫林格爾盟の西ウチムチンの王候である。彼はノモンハン事件の際、ソ聯機が管内の泥濘に不時着した、その時旗民を狩り集め、ソ聯機を泥濘より引き出し、再び逃してやつた、その件が日本軍に後になつてから分つたために張家口の興蒙学院に学生として籍を置かせ、半監視的注意人物とされていた。終戦当時は自分の旗に帰つて、馬群を友とし遊牧をして暮らしていた、其の当時の旗の行政は台吉（姓名忘却に残念）が當つていた為、終戦と同時に日本と深い関係にある理由を以てソ蒙軍に逮捕され政治犯として刑二十年を言い渡され、外国系收容所で七十余才になるうとする老後を、細々と送つていたが、一九五四年中共に移管され、厚和中央監獄で労役に従事している。なお彼の息子も父親と行動を共にして、やはり厚和中央監獄に労役している。彼の老人は何時日本も良かつた事を話し、日本特務機関の麻生（蒙古名メートルバクシイ）を良く知つており、その人達の思ひ出話しをして聞かせるのであつた。

一方ドルチ王は終戦と共に、自分の部下二〇〇戸を集結し、外蒙と交渉の結果、スフバートルアイマツクに移住して、外蒙古人の籍に入つたのである。

この老人台吉とドルチ王とは親戚の間柄であるが、非常に仲が悪く、老台吉に慰さめの言葉もいたわりの言葉もなく、またドルチ王は差し入れが有つても絶対に老人に与える事をしない、吝嗇の男であつた。

このドルチ王が外蒙に移住して来て、一つのソム（佐）を作つてその長になつた。処が錫林格爾盟から移住して来た当時は家畜の数は膨大なもので、外蒙古一の富裕ソムと言はれていた。しかし年が過ぎるに従つて、社会主義教育と、供出に全くまいつて終い、僅か「社会教育がうるさい」とか、「供出物が多すぎる」とかを言つた為、に国事犯として七年の刑に処せられ、一九五一年バイントモンから中央監獄に護送されて来たのであつた。

彼には又一つの疑問事があつた。彼は内蒙古在住中、外蒙古のスバイと連絡があつた。その外蒙古スバイが現在中央監獄で二十五年の刑を貰つて服役中でミシン班に労役しているのであつた。実はこの外蒙古スバイは日本のスバイでもあつた。

即ち両テンビンかけ持ちであつた為、終戦と同時に露見し政治犯として刑を受けたのだつた。このスバイがドルチ王の前歴を密告している様子が、判然と窺われ、ドルチ王とスバイが、度々グループ情報係室に呼び出されて行くのを、吾々は目と耳で知る事が出来た。

この様な吝嗇で、融通のきかないドルチ王は誰にもきらわれ特にホゲンホロガイチのねらう処となり、彼の持つていた木箱は、何時の間にか盗まれ、空となつて便所に捨てられていたのであつた。

彼は一度被害に遭つたので、益々細心の警戒を払い、木箱及寝具等を染色係のノスハンポー、バアツホに預けた。しかし之も総べて盗まれて終い、どうにも手の下し様が無くなつて終つた、彼は全く裸一貫となる状態に迫られた、しかし彼の妻は良く再三、スフバートル、アイマツクから、ウランバートル迄出て来て、ドルチ王に差し入れて呉れるのであつた。

かくしてドルチ王は生きのびていたのであつた。

八、イカダ揚げ

一九五〇年七月であつた。吾々の鉄工班は、私を除く外は全員イカダ揚げに行く事になつた。之は九月一ばいからとの事であつた。私は一人で留守をしている事がたまらなく、退屈で致し方ない、それで班長ダンビル・ジャムソに懇請した処「よし何とかする日本人と言う事でなく、蒙古人としてごまかして行く様にする」と受け合つてくれた。

次の日から私も同囚達の中に入つて行つた、中門で員数調べと点呼があつたが、私の名前が「よしと」で通つて終つた、しかし外門の監視は持ち物を検査した、私はただハラタルハーを持つていただけだったので、簡単に出門する事が出来た。私は投獄されてから、この柵を出たのは、何回もあつたがそれは清掃班にいた時代、車を押して塵埃を捨てるため出た以外には無かつた、あの当時の苦しかつた事を考えると、今の出門の機会を得た事は、何となく氣持が晴々として、身も心も軽快になるのだつた。

監視人は蒙古軍中尉のガルツオ、ツェリン、と言う一風変わった人であつた、彼は氣が狂つた様な振まいをするので、ガルツオと言われていた。彼は又蒙古革命軍創設当時の遊撃手隊員三八六名中の生存者の一人であつた。彼は新聞を読む事も出来ないのであつた。又新文字も勉強中であつたが、年令が年令だったので、覚えも悪いらしく、わけの分らん字を書いていたが、只革命軍創設と同時に遊撃手隊に参加し革命遂行の功労者であり、真面目であつた為、最近少尉から中尉に昇格したばかりであつた。彼は酒が好きで俸給の大部分は酒で消費して終つて、只一人の妻がいるが財産としての家畜もなければ、蒙古包もなかつた位、困窮した生活をしていた。

私共は彼に連れられ、木工場の側を通り、ソ聯囚人收容所西側の監視楼下を通り抜、変電所の川に休息する事になつ

た。其の辺はジュウタンを敷いた様に青草が生えていた、吾々はその上に寝ころんで休んだ、初めて青草の上におころんでみると、青草の香りはブンブンと鼻をついて、何とも言えない、スガスガシイ気分になるのであつた。長年にわたる小便臭い監獄の体臭は、何処かへ行つて終つた様に、さつぱりするのであつた。

この辺からトレン河迄はほど遠く、河原となつて、処どころに水たまりやら小川らしい湿地もあるのであつた。トレン河の附近に行くと蒙古包が移転して来たばかりらしく、荷物も外に出してある処もあつたし、又家畜を飼つてゐるらしく牛糞がふみかためられてゐるのもあつた、又仔羊や仔山羊二、三頭が庭先にながれてゐる処もあつた又ある処では仔牛や、仔サルラカが一語になつて草を食つてゐるのもあつた、しかし大家畜は何処に行つてゐるのか、自分の目には見当らなかつた、相当遠い処迄放牧に行つてゐるのかも考えられた、が仔羊仔牛の頭数から割り出しても大家畜の頭数は小數なものとしか考えられなかつた。

右手に大きな建物が有つた。之が党大学である。その西南方にゴリンツェンゲルがあつた。河の向う側の小高い山には、「スターリン・マンドドガイ」と山一ぱいに石灰で書いてあつた、これが監獄からはよく見えて、側で見ると仲々大きいのは驚ろいた。

イカダ揚場に入つて見ると、材木は陸揚げされ山と積まれていた、その山が二棟半あつた吾々はハラタルハーをその山の材木の間に入れて猿又一つになつて、イカダ引揚に取りかかるのであつた。

イカダ引き揚げ場は、この辺一体に亘つていた、吾々の場所は丁度中間にあつていて、河下の方には橋が見え、イカダはその下をくぐつて行くのもあつた。その橋の西北に昔のラマ廟が見える、之は博物館になつてゐる、その西側に外蒙で一番大きな、カンピナートが三本の煙突を突きたててゐる。

吾々の作業は河岸に撃かれてゐる三組のイカダの陸揚げであつた。薪炭になる材木は長さ三米で、太さは直径一米もある様なものもあれば、二十糎位の細いのもあつた、大体に於て三、四十糎位の太いものばかりであつた。

又長さ十米以上もある建築用材もあるのだつたこれは四人掛りで担いで運び出すのであつた、薪炭用の木材は殆ど二人で担いで運ぶのであるが、私はどうしても腰がたゞず困却してゐると、マーシチルがお前は病氣上りだから、自分で運べる様なものから運べと言つてくれたので助かつた。

これ等の材木は総べてハラムト（落葉松）で相当年数のたつたものである、みんな自然林との事である。トレン河上流十五糎位の処から二日ばかりで下つて来るとの事であつた、普通イカダは五通りが一組になつていて総べてが、十八番線で結ばれ連ねてあつた。

巾は五、六米以上で長さはそれでも二十米近かつた。河巾は広い処で五〇米、狭い所でも三〇米あつて、ほぼ真中を下つて来るのであつた。

私は水に入つたり出たりしたので、関節が痛くなり帰りには、どんなに難儀したか分らなかつた。

門衛所に行くと一人づゝ身体検査された後、個名点呼した。そして吾々は中門を素通りして入ると、監獄の小便臭い臭が鼻について来る、みんな予備收容所の囚人達はバスケット、ボールを楽しんでゐたが、私は疲れた身体を宿舎に横たえるのであつた。

それから後毎日の様にイカダ揚げに出かけた、雨の日もかまわず引揚げが行われた。

暫くすると自分でも分る様に日に焼け丈夫になつた、私は昼休みに必ず五分か十分間水浴する事にしていた。足の関節が痛かつたのもいつの間にか癒つて終つたし、一昨年大病して未だ充分でなかつた、胸痛や腰痛も殆ど痛みを感じなくなり、又、頸部の淋腺も腫れていたが、これも無い位にひつこんで終つた、こんなに丈夫になつた事は初めてだつた、Y顧問もイカダ揚げに行きたいと希望したけれど、生産部の者でない為許されなかつた。或る日の事だつた、私は何時も通り昼休みに水浴していた、処へ監視のガルツオ、ツェリンが来て水浴し初めた、彼は全々泳ぐ事を知らない、彼は私をつかまえて、「お前は泳ぐ事が出来るか」と話しかけた、俺は「少しは出来るが余り上手じゃない」と答えた。

「ほう泳げるのかい、それでは泳いで見る」と言うのだつた。

私はためらつた、泳いだ事は小学校の時位でその後は水に入つた事もなかつた、考えて見ると二十五、六年は過ぎてゐるその上監獄の中で大病をやつたばかりである、何だか自信がなく恐怖心に襲われるのだつた、それで毎日水浴位で済ましていたのだ。

私が考へ込んでゐるので、益々中尉は意気込むで、「お前は日本人だそうではないか、日本人は水泳が世界一だと言うが本当か」

私はこの中尉がどうして日本が水泳において世界的である事を知つたか不思議に思うと共に、祖国日本の夏の情景を思い出し、今頃は何時でもカップが泳いでゐる、子供時代のあの事、この事が思い浮かんで来るのであつた。

「俺は年を取つて終つてゐるから泳ぐ事が出来るか、非常に疑問だ、良く考えて明日泳ぐ事にしよう」と言うとな彼の中尉もそれもそうだと言つて水浴から出て行つた。

明日は必ず泳がねばなるまい、その準備にトレン河の流れと深さとを知つて置く事が必要と思ひ、思い切つて河を渡る事にした。

河底は石がごろごろしている、流れは非常に激しい、足の裏が掘れる様になつて、流れ易い、真中迄行つたら胸の中程迄迄ある、この位だつたら浮かんでいるだけで、大丈夫だと自信が持てた、河向うに渡つて暫く休んだ後、再びもとの位置に帰る途中、足をけつて泳いで見た、流れが激しいので、泳ぐより流される方が多い位だ、暫く泳いで行くと、泳ぐ手が川底に届いて終つた、ひよいと見ると二〇〇米も流されている、みんなが川下の自分の方に馳けて来る、私が河岸に上ると監視の中尉が馳け寄つて来て、

「お前河に溺れたのか」と聞くのだつた。

「いや溺れたのではない、向うの岸迄行つて帰りに、一寸泳いで見たのだ」と言うと、

「何んだ泳いだのか、馬鹿にしぶきを上げて流れて行くので、水でも飲んで慌てゝいるんだらうと思つたのだ、お前俺の目をこまかして逃亡なんかする気は無いんだらう、水の中へくゞつて何処かへ行つて終つたら、俺の責任だからなあ、今度泳ぐ時は、俺の許可が無くては駄目だ、兎に角あんなに泳ぐのが上手だから、心配なのは俺だよ」と言い乍ら笑ふのであつた。

「心配かけて済まなかつた、しかし俺は絶対に逃亡するなんて、馬鹿な真似はしませんよ」

と答えた、彼の中尉も安心したもので、それから後何回も泳いだ、中尉は全々心配しなくなつた。

八月の下旬頃であつた、今日は特別コースを取つて、チョイバルサンの官舎を目当てに、吾々の足は運ばれた。橋のたもとに行くと歩哨が立つていて、ガルツオ、ツエソン中尉は、自分のパスポートを出して渡橋の許可を得た。順々に数えて渡つた、渡ると直ぐ側にチョイバルサンの官舎が見える、平屋である、それもコの字型になつていて、その前迄アスファルトの舗装道路になつている、家の前は庭園で実に開放的である。

私共一行は橋のたもとから東へ曲つて、河沿いに上つて行くと、チョイバルサン名の牧場がある。

その附近の部落は殆ど散つてしまつて五、六戸しかなかつた、亦、これより少し手前に蒙軍の兵舎が一棟あつて、兵隊達が吾々一行を見ている、少し離れた処に銃を持つた兵隊が整列していた、その数は僅か五、六名であつた。

この牧場地帯を過ぎると殆ど道らしい道が無くなつて終り、一軒ばかり行くとイカダ引揚場があつた、これがチョイバルサン官舎及牧場等の引揚場である。

八月下旬頃になると水量は半分減つて河の真中でも腹部の上位になる。

河の南側は五十米位いで急な山になつている、その山麓には灌木が点在している、この灌木には紫色の小さな実がなつて

た。

吾々は橋を渡ると遠廻りになるので、河を渡渉する事にした、その方が余程近道であつた。

河を渡渉して暫く行くと、蒙古包がある、ここは母親と娘二人の女だけ三人の部落であつた。

この母親は四十を出た位の婦人であつて、娘は二十四、五才位で、夫らしい者は無く、只附近のイカダ引揚場の若い監理人と良い仲らしく何時も附近を散歩しているのが見受けられた、もう一人の娘は十二才位の小女であつたが、学校へは行つていないらしい。

或る日ガルツオ、ツエリン中尉は、騎馬で先に行つて終つた。吾々一行が渡渉して、その部落の附近を通ると、十二才の

小女が馳けて来て、

「お茶を飲む様に準備してあるから、家に来て飲みなさい」と薦めてくれた。

吾々一行十数名は其処に行つて御茶を御馳走になつた。

外蒙古に来て蒙古包で御茶を御馳走になるのは初めてであつたのでどれ程心の暖まる思をしたかわからなかつた。

蒙古包には十数名入り切れなかつたので、私と数名は外で御馳走になる事にした。

外には蒙古犬が縛られていた。冬の蒙古包用のフェルトが、黒ずんだまゝ積み重ねてあり、なおその側に鑄鉄で出来た鍋が伏せてある、この辺は牛糞の山は見当らない代りに材木が二、三本ころがつている、蒙古包は渋黒くなつた大布で包んであつて、家畜は辺りに全々見受けられなかつた。

私は蒙古包に割り込んで内容はどうだろうと窺つた。

私は内蒙古で旗顧問をやつて居る時、よく蒙古部落を歩いて生活状態を見聞して居たので大体一目見て、家庭の内容はほぼ見当がついた。

蒙古包の屋根の骨組は、四、五本欠けており、ハナ（蒙古包の横わく）は処どころ破損していた、フェルトは二、三年前のものらしく、処どころ穴が開いていて黒ずんでいる、イロリは無いがトタン板で丸く作つたストーブが一ヶおいてある。今は盛んに割木をくべてお茶を煮ている。正面には何も飾つてなく、只名ばかりの燈明器と供物皿が一枚置いてあるのみだ、その外に小さな鏡と雑多な小物が散らかしてある、いつたい仏様は何処にあるだろうと思つて注意して見たが見当らない。

木で作つた寝台が両側に置いてあり、それには一枚のフェルトが直かに敷いてあり、其処に同囚達が腰掛けて居る。寝具らしい物は何処にも見当らない、机などもなく、戸柵様の箱が二個正面に置いてあり、その上に鏡や小物が置いてあつた。

入口には炊事用のバケツやつぽが置いてあるばかりで、土間には、生皮が敷いてある処もあるし、フェルトを敷いてある処もある。只家畜の頭数が分らないのが残念であつたが、その後二、三回立ち寄つて見て、大体乳牛二頭、山羊、羊一〇頭位である事が分つた。こんな状態だとこの家庭では一ヶ月、どんな生活をしているかと非常に疑問になつた。私はこんな生活を一旦見て、未だ監獄生活の方が上位にあるのではないかと考えられると共にふと思ひ出す事があつた。それは、或る時私が炊事から羊の蔵物一匹分を貰つて来て、それを料理して食事を作る事になつた、私は肺蔵はいらないから、便所に捨てて終おうじやないかと、蒙古人同囚に相談した処、彼は「おいそれはいけない、尊い肉を只々便所に捨てるなんてしてはいけない、外でも肺蔵は肉だ必ず調理して食べ、ただじや捨てやしない。今じや死んだ家畜の肉やら尚蒙古人の最もきつたラクダの肉や蔵物さえ食べる様になつたんだ」と言うことだつた。

私もよく考えて見ると雪害や狼害で斃死した家畜の肉や蔵物を食わされたことも、たびたびあつたが、全く監獄でも外でも同じ様な生活をしているのだなと、うなずかれるのだつた。

私共は、このイカダ揚げ場に九月中旬頃迄通つた。その間往復河を渡渉するので慣れて終つたが、九月に入ると水は極めて冷たくなつて、長時間入つていると感覚がなくなつて終う。夏は面白く猿又一つで作業も出来たが、九月の初旬頃からは、綿入の上衣を着てやらぬ事には到底作業の継続は出来ない、又河に十分間位入つて作業した後は飛び出して焚火で全身を暖ためねばならなかつた。寒い朝など河の端の静かな処は薄氷が張つている事もあつた。

九月中旬迄毎日続けられ、毎日同じコースをたどつた、監視も初めから見ると厳しくなくなつて、班長にまかした儘、何処かへ姿をかくして来ない、只獄門に入る少し手前で、吾々を待つていてその儘引卒して入門すると言ふ風になつて終つた。其の当時三、三、五、五、打ち連れて帰る途中よく目に見える建築物の名前を聞いては、同囚達に注意される事もあつた。しかし、私はその度毎に知らぬ顔して、あゝそうかとうなずいておいた。イカダ揚げ場から獄門に到る間には色々の建築物が点在しているのが、見まいとしてもよく見えるので困つた。東から数えると、アムゴロンの一廊、オランハウラの兵舎六棟、有名人士の墓地、煉瓦工場、パン工場、ソ聯人クラブ、ソ聯大使館、アパート、昔の中華民国の無縁塔があり、自動車修理工場、士官学校、第二自動車修理工場、運輸省、三つのガソリンタンクが並び、第一自動車修理工場、ガチリン、ガザル、鉄道員宿舎三棟（この内一棟は前日本捕虜部隊の司令部）等が散在している。

これ等の建築物の間には、支那家屋や、ロシア式家屋、蒙古包が雑居している。蒙古包も白いのもあれば、黒いのも相当混じつてゐるのである。

九、サイチョートナルの炊事（優秀囚人達の炊事）

一九四九年よりサイチョート炊事が設けられ、生産部ノルムチン（就労囚人）の中最も、生産能力の優秀者が選ばれて、食事の配給を受けるのであつた。

初めは生産部一五〇名足らずの中から、一五、六名選ばれてサイチョートになつた。

選抜される条件としては、一年以上の就労囚であつて、年平均一五〇%以上の成績を上げた者で、病氣、事故欠勤が無く皆勤した者に対してであつた。なお未決、チャンガロンに収容された者に対しては、サイチョートを削除されて終う。

私は丁度その当時一九四七年から一九四八年に亘り大病をやり、病院生活八ヶ月、証明付き休養等で過していた為、鉄工班には一九四九年から掃除夫として一年軽労働に服し、一九五〇年から再び鉄工として勤務した。その為私に私がサイチョートに入つたのは一九五〇年の秋頃であつた。

開設された当時は、内防処の指示により、二等肉と二等麵で一日二回の食事を配給し、尚六〇〇グラムの黒パンを配給する事になつてしたが、一九五一年頃より又昔と変りない、一食となり肉も麵も殆ど予備収容所と変りなくなつて終つた。外蒙は何か新しく出発した時は仲々景氣が良いが、暫くすると又もと通りになるのであつた。

一九五一年からS顧問が、病院洗濯班長からこのサイチョート炊事班長に變つて来た。そして我々日本人だけは内密に食糧の補給をうけた。しかしこのことが、蒙古人同囚達に知れると疑惑を抱かせる、結果になるので、細心の注意のもとに行われた。

鉄工班の掃除夫ダンビニマは、何時も炊事から食事を配給される時、受領に出かける。又、黒パン配給の時も同じであつた。その為炊事班への出入りが自由であつた。私は彼を利用してS顧問班長から何時も、肉とか黒麵、塩、野菜等の補給を受けるのであつた。実にこんな有難い事は無かつた、そのれとして炊事に必要な道具の修理は何時もみんな、自分が引き受けてやつてゐる事は勿論であつた。

S顧問も食事の質の悪くなつたのには、困却した様だが、総ゆる手段方法を構しても、上部のラーガルで購入支給しないのには、どうにもならなかつた。それでもS顧問の上手なやりくりによつて、無事に勤める事が出来た。

一九五二年私が、仮釈放されるに当り、S顧問も奮発してミシン班に入つてアジリンホノクを稼ぐ事になつた。

10. アジリンホノクと積立金

アジリンホノク（仕事の出来ばえに依つて減刑される日数）は一九四七年十二月施行された、その当時は減刑率が誠に少なく、誰も食う事に追われた為、熱心に仕事はせず臨時収入の横流し製品を作る方面に力が注がれていた、本格的にアジリ

ンホノクが改訂されたのは一九四九年三月からだつた。

一ヶ月二十六日間（日曜日は除く）病欠事故欠なく、一〇〇%継続成就した者には、アジリンホノク五日間を減刑する。之に該当する者は、病院勤務者、炊事夫、経理事務補助者、掃除夫、門衛補助者等である、一ヶ月欠勤なしに一〇〇%以上、毎日労働した者には一〇〇%について五日間、一〇〇%以上の分に対しては一〇〇%につき二日のアジリンホノクを受ける。

例えば一五〇%毎日労働し、欠勤なしに一ヶ月続行した場合のアジリンホノクは、

$$\frac{50 \times 26}{100} \times 2 + 5 = 31 \text{ 日}$$

三十一日となる。

但し之が三ヶ月間継続して途中病欠、事故欠のある者、又は事故を起し未決に收容され或は、監禁された場合はアジリンホノクは無効となる。右の条件がかない、一五〇%毎日労働生産に当つていと、一年間三七二日のアジリンホノクが減刑される。

この様な好条件であつた為に、誰もが生産能率を挙げ、減刑されようと思ふから、質より量に傾き、製品の質が極度に低下するのであつた。反面ソ聯品は安価で質の点に於ても国産品よりは圧倒的によく、自然に国産品を抑える為、国内品がさばけない。このへんが外蒙経済の悩みの生れて来る理由の一つである。

何時も生産部長は質の向上を計る様に、訓示し、又は講習を計画するが、之も前に記した通り「蒙古の法律は三日天下」で何時の間にか訓示も講習もなくなつて終るのであつた。生産部に於て普通労働囚であると、一二〇%位の能率であるが、一番成績の良いのになると、四〇〇%以上に達する者もある。しかし之は殆んど稀である。

私はイカダ揚げに行つてからすつかり丈夫になつて終つたので、一九五一年から頑張つて一九五二年の九月迄の間に自分の刑期十五年を、このアジリンホノクで満刑にして終つた。それで一九五二年十一月アジリンホノク発表と共に釈放される事になつたのだつた。

このアジリンホノクも一年を四期に分け、一月から三月迄を一期、四月から六月迄を第二期、七月から九月迄を第三期、十月から十二月迄を第四期とし、その期別毎にアジリンホノクが発表され、囚人カードに記入される。

しかし幹部の事務的能力の劣等な為、たまたまアジリンホノクが記入漏れとなり、釈放されない囚人も多いのであつた。このアジリンホノクと関連して積立金がある、この詳細は不明であるが、一〇〇%の者に対し一日二十六モング（日本の

銭単位で七円八十銭に当る）が積立金となる、一〇〇%以上の場合は割増金が付く。

私が釈放された当時支払われた、積立金額は四四一トコロゴ（日本円の一万三千二百三十円）であつた。それも一九四六年六月から一九五二年十一月迄を通過したものであつた。

この積立金からは官給品の金額が、差し引かれるが、その主なるものはフェルト靴、労働用短靴位で外は殆どない。又原料及機械器具、道具等を破損した場合は、差し引かれる。尚在監中必要を生じた場合は、一年間に六〇トコロゴ以下の現金を、積立金からおろす事が出来る様に規定はなつてゐるが、実際は二、三十トコロゴ以上は出来ないであつた。又囚人は常に七〇トコロゴ以上持つ事を許されない、若し余分がある場合は、積立金とする。若し積立てないで、持つていて臨検に会い摘発された場合は、没収されても文句が言えないのであつた。

二、加刑裁判

或る日突然、全員クラブに集合する様に命ぜられた。吾々は又何事が起きたかと思つてクラブに行くと、クラブの周囲に、五、六名の銃剣を持った蒙古兵が立哨していた。

これはえらい事になつたかなと思つて内へ入つて行くと、同囚達がこそこそと話している、それに依ると裁判が公開されるとの事であつた。どんな裁判が公開されるかと興味を持つて暫く待つた。

其の中にステージに机と腰掛が置かれ初めた、背広を着た人が四人どやどや入つて来て、各々席についた。その中に二人の銃剣を持った護衛兵に護られながら囚人が入つて来て、裁判官達の前の座席に坐らされた。

書記が起立して今から囚人某の裁判を行うと宣告した。

次に裁判官は調書を見ながら、原籍、氏名、年令、家族、收容所名等を訊ねた上、調書を読み初めた。

それに依ると、この男は刑期六年が後二日か三日で、満了になる、チャガン、ホウラ收容所に就役していた者である。

彼は満刑に近いと言うので何回も化病を使つて、收容所に寝ていた。それを收容所長がその度毎に就労さすべく命じたが、一向聞き入れない。しかし彼も又、所長から何回も訓戒を与えられているので、就労に出ないとなると、自分の身分が危いと感じ、建築現場に出かけたが、仕事もせず現場を離れて、消費組合とか、知人宅などを遊び廻つて帰つて来た、之が又所長の知る処となつた。こんな事が二回続けられた。

これは故意に職場を放棄したもので、国家に対する反動行為と認める、依つて刑法何条により、服役八年を加重する、本

日より執行すると言うのだった。

之に対し囚人被告は異議を申し立てた、それは事実病氣であつたから、バリガテンダラガアの許可を貰つて休んだ事、現場を離れたのは監視幹部の許可を得て行つた事を述べて判決の不当なことを申し立てた。

之に対し裁判官はバリガテンダラガアは、医者でない、休むには医者の証明書が必要である。医者の診断の如何に依り、休養もとれるし、就労せねばならない。それだのにお前の行動は、この規定を故意に無視し、国家の仕事放棄したものである。

又監視幹部の許可を得たと言つては、その幹部は許可はしなかつたと証言している、お前はこれでも未だ不服なのか、寛大な処置に対し何をぬかすかと、一カツした。しかし囚人被告は懸命になつて自己弁護する、検事も起つて囚人被告の非を指摘して、聞き入れる処がない、弁護人は何か裁判官、検事と打合せをした。そして一時休憩する事になつた。囚人被告は護衛兵に連れ出された。

裁判官、検事、弁護人、書記等も出て行つた、十分間位休憩の後再び裁判が行われた。結局原判決の通り判決を言い渡されて終つた。

實際監獄生活に於て、この位の事はどの囚人も行つており余りにも非現実的な裁判であると、言葉には出さぬが、皆がさゝやく言葉の中に現れるのであつた。

又この様な裁判はこゝで三回程あつた。一件は傷害事件、一件は逃亡事件、一件は窃盗事件であつた。

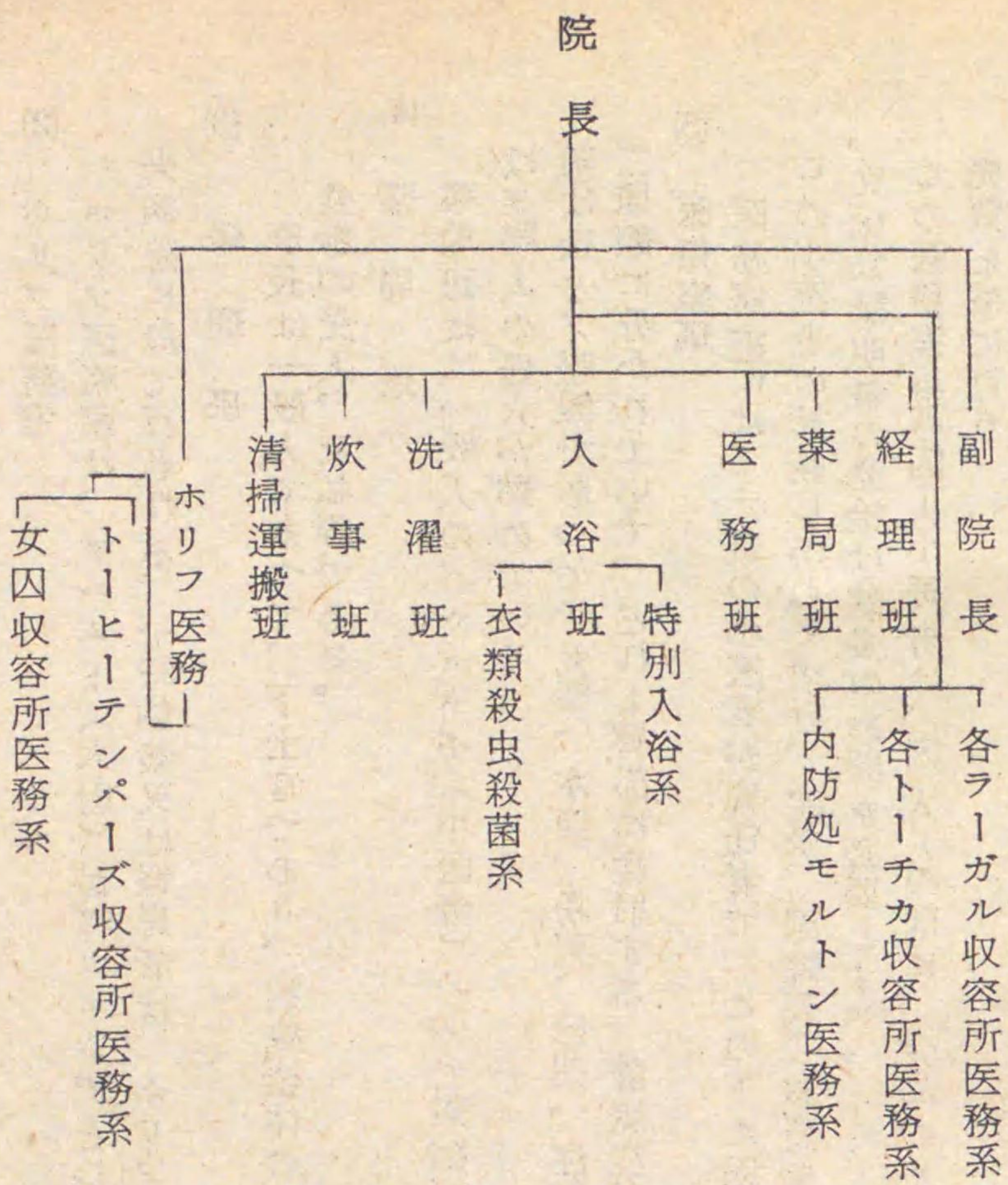
これ等の裁判公開は、囚人達に最も良い教化法として峻烈に公開されたものである。しかし囚人達はそんな事は、殆ど念頭になかつた。又次の日から、窃盗、強奪、逃亡、ゆすり、怠業が繰り返されて行くのであつた。

これも「蒙古の法律は三日天下」の観念を何時も持つてゐるからであると思われる。

才三章 中央監獄病院

一、中央監獄病院の概況

この中央監獄病院は内防処直屬で、囚人患者のみを收容している。その組織構成は次のようになつてゐる。



(1) 院長

一九四九年迄はソ聯人が當つていたが、ソ聯からの引揚げ命令によりそれが引揚げた後は、蒙古人の医者が之に代つていた。

副院長は一般人がなるのが原則であるが、人員不足の為囚人で蒙古綜合大学医科を業した者があつてゐた。

医者は、イフウエムチ、(大医者)といつて大学医科を卒業した者、及びバカエムチ(小医者)といつて医学校を出た者の二階級に分かれています。

なおこの外にセストラ(看護婦(夫))といつてセストラ講習所を出た者が居り、その下にセンタール(附添人)等が居る。

(2) ホリフ医務室
ホリフ医務室は、アハムト(大尉)がバカエムチとしてホリフ全般の医務に携わり、入院、投薬、入浴、洗濯等は中央病院に於て行われる、一時休養又は軽患者は、ホリフ内で休養投薬されることになつて居る。

(3) 経理班
班長は一般人であつて、下士官であり、病院全体の収支に當つて居る。その仕事は病院の備品、器具、器材、薬材、食糧の受入、支払等である。

(4) 薬局班
薬局班には一般人のバカエムチ(小医者)がいて薬剤の調合を行い、助手として囚人二人を使つて居る。この薬局にはソ聯人の婦人が勤めて居る。

薬は殆どソ聯製であつて、丸薬、水薬、粉薬、塗薬、注射液がある。注射液は主に花柳病用のもので、赤色と白色との二種類に分かれていて、どれも臀部に注射する。静脈注射は殆ど見たことがなかつた。

(5) 医務室班
医務室班には下士官の小医者が責任者で、この下に囚人の小医者が二名から三名おる。この小医者の診断しかねる者は、院長、副院長の診断を受ける。又休養証明書の発給は院長の診断を必要とする。

この医務室班の囚人小医者は、囚人との間に、金品のやりとりによつて、休養証明書の発給や投薬注射、或は薬品の密売買を盛に行う。

(6) 入浴班
入浴班長は主に囚人が当り、その下に四、五名の囚人が就労する。入院患者は、中央監獄囚人の入浴並びにホリフ全般の囚人、未決囚達も入浴させて居る。

特別入浴系があるが、医務室班の指示に従い新入院患者及皮膚病患者等の入浴を担当する。衣類殺虫殺菌場系は、衣類の殺虫殺菌を年に四五回定期的に実施する。この外、伝染病流行中も臨時に何回も実施する

この殺虫殺菌場は丁度中国のオンドル式になつていて、入れ口が一つで小さく、密閉した後地下炊口から一〇〇度以上に加熱して、殺虫殺菌する。

一九四六年から一九四九年に至る間は、発疹チブスが流行し、何回も寝具、衣服、全部について熱菌、熱殺を受けた。非常に高温に加熱するので下積みになつた衣類等は、焼け焦げているものもあつた。この時は入浴も同時に行われ、シヤツ、ズボン下迄シラムの検査を受け熱殺にかけられるものである。なお頭髮は勿論、脇下の毛、陰部の毛迄すつかり剃り取つて終う。

(7) 洗濯班

一九五〇年迄は、殆ど日本人がこの班にいて、病院、中央監獄、ホリフ等の総べての衣類洗濯を行つて居た。なお官庁病院の衣類を洗濯した事もあつたが、途中で中止となつた。

班長はS顧問で、S顧問、Y顧問、Uさんの四人でやつて居た。

一九五〇年以後は、S顧問はサイチョート炊事班長に、Uさんは病院炊事班に、夫々移動して終つた。

後に残つたC顧問が班長でY顧問がその下で働く事になつて居たが、Y顧問が病死した為、二三名の蒙古人囚を使つて洗濯をして居た。

この洗濯班も石けんの配給が少く、時々休業する事もあつた。

毎日六、七十枚の衣類の洗濯をすれば、ノルマは終つてしまう。又次の日は別の処から五六十枚持つて来て洗濯する。こちやつて中央監獄、病院、ホリフと一巡するには、二週間かゝり、一ヶ月一回の巡回洗濯であつた。

囚人達の衣服は十四日に一回の為、全々真黒となつてしまい、仲々綺麗に洗えない。その上配給の石けんと水が欠乏し易い。

水は中央監獄内にはなく、棚外アジホイトから、馬車、自動車タンクで運搬せねばならず、誠に不便なものであつた。これらのよごれた衣類の洗濯は、一石位入る大きな樽に三分の一位の湯を入れ、大きな釜で殺菌した衣類を引きあげ、この樽に入れ裸になつて頭を突込み洗濯するのであるが、身体中は汗だくで、辺りは濃とたちこめる水蒸で一ぱいである。

洗つて居る本人には何の臭も感じないそうであるが、外から入つて来た者は鼻をつまんで洗濯場から飛び出すと言う程である。

午前中で洗濯が終つて、午後からは病院だけのものにアイロンをかける。その他のものにはかけない。この洗濯班は午後三時頃で仕事が終わつてしまうので、仕事のない囚人達が良く遊びに来ては色々の話をするのであつた。

日本人は語学の勉強やら、臨時収入のキセル、パイプ等を作つて過すのであつた。蒙古人も日本人の語学勉強には驚き、誰も日本人を呼ぶのに「○○バクレイ（先生の意）」と言つていた。これには色々の原因があつた。日本人が何事にも博学でよく勉強する事。捕虜部隊の残した建築技術の優秀であつたこと、日本人を信頼しても絶体間違いないという確信を得た事。日本人は非常に親切である事。又非常に仕事が上手である事、等で今迄の日本人に対する認識の誤つていたことがこゝで初めて日本人に接触して分つたと言ふ事である。実際に日本人と接触しなかつた時代の外蒙古人の常識は、全く驚ろく外は無かつた。例えば軽便鉄道があるとか、ラジオがあるとか、自転車やバスがこんなに走つてゐるとか、大学は吾が国に二つあるがお前の国にはいくつあるとか、俺は今度の戦争で日本へ行つて来たとか（満洲迄行つて来た事を誤認して日本と決めてゐる）全く黒いカーテンにとじ込められた世界しか知らなかつたのである。

一九五一年の八月Y顧問は熱病にかゝつて、宿舎に寝てゐた。

その当時丁度院長は一年間一回の賜暇一ヶ月間を貰つてゐた為、バカエムチの誤診がもとで遂にこの世を去つて終つたのである。

Y顧問は八月の初め頃から発熱し初めた。只熱があるばかりどうしても病名が分らない。

その時は副院長は欠員であつて、薬局のソ聯婦人バカエムチが診断してくれた。又囚人エムチもこの病名をつかむ事が出来ず、只熱が出るのでアスピリン錠の投薬位で過ごしてゐたのだつた。Y顧問も大分良くなつてゐると言つてゐたが、それは吾々に心配をかけまいとする気持から出た言葉であつた事が後になつて分つた。何時迄過つても熱が下らない。吾々日本人もこれはどうも唯の病氣じやない、早く何とかして病名の分る様にとバカエムチ達に懇請しても、彼等には全々診断がつかない。吾々も兎に角栄養をとるようにと牛乳やオカユを作つて持つて行くが、僅かに唇を濡す程度で、全々食欲がない、それでも総ゆる手段を構じて、トマトを外部から構入して、その汁だけを飲ませようとするが、どうしても飲めない、相変らず病勢は悪化するばかりである。

彼等バカエムチ達も何の治療法もないよう、只高熱を出す時にカンフル注射をするばかりである。吾々はそんなにカンフルばかり打つては駄目だ、もつと栄養のある葡萄糖液でも注射したらどうかと忠告しても、液がないと言つて聞き入れず、どうにも処置の方法がなくなつて終つた。

その頃は三十九度以上に昇る、その中に謔言を言う様になつて来た、これは大変と吾々日本人が交替に看病する事とし鳩首協議してグループの情報係長に僅か五人しかいない日本人の中Y顧問が重態で病名が判明せず、治療の処置がとれないから、国立中央病院に診断に出して貰いたいと、申請書に四名が署名し、S顧問が代表して陳情することになつた。

その結果暫く待てという事であつたが、吾々はそんなに待つ事は出来ない。次の日再び申請書を書いて再びS顧問に陳情に行つて貰つた直ぐに許可が出た。夕方四時頃救急車が行くから、準備して置く様にと言われた。

吾々は至急Y顧問のズボン下及びシャツ、上衣やら、帽子日用品等を準備して救急車の来るのを待つた。

救急車が来た。ホリフ付小医者の大尉が附添いで出発する事になつた。

Y顧問もそれが分つたらしく、吾々がY顧問を助け、新しいものと着換えるのを意識してゐた。有難うと頭を下げていた。

非常に水を欲しがつて困つたが唇に少し綿でぬらしてやると、お美味そうに唇をなめてゐた。

吾々日本人四名はY顧問の身体をかゝえて救急車に乗せ、

「Y顧問国立中央病院に行くから、元氣を出しなさい。氣を確り持つ事ですよ、必ず病氣は良くなりますからね」と励ました。附添いの小医者大尉にも「何分宜敷頼む」と御願ひした。

救急車は激しくゆれながら獄門を出て行つた。吾々はそれを見送りながらこれが最後とは思わなかつた。

この小医者こそ私が釈放され、行先がどうなるものかと思案にくれてゐた時、衛門の処で自分の家に来いと言つてくれた医者であつた。後になつてY顧問の状況はこの医者から祥しく聞く事が出来た。

次の日からこの医者が毎日国立中央病院に出頭しY顧問の病態を、吾々に報告してくれるのであつた。

それに依ると、尿、大便、血液等の検査が行われてゐるが、その結果は分らなかつたが、四、五日過ぎると、伝染病の疑いで、伝染病院に移される事になつた旨伝えられた。

伝染病院に移されてからも、毎日の様にその状況が伝えられたが前と余り変りなく持ち続けているとの事であつた。その後四、五日過つと、何うも高熱が依然として降下しないで、重態らしいと言ふ報告があつた。

吾々四人は何とかして、Y顧問の病態がどんな様子か、はつきり知りたかつた。それにはどうしても一度見舞と言ふ事で伝染病院迄出して貰らわねばならぬ。今迄日系が外に出ると言ふ事は殆ど禁止されてゐた。只私がイカダ揚げに一ヶ月程内防処に内密で従事した事があつたが、今度の問題はそう簡単に行くかどうか分らない。情報係長に御願ひして見るのも良いだろうと言ふので、S顧問を代表として陳情することになつた。S顧問が喜んで帰つて来た。明朝早く行く事になつた旨伝えられた。S顧問に万事依頼し、院長の馬車が空いてゐるので、バカエムチと二人で行つて貰ふ事になり明朝を待つた処がS顧問がグループに呼び出されて行つて間もなく帰つて来た。

S顧問は吾々を見ると

「残念ですが、Y顧問が病死して終つた。昨晚だと言ふ事です。どうも昨晚は夢見が悪かつたが、」と開口一番悲報を

受けたのだつた。

「もう一日早ければなあ」と誰も彼もが残念がるのだつた。今迄吾々は出来る限りの手を尽して来たが、どうしても残念だつた、Y顧問を生かして置く事は将来大きな力になると考えていた。彼は非常に文筆家であり。又祖国日本を誠心から愛している熱情家でもあつたからだ。

吾々は彼の病死の状況を詳細に知りたかつたが、それは発表されずに終つた。何事も思う様に行かぬ捕われの身の不自由さを味うのであつた。

暫くたつてからY顧問の追悼会を吾々四人で洗濯班で行つた。何にもない監獄のことであるから、供養は出来なかつたが、たゞ亡きY顧問の思い出を語り耽るのであつた。なお遺品があるので皆で少しづつ分けて持つ事にし、誰か一人でも日本に帰れる事ができた場合必ず届けようと誓ひ合ふのであつた。この様にY顧問の発病以来何とか尽し得た事は、過去に於ては全々出来なかつたことである。一九四七年に亡くなつた金森氏の末路と比較する時、そこには大きなひらきがあつた。これも我々の日本人という立場の根底には、負けたとは言え日本と言う国の偉大な存在のあることを彼等蒙古人が知つたからに外ならない。Y顧問の詳報を聞いたのは、私が釈放され、バルトン大尉小医者と共同生活をしている際何かの折、亡くなつたY顧問に及んだからであつた。

グループではY顧問の国立中央病院入院に當つては非常に慎重な態度で臨んでいた。バルトン小医者は毎日Y顧問の病態をたしかめ、グループに報告する様に命ぜられ、又国立中央病院にも鄭重に扱ふ様にと連絡した。

その為病院でも、セストラとセンターを交替に看護につけ、なお担当医が特別一、二時間おきに回診してくれた。中央病院で伝染病の疑いがあつたので、国立伝染病院に移し、特別室に入れ特に支那語の出来るセストラを(Y顧問は支那語が上手であつた。)看護につけた上、医師もたえず回診し、総ゆる医療を尽した。なおこの担当医がバルトン大尉小医者にもらした言によると、伝染病院に移された当時、Y顧問は最早衰弱が甚しく、手遅れでどうにもならなかつた。もう一週間も早かつたら、助けてみせたと言つて残念がつていたと言ふ事である、尚腸疾患の為、高熱が続き何時も謔言を言つていたので、特に強心剤や栄養剤を注射したが、効果はなく遂に七日の午後に瞑目したと言ふ。

(8) 炊事班

炊事班の班長はアルトン、バカンと言ひ、終戦前は満洲国クシクトン旗警察官で、特務係の警尉であつた。

バイントモンで判決を受け、同収容所に就労中逃亡逮捕され、原刑十五年に三年加刑され刑十八年となつた。彼はバイントモン収容所から中央監獄に移動せしめられ来てから暫くの間洗濯班に就労していたが、その後、炊事班長として移動

した。

彼も又囚人中のスパイであつた為、班長と言ふ片書きを貰つていた。片書きを持つてゐる者は殆どといつて、位グループの任務を持たされていた。そしてさばつてゐる者もあつたし、良心的に苦しんでゐる者もあつた。

この班長の下に内蒙古人、カザツク、ブリヤート、日本人Uさん四名が就労していた。

この内ブリヤート人でセンドウと言ふ外蒙古人は、蒙古唯一の師範学校の図工の先生で年令は三十才を少し出たばかりの若い元気な青年であつた。

彼は極端な親日家で、吾々日本人にかなり詳しく外蒙事情を話してくれるのであつた。恐ろしい事件にもなりそうな事を平気で話すのであつた。

彼は師範学校に教鞭をとつてゐる時、何処から手に入れたか分らないが、日本の剣道シナイを持ち日本軍服を着て戦斗帽をかぶりながら、街を歩き廻り、学校へは軍服、戦斗帽に軍靴と言ふ姿で登校した為、みんなからは非常にいやな顔をされていたと言ふ事である。

日本語は自分で独学し、会話は非常にますいを書くに相当な事迄知つていた。

彼は何処から手に入れたか「五十年後の蒙古」と言ふ本を一冊隠蔵してゐた。それが露見して国事犯として刑十年を受ける身となつたのである。

彼はよく私の宿舎に遊びに来ては、他人のいない処を見計つて外蒙古の事情を話してくれるのであつた。

銅の露出鉱、鉛の露出鉱、金鉱、石炭坑、石油の採掘、河川の状況、アイマツクの名称と状況地方の産業、各民族の分布等実に言葉少なに書いたり話したりしてくれた。外蒙古地図を書いて見せたりするので、若し囚人中のスパイにでもこんな処を現認された場合は、本当にえらい事になると心配したが、彼は平気だつた。それだけに彼の行動は実に危険があるのであつた。

彼はこゝに収容される以前は、アルタン、ガタス、ラーガルで金鉱石採掘に就労していたが、その間にソ聯と外蒙国境線に騎馬で乗りつけ、ソ聯兵の遊動してゐるのを見て来ると言ふ大胆な処があつた為遂に危険分子と認められ中央監獄に締め込まれ、柵外労働には全々出られなくなつて終つた。外蒙古囚人は、予備隊収容所に入つてゐるものを除く外は殆どが柵外労働者である。若し中央監獄に就労してゐる外蒙古人があるとすれば、殆どが国事犯で危険分子として取扱われているものである。

その関係でアルトンバカン班長の下に置くのも、監視を怠らない事を裏付けるものであつた。私は彼に言動に注意する様にと忠告しても日本人だけには心のわだかまりを、打ち明けて話すのであつた。しかし私は記憶力が減退して少からず忘却し

た事を残念に思う。

この班は入院患者の炊事が主であるが、ホリフの患者食事も一諸に作っていた。

一日二人交替で炊事を行い、次の日は休養する事になつていた。

この炊事班からは一日一回の食事が配給される。オ一回は小米のオカニに、その中に干ブドウを入れたもので少し甘く作つてある。オ二回はハラゴリラ(黒麵)でウドンに家畜の内臓物か、ラクダの肉が入れられている。

特に肺病患者の重症者には生乳が一日一〇〇グラム配給される。その外黒パンが五〇〇グラム配給される。

野菜物も冬期間に於ては、利用され、白菜、キャベツ、ジャガ芋、葱、大根、赤いカブラ等であるが五月一十月迄は殆どなくなつて終ち。この炊事では家畜の内臓や肉を煮つめ、脂肪を搾つて終ちこの搾つた脂肪はこの班の臨時収入となり、囚人達に売却されるのであつた。又知人にも分けてやることもあつた。

院長は必ずこの炊事から、特別昼食を作つて、食事をとる外、白パンか黒パンが支給される。これは彼等に取つて、経済的に大きな助けとなつてゐる事が分つた。

この様に院長がそうである為、一般人の小医者達も炊事班から、患者の食事を取つてゐると言ふのだつた。

之等の院長及び經理、薬局医師、ホリフ医師、小医者等の者の俸給は、特殊技術者であるため、余裕の有る者と見做されてゐる。

院長イフウエムの月俸、五〇〇トコロゴ余日本円に換算一万五千円位、

薬局医師二八〇トコロゴ、日本円に換算八千四百円位

ホリフ小医者三八〇トコロゴ、日本円に換算一万一千四百円位、この小医者はソ聯への留学生である事及び年高者であるため、小医者としては最高額といつても良い。

經理下士管、二二〇トコロゴ、日本円に換算六千六百円位

なお参考迄監獄内幹部の俸給を示すと次の通りである。監獄長、部長、其他下級幹部。

- ラーガレン、ダラガー 四八〇トコロゴ
- (監獄長)
- オロロクチ、ダラガー 三六〇トコロゴ
- (副監獄長)
- オロストリンダラガー 三三〇トコロゴ
- (政治部長)

- ナミン、ダラガー 三〇〇トコロゴ
- (党支部長)
- サンコウゲン、ダラガー 三〇〇トコロゴ
- (經理部長)
- ウエトリン、ダラガー 二八〇トコロゴ
- (生産部長)
- フムウジュルクチ、ダラガー 二六〇トコロゴ
- 監視部長 三〇〇トコロゴ
- 監視下士官 一八〇トコロゴから二八〇トコロゴ

之がソ聯人大医者になると、六六〇トコロゴの外に外国勤務手当として、相当額が支給される。ソ聯人が外蒙古に勤務していれば、白パンと肉食が出来るが、帰国すればそれが出来ないと言つてゐる。この様にソ聯人は外蒙古を体裁の良い属国として、支配してゐる事が窺われる。

(9) 清掃運搬班

この班は清掃、運搬、院長の馬車夫各々一名づつである。

清掃のジャンパー、ブルライは満洲ホロンバイルの活仏で、政治犯となり刑十五年に処せられていた。

彼は病院内の清掃と、柵内進入禁止区域の整地を行い、人の足跡を判然とせしめる為に鄭重に草はむしられ、土は掘り起こされる。

この進入禁止区域は左記の通りであるが、五〇米おきに立札が、たちならび、人の注意を引き、囚人達に一種の威嚇を与えてゐる如く思われるこの立札には

「立入禁止。若し不法侵入したる場合は即時銃殺に処す。監視部長」としてあるのであつた。

これは余り逃亡が激しかつたので、一九四九年頃作られたものである。

運搬夫は死体の運搬、食糧の運搬である。

この屍室の地下になつていて、泥で敷き固めてあり、屋根だけが地上に出ている。

入口には戸がなく外から見え、二人位の死体しか入らない。

一九四六年から一九四九年迄は、この屍室が死体で一ぱいになり、外に裸体の死体がころがしてあつた。

この当時は毎日実に二入以上の死亡囚があり、何時も満員の盛況であつた。

一九五〇年頃から病院の給与、格段とよくなり死亡率も激減し、一週に二、三個死亡者がある程度になった。それも冬なら末だよいが、夏と来た日には全々目もあてられない。死体に寄り集つたハエと、回りを充滿する死臭は、見ただけで身震いする。

この死体を全部一枚のフェルトに包んで、馬車に乗せ、上から転び出さない様に、麻縄で縛りゴトリゴトリと獄門を出て行く様は、吾々日本人の常識からはとても考えられない。そしてその埋葬はと言うに、蒙古特有の風葬である。山の中腹に穴を掘るのでなく、長い溝を掘つて其の中に、投げ込むだけで、土をかぶせる事もしなければ、何にもしない只自然のまま放置されるのであつた。

こうやつて死体を棄てに行つた帰りには、病院の食糧、ハラタルハー、家畜の内蔵、ハラゴリラ、小米、野菜等を積み重ねて持つて来る。慣れて終えればそれで良い様なもの、實際運搬する者でさえ、「俺は生きんが為にこんな仕事をしてゐるぞ」といふことはないだろう」と懺悔するのであつた。

馬車夫のうち一人は、最初革命軍遊撃隊が編成された時の生存者の一人であつた。彼は家族四人で、はつきりした職もなく、只闇をやつて生計を樹てゐたが、生活に益々困窮するので他人の物を窃盗した。その件で刑六年を受ける身となつた。彼は前にも窃盗で中央監獄に入つたが、チヨイバルサン総理の生存中であつたので、総理の一存で釈放された。今度はチヨイバルサンも亡く、どうにもならなかつた。

彼は院長を馬車で送り迎えするだけであつた。帰りには必ず酒を飲んで来て、昔のことを回想しながら現在の身をはかんでいた。彼はこの遊撃隊の巧労働者であるから、国家から二犯と言う罪人でありながら、年金千四百円を受けていた。

二 囚人バカエムチ達（小医者）

囚人バカエムチ達は殆ど内国系で、横領犯か窃盗犯であつて、案外刑期は軽く五、六年位であつた。

このバカエムチ達も医学学校を卒業した者で、蒙古人の中では知識階級に入つていたが、彼等の医学的知識は全く幼稚である。丁度日本の看護婦以下か、若しくは吾々日本人の素人が、薬名を知つていて、頭痛、腹痛、胸痛、腰痛、風邪、其の他を常識から判断し、病状に対し処置を与える程度である。

これ等幼稚な医術の誤診の良い例としては、Y顧問の病死がある。

なお彼等は医務室に於て、患者から病状を聞き取り、責任のない処方箋を書いてくれるが、監獄の中ではどうする事も出来ない。何かしら薬を貰えると言う事で、一応は安堵するのであつた。

これ等の小医者は患者を診断するのに、体温もとらない。診断書にも書き込まないと言ふより診断証が無いと言つた方がましな位である。身体を注意して見るわけでもなし、脈博を取つて見るわけでもない。只患者の言ひ分を聞いて、見当をつける

こゝに色々の問題が起るのであつた。

囚人患者と囚人小医者との間は、総べて経済的に支配されていた。例えば私がどうも腰が痛んだり、淋巴腺が腫れたりした時は心配になつて小医者に錠を二個作つてやる。早速、休養証明書が簡単に貰えたり、薬も多量に得る事が出来た又自分の思う良い薬も何とかして持つて来てくれるのであつた。

なお彼等は肺結核の重症患者に対しては日光浴させる。イフェムチも同じ様に日光浴に賛成する。これは国柄が異うと言つても肺重症者に日光浴を強いると言ふ無謀な事は、吾々日本人には不可解な処であつた。ある時十台位の寝台に肺患者が乗せられた儘、病棟から運び出された。私は不思議に思つて見ていると、皆んなを一列に並べて、日光浴させるのであつた。

私は小医者に向つて聞いて見た。

「こんなに起きられない様な重症者を、日光浴させてもよいか」

「日光浴は肺病には、最も良い薬だ」とのさばり返つていた。

私は一人の患者に近寄つて話しかけて見た。患者は何一つ話さなかつた。只頭を少し動かしただけだつた。唇は真白に乾いて、蠅が鼻や口にとまつているのを払いのけてやつたが、払つても払つてもまた蟬集する。私もこの状態じや駄目だろうと思つてその患者から離れて行くと、代りにセンターが廻つて来て患者の様子を見て歩いている。突然センターが大声をあげて小医者を呼んでいる。小医者はこのこ出て来て「なんだ、もう死んだのか」と言つて脈を取つて見たが静かに下して「すつかり行つて終つた」と言ひながら前の場所の方に行くのだつた。これが囚人病院での臨終の光景である。私は絶対死ぬ事はないと思つた。死ぬなら日本の祖国に一步だけでも踏み入れて死にたいと思つたのである。

私はこの光景を見てこれ程無責任な医者が何処にあるか、それも外蒙古の医学学校を出た医者で人の生命を預かつている医者ではないかと義憤を感じざるを得なかつた。

この様な状態であるから死亡率が非常に高いのも無理は無いと痛切に感じた。

囚人小医者は又特別収入があつた。受け持ち病棟の患者用薬劑を横領して之を一般囚人に売却する事である。

これが為患者に渡るべき薬劑が削減され又は不渡りになると言う事になつて終り。

又アルコール代用にエスベルト（アルコール分九〇%含有）を使用しているが、これを窃盗して、水をうすめて適当な酒にし自分の腹の中に収めるか、囚人達に売却するのであつた。

なお薬劑にしても炭酸ナトリウムなどは、よいふくらし粉の材料となるので、彼等の食事に利用され又魚油などは柴

養劑として肺患者、栄養不良者に与えられるべきを、彼等の食事の材料として使用されてしまふ等、監獄病院での囚人小医者達は患者達の相当な犠牲の上に座して一般社会人よりも楽な生活をしているわけである。又囚人小医者達は、女囚達とよく結ばれ、性的解決にも余り苦勞はしなかつた。このことに付いては特別入浴場に於て記述する事にする。

三、セントール (附 添 看 護 人)

セントールには囚人が当つていて、患者の大小便から、室内の清掃、患者の衣服監理、及び食事の配給等を分担している。この仕事は病院勤務者の中で、最も非衛生な仕事である。日本では患者が規律を守り又附添婦が衛生思想に深いから、何処の病院に行つても、病院らしく感ぜられるのであるが、しかし外蒙の病院は全々比較にも何もならないのである。便器の清掃から、死者の衣服をはぎとるとか、屍室に死者を運搬するとか、新患者の衣服を監理するとか、清掃を行うとか、やる仕事は山程あるが、四、五十名の患者を預るセントールは實際隅から隅まで手が届く筈はなかつた。彼等は余り熱心に患者の面倒を見る事が出来ない。それを理由に賭博に出かけて行くとか、自分の臨時収入を得んが為、着物を縫うとか、パイプを作ると言うことに熱中して行くのであつた。

このセントールをやつてゐる者は内国系と外国系と半、半位であつた。

こゝに二十才位の若い内国系がシリンパーイエ小医者のもとでセントールをやつてゐた。

彼は蒙古人の内でもインテリで、ロシア語、ドイツ語など少し位の会話が出来た。五十才を出ていたが中々精力家で以前は鉄工班の銀細工をやつていたが、年令もいつてるし、身体の楽な仕事にと言うので、バカエムチをやり出した。彼は實際に於て医学校を出ていない、只彼の前歴がドイツに學んだと言ふ事が大きなハンディキャップであつた。ロシア語を少し知つていたので、薬名をおぼえるのに都合であつたし、患者にも信頼を得る結果ともなつた。亦彼も熱心に患者を見てやつた処がバカエムチも余り仕事はなく、身体の置場に苦しんで来ると、彼の下のセントールを自分のバンディ稚児さん

女代用にする男)にすべく工作を初めた。このバンディに自分の差し入れの物を与えたり、着物を与えたり、必要なものを買つてやつたりして勤心を求めた。非常に良い仲となり何時も寝台にねそべつたりして、楽しそうに語り合つてゐた。ある晩他のセントールの居ないのを見計つて、セントールの寝所に忍び込み、ズボンをぬぎジャツ一枚でバンディの寝ている寝台にもぐり込んだ。セントール、バンディも疲れてゐた見え、全く何にも分らない程よくつてゐた。部屋は消灯してあつて真暗である。シリンパーイエはバンディにより添つて、のしかつて女代用にしようとした。バンディは突然で真暗なので、はね起き大声を挙げて助けを求めた。シリンパーイエは静かにしろと言つて抱き押し縛とした。

一方バンディは人殺しと誤解して、益々大声を挙げて部屋中駆け回り、戸を押し破つて外に飛び出し「人殺し」と呼んで救いを求めた。

附近にいた外のセントールや炊事夫、小医者、患者も、何事が起きたのかと、馳けつけた処、中からシリンパーイエがズボンをぶらさげながら「どうしたんだ、どうしたんだ」と言いながらこそそこそと隠れて終つたと言ふ話が、囚人の中に拡がつたのであつた。

これはほんの一例であるが外蒙古人の性慾がいかに強く、又乱脈であるかが分るのである。

四、入 浴 場

入浴場の班長はアラシと言う。滿洲東科中旗の青年で、王爺廟興安軍学校の予科に在学中終戦となつた。

内蒙古自治区政府成立に當つては、外蒙古内防処にいたウランホ(原籍はハルチン人で現在は内蒙古自治区政府主席)が王爺廟に入り、軍官学校の学生を説得し、味方に引き入れ、内蒙古自治区政府成立上偉大なる成功を収めたものである。

その当時彼は予科生で、何も分らない少年であつたが、本科生と行動を共にし、それ以後彼は東奔西走中、公金を利用して食糧物資の横流しをやつて、大いに儲けた。それが上司の知る所となり、逮捕命令が出るやいなや、彼もそれを知り、外蒙国境を越えて逃亡を企てた処外蒙国境警備兵に逮捕され、中央監獄に投監される事になつた。彼は政治犯として二十五年の刑を受けていた。

彼は少年時代から物凄く明敏な頭脳の持主であつたらしく、日本語は非常に上手であるばかりでなく、支那語、ロシア語も得意であつた。

彼は又囚人スパイとして、中央監獄内でも相当名前前の知れた男であつた。彼は外国系予備隊班長もやつたし、又モルトン(未決)にも入つた。それは外国系が一九五四年秋、中共に移管される四五ヶ月前までであつた。それであるから内防処では外国系を中共に移管する準備として、外国系の情報を、彼から聴取したかも知れないし、又彼の前犯を再審したかも知れないが、兎に角外国系が中共に移管される時、彼は残留組となつて終つた。この様な履歴のある彼のもとに働く者は、何かと圧力を感じてゐた。

この入浴場には、中央監獄病院、中央監獄、ホリフ、アジホイ等が、一ヶ月一回若しくは二回入浴する。

この入浴は小さなバケツ一ぱいの湯と水一ぱいの配給である。洗濯石けん五分位の小さなものを貰つて、洗うのであるが、タライより小さな桶に入るので身体が自由にならず、外に出

て洗うより外に道はない。これも湯が少なく、水を埋めるので、湯が冷たく、夏ならまだよいが、秋から春にかけては、寒くて身体中鳥肌が立ち、

ふるえ上つてしまふ。

身体の丈夫でない者は、一層障害を起し、風邪をひくとか、ケイレンを起すと言う状態になるが、之も半強制的に入浴せしめられるので、致し方なく入浴するのである。

この入浴場はヤスチョージ、トスカイチョージ、モルトン、等も入浴する。

この時は監禁部屋毎に四、五名乃至十五、六名が、監視付きの上、時間も制限されて入浴する。彼等囚人はこの時とばかり、食糧の獲得に奔走する。監視は一人の爲入浴場の内迄入つて見ないから、南側の窓から手紙のやりとりやら、ハラタルハー、物資のやりとりが、要領よく行われる。

又入浴して終つたふりをして、監視から十分か五分の許可を貰つて、予備隊、病院内を馳けずり廻つて、食糧の獲得に奔走するのであつた。このホリフの囚人達の間には、自分の食うものでも、仲間と与えろと言う、風習があつた。

特にヤスチョージに入つている囚人達は、殆んが狂猛な前科者ばかりである為、一種の恐喝的行動とも見受けられる所もあつた。

モルトン(未決監)の未決囚は、往復の道中頭から着物をかぶせられる。これは丁度日本の深編笠をかぶつて連行されるのと同様である。吾々も内防処のモルトンにいる時は何時も上衣か、蒙古服を頭からかぶせられて行き帰りをしたものだつた。

又この班には特別入浴室があつた。こゝに入浴する者は、新しく入浴をする者、医務室で入浴を必要と認められた者等であつた。この中には皮膚病患者が多いので、薬浴に依つて治療を行うのだつた。特別入浴場は二つの湯船と、寝台が一つ置いてある。

この二つの湯船は一つは皮膚病用一つは新患者用として分けられている。

この皮膚病患者の最もひどいになると、梅毒の四期位の者もいた。

この特別入浴場は又女囚達の入浴の際、及び病氣診断の際に、女囚を引き込み、性行為を果す一番安全な場所でもあつた。女囚収容所が一九四九年迄、中央監獄内にあつた時は男囚は性的欲望を完遂する為、狂奔した。彼等にとつてはこの特別入浴場が常に利用された。これ等の男女囚達は殆どが内国系であつて、男囚は小医者、セクター、其の他病院勤務の囚人が多く女囚達を獲得の爲に、事前工作に相当の物資が注ぎ込まれる。

それであるから男囚達は常にどんな無理しても、物資の蓄積に狂奔する様は、諺から見ても涙ぐましい程であつた。

一九五〇年以後女囚収容所は、三軒位離れた場所に移転したが、暫くの間そこからこの入浴場に通つて来た。

一九五一年から女囚収容所にも入浴場が出来、今迄の様な男女囚間の性行為は出来なくなつた。しかしバンデイと言う女

代用の男囚が現れて之に代ることとなつた。

五 死か生か

一九四六年から一九四九年迄の間は中央監獄の不整備、食糧の欠乏、氣候風土の差異、強制労働の強化、言葉の不自由、知人もないと言う困苦が四重にも五重にも、吾々には襲いかゝり、全々生か死の大格闘時代であつた。

之は私だけでなく、全囚人が直接受けた、大きな打撃であつた。

内国系の外蒙古人でさえ、生きんが為逃亡もし、強奪、窃盗は勿論、殺害、傷害などが絶え間なく起つた。

一九四六年五月内防処の未決監から中央監獄に投監されてから、極悪な食事と強制労働に依つて、益々身体の衰弱が甚だしく、歩く事さえ大儀であつた。この衰弱をいかにして持ちこたえるかに苦勞し、捨てた骨や、皮、野菜の屑、野草を取つて命をつなぎたゞ生きると言う事だけに、汲々としていた。

一九四六年十二月になつて、冬の仕度は全々なく、僅かに、ぼろぼろのフェルト一枚と、蒙古軍兵隊用の白い外套と、フェルトの長靴だけが官給品として支給された。

この時の冬は格別寒く、普通零下三十度以上に達し、なお飢えに迫られ、身も、心も、砕ける様な朔風に虐げられていた。正に生地獄と言つて良いだろう。

私は鉄工班で冬を迎えた。その当時は昼夜交替で仕事に追われていた。ある時(旧正月と思う)予備隊が次から次へと増えて来て、収容しきれなくなつた事があつた。その時外蒙古人が「ツオス、ヤボン(血の日本人と言う意)お前の寝る処でない」と外に突き出され、固く氷つた庭に憤怒の涙を押えていた事もあつた。この当時の宿舎は火の気が殆どなく、それでもペチカの側に寝台を置いて、寝るだけでも温かくと思ひながらも、冷い環境はそれを許さない。ぶるぶる震えながら着た儘、上から白い外套をかぶつても、足と腰が冷え切つていて、何処迄経つても眠れない。漸く少し暖くなつたと覚える頃は明け方になつていたのであつた。

仕事場に出てもノルマの燃料は昼夜二回に分けて燃くのであるから、大きなペチカは十二分に加燃せず、部屋の窓と言う窓は全部厚な氷となつて終つていた。呼吸する度に真白な蒸気となり、帽子口、鬚、睫毛、等迄白くなつて終い、鼻からは二本のつらが下がつてゐる事を知らない事もあつた。

足はフェルトの長靴を穿いているが、これも不十分で爪先が凍えて終い痛くなる。ペチカの側に行つてフェルト靴の儘、炊口の中に入れて温めるのであつた。

一番に困つたのは、膝の関節だつた。外套は膝の関節迄屈かないし、こゝに縫いつける布も手に入らなかつたので、やすり掛けの仕事を中止して、マッサージして暫くは持ちこたえるのだつた。

一九四七年二月頃から、全く冷え切つて終つたのか、夜寝てからひつきりなしに咳が出て止まらない。三時間も四時間も

続く時は、身体がぐんなりして、起きる事も困難になつて来た。

これがもとで頸部の淋巴腺が腫張し初め、一九四七年十月に破れて終つたが、医者に見せても何も手当をするのでなく、只赤い丸薬か、白い丸薬をくれる丈であつた。

一九四七年六月頃から、栄養失調を来し神経痛が起き初めた。この頃は淋巴腺も益々大きく腫れ上り、病氣と言う病氣が一諸に来た様なものであつた。

班長に背おわれて医務室に行き診断して貰つたが、サルチルサン、ナトリス、とアスピリンしかくれなかつた。休養もとれず、その儘仕事を継続するより外に生きて行く道はなかつた。

特に雨の降る時などその前から寒気がして発熱が激しく、動く事も出来ない程疼痛が激しくなる。私はいつも雨が止むと外に出て直射日光の下で、冬の外套をかむつて汗をびつしより出すと、疼痛も大分軽くなるのであつた。

私は全身の疼痛が激しい時、医者にも行かれないから、自分の好き勝手に寝合に横臥する外は、休養はとれない。その代り、その休んだだけのノルマーを次の日作ることにした。その為色々の問題を起さないで済んだのだつた。

私の身体の調子が益々悪くなるばかりだつたので、Y顧問が心配して、私の処に来てはよくマツサージをしてくれた。又ビタミンCの欠乏だと言つて、アカザを沢山取つて来ては、ゆでて馬草の様に沢山食べた。食べ続けて四、五日は疼痛

も少しよくなるがそれが切れると、又疼痛がはげしくなるのであつた。

九月になつて淋巴腺が未だ破れない少し前は、毎日全身の疼痛が甚しく、遂に寝た切りになつて終つた。その中に淋巴腺が破れてから身体の調子が少し良くなつて来たので再びノルマーを始めた。

ある日班長が鉄工場の壁塗りを手伝う様にと命令した。その日は案外暖かつたので、思い切つて上半身裸体となり陽を浴びながら、壁塗りの手伝をした。風もなかつたので、汗ばむ程であつた。これが三日続いた。

これが特別身体によかつたものか、一九四八年二月迄は何とか持ちこたえる事が出来た。三月になつてから急に寒気がして、発熱し、足、腰、疼痛が激しくなり、再び病勢は悪化するのみとなつた。Y顧問は心配して知人の囚人小医者連れ

て来て診察させてくれた。

体温を計つて見たら三十九度を少し出るので、院長の許可なしに入院する事になり、みんなに助けられ、内科病棟才三号室に入る事になつた。

入院した当時は毎日発熱発汗し、体温は三十九度を下らない。食慾は全々なく、一寸でも動くとも全身に疼痛を覚えるのでたゞ寝台に静かに寝ているばかりであつた。

Y顧問は何時も干ピンを焼いて持つて来てくれ、マツサージしてくれた。しかし全々身体を動かす事が出来ないので、Y顧問に助けられて身体の位置を変えるのであつた。

才三号の病室には私を加えて六人入つていた。

この病棟の受持囚人バカエムチは、ラマ医であつて、十年刑を受けている国事犯であつた。それは彼が昔式のラマ医術を以つて住民を診断し、治療した結果による。

この小医者は日本人に対し、好意を持つており、私には毎日二回に亘つて、赤や白の丸薬を一粒づつくれるのであつた。私が入院中彼は同室の患者に対し、数珠を以つて仏に願をかけ、患者の平癒を祈つてくれるのであつた。

彼は数珠を持つて誦経し、息を数珠にはきつけ、数珠の一粒一粒を数えながらつまぐる。そして同じ事を三回繰り返し、黙想十分間、その間に患者の過去に於ける仏教に対する悲徳行為のある事を察知する。それを患者に言い聞かせ、その悲徳行為を払いのぞいてやると言つて、数珠を持つて誦経しながら患者の頭の上から身体中を、おがみ廻るのであつた。

私は起きられないので、寝た儘その状況を見ていたが、非常に真摯なのに敬服した。

彼はラマ医として相当有名であつたらしく、老年者からは良い医者だと言われていた。

この当時の院長はロシア人で、七十才以上の老年者でありながら誠に元氣のよい好々爺であつた。声は非常に太く、よく澄んでいて、院長の来た事が直ぐ分るのであつた。

ロシア人医師は一週二回廻つて来て、私の容態を詳細に診断し、肺結核の水薬と丸薬に魚油を与えてくれた。これによつて熱も降下し、歩き出す事も余り苦痛を感じなかつた。この院長は何時も日光浴を毎日よくする様にと指示してくれたので、私は午後になると、入浴場の南側に行つて、上半身裸体になつて、日光浴を二、三時間続けた。その甲斐があつてか頸部の淋巴腺もすつかり癒つて終い足、腰の疼痛もなくなつて終つた。

未だ身体の衰弱は取り戻せなかつたが、病院は満員であつて、五月の下旬には退院を命ぜられた。

院長に御願ひして休養一週間の証明書を受けたが、瞬々間に過ぎ前の通りノルマーの錠作りをする様になつた。二十日も過ぎぬ中に又再発して、ノルマーの仕事が出来なくなつたので、再び院長の診断を受けた処、入院と決定した。

私は今度は駄目だろうと、自分からあきらめていた。

頸部の淋巴腺は右側にも左側にも大きく腫れ上つて来た。小さな淋巴腺は胸部、脇下にも出て来た。足腰は疼痛甚だしく起きる事も動く事も出来ない。熱は三十九度を上廻つて居る。何時もとうとうとしては寝汗せをかいて居るのであつた。その中に同室肺病患者が死亡した。又隣の部屋の淋巴腺患者も、全身淋巴腺が破腫して遂に死亡したと言う。又別の病棟からも二個の死体が屍室に運び込まれたと言う事を聞いた。私は自分もあの様に裸体にされ風葬されるのかと思うと、生

きたいと言う気持が湧き出て来るが、今の身としてはどうする事も出来なかつた。私はうとうとしながら、よく夢をみた。それは日本の山や川が全々荒廃し尽し、沢山の男女が裸体で食を追っている惨めな姿であつた。

又夢に出て来るのは内蒙古で妻子と分れた際の哀れな妻子の姿であり、声をかけても話さないで消えて行く。又よく死んだ祖父の姿を見たが、これも口を割らなかつた。しかしどうした事か兄弟や母親の姿は全々夢に現れなかつた。目が覚めて見ると寢汗でびつしよりである。

これを取り換えて呉れる人はいなくなつた。その儘寝ているより仕方がなかつた。二、三日おきにY顧問が来ては、静かに静かに起して貰つて寝具を取り換えて貰つた。やはり日本人だ。私は同胞が争ふ事のできない大きな力であることを泌々と知つた。

私は投監されて以来何時も生活に追われ、家族や日本の事など殆ど忘れて終つていた。それなのにどうして思つた事もない事を夢に見るものかと思議に思ふのだつた。

七月の下旬にロシア人の院長は休暇を貰つて、モスコイに帰り病院は留守になつて終つた。

八月になつてから一人のブリアート蒙古人でバトスルンと言フウエムチが投監されて来た。彼が副院長として院長の代理を勤める事になつた。彼は蒙古綜合大学医科を卒業し、モスコイに学んで、ウランバートル市中央病院の医師として勤務中同僚を酒の上で受傷させた件で刑六年を受けていた。外蒙古の医学技術界では彼の右に出る者は無いと自称して、大意張りであった。

彼はどう言うわけか日本人に非常に好意を持つていて、初めての診断の際それが分つた。彼は私が日本人である事を知つて驚ろき、「何日本人だつて」と言いながら私の身体を静かに救け起し、「何処が悪いのか」と尋ねた。私は今迄の事を詳細に伝えた。彼はうなづきながら聴診器を出し、胸部の前後を鄭寧に聴診し、指でたゞいて見たり口を開けさせて見たり、又寝かせて腹の具合や、足の関節をたゞいて見たり、又最も痛い処を押えて見たりして、診断が終つた彼は私に小さい時からどんな病気をしたか聞いた。私は満洲でマラリヤをやり、終戦直前内蒙で発疹チフスをやつた事など伝えた彼は診断書に書き込み終つて、「元氣を出すんだ、お前の身体は俺が引き受けた。必ず健康にさせて見せる。明日から注射をするが、注射には驚かないだろう。今注射液はないが、今日俺が外出して注射液を持つて来てやる。尚牛乳一〇〇グラム白米のオカユ、ハラタルハーを支給するから、充分静養する様に」と言つて出て行つた。今迄外蒙に來からこんなに鄭寧に診察して貰つた事は無かつただけに、彼に非常に感謝した。明日長さ十糎、直径一糎位の注射液を持つて来て、静脈に注射してくれた。二日目頃になつて、大分全身疼痛が少くなつた。

た様な感じを受けた。

そして一週に二回の割合でこの静脈注射が繰り返され、三週間目には起きるのに他人の力をかりなくても出来る様になつた。部屋の中を歩いて見ても、疼痛が感ぜられず、大丈夫回復は出来ると思ふを得るのであつた。

又頸部の淋巴腺や胸部、脇下の小さな淋巴腺の腫脹も、何処へやら分らん様に消えてしまつた。こうなつて来ると食欲が増進し、白米のオカユでは物足りなくなり、普通食に変更して貰つた。

この静脈注射は合計十六本した。その頃になると、殆ど足腰、胸部等の疼痛はなくなり、肥つて来た。Y顧問も来て重態の時は本心に心配した。余りウワ言を言うので、これは駄目かなと、思つた事もあつたと述懐するのであつた。

もう大丈夫と思つたので、自分から進んで退院する事にした。バトスルン医師ももう大丈夫だろうと太鼓バンを押してくれた。思えば私はこのブリアートバトスルンに救けられた様なものであつた。彼が監獄に投監され来なかつたら、自分は二度と日本の姿に接する事が出来なかつたであらう。

彼は刑半ばにして釈放されたが一九五三年再び酒の上で傷害罪を犯し、刑八年となり投監されて来た。

彼にはUさんが腸出血で驚き入院した時も手厚い治療を受け、全快する事が出来た。

彼のたゞ一つの欠点は酒の上の喧嘩だつた。これは何が原因かと言つと、外蒙古におけるハルハ族とブリアート族との軋轢の結果である。ブリアート蒙古人は一般的

に頭が非常によい為、政治的に頭角を現し易い。外蒙古に於ける政治的権力は住民の八〇%を占めてゐるハルハ族が独占的に掌握して、僅か4%の少数民族であるブリアート族を政治的地位から放逐しようとしてゐる処に、大きな原因があつた。

それであるからブリアート族としては、最も文化の高い、医学と教育に入るより外に道はなく、政治的な職場入つて、肅清を受けて犠牲になるより、この方が一番安全だと言ふのだつた。

外蒙古革命以来、このブリアート族の反革命行動が、しばしば続けられる度に、肅清が行われ、犠牲者を出していた。最近では一九四八年内蒙古錫林格爾盟管内に於ける、ブリアート族の徹底的な反動が、外蒙にも非常な影響を与えたのであるから、ハルハ族として一番警戒するのはこのブリアート族であるのである。

内蒙古におけるブリアート族の反動は大きく、錫林格爾盟ブリアート族と滿洲ホロンバイル、バラカに在住するブリアート族との血の結合は、遂に武装反撃となり、外蒙と内蒙との国境線に於て中共八路軍に対し執拗に反撃を行い、一時はブリアート族の勝利となつたが、外蒙軍が後方から出撃した為、遂に全滅になつて終つた。事例の如きは特筆すべき事件であつた。これは一九四九年になつてブリアート反革命軍に参加した内蒙古人の述懐した処である。

この一内蒙古人も、特別禁固刑二十五年を課せられていたが、監禁中、肺結核となり、病態悪化した為、中央病院に入院する事になつた。その際彼の友達でハラダミリンが鉄工班の鉄工として働いていた。そのハラダミリンを一内蒙古人がたすねて来た。彼はその内蒙古人に食糧、物資を懇請した。この時彼がもらした事も前記の様な事であつた。これは内蒙から来たブリアート人オランダンドン、ダシニマ、アルビミト等の証言する処と一致した。

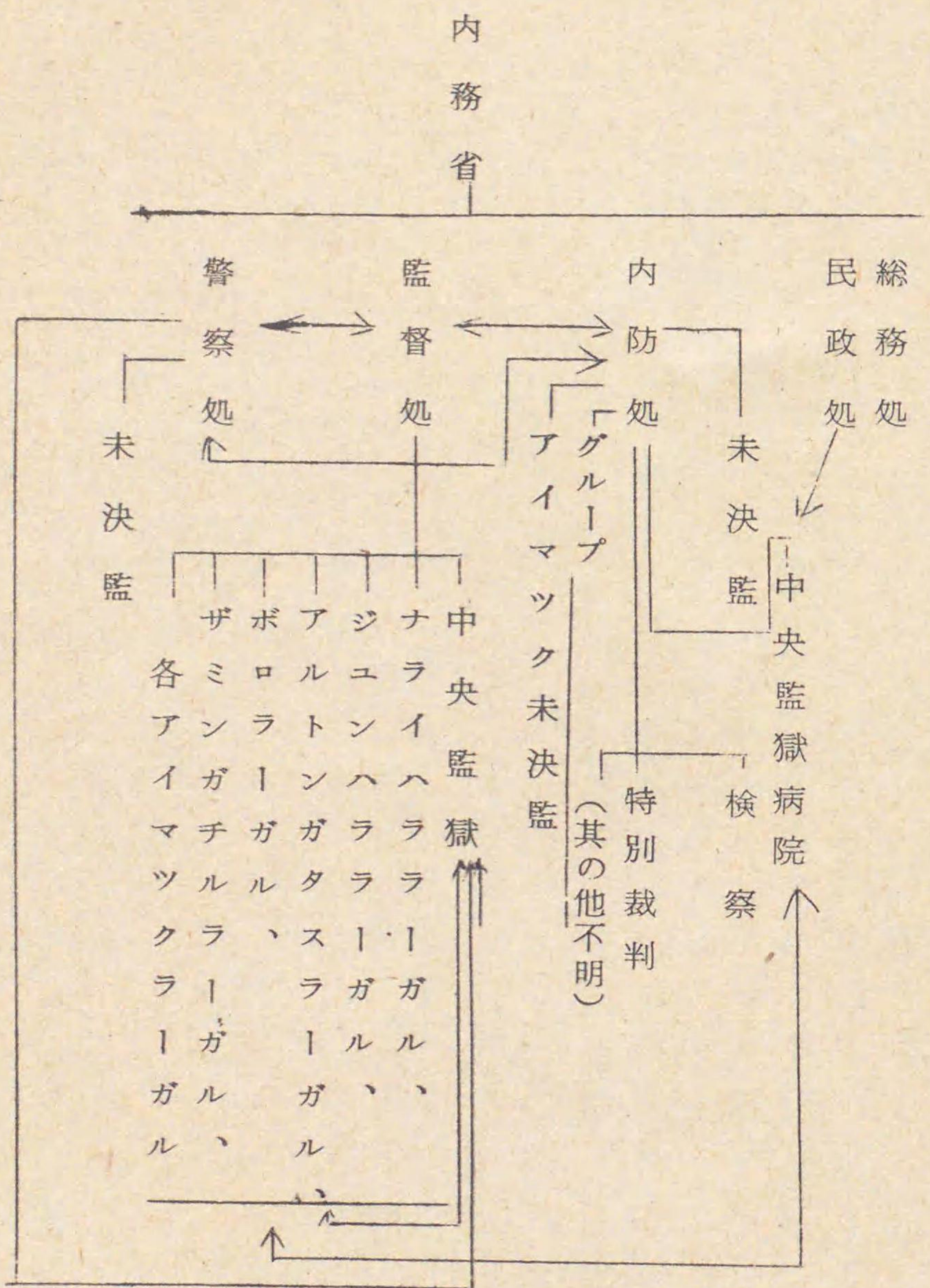
一、外蒙古人民共和国強制收容所の概況
 外蒙古の收容所は内務省の直轄である。
 この内務省は政府の四階建の中にあつて、総務処、民政処、内防処、警察処、監督処、その他不明等に分かれており、内防処は国内に於ける思想、経済攪乱、陰謀計画等の国事犯の取締りに當つては、例外的には刑事犯も取扱う。内防処長は将官であつて、閣僚会議に出席する程、強い権限が附与されている。
 警察処は一般住民の刑事事項を掌り、監督処は各強制收容所の総監督に當つては、その長は中佐で、その下は各トーチカ（出先收容所）に分れている。

監督処はトープ・ラーガル（中央監獄）、ジュンハラ・ラーガル、アルトンガタス・ラーガル、ナライハラ・ラーガル、ボロ・ラーガル、ザミンガチル・ラーガル、各アイマツク・ラーガル、等を管轄している。
 軍人の階級別を示すと次の通りである。

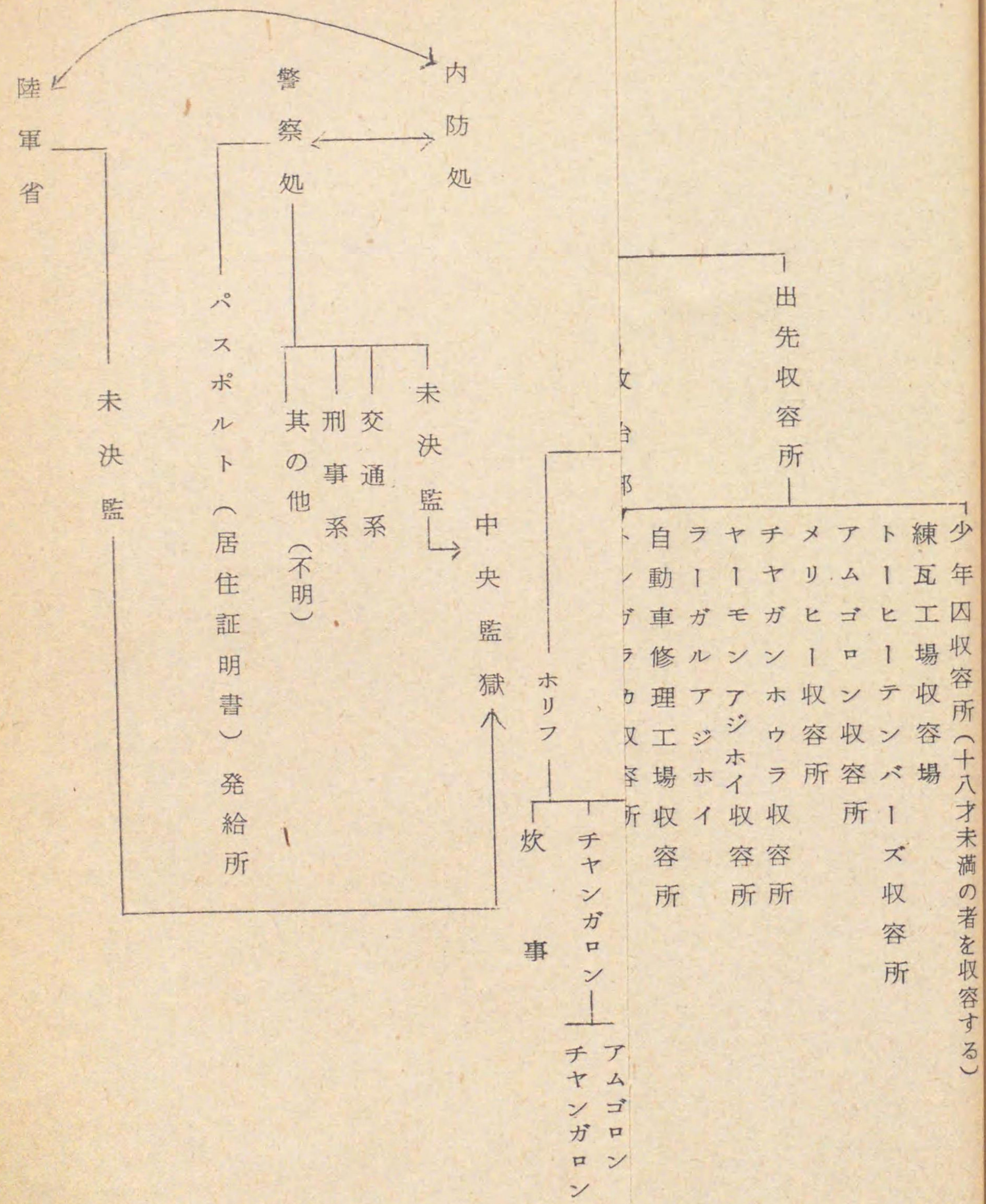
兵（チリック）、下士官（ヒノクチ）、少尉（デスレクチ）、中尉（トストラクチ）、大尉（アハムト）、少佐（モヨル）
 中佐（ホロンダー）、大佐（デエート、ホロンダー）、少将（ゲネラル）、中将（デエート、ゲネラル）、大将（ジャンジン）、元帥（マーシヤル、ジャンジン）等で、死亡したチヨイバルサン首相は元帥大将であつた。現在はこの階級にいる者は無い。

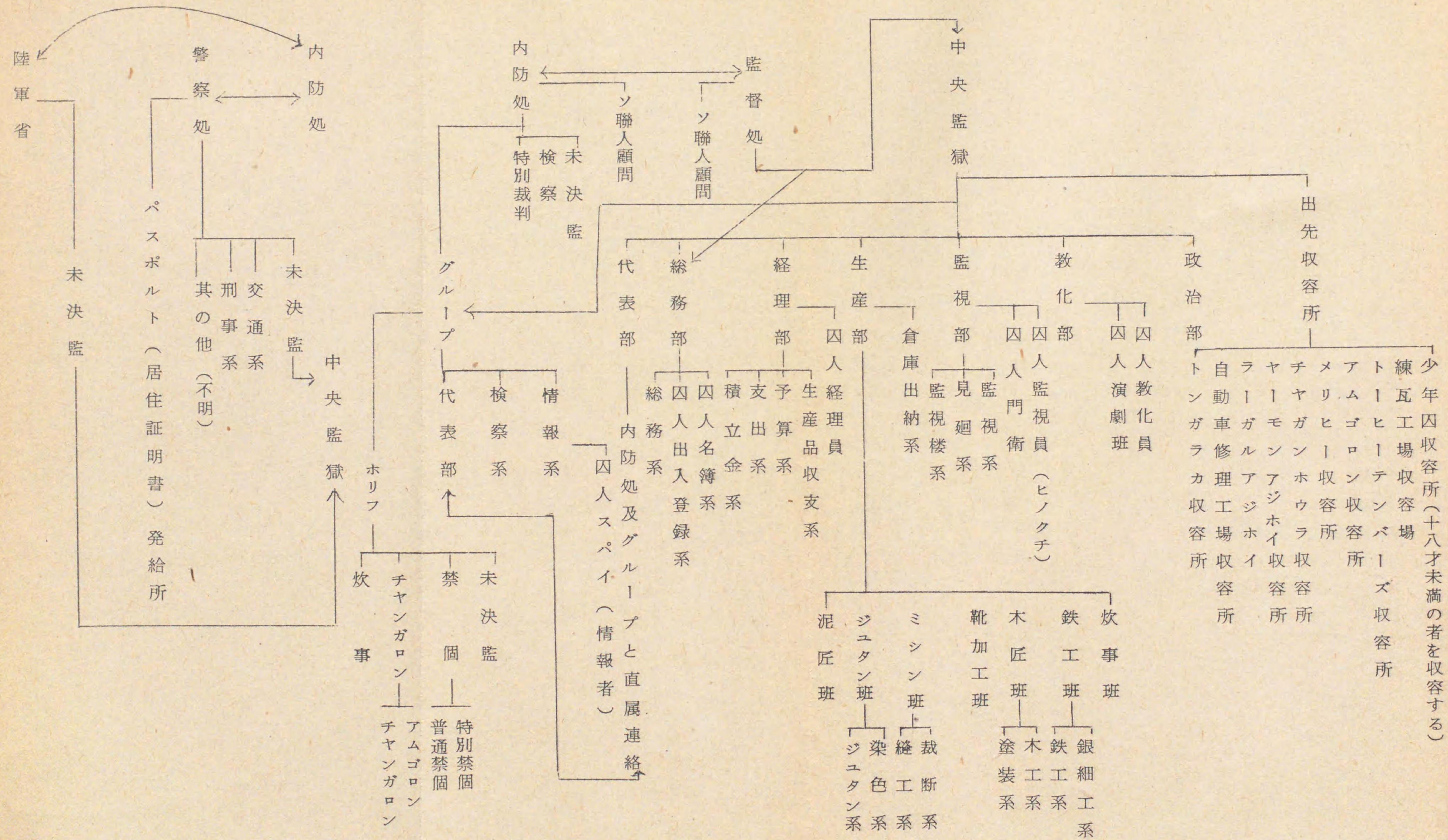
これは陸軍の階級別であるが、内防処、警察処、監督処に於ては階級別には変りはないが、服装、肩章等を夫々色合いで異にしている。一見して仲々区別しにくいのであるが、警察処丈は一見して区別出来る、それは黒紺に染めた服を着て、内防処、と監督処は殆ど同じであつて陸軍省とは幾分異なる。

監獄の構成図を示すと次の通りである。



中央監獄は各ラーガルから集結又は分散される中央部であつて、この関係は次の通りである。





二 中央監獄の監視

中央監獄は監視部長(大尉)ソノムスルンが責任を負い、囚人の挙動の監視と、それにもとづいて柵外労働派遣の許諾権を握っている。その下に副監視部長(中尉)アヨルザナがいる。

其の外各監視長(中、少尉)がいて、門衛の監視の責に任じている。監視員は皆下士官級で軍人ではないが軍人としての取扱を受けている。

中央監獄には門衛が四ヶ所ある。一つは正門、他は中門、病院門、グループ門となつてゐる。

正門は中央監獄勤務者及囚人の外出入の門で一番重要な処で、監視長の外監視が二名勤務している。この外宿直者として、ラーガル幹部が一名、二十四時間勤務制の三交替で勤務している。

この監視は軍の服装と変りはないが、肩章が異なり丸腰である。上衣に帯革を締め、長靴を穿いている。

中門も病院門も同様な形式でつくられ、監視長には少尉若しくは下士官待遇の古参者がついており、監視が一名と補助者として囚人門衛がいる。

グループ門衛には、監視長と、監視各一名と、囚人門衛の補助者が一名いる。

この門衛はウランバートル中央道路に面してゐて、主にグループに關係のある者が出入りする、それは向き合ひに監督処があるので、こゝとの往来が常に行われている。

又未決及禁固に収容中の囚人に対し、住民の差し入れ口ともなり、又病院の食糧等もこゝより持ち込まれた。

この門衛には表門と内門とあつて、内門は監獄内に通じる、押しベルが取り付けてあり、それが表門衛に通ずる様になつてゐる。この内門は絶えず錠が下りていて、ベルの鳴る種類に依つて門衛の監視が開閉する事になつてゐる。この内門は監獄内部の囚人が出入りする事がある為嚴重に警戒を行つてゐると共に、未決監囚の取調べの際に通用する門にもなつてゐる。

幹部もラーガル事務所と連絡の為此の内門を通用する、又囚人中の囚人スパイもこの押しベルの押し様に依つて、その門に入る事が許されるのである。

監視の中には囚人から選ばれて、門衛監視の補助者が出る、これは大門の開閉に当るとか、雑用に當つてゐる。この囚人は中央監獄に二・三人であつて主にグループの特別任務を持つてゐる為、囚人の出入りに対し相當の権限を発揮する(乱用する)。又監視長の許可を得て柵外に出るは、物資を購入し、囚人達に高価な利益を以つて売却する、又監視長や監視と經濟的連絡を密にし、囚人から安く購入した生産品の売却依頼をする、監視長や監視は、これを生活の補給源とも

しているのであつた。

柵外労働は一定の規定がある。中央監獄では一日の労働料金として、申請者より囚人一日のノルマー代金を徴収する、その料金は一日五トコロゴ(日本円に換算すると一五〇円位)である、これを経理部に納入し、監視部長の人選を経て、適当と認められた囚人が許可されるのである。

この時の監視は申請人が直接当るか、又特別非番の監視がつくのである。

なお囚人労働の数が多い場合は特別蒙古軍の兵が派遣され監視につくのである。

中央監獄柵外の監視は総べて、監視部長の指揮下にあるが、要員は蒙古軍から派遣される。この柵外監視は監視楼と遊動監視とに分かれている。

外部監視楼には銃を持った、蒙古軍兵士が高さ一〇米位の哨楼に、夏期は二時間交替に、冬期は一時間交替に勤務している。

中央監獄の柵は高さ四・五米で、その上に鉄条網が二米の高さに張り廻らされている。この柵に用いてある丸太は落葉松で尖端を地下七〇糶埋め根太を上方にしてある。

この柵外を遊動監視兵が、各監視楼哨兵と連絡をとり、異状の有無を一時間毎に確かめている、一九四九年頃迄最も逃亡者の続出した当時は、よくこの高い柵を乗り越え、逃亡した為電流が通ぜられた。その後柵内歩行禁止区域が設けられ、哨楼が増設せられるに至り、又食事の給与も改善されたので、逃亡者も漸減し、電流も通さない様になつた。

又逃亡した際には、軍用犬を利用して捜査に当つたが、仲々簡単に捕まるものでは無かつた。この外監視部長直属の囚人ヒノクチ(囚人監視)がいて、ウランバートル市内の要所に配属され、遊動して囚人の非法行為の摘発と、逃亡者の捜査の役目を持ち、主に騎馬にて遊動しているのが見受けられた。

三、ヒノクチ達(監視達)

中央監獄のヒノクチ達が非常に、嚴重に監視する事がある。

特にメイデイ、革命記念日、十月革命、正月、等の際は外の各出先收容所から、囚人が祝祭日監禁といつて、送り込まれて来る、又中央監獄の生産部作業場は総べて封印され、祝祭日が開ける迄、嚴重な監視が行われる、又囚人達各人の持物も嚴重に検査され、毎日使っている、鉛筆、刃物、鉄器類総べて危険物と名の付く物は没収して終う、そして絶えず、見廻りにやつて来る。特にラーガレンダラガーを初め、上層幹部は交替に巡察にやつて来る。

幹部が宿舎に入つて来た時は、初めに見つけた囚人が、全囚人に聞こえる如く大声で、「ボソー」(起立)と号令をかける、すると全囚人は直立不動でその場に立つのである。特に隠れて賭博でもしている者は、この号令に依つて助かる事

が多いのである。

しかし普通日には、全く打つて變つて、囚人と一語に蒙古将棋もすれば、蒙古マージャン、シャガイ拾い等して打ち興じるのである。

彼等は又囚人の生産物を秘かに購入して、売却の斡旋をし、そのうわまえをはねる仕事もする、彼等は家庭の破損道具を持つて来て、囚人に無料で修理させる役得もある。又炊事場に入り込んで食事を作らせ食を取るものもあるのであつて、こうする事に依つて彼等の生活は成立し、又囚人にとつては彼等から色々の便宜を与えて貰う機會の糸口ともなるので、囚人も心よくひき受けてやるのであつた。

或る日囚人間に傷害事件が起り、ヒノクチ達が二・三名馳けつけて来た。

囚人達は黒山の様になつて、ドスを抜いていがみ合つている二人を囲んで、高見の見物をしている。それを押し分け、ヒノクチの一人が入つて、奴鳴り始めた。このヒノクチは、囚人達が最も恐がる監視長の一人で、綽名、ガルツォ(狂つた)ツェリンである、彼は腰から拳銃を抜いて、何かわめきながら、処かまわす一発、二発、発砲した。囚人達は「ワー」と蜘蛛の子を散らす様に飛び去つて行く。その中にガルツォツェリンに向つて、一人の喧嘩相手が体当りをやつたと思つと、彼のガルツォツェリンは、ノケゾリ返つて倒れてしまつた。囚人達は何が起きたかと再び集つて来た。見ればガルツォツェリンは倒れた儘、意識不明である。一諸に来たヒノクチ達は、これは大変と、ガルツォツェリンを担ぎ、監獄事務所の方に運んで行く、監獄病院のバカエムチ達が、至急後を追つて行く、こんな慌しい中に、傷害事件の発起人二人は、仲直りしてさつさつと引き揚げて行つてしまつた。

その後彼のガルツォツェリンは中央病院に担ぎ込まれたが、一週間もたぬ中に回復したが、遂に彼の姿はこの中央監獄に現われず、別の收容所に廻された。彼の傷害事件の囚人二人はチャンガロン一週間に放免されてしまつた。

このような処置となつたについては次に述べるような経緯がある。ある時、監視人が、禁錮の囚人を禁錮に帰れと催促したが、仲々帰らない、その為何回も注意したが、帰る様子もないので遂に発砲したが、あやまつて射殺して終つた。これが問題となつて、監獄内に於ては銃を持ち込む事が出来ない様になつて終つた。但し拳銃は護身用として持参してもよいが、みだりに発砲する事は禁止されていたのであつた。

この様な傷害事件はこの中央監獄では、たまたま繰り返されるが、ヒノクチ達は手の下し様がなく、只傍観するより外に道はなかつた。喧嘩が終つてから後、一人一人呼び出し、処罰を決定するという順序であつた。

この種の裁判については前にも触れたところであるが、囚人の見せしめとして、中央監獄内においてひらかれ、極刑にされる者もあつたが、それでも囚人達はこのような傷害事件をひき起すのであつた。

この様な傷害事件の現場に監視部長が来た時には、中止する様な手段を構せず、部長の目の前で思う存分やらされるので、囚人としても手が出なかつた。それで簡単に処理されて行くのであつた。監視部長の権力は、彼等囚人達を自由に処置する事が出来たからである。禁錮と言えは直ちに禁錮へ、未決と言えは直ちに未決へ、柵外労働禁止と言えはその通りに、又出先収容所へ出るにしても、皆部長の任意であつたからである。

四 囚人中の囚人スパイ

囚人スパイについては、すでに一部記したが、囚人スパイの監視は実に徹底して、囚人間に於て、何か恨みを持つとか、何か冗談中に反政治的言動をしたとか、言う時は、囚人スパイに密告されて終うのである、これには情実も相当からむが、上司からの要求が厳しい為に、遂に情実も義理もなくなり、自分の身の安全を計る為に、密告となるのである。この囚人スパイは中央監獄に於ける党の末梢細胞組織である。共産主義社会に於て、最も力を入れているのは、この細胞組織である、これは監獄だけではなく、実社会に於てもそうである。実社会に於てはウランバートル市民生活の項に於て記述することにする。

中央監獄に於けるバリガートン、ドラガア(班長)とホリグト、ヒノクチ(囚人監視) 囚人門衛、經理補助者、教化補助者等は、大概この囚人スパイに属する者である。

生産部に於ては、鉄工班に二人、木匠班二人、靴加工班に一人、ミシン班に二人、ジュタン班に二人、泥匠班に一人、炊事班に一人、と言う様に細胞組織が出来ていて、これ等の細胞組織の横の連絡は全然認められていないしまた堅く禁じられていて、若し口外した場合は相当な罰則で処理される仕組になつてゐるのである。

それであるから彼等は絶対に他人には話さない。こゝで面白いのは吾々日本人に対しては彼等がその任務の苦しさを打ち開けて愚痴る者のある事である。全部が全部そうではないが、誰しも好意を持つて、吾々にチョツピリ、チョツピリと当らず触らずに表現するのである。

これ等の囚人スパイの任務は、監獄内と言わず、外部の者と言わず、すべてに及んで、殆ど全般的と言つて良い。彼等の担当事項は、思想動向であり、政治活動であり、流言蜚語、宗教的言動、経済事項、教化事項、逃亡事項、刑事事項、等総ゆる部門に亘つてゐる。そして毎週一回グループの情報係長に出頭し、口頭を以つて、報告する、之は必ず出頭し何かを必ず報告せねばならぬのである、彼等囚人スパイがこれにどの位苦勞しているかが窺われ、全く神経衰弱になる様な状態にあるのである。

密告された例を挙げる

ダシニマと言うブリヤート蒙古人がいた、彼の原籍はバイカル湖附近である。父は革命に依つて獄死し、母も投獄され

ていた、彼は母を監獄に残して、滿洲事変後滿洲に逃亡し、日本軍に保護され、早稲田大学の専門部を修了して後ブパカ特務機関に働いていた、終戦と共に外蒙に連行され、刑二十年を言い渡され、服役中であつた。

彼はバイカル湖附近に育つた関係から、ロシア語が、非常に上手であつた為、中央監獄に投監されて来るソ聯系、及白系ロシア人は、誰も彼の許に一時寄宿する事が多かつた。その際或るソ聯系ロシア人より、人肉を食うソ聯人のある事を聞き、文化の高い社会主義国家に於ても、未だそんな事があるかと、入浴中沢山の囚人の中で、一寸口を割つたのだつた。そこにいた仲のよい炊事班長のアルトンバカンが、今迄外国系として互に助け合つて来た同囚を、情実や義理を忘れて密告して終つた、側にいた囚人も参考人に呼び出され、実証する事になつた。彼は未決に収容され、約四ヶ月後、新しく刑二十五年を言い渡され、服役期間八年は無効となり、その上五年の加刑となつて終つたのである。この様な例は枚挙にいとまがない。必ず加刑か禁錮である。

それであるから囚人間に於ても、常に話す事を警戒し、何事も本音をはかない。共産主義国家の都合の良い様に話をするのにはつきり分るのである。

而し彼等は腹の中のワダカマリを、日本人の処に來て、さらけ出すのであつた。

特に他の囚人のいない時は、恐しい程の事迄話して聞かせるのであつた。兎に角彼等の政治的智識が低いので、真実かどうか分らないが、次の様な事があつた。

チヨイバルサン首相はモスコイで、毒殺されたのだとか、囚人スパイは誰と誰とどとか、若し監獄から逃亡するならば、何時頃、何処が一番安全だとか、西方に逃げてから新疆西藏、ペキスタンを経て日本迄行くんだとか、監獄より実社会の牧民の生活が苦しいとか、チヨイバルサン官舎の山には、誰も山に登る事が出来ない様に、要所々に歩哨が立哨してゐるとか、王侯、活仏は皆殺されて終つたとか、吾々の使つてゐる日用品物資は、皆ソ聯製であるから、蒙古は独立は出来ないとか、教育文化が低いから、世界各国と共に行く事は出来ないとか、外蒙は革命以来三十有余年になるが遅々たるもので、滿洲建国十年に比べたら問題にならないとか、昔の生活は楽だつた、今は供出が多いので、肉でも乳でも飲めなくなり、一般家庭では乳茶が飲めないで、黒茶が殆どであるとか、肉も今はラクダの肉を食う様になつたとか、ウランバートルはそれでも、教育文化は進んでいると思ふが、田舎は昔と余り変りはないとか、ドロンノールゴビ盟のサインシャダからは、黒いドロドロの液体が出てゐるのを、ソ聯人が発見して盛んに発掘し、今は大きなやぐら迄起つてゐるとか、今は近くに寄りつけなくなつたとか、その辺は大きな町になつて電気がつく様になつたとか、地下資源はソ聯直屬調査機関がウランバートル市にあつて、銅、鉄、石炭等は眼中になく、今は軽い鉱石の調査のみに當つてゐるとか。バイントモンはソ聯の工場が多く又倉庫も多く、ソ聯のシベリヤ鉄道から支線が敷設されてゐるので、物資の輸入と、資源を供出する処であるとか外蒙の西端

はノール(湖)が多く、その盆地帯には、西瓜が良く出来、又ソーダと塩は豊富に採取出来るとか、この辺はカザツク族とトルゴト族が多いとか、ボルガン盟は、外蒙人民共和国となつてから政治犯罪人の流刑地となり、色々の事件が起きるとか、又刑期の終つた政治犯を強制居住せしめ、指定した場所に三年間居住せねば、移動出来ないとか、それであるから人心が非常に複雑であるとか、監督処の裏山には、弾薬庫が地下にあつて、鉄条網が張つてあり、歩哨がいるとか、その地下弾薬庫から、陸軍省の地下に坑道が通じているとか、才一自動車修理工場の東側にある、ガソリンタンクの三個は遠くの方の山づたいに油送されて来ているとか、伝染病院の附近には、大臣級の療養所があつて、そこには北鮮の戦争孤児が、七、八十名收容されているとか、又附近には蒙軍兵舎が建設されるとか、レーニンのハゲチャビンとか、チヨイバルサンは克国奴の犬だとか、誑経する事は出来ないが、声を出さなければ良いとか、仏様を箱の中に入れて朝晩出しておがむとか、占いをすると直ぐつかまるとか、予言しては駄目だとか、官憲に見つからん様にせねばならぬとか、日本軍の建築設計図をソ聯技師が見ても分らなかつた、ソ聯人は大したものではなく、日本人は偉いとか、博学であるとか、ソ聯人は無教育者が多いとか、女を強姦する事は平気だとか、ずぶといとか、日本のドクトルは仲々技術が上手だ、そして、よく病気を治して呉れた、ソ聯や外蒙の医者は日本の医者とは比べものにならないとか、その他枚挙すれば数知れずであるが、このような会話を、囚人スパイに聞かれた場合は問題なく未決監に投監される事を覚悟せねばならぬのである。

五、女囚收容所

女囚收容所は中央監獄より北方四軒位離れた処にあつて、やはり中央監獄と同様な高い柵が廻らしてあり、その上に鉄条網が張つてある、門衛所が一ヶ所あつてその側に、收容所長を初め、幹部の事務所がある、たまたま情報係長が出張して詰めてゐる。

中央監獄から幹部が、派遣されていて、上層幹部は毎日見廻りに来る。

この收容所にも監視柵は四角の收容所の角、角にあつて、逃亡、非常時態の見張りを行つてゐる。門衛には蒙古婦女子監視員の外、女子囚人ヒノクチ等が居り、收容所長は中尉のブリーヤート人のヨンドンと言つてゐた。

女囚收容所は、ミシン班、ジュウタン班、フェルト班、医務班等に分かれていて、中央監獄の生産部に直屬となつてゐる。機構は生産部と変りなく、班長、マーシナル、書記等で女囚が當つてゐる。

ここに面白い事は子供を監獄内に於て、出産する事である、亦子供を連れて入獄して来る事もある。

この様に妊娠する女囚達は、殆ど男子監視人と、良い仲になつて結ばれるか、いたずら事をして出来たものである。

子供が出来たからと言つて、恩典が与えられると言ふ事は先ずない。而し中には恩典が与えられて釈放される事もあつた。監視や幹部のいたずらは、相当繰返されている模様で、たえず女囚の噂が話題に上るのであつた。

女囚收容所が中央監獄にあつた時代は、色々と男囚との間に、性的関係の問題が起きて、取締り上どうする事も出来ない。それで分離して現在位置に移転する事になつたのである。男囚と女囚との醜態は毎日の様に繰返された、便所の中、病院の入浴場、ミシン班に於ける作業場、ジュウタン班に於ける作業場、男女囚共同劇団練習中に於ける、男女間の性行為等紛ゆる場所に於て、監視の目を盗んで、素早く実施される。

そして男囚は女囚の執心を求める為、夕方になると、女囚と男囚との柵は黒山の様になつて両側に起ち並ぶのであつた。相手の女囚が居ると分ると、高い柵の上から食糧が、投げ込まれる、運悪く鉄条網にひつかかつて終ふのもあり、誠に何とも言えない、風景をかもし出すのであつた。

女囚の方からは石を包んだ恋文が柵を越えて、恋のつぶてとなつて飛んで来るのである、それを拾ふ男囚の喜ぶ顔は見られたものでない。

これも監視の目を盗んで実施されるのであるから大声をたて、はならず、誠に不自由な中の、喜悅の一瞬である。

或る夜の事であつた、二人の男囚が柵を越えて、女囚收容所内の臨時禁錮室に、窓から忍び込み、そこに禁錮されていた三人の女囚が、それと知つて心よく迎えその中の二人は自分達の寢床に案内し、一語に寝て終つた、処が残された一人は、やきもちを焼いていたが遂に自分は何の楽しみも出来ず男囚二人は用を充分済まして再び、窓から飛び出し、柵を乗り越えて、男囚收容所に帰つて終つた。さて一人寝た女囚は非常にこれを恨み、夜が明けのを待つて、監視人に昨晩の出来事を密告して終つた。これが大騒ぎとなり、男囚も、女囚も直ぐ未決監に廻された結果、前記の様な事が明らかとなり、男囚二人は、禁錮一ヶ月、女囚二人は禁錮の上に同じ禁錮刑が加えられた。一人寝た女囚はその儘と言ふ事になつて終つた。この様に終つてから発見される様な、監視の行き届かない事は、新しく移転した女囚收容所でも前と変りなく、妊娠する女囚もあれば又、ミシン修理等に行く男囚は、無理、矢理に彼方此本で引張りだこであると言ふ。

外蒙古人は習性上性行為は、ルーズであり、解放的であるから、監視もその点大いに理解があるのかも知れない。只逃亡と反共運動に最も重点がおかれ、囚人中の囚人スパイも主に之に集中されるのである。

六、植樹苗採取

一九五一年の五月中旬頃の事である。丁度生産部も予備隊も、ジュンハラ、ラーガルの農作物播種繁忙期に出動して、僅かしか残つていなかった。私の鉄工班も私と掃除夫のダンビニマと銀細工の二人と四人しかいなかった。政治部長ゴトブが鉄工班にやつて来て、私を指名してマサカリとシャベルを持つて中門に集合する様にとの事であつた、日本人が柵外に出ると言ふ事は殆んど出来ない。それなのに私を指名する処を見ると、私が日本人だと言ふ事を知らないからであらう。

集合して見ると四、五名の内国系が集まつていた、この内国系も最近モルトンから出て来た者らしく、青白い顔をして

ひそひそと話をしていた、彼等は何処へ行くだろうと心配している様子であつた。

彼等はマ、カ、ビート（工場）の従業員で生産品の肉及脂肪等の横領、窃盗罪で投監されて来た者であつた。

吾々一行、長崎の卒のもとに、貨物自動車に乗せられて出発した、監視は一人もつかず只政治部長一人と運転手丈であつた。

自動車はウランバートルの真中を走らず、横道を通つて、ガンドンの東側を通り山にかつた。山の中腹には古い自動車の車台が幾つも捨ててあり尚沢山の鉄器物が山と捨て、あつた。暫くして、山の南面を西北方に向つて降つて行くと、蒙古部落があつて二個の蒙古包が見えた、家畜は四、五十頭いて主に山羊と羊であり、蒙古人が盛んに一頭づつ数えているらしく、声をはり上げて家畜を制御したり、追いつたりしていた。

こゝを通り過ぎて北に曲つて、十五分間位走ると、山が西北方に向いた傾斜地に自動車が停つた。

辺りは白樺と落葉松、緑葉樹等の自然林が繁つている、内に入つて見ると、ノイホシヨ（之は薬用にせんにて飲むと毒下しとなる梅毒とかに特効有り）とかスグリの様な木や、ウフリンハタ（黒い実がなる）等の灌木がところどころに繁つている。この辺は余り太い木は見られない、直径四、五寸位の樹木も、たまたま見受けられたが、主に二、三寸位の細いものであつた。

相当繁つている林の中には、末だ残雪があつて、盛に雪解けがしている、穿いている長靴も、水浸しになつて終う。

吾々は最初に適当な木を見つけて、根の周囲をマサカリで丸く切り、シャベルで深く掘り出すのであるが、この辺の根は真下に深く入り込んでゐるのが特徴であつた、どの木も総べてが真下に向つて根を張つていた。

二、三十本の植樹に適当な白樺と落葉松を掘り取り、その儘自動車に乗せた。

この間政治部長ゴドブは私の側にばかりついていて離れない、どうした事かと思つたが、彼も無言の儘作業を手伝つてくれる、私もなに気なく、彼の働き振りに見とれてゐると、やおら腰を上げて「日本にも植樹をする事があるか」と突然聞くのであつた。

私は一寸驚らいた。私を日本人であると知つていて、こゝも側を離れずいたのかと思つたが無理もないと思つた。

「日本ではこんなに大きな木は、植樹に使わない、植えても直ぐ枯れて終うから、初めから苗木を育て三、四年目に移植する」と返事をした、彼は「フウン」と言いながら、「日本の街には植樹をする様な場所があるのか」「勿論植えられるていない処はない、大都会になる程何処の道もアスファルトで、其の両側には綺麗な街路樹が繁つている、この様な白樺や落葉松は街路樹として用いない。亦、日本には自然林は少ない、殆ど人工を以つて山に植林する、日本の山は何時とも鬱蒼たる森林であるから、水は綺麗で、農作物はよく出来る」「ホウ、日本では人が山に木を植えるのか、それは稀しい事

だ」と驚くのぢつた。

私はこう思つた、政治部長でありながら、実際日本の状況を知らない、只共産圏内を黒いカーテンで覆い、自分の処しか知らない、政治部長がこんな状態であるから、民度の低い一般住民に到つては、とてつもない常識はすれである事が分るのであつた。

これは一例であるが、一般蒙古人が初めて日本人を見て驚いたと言ふ事である、彼の蒙古人は、日本人は髪の毛が赤茶色で、目は青く、鼻は高い、ソ連人と変りはないと思ひ込んで終つていた処、突然終戦後日本人を見て驚いて終い、「何だ、俺達と少しも変りは無いじやないか」と言つて、安心と心易さを感じ、持つていたハラタルハー（黒パン）を日本人に与えたとする事である。

ウランバートル市民は、日本人と言ふものを、日本の捕虜部隊で良く知つた事だろうが、地方の遊牧民達に到つては、まだまだ日本人と言ふものを、知らないでゐる。

私共は夕日が入る前に、帰路を急いだ。帰路は前と変り、その儘真直ぐ南に降つて行つた、少し山の間から大きな建築物が見え初めた、これが肉カンピナートであることが分つた。私と同行した新囚人達は、何とかして知人、家族にでも会えないものかと、自動車の上から物色したが、見当らない。彼等は手紙を書いて持つていた、それを渡す事をあせつてゐる様であつた、政治部長は運転合に乗つてゐるので、渡すのは簡単に行われるが、渡す人物が仲々見当らない、この絶好の機会を無にしてはとあせるが、自動車は無心に走つて舗装道路に出て東に向つた、右手にウランバートル駅が出来上り、さらに宿舍の建築が盛に行われている。建築従事者は総べて、ソ連人である、これは才二次世界大戦の際、ドイツに降伏したソ連人が、終戦と同時にソ連に引き渡され、国事犯として就労してゐるのであつた、この内には女囚も見受けられたが、彼等は主にウクライナ地方の者であると言ふ事であつた。

自動車は停車した、附近は街に入りかけた処であつた、政治部長は下車して、肉カンピナートに連絡する様だつたら、知人を探して頼んでも宜しいと許可が下つた。新囚人達は喜んで、附近の人通りを物色してゐたが、一人の知人を得て、呼び寄せ、政治部長立ち会ひのもとに、近い内に遠くに仕事に出るらしいから、仕事着とか日用品、食糧等を頼むと連絡が終つた。

自動車は中央監獄に戻り、吾々は取つて来た苗木を、ウランバートル市を東西に貫く舗装道路の両側に、すでに掘られである植樹用の穴に一本づゝ置いた、明日植樹をするとの事であつたが、まだまだ沢山の植樹の穴が東に向つて掘つてあつた。

吾々が中央監獄に入る時は、何の検査もなかつた、それは政治部長が直接責任を持ち品数の事故なしに、行つて来たからである。

チャガンホウラ收容所は、中央監獄より五、六軒南方にあつて、よく中央監獄より見える所にあつた。こゝは、内国系と外国系との二つの宿舎に分れていて、收容所長の外、各監視員等が居り監視楼が四個所、それには蒙古軍の歩哨が立哨している。

この收容所の囚人達は殆どウランバートル市内の建築に当り、二百名位收容されている、囚人間の機構は中央監獄と変りなく、囚人トウブルクチ、囚人バソガテンダラガア、囚人マーシケル、の外医務班長、教化班長炊事班長と幾班かの建築班長、木匠班長、塗装班長、鉄工班長、靴加工班長、ミシン班長、等に分れている。

この收容所は日本軍補虜部隊が一九四七年十月引き揚げて後、直ちに継続引継がれたものであつて、日本軍の建築中のものも総べてこの囚人部隊に依つて完成されるに到つた。

政治官庁、中央劇場、スタリイン名称中央図書館、国営印刷局の宿舎、アパート等次から次へと建設され、なお北鮮大使館の建築も日本軍の引き継ぎでは無いが、完成されたし、各種アパートも次ぎ次ぎと建設されるに到つた。外蒙の大建築の大半はこの收容所の無報酬労働力に依つて、建築されたと言つても過言でない。

それだけに彼等囚人にとつては大きな功績であつて、政府でも之を認め、囚人に相当の償与を与えた事もあり、待遇も極度に改良され、一日のノルマー以上労働した者に対し、砂糖、牛乳、白米、白麵等の加増配給が一週間毎に行われた。

收容所内の監視は殆ど中央監獄と変りはない、收容所から現場に出勞する際には四、五集団に分れ、一集団五、六十名毎に銃剣付きの蒙古軍二名に護衛され、一名の監視員と共に往復する。

現場に於ては高い板壁を廻らし、その入り口に歩哨が立哨し、角々に監視楼があつて、監視を怠らない。

この蒙古軍の歩哨は、仕事の出来ばえには無関係であつて、只板壁外に逃亡又は私用に出る者の取り締りが任務である。

彼等蒙古軍歩哨も囚人と、経済的に結ばれ、適当に許可を得、知人、消費組合、飯店等に行つて、必要なものを食ひ、又購入して来る事が出来るのである。

囚人達も仕事の合間を見ては、煙草キセル、錠、ナイフ、パイプ等を作り彼等の臨時収入としてゐる。

この工事現場に於ては、冬期間に一番困難な事が起る。土台の根堀り、内部構造の取り付け。コンクリー打ち等並々ならぬ努力が傾注される、土台の根堀りなどは、自動車の古タイヤを焼いて掘るのであるが、実際に於て一日のノルマーには到底及ばないとの事である。尚コンクリー打ちなどは直ぐ水が氷るので沸いた湯を用い、打つた上にはフェルトを二枚も重ねて置くと言う事である。

實際零下三十度を下る厳寒に於ては、地下二米も凍りつく、それが為根堀りがこの收容所の一大困難事であると言う。

これは囚人であればこそ継続されるのであつて、一般住民なら勿論休業しているものである。

又外蒙には前に述べた様に、ソ聯の囚人達がウランバートル都市計画に参加している、彼等も同様に、ソ聯軍兵士の監視のもとに、冬期間と雖も、建築に追い廻されているのである。ソ聯囚人の建設も各所に行われており、元日本軍捕虜收容所司令部の隣りに、二階建の洋館が三棟立ちならんだし、セレベ河の西側に二階建の小学校も建設された、彼等ソ聯人も同様に同族を酷使して、他国の首都の建設に従事せしめている事は、何処に理由があるだろうと考えさせられるのであつた。

又近く中央監獄も打ち壊して、こゝに新しく洋館を建設するとの事であつた。この様に外蒙はソ聯の領土の如く建設されている事を思うと、経済的にも政治的にも、軍事的にも、見逃してはならぬものがあるであらう。

私が十一月仮釈放されて、才五アリテリ(協同手工業組合)に初めて採用された当時は、このアリテリでは、建築事業は中止されていて、五月になつて再開されたのであるが、囚人部隊に対しては冬期間も建築を継続せしめていた事は、政府が強権によつて、自由を束縛したノルマーの制度下に、囚人を呻吟せしめていた姿でなくて何である。

この收容所に朝鮮人イイミンホウ、(日本名福見)と言ひ刑十年を受けていた男がいた。彼はハイラルの映画館の館主であつたが、終戦と共に外蒙に連行され、政治犯となつて終つた。

彼は暫く中央監獄にいたが、転属されこの收容所に來た、彼は中々器用で、電気関係に詳しく、ラジオの修理、配電、時計の修理等をして蒙古人幹部の信頼があつた。

彼も一九五一年、よくノルマーを完成しアジリンホク(減刑期日)を貰ひ釈放された。

彼は又收容中、モスコより流浪して來た、朝鮮人と知り合ひとなり、彼の差し入れに依り、援護を受けていたので、生活には困らなかつた。又北鮮大使館建築に當つては、彼の技術が買われ、配電装置、暖房装置、国旗掲揚塔、内部裝飾等彼の手になつたものも相当あつた。

これが北鮮の大使館に認められ、彼の釈放の際は、トラック一台と乗用車で迎えられ、高級アパート一室に、中の設備迄準備してもらい、なお部屋代は無代と言う好条件に恵まれていた。

また彼は直ぐ建設省の鉄工部の技術者として、月俸六〇〇トコロゴ(一万八千円)を貰う事が決定されたが、これは、彼が北鮮出身であつたと言う事も大きな原因であつた。

彼は自分が收容中、差し入れて呉れた朝鮮人のめんどろをよく見、大使館の暖房装置の技術者に推薦してやつて、收容中の恩義を返したのであつた。

ウランバートルには朝鮮人が四人おるが、三人は終戦と同時に、滿洲から入つた者であり、一人は前記の暖房装置の技術者として大使館に在る者である、これ等の朝鮮人に付いては、ウランバートル市民生活に於て記述する。

一、囚人の服務規定

受刑者に対する取扱は、囚人服務規定(才一条一才三十二条)に基づいて行われている。

この規定は一九五一年に制定されたものであつて、現在忘却した事項も少くないが、記憶をたどりながら書き並べて見た。

囚人服務規定(順序不同)

1. 各部屋毎に無断で出入しない事。
2. 班長は員数を監視長に毎日報告の事。
3. 喧嘩、窃盗の生じたる場合は直ちに監視長に報告の事。
4. 衛生に注意し、急病の場合は直ちに病院医者の診断を受け、医者の証明に依り休養をとる事。
5. 所持金は七十円以下とす。七十円以上の現金を所有している場合は、経理部に提出し積立金とする事。若し提出せざる事発覚したる場合は没収する。
6. 外出許可は監視長より得る事。外出の際は監視人同行の事。
7. 差し入れは月二回とする事。
8. 差し入れ品は生の物を禁止する。また差し入れ品に手紙を同封せざる事。
9. 生産部に出入の際は生産部長の許可を受ける事。
10. 公共物、備品、生産道具、機械を遺棄破損せしめざる事。若し故意と認めたる場合は、加刑若しくは辯償せしむる事。
11. 公共物、生産品を横領、着服せざる事。
12. 勤務時間中はみだりに職場を離れざる事。
13. 四十五才以下の者は漏れなく新文字を、所定に従ひ学習する事。若し学習を怠りたる場合は適当な処罰刑を加刑せらるべき事。
14. 週二回の新聞購読には老若を問わず必ず出席する事。
15. 宿舎、作業場に於てはみだりに喧嘩し或は歌を唱わざる事。
16. 室舎に於て賭博は絶対せざる事。若し発覚したる場合は重罪に処する事。
17. 危険物は所持せざる事。若し所持せる事発覚したる場合は、没収の事。

18. 娯楽、体育は就労時間外にする事。

19. 宿舎及作業場に幹部が来場したる場合は最初の発見者が「起立」と呼ぶ事。

20. 監獄内に於ける売買取引は絶対不許可の事。

21. 外出宿泊許可は監視長の許可を得る事。宿泊は一泊限りとし、ウランバートル市内とす。

22. 面接は監視長の許可のもとに、十五分以内限定する。但し遠距離の親族との面接は特に監視長の許可に依り、時間を延長する事を得。

23. 火災非常発生したる場合は、直ちに防火班と監視長に報告し、その指揮に従う事。

24. 病院内には許可なくしてみだりに出入せざる事。

25. 囚人は朝五時起床、夜十時就床する事。

26. 柵内歩行禁止区域には絶対に入場せざる事。

27. 規定場所以外にみだりに大小便せざる事。

28. 積立金より金円を払下げる場合は、年七十円以内とする事。

29. 宿舎内に於てみだりに咳痰し、或は鼻汁を散らさざる事。

30. 酒類を監獄内に携行せざる事。若し発覚したる場合は重罪に処する事。

31. 火薬、銃器類は絶対に隠匿せざる事。

32. 服務規定を厳守し、温厚篤実に服務する事。

これ等は豫備隊宿舎南側にペンキ塗りで掲示されているが、現在は風雨に晒され、よく判読し難いものがある。

この様ないかめしい規定も、監獄生活の項や、其の他の項に於て記述した如く、殆ど実行されていないが、そこに外蒙古の民度が如何なるものが窮はれるとともに、また蒙古の規定は三日天下だという事も解るのである。

このように上層部からの形式的な規定は、監獄に於ては、その時だけであつて永続しない。又囚人も幹部も、規定の通りに取扱ひ服務するというような、型にはまつた事は、蒙古民族の遊牧形態から見ても、現在に於てはとも出来ない事である。それであるから遊牧民を急速に共産化に向わしめた過去の失敗も實際にうなずけるのであつた。

外蒙古の自由棄放の習性は、社会主義革命後三十有餘年を経過した今日に至つても、未だその習性から抜け切れないでいる。しかし一般的にいつて監獄生活よりの収獲は、働けば必ずどうやら食えることと、新文字を習得せしめられることとを二点である。

